
Magic of Kingdom

萌黃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Magic of Kingdom

【Zマーク】

Z4296E

【作者名】

萌黄

【あらすじ】

少女は、夜毎夢に見る養母の遺言を頼りに幻の王国を捜し続ける。共に旅するのは幼なじみで魔法使いの少年と、腕は立つが正体不明の剣士。遺言の真相、そして王国の魔法とは?剣と魔法の異世界ファンタジー。

プロローグ - Prologue

風が強い夜だった。

薄く色づいた木の葉は舞い踊り、地に敷き詰められた枯葉たちは力サカサと鳴いている。

遠くにやわらかい光が見えた。民家の灯りは少し離れたこの雑木林にも細々と届き、足元を照らす。壊れた街灯が頭上でわずかに光を漏らしていたが、それより月の光のほうが明るく見えた。

ふと、暗闇に人影が紛れた。

黒のマントを羽織った男が灯りの下に立っている。同色の帽子を鼻の辺りまですっぽりかぶっているため顔は見えず、シルエットだけが鮮明に木の葉の上に浮かび上がる。妙齢の男である。

あの娘は、まだ泣いているのだろうか。

男は遠くに見える村の灯りをぼんやり眺めて思つた。頭上で街灯が、じじじ、と鳴る。

葉を踏みしめる音がした。慌てて男が振り向くと、驚いた野うさぎが林の中へ駆けていくのが見えた。男は困惑とも安堵ともとれないため息をついて、村の反対方向に向かって歩き出した。

林の下のあぜ道を抜けて、大きな丘にたどり着いた。村の灯りを見下ろせる大きな丘だった。その中央に張り巡らされた柵をぐぐり抜けると、小さな墓地に出た。男の行く先には先客がいた。

少女は、泣いていなかつた。

一等高い場所にある小さな墓石の前で、静かに寝息を立てている。

目尻に残る涙の痕が、痛々しかつた。

男はそつと少女に触れ、その小さな頭を撫でた。ゆっくり、慈しむように少女を抱いて、墓前に腰掛ける。少女は男の腕に体を任せたまま、なおも寝息を立てていた。

「朝になれば、すくとも通り

男は宙を見上げ、誰にともなく呟いた。

「君は、また彼に会えるよ」

男の呟きは、少女の耳には届かない。

フブリ・トリバンドラムは、夢を見ていた。

死んでしまうの？ 私をひとりおいて、行ってしまうの？

夢の中の少女は、真っ白なベッドに突っ伏して金切り声に近い泣き声で喚いていた。

フブリはそれを見ている。部屋の隅に浮かび、靈魂のような存在で少女を見下ろしている。

そのときフブリは、何もできない。

夢の中で彼女は、何度も養母が息を引き取る瞬間を見ている。それなのに第三者のフブリはただ息を呑んでそれを見つめるだけで、何もできないのだ。

あんたはどうしてそんなに無力なの
フブリは幼い自分に吐き捨てるように言ひ。けれど夢の中ではそんな言葉も届かない。

大きくしゃくりあげる幼いフブリに白く細い手が伸びる。それは優しく頬に触れ、あふれ出る涙をすくつた。白いシーツからわずかに覗く青白い顔が微笑んでいる。

養母シルヘット・トリバンドラムは強い女だった。流行り病の熱病にかかりても、フブリに心配をかけさせないようにと平然を装う。病がその身体を蝕み、そして今、生きるか死ぬかの状況にあってもなお、フブリに優しい笑顔をくれる。

汗だくの顔をフブリに向けたまま、シルヘットは重たそうにまぶたを閉じた。

フブリはシルヘット、シルヘット、と半ば狂気したように叫んだ。幼い自分の声なのか、夢を見ている自分の声なのか、もうわからなかつた。

フブリは知っている。

シルヘットが死んだ後、瘦身の少年が勢いよく扉を開けてやつてくれるることを。

そして、もうすでにこと切れたはずのシルヘットが一人に奇妙な遺言を残すのだ。

『カラア……カラア……を……』

呪文のように繰り返されるその言葉を、フブリは恐ろしく思った。やがてシルヘットの閉じたままの口から流れていた言葉は、機械音のようなものに変わっていく。

すると、突然シルヘットの顔がぐにゃりと歪む。この世のものとは思えない醜悪な姿でフブリ、フブリ、と咳きながら近づいてくる。フブリは腕を掴まれそうになり、ひつ、と漏らして後ずさり、どこへともなく走り出す。

幼いフブリはもういなかつた。少年も、シルヘットも、部屋だつたはずのここはどこを見ても真っ暗で、どこまで走っても終わりがない。まるで宇宙空間に一人取り残されたようだつた。

フブリは走つた。次から次へとやつて来る正体不明の恐怖から逃れるために。

逃げなくちゃ……

ひたすら夢中に走るフブリは、いつの間にか暗い森の中に入つていた。

さつそうと生い茂る黒い葉の樹木を搔き分け、枝に切り傷をつけられようとも走り続ける。奥へ進むと小川があり、周囲で色鮮やかな花々が、のんきに茎を上下しながら歌つている。

その先には 光があつた。

フブリは恐れずにその光に飛びこんだ。すると辺りは突然真っ暗な闇に包まれ

フブリは崖から落ちるので。

闇に彩られた奈落の底が、抵抗できぬイフブリを呑みこむ。

私はまた、ひとりになるの？

「つは……！ はつ……はあ……は……」

勢いよく起き上ると、ふいごのようには息を吐き出す。心臓の音が、早鐘の「」とく頭を打つ。まるでつい先ほどまで動くのを忘れていたかのような速さだった。

「はあ……はあ……」

額に無意識に触れ、びつしょりと肌を濡らす汗に気づく。その感触で、フブリは夢を見ていたことを思い出した。とても恐ろしい夢だった。

窓からはもう朝日が差しこんでいた。眩しさに目をそばめると、ようやく現実に戻ってきたように感じる。自分を落ち着けようと大きく息を吐くと

「大丈夫？」

目前に、突然コップが現れた。目覚めたばかりで混乱していたため、状況を理解するのに時間がかかる。フブリは呼吸に体を支配されながら、しゃべるコップを眺めた。

「ぼくだよ。……落ち着いて、さあしつかり深呼吸して」

コップを差し出した少年の顔が水面に映り、フブリは苦笑した。

「…………あ…………うん…………。ありがと、ルビー。もう大丈夫」

「ずいぶんうなされてたみたいだ」

心配そうに紫の瞳が覗きこむ。

フブリはコップに口をつけた。手も唇もまだ震えが止まらない。羽織っていた一枚きりの毛布を引き剥がし、呼吸を整える。

「ここ」の女将さんに温かいものでも頼んで、持つてきてもうつよ

フブリは、急いで出て行こうとする少年の服の袖口を掴んだ。

「…………いつものことだから大丈夫。もう朝だし、私もすぐに起きるから。朝ごはん、まだでしょ」

微笑んでベッドから出ると、震えが収まった。

「あんまり無理はするなよ……」

「お客さん。申し訳ないんだけどエントランスもお願いできなかねえー」

階下から突然大きな声が響いた。ルビーは扉の隙間から顔だけを出して、今行きます、と言った。下は目を覚ました客たちが騒いでいるのか、人の声が入り混じって聞こえた。

「昨日の『あれ』を直してくるんだよ。じゃ、ぼく行くから……食堂でね」

フブリの傍に駆け寄つてそれだけを伝えたルビーは、矢継ぎ早に階段を下りて行つた。

それを見送り大きく背伸びをして、フブリは窓を開けた。穏やかな町並みを眺めていると、夢のあととの不快感がすべて風と共に吹き消されていくようだった。

着替えてギシギシ音を出す階段を下りると、数人の宿泊客が円陣を組んでひそひそ話をしていた。中年の婦人たちだった。

「突然宿に押し入つてきたと思ったら刃物でドスッ、ですものねえ」「でも、五号室の旦那さんも軽症でよかつたわよね。ただ女将さんには気の毒ねえ……こんなに宿中荒らされたんじゃ、大変でしょう」「あら、それなら大丈夫よ。ほら……」

婦人の一人が指差すのとほぼ同時に、フブリは円陣に割つて入つた。

「あの、ちょっとといいですか」

いきなり話しかけられ、婦人たちは怪訝そうに少女を見つめた。フブリは構わず話し続ける。

「その、昨夜ここを荒らした人たちって今どこにいるかわかります？」

さあねえ……と一人が口にするとみな揃えて首を傾げたので、フブリはありがとうとだけ言い残してさつさとその場を去つた。あまり長居したくない雰囲気だった。

階下には食堂があるため、周囲は朝食に起きてきた宿泊客たちでざわめいている。心なしか、先ほどよりも人が増えたようであつた。

小さいながら、町に一つきりしかない宿である。そのため宿泊客は多い。

「」の間に小さな染みのある壁に必要最小限の白熱灯、ぎしぎし音を立てる螺旋階段はクラシックな雰囲気を漂わせる。装飾は少なく簡素であつたが、その中で灯りを反射させて輝く翡翠のカウンターだけが場違いな雰囲気を醸し出していた。……昨夜までは喧騒の中に人だかりを発見し、フブリは駆け寄つた。

群衆は少年を取り囲んでいた。

そこには、見るも無残に破壊されたカウンター や、観葉植物のプランターが転がっていた。翡翠のカウンターは表面に傷がつけられている上、割れた破片が周囲に飛び散り変形してしまっている。最もひどいのは出入り口で、変形どころかそこにあるはずのドアがないという惨状であった。おかげで玄関からの風通しはよく、朝日がエントランス全体を明るく照らしていた。

少年は、破損した物品に触れただけだった。彼が指を触れただけで、倒れていたプランターは立ち上がり、割れた翡翠のカウンターは瞬きする間もなくもとの姿に戻るのだ。ルビーがものを一つひとつ修復させる度に、人ごみからは喚声が上がつた。

「ルビー、お疲れさま」

フブリは驚くこともなく群れを割つて前に出ると、彼の肩を叩いた。「う……うん……でも、なんていうか背後からの視線が熱いって言うか……」

「」めんねー、お客様にこんなことさせちゃってさ

奥で食事の準備をしていた女将が、客の波を搔き分けながら戻つてきた。

「はー、お客様がたすみませんねえ。遅くなりましたけど朝食は食堂のほうで……」

こちらです、と若い女中が大きく手を振つていた。宿泊客たちは名残惜しそうにルビーを一瞥してから食堂へ向かつた。人に注目されることが苦手なルビーは、ほっと息を吐いた。

しかし彼が胸を撫で下ろしたのも束の間、今度は街の通りを歩いている近所の住人たちが、扉のない宿を不思議そうに覗きこみ、ルビーに注目を集めた。そのおかげでまだ朝方だというのにもかかわらず野次馬の数は一気に増え、宿は見物客でいっぱいになつた。

「な、何か緊張するな……」

ルビーが赤面しながらちらちら後ろを気にしていると、女将が大きな体躯を反り返してげらげら笑つた。

「ここら辺、田舎だからさあ。魔法使いなんて珍しいんだよみんな……お兄ちゃん綺麗だしね」

綺麗といわれてルビーは更に顔を赤くした。

ルビーは、他人が見ても美しい少年だった。すらりとした瘦躯に整つた顔立ち、肌も雪のよう白い。色素の薄い茶髪はフブリよりも長く、えりあしが肩にかかっている。

「すげーなー、これが魔法だべー」

「生きてるうちに見れて儲かつたなあ」

「兄ちゃん、俺さも魔法かけてくれー」

「…………」

背後の方よめきが大きくなつてると、ルビーはいよいよ閉口してしまつた。その額に汗が滲んでいるのを見て、彼の気持ちをフブリが汲み取る。

「……あの、連れはちょっと気が弱いって言うか、プレッシャーに弱いんで……」

女将はすぐにフブリの真意を看取したようだつた。

「ほらあんたたち、泊まる気がないんならさつさと出て行きな！」この一喝で、多くの見物客は去つて行つた。残つたのは、食事を終えて戻ってきた宿泊客だけである。彼らはルビーによつて修復されたばかりの談話室で、ことのなりゆきを眺めていた。

「ありがとう、女将さん」

「こんなことお客様にやつてもいい」とじやないんだから当然さね。あ、そうだ。宿代はいらないからね

フブリは黙つて首を横に振つた。

「……私の…………かもしれないから…………」

小さく呟いたが、その声は女将には聞こえていなかった。残すはすっかり外れた玄関扉のみだったが、ここでルビーは立ち尽くした。

「これが、言うことを聞かないんです」

首を傾げた女将に、フブリが説明する。

「魔法は、ものや生物に『こうなつて頂戴』と呼びかけることなの。カウンターの破片に、もとに戻つてと伝えれば、人間が手を加えなくとも戻つてくれる……ものには命があるんだよ」

「へえ……。じゃあ、この戸は嫌がってるのかい？」

「このほうが風通しも日当たりもいいだろ、と言つてます」

女将はまた反り返り、宿中に響きそうな大声で笑つた。

「さすがあたしの宿なだけあるね！ そうだねえ……うん」

周囲を見渡し頷くと、女将は手を振つて宿泊客の視線を集めようとした。しかし彼らの視線はすでに、彼女の笑い声によつて集められていた。

「お客さんたち、どうでしようね。こここの扉、なくなつてすつきりしたと想ひます?」

いいんじやないの? と誰かが言つて、連鎖するように周囲から同じ声が上がつた。やがてそれは歓声に変わり、ルビーに向けた拍手に変わつた。ルビーは恥ずかしそうにうつむいて、ひたすら周囲の関心が自分たちから離れるのを待つていていた。

「昨夜、ここを襲つた人たちって今どこにいるんですか?」

しばらくして宿が穏やかな雰囲気に戻ると、フブリは隅で伝票を整理している女将に小声で尋ねた。ロビーはチェックアウトする客でごつた返し、カウンターにはひつきりなしに客が並んだ。

「気になるのかい?」

フブリは黙つて頷いた。

「ありや、ただの町外れのならず者さ。最近はああいう若者が増え

てきて困るねえ……今流行りの一ートって奴かね「女将はため息をつき、伝票の束で机を叩いた。

「しかし夜中に宿に押し入って金品あたるなんて……」

「何か盗まれたの！？」

「あ、いや……被害はなかつたけどね」

少女の必死の形相に、女将は目をぱちくりとさせた。

「ショッピングした町の警備隊の話じや、金目的だつた、つて自白してるらしいから。実際ほら、あの翡翠のカウンター、抉り取られてたろ。あたしが駆けつけたときにはレジからお金も抜き取ろうとしていたし」

思い起こせば、確かにカウンターには抉られたような跡があつた。旅の途中でたまたま立ち寄った片田舎　普段なら物取りすら珍しいこの穏やかな町が、一時騒然となつた。フブリが宿泊した宿に、深夜正体不明の男たちが押し入り、宿中を荒らしていったのだ。しかし、フブリは犯行のすべてを目撃してはいないため、彼らの目的がわからなかつた。大きな物音と悲鳴がして目を覚ましたときには、すでに階下を荒らした男たちは捕まつて宿にはいなかつたのである。女中に呼ばれ、女将はフブリたちに目配せして去つていった。

「……お金目的だつて

「違つた……ね」

フブリは遠くを見つめながら、深く息を吐いた。

「よかつたじやない。最近気を張り詰めすぎなんだ、フブリは」

「夢のことなら心配しないで。大丈夫、もう慣れたつて言つてるじやない」

少女は笑顔を作つたが、それはルビーに余計な心配をかけさせないための、事務的な笑顔だつた。本当は彼の言つ通り、心身ともに緊張状態を解けない日が続いている。それを暗示するかのように、夜は毎晩のように悪夢にうなされる。終わりの見えないこの旅は、自分の肉体も精神も確実に蝕んでいるのだ。

「行こう、ルビー」

客足がまばらになつてきたため、カウンターを離れよつとしている女将のもとに慌てて駆け寄る。

「あ、チェックアウトします！」

女将は一人の出した宿代を断り豪快に笑つた。

「いいのいいの。それより気をつけなよー。ここいら辺田舎の割にああいう変なの多いから！」

ありがとう、と大きく手を振り、宿を後にした。

女将がカウンターから離れようとすると

「ふーん……男のほうは魔法使いねえ……」

ロビーの長椅子に腰掛けていた宿泊客の男が、遠ざかる一人の男女を眺めて呟いた。腰まで伸びる金髪を煩わしそうに搔き揚げている。

「……あの子たち、こここの客？ おばちゃん宿帳見せてよ」

もうほとんどの客がチェックアウトを済ませたといつて、出て行つた彼らをまだ目で追つている。

「あんた怪しいねえ……まさか今流行りのストーカーじゃないだろうね」

「げほつ！」

男は、口をつけていたコーヒーを吐き出した。

「な、なーに言つてんだよおばちゃんー。この美青年がそんな変人に見える？ はつはつはつ」

「図星のようだね……」

ぎくり、と男は身を硬くして真剣な表情を作つた。

「いいかい、あたしがそんなに気になるんなら正々堂々と口説きな！」

「！」

「ぶほつ！」

男は、今度は吐き出した勢いでコーヒーのカップを落とした。

機関車の蒸氣を出す音に合わせ、近くの路地がかすかに揺れている。フブリは、広い駅の構内を見渡した。都会風のそこは一面ガラス張りになつており、宿のあつた中心部に比べるとおしゃれな雰囲気が漂つている。それほど多くない改札口からは、大きな荷物を持つた人の波が間断なく出入りしていた。

「ねえ、さつきの宿にいた男の人……気づいた？」

「え？ 誰のこと？」

足早にホームを歩くルビーが後ろを振り返つた。喧騒が激しいため、声のトーンを高くしている。

「あ、ううん。何でもない」

金髪の男が自分を見ていたような気がした、と言いかけてやめる。気のせいだらうとは思つていたが、確認せずにはいられなかつた。執拗に誰かの視線を感じると、どうしても過敏に反応してしまつ。ルビーは嘆息して立ち止まると、フブリの肩を叩いた。

「また……。気を張り詰めすぎだつて言つたろ」

「うん……あー、駄目だね私。ごめん気にしないで」

「いいよ。じゃあぼく、チケット買つてくるから。待つて」

振り向きざまに言い残し、窓口に向かつたルビーの後ろ姿を見送る。

「西行きだろ？ ええと……次は夕方に一本しか出でないねえ」

「次の町までどのくらいかかりますか……」

駅員とのやり取りを遠目に見ながらホームの中をぶらぶら歩いていふと、フブリは急な悪寒に襲われた。

視線だ。

誰かの視線を感じる。

フブリはルビーのもとに駆け寄つたが、その方向から視線の主が近づいてくるのに気づき躊躇する。ルビーは駅員と話しこんでいるようでフブリの異変に気づいていない。大声を出して叫ぼうと

も思つが、これだけ離れた場所から、しかもこの喧騒の中では届かないだろ？

灰色のコートに身を包んだ若い男が近寄つてくる。フブリはじりじりと後退し、やがて駅の入り口に向かつて走り出した。するとちりぢりだつた視線が一斉にフブリに向かつて収束した。フブリはその気配を後ろ手に感じ、全速力で走つた。

「はあつ……、はあ、はあ……」

ホームを出て貨物の隙間に身を隠した瞬間、何かが目の前を掠めた。

「つ！？」

フブリは反射的に上半身を反つた。鳥が数羽飛び去る音が聞こえる。目の前に、大きな影が差している。しばらく日の光で目をそばめていたフブリは、それを人影だと判断するのに時間を要した。ちくり、と頬に鈍い痛みを感じた。生暖かい血液が垂れている。先ほど掠めた何かは刃物だつたようだ。

「また……」

二人の男だつた。一人は先ほど目にした灰色のコートの男で、何本かのナイフを手にしている。もう一人は剣を携えた屈強そうな、体格のいい中年の男であつた。二人とも背景に紛れるような目立たない格好をしている。

「お金が欲しいの？……なーんて……違うよね……」

フブリの問いに、答える者はいなかつた。一人の体が動いたのを見ると、フブリは慣れた動作で身を屈めた。背後で、ナイフが積み置きのコンテナに当たつて落ちる音がした。

ただの賊ではない、とすでに確信していた。

「ただじや殺されてやらないんだから……！」

吐き捨てて走り出す。男たちは身をかわしたフブリが予想外だつたのか、逃げた彼女を追うまで時間がかかつた。

実は、このような事態は初めてではない。

フブリは何者かに追われていた。それは、単に金銭目当てで徘徊する賊などとは異なつた。彼らはフブリを殺すことだけを目的として

いる。そのため、こと逃げることに関しては旅の中で多くを学んだ。人ごみの多い場所を選んで、その中に紛れる。フブリは背負つていたりュックから白いショールを取り出し、慣れた手つきで頭からすっぽり被つた。

どれだけ走ったのかわからないくらい走り、ゆるゆると速度を落とし立ち止まる。額の汗が髪の毛に絡み付いて鬱陶しかつた。

「撒いたかな……」

初めて後ろを振り向き、男たちが追つてこないのを確認して、ほつと息をつく。

「どのくらい離れちゃつただろ。ルビー、気づくかな……」

駅に置き去りにしてきたルビーが気がかりだつた。彼はフブリがいなきことに気づけば、大慌てで探しに来るだろう。しかし、周りを見渡せばそこが未知の場所であることは一目瞭然だつた。そもそも、一夜を過ごすために一泊しただけの町である。この辺りの地理はまったくわからない。

とりあえず、人気のない路地裏に身を隠した。

「迷つてなきやいいんだけど……」

方向音痴な同行者を案じつつ、フブリは民家の壁にもたれかかつた。すると、ふいに誰かが自分を呼んだ。

「ルビー？」

すぐさま周囲を確認するが、誰もいない。

息を凝らし、フブリは身を構えた。先ほどの男たちが追いついて來たとも限らないからだ。これも、長い旅の中で身についた習性の一つだつた。しばらく体を強張らせていると、声が、今度ははつきりと耳元で聞こえた。

「ここにちは、お嬢ちゃん

「誰！？」

ルビーの声ではなかつた。急速に心拍数が上がつていくを感じる。

「おれ？ おれは麗しの美青年剣士さまです。なうんて」

フブリの緊張に反して、妙に垢抜けた能天気な返答が帰つてきた。

しかしひブリは、依然姿の見えない声に気の緩みを許さない。

「どこにいるの？ 出てこい！」

怒声と同時に、目の前にある街路樹の葉から突然顔が現れた。フブリが思わず小さな悲鳴を漏らす。顔を出した本人は、目を丸くしてフブリを覗きこんだ。

「あつ、ごめんごめん。びっくりした〜？ いやー、出て来いって言つからさあ」

男は、木に足をかけ苗吊りになっていた。

さすがにこれには、フブリの緊張も一瞬で解けた。フブリは何を思つたか、逆さの頭を掴むと、それを引っ張りはじめた。

「あいたたた！ ちょ、待つて！ 自分で降りる……痛えつ！」

「あ、あなた宿の……！」

その長く垂れる金髪には見覚えがあった。宿で自分のことを見ていた男だ。間違いない。

「おつ、覚えててくれたの？」

男は嬉しそうに微笑んだが

「近づくなー！」

フブリに顔面を思いつきり殴られた。

「……な……ナイスパンチ……」

「あんた何！？」

男の顔をしつかと掴み引き寄せると、落ち着きのない声が口をついて出た。あまりの怒声に、男の耳が壊れそうな勢いだつた。

「シルヘットが何をしたって言つの！？ 私が何だつて言つんだ！」

男はまだ呆然と少女を見つめた。

「シル……私が何だつて……、何？」

「……え？」

フブリはようやく、男の顔をまじまじと見つめた。声を張り上げたせいで息は上がつていたが、同時に冷静な思考も徐々に戻つてきていた。

「人違ひじやねえの？」

よく見てみると、彼は今まで襲つてきた男たちとはどことなく毛色が違うようだつた。

体つきはしつかりしているとはい、全体的に細く、力がありそろには見えない。身なりも目立たないようにしている彼らとは異なり、黒を貴重としているもののラフで明るい出で立ちだ。人目を引く金髪は、自分の存在を誇示するかのように腰の辺りまで伸ばされている。極めつけに、彼のノリは暗殺者にしては軽すぎた。

「……人違ひみたい」

よくよく考えてみれば、襲撃者が自分に声をかけてくること自体おかしい。フブリを殺すことだけを考えている人間が、そんな馬鹿な真似をするはずがない。

フブリは急に体の力が抜け、路面にへたりこんだ。

「なあ、それだけ？」

「はあ？」

先ほどとは打つて変わつて、適当に返事を返す。

「人違ひのお・詫・び」

木から降りた男は、恭しくフブリの手を取り、握りしめた。図々しくも詫びを要求してくる男に、フブリは眉をひそめる。男は何を考えたのか突然口を尖らせて自分の頬を指差しはじめた。

「ほつぺにちゅーつて……」

「あ！」

男が言い切る前に、フブリが開口した。

「私、行かなきや。連れが私を探してると思つから」

「え」

「間違つてごめんなさい。じゃ！」

男が何か口にする間も『えず、フブリは脱兎の』とく立ち去つた。

その後ろ姿を、人差し指を頬に埋め、唇を尖らせた状態のまま呆然と見送る男。情けなく落ちたその肩は、心底寂しそうであった。

「ちゅーつて……」

通りすがりの町民が不審な目つきで、間抜けに立ち去る男を見て足早に駆けていった。

「あーあ……振られちまつた」

遠くなる少女を眺めながら、ポツリと呟く。

「あれが、フブリ・トリバンドラムねえ……」

男は不敵に微笑んだ。

フブリは当てもなく街を徘徊していた。駅のホームに戻つたはいいものの、そこにルビーの姿はなかつたのである。

「いつものことだけ……」この調子じゃ、今日も汽車に乗れそうにないなあ」

フブリが一人でいるときの襲撃は珍しいことではない。しかし、ルビーと一旦はぐれると、お互いを探すのにどうしても時間がかかる。自分たちの都合は、襲撃者に完全に振り回されていた。

すれ違いを避けるためにも、フブリはへたに動かないことにした。しかし、それが逆に仇となつた。フブリに襲い掛かってきた二人の男が、駅に戻つて來たのである。男たちはフブリを見つけるや否や、足早に駆け寄つてきた。

「しつこい！」

フブリもそれに呼応するように走り出した。緊張の連続で疲れてはいたが、彼らを再度撇く自信はあつた。どんどん距離を引き離していく。

「人ごみに紛れれば、追いつけないよね……」

聞こえないと知りつつも、声に出した。群衆の中にも彼らの姿は見えなかつた。

「追いつくんだよ！」

耳元に男の声。

フブリは咄嗟に建物の陰に隠れた。刃物が壁にあたる音が響く。

「嘘！」

大きく距離を引き剥がしたはずだつた。こんな近くまで急に追いつけるはずがない。まるで一瞬で、移動したような……。

『魔法使い』という単語がフブリの頭をぐるぐる回る。しかし魔法で移動できる使い手は、ほんの一握りだと聞いたことがある。ルビーですらそんな芸当はできない。

その答えは簡単に見つかった。陽を遮るように足元に奇妙な形の影が落ちている。見上げれば、頭上には民家同士をつなぐ掛け梯子がある。迂闊だった。これを使えば町中の移動も短時間で済むだろう。

「静かにしろよ、譲ちゃん……」

若いナイフの男に羽交い絞めにされ、口を覆われてしまつた。人が多すぎたため、フブリが路地裏に押しこまれたことに気づく者はいなかつた。

中年の男が歩み出た。帶剣の切つ先が、まっすぐフブリに向けられる。

彼が構える帶剣だけではない。フブリの首筋には、背後からナイフが当たっていた。容赦のない彼らの姿勢に、フブリは初めて恐怖した。

「私に何の……恨みがあるの？」

口を覆う指の隙間から震える声を漏らす。

答えが返らないことは知つていた。沈黙に、フブリの生睡を飲みこむ音だけが響く。

今まで、この問いに答えてくれる襲撃者はいなかつた。人から恨まれるような覚えはなかつたが、少なくとも、自分に知る権利はあるはずだ。理由もわからなまま殺されるのだけは嫌だつた。

「私をどうするの？」

じりじりと距離を縮めてくる中年の男の氣を逸らそと、言葉をつないだ。しかし近距離に追い詰められてしまえば逃げ出すことは難しい。この状況では、むしろ体格のよい男たちのほうが有利だ。いや、それ以前に、もう体の自由すらままならないのだ。首元に当たるナイフの切つ先がそれを物語ついている。

フブリの口元を塞ぐ手のひらに力が入る。悲鳴を上げさせないためだろうか。そのごつごつした固い手の感触に、フブリは顔を歪めた。こんなことになるなら、護身用の剣を離さないでおくべきだった。いや、それよりもルビーと逸れたのがまずかったかもしれない。彼がいれば、魔法である程度相手をかく乱することもできた。

そんなことをとりとめもなく後悔しているうちに、男が氣だるそうに帯剣を持ち直した。金属独特の鋆ついたような臭気が鼻を突く。もう、自力ではどうにも手の施しようがない。体温が急速に冷えていく。

「すぐに終わる」

男が帯剣を振り上げ フブリは祈るように目を閉じた。

頭が真っ白になった。

痛みはなかつた。

苦しまずに死ねたのだろうか、と考えていると、呼吸の音が耳に入った。しばらくして、それが自分の呼吸だということに気がつく。そつと薄目を開けて、自分の手を、足を、頭を確認する。切られたような跡は、どこにも見当たらなかつた。

「生きてる」

フブリは、間の抜けた声で呟いた。声が出たことで、自分の口を覆つていた男の手が消えていたことに気づいた。

「お前、誰だ！？」

突然の怒声に、我に返つた。

先ほどの男たちが誰かと剣を交えている。長い金髪の、長身の男だつた。

その男には、見覚えがあつた。

「女の子一人相手におっさん一人でかかるなんて、恥ずかしいと思わねえのかよ」

金髪の男が、細身の剣を軽い身のこなしで扱っている。二人の屈強な男たちを、たつた一人の青年がまるでダンスを踊るかのように、軽くあしらつっていたのだ。剣技に覚えのないフブリにも、それがどんなに難しいことかはわかる。

襲撃者たちは、完全に金髪の男に翻弄されていた。

「……な、なんなんスかこいつ！」

「だから、麗しの美青年剣士さまだつーの」

若い男が軽く斬りつけられ、悲痛な叫びを上げた。男たちの会話か

らは、先ほどまでの緊迫した雰囲気がまるで想像できない。フブリは硬直したまま彼らのやり取りを眺めていた。

「こいつ言つてること意味わからねえし、つええよ… かなわねえ「意味わかれよてめーら。おれ一人でアホみたいじゃん……って…」

中年の男は舌打ちをすると、踵を返して人波の中に足早に消えていった。若いナイフの男は一瞬躊躇したが、すぐに諦めて後を追つた。

「待て！」

金髪の男が素早く彼らを追つたが、もう群衆の中にその姿は見えなかつた。

「ちつ… 逃げ足早えな」

ブツブツ呟く金髪の男は、息すら乱してはいなかつた。

「あいつらこの町の地理に詳しそうだったから、追つてもなかなか見つからねえかもな。……って、聞いてる？」

「えつ？」

男に疑問符を投げかけられて、ようやくそれが自分に向けられていた話であることに気づいた。しかし、まだ現実が把握できていないフブリは、ただただぼんやりするだけである。

「なあ、生きてる~？」

「えつ？」

二度も返ってきた間抜けな返答に、男は苦笑した。

「あつ、うん……！ 生きてるみたい、私」

ようやく事態が呑みこめたフブリは、しかし興奮冷めやらぬ調子の声を出した。

「ん、よかつた。よかつた」

「ありがとう……えーと」

「ツバル」

「ツバル。ごめんね、さつきは頭引っ張つて」

まだ混乱しているらしい。助けてもらったことよりも、彼の頭を引

つ張ったことのほうが先に浮かんだ。

「ああ、うん。あれは痛かつた……」

「今の人たちの仲間だと思つて……。本当にじめんなさい」

「え、とツバルの唇が動いた。

「ほら」

ツバルが手を差し伸べた。男たちに追い詰められたとき、座りこんでしまつたらしい。フブリは彼の手を支えにして、がくがくいつている足を何とか持ち上げた。膝小僧が軽く擦りむけていた。

「あいつら何？」

「それは……」

フブリはうつむいた。自分の声のトーンが落ちていることで、興奮も徐々に去つていく。

「お嬢ちゃんは、近くの町の人……じゃないよねえ。宿に泊まつてたし」

「うん、旅してるんだ。ああいつ変なのに追われてるから、細心の注意は払つてたつもりだつたんだけど……」

「あんな正体不明の奴らに狙われながら、女の子一人で旅してんの？ 何か危ないねえ」

「あつ、一人じやないよ。はぐれちゃつたんだけど、魔法使いの……」

フブリは訂正しようとして、遠くに人影を見つけた。人影は少女に大きく手を振つている。

「ルビー！」

フブリが走り出すと、ルビーも歩幅を広げて駆けてきた。

「フブリ！ どこに行つてたんだよ。……もしかして、またあいつらが！？」

尻餅をついたときに汚れたフブリの衣服と頬の切り傷を見て、ルビーは目を見開いた。ルビーが、自身の背負つているリュックからはみ出している護身用の剣に気づいて、更に慌てた。

「剣！ フブリの、ぼくが持つてたんだ！ けつ、怪我は？ あい

つらは？」

フブリの衣服と切り傷だけでパニックを起こし、本人以上に慌てている。どうしたらよいかわからないらしく、両手を所在なさげに宙に浮かせたままだ。

「大丈夫、ちょっとほっぺたかすつただけ。それがね、助けてもらつて」

「助け？」

ルビーは視線を動かし、フブリの後ろに見慣れない男を発見した。

「オッス！」

「…………」

軽いノリで話しかける謎の男に、ルビーは一瞬閉口した。その気持ちはすこくよくわかる、とフブリは心中でルビーを察した。

「…………あなたが、フブリを助けてくれたんですね。ありがとうございます」

深々と頭を下げる。ルビーは、こうした礼儀にはつるさい男だった。

「どういたしまして～」

へらへら笑う男をルビーは凝視していた。フブリも改めてツバルの風体をまじまじと見つめてみた。腰に剣を携えてはいるものの、彼の身なりからしてそれは飾り太刀にしか見えない。ひょろつとした体型には、力強さすら感じられなかつた。

「失礼ですが、旅人ですか？」

「いや、おれ傭兵」

これには二人同時に驚きの声が漏れた。

「浮浪者かと思つてた……」

フブリが呟く。ツバルは、少しむつとしたよつだつた。

「聞け！」

ツバルはフブリたちの前に仁王立ちになると、突然大声を出した。びくつ、と二人の体が痙攣する。

「おれが、『自称「凄腕」』の剣士ツバル・リアノーラだ！」

自信満々に言い放つその男に、一人は一瞬で固まる。

「自ら自称つて言つてる……」

「変な人……」

何と続けてよいものかわからず、ルビーとフブリはお互い顔を見合させた。

「お前ら！ 名を名乗れ！」

「はつ、はい！？」

一人盛り上がりっていたと思いきや、男は唐突に声をかけてきた。

「フ、フブリ・トリバンドラム！」

「クイルビー・ヴォルケットです！」

二人とも相手に感化され、要らぬ大声を上げていた。

「フブリに、クイルビーな。ようつし、覚えた」

額くツバルに、ルビーは一抹の不安を感じたようであった。確かにこれは、あまり深く係わり合いにならないほうがよさそうなタイプだ。

「えー……、ツバルさん。ぼくら、急ぎますのでこれで失礼します」

ルビーはフブリの頭を掴むと、強引に頭を下げさせた。

「えつ、えつ、ルビー？」

「いいから、行くよ。今行けば夕方の汽車に間に合つ」

いつの間にか日は暮れ、民家は夕焼けの色に染まっていた。フブリは即座に相槌を打つた。簡単に体裁を整えると慌ただしくその場を去る。ルビーはツバルには目もくれなかつた。

「ツバル、ありがとう！」

フブリがルビーに半ば引きずられながら、何とか後ろを振り返つてそれだけ告げた。

「いえいえ」

振り返ったフブリは、ぎょっとした。すぐ傍に、彼の顔があつたのである。

「な、何でついてくるんですか！」

ルビーもツバルに気づき、驚きの声を上げた。

「いや、また襲われたら大変だろ？ フブリが心配だからな

「は、はあ……」

「ぼくがいるから大丈夫です」

呆気にとられているフブリの代わりにルビーが語氣を強めた。

「魔法使い一人じゃ心許ないだろ。だから」

自称『凄腕』の傭兵はにっこり笑った。

「おれを雇わない?」

私は、彼女を殺した。

彼女の寝室に入るのは、とても簡単なことだった。

それもそうだ。実の妹が姉の部屋に入るのに、誰の許可が要るうか。衛兵たちも、まさか私が、彼女の命を奪うとは考えもしなかつたらう。何の疑いもなしに、私を寝室に入れてしまった。あの、国王側近の近衛の少年たちが揃つていれば、何かが変わつていたかもしれない。

彼らは姉も一目置く、優秀な近衛であつたから。

私は、静かに寝息を立てている姉に、最後のお別れを言った。今となつてはもう、何を口にしたのかは覚えていない。私を許してくれ? とは聞いたような気がする。殺す相手に疑問を投げかけるとは、何とも笑える台詞だ。

私は、彼女の首筋にそつと触れた。生暖かい感触を確かめたかったのかもしれない。一瞬、その体が動いたように見えたが、気のせいだつた。

けれど彼女は、目覚めてくれなかつた。一向、自分に気づいてくれる気配が無い。彼女は、すでに深い眠りに落ちていた。目覚めて、私を叱咤してくれたら、どんなにこの心臓も落ち着くことだらう。私の鼓動は、今や私の目になり、手になり、足になつていた。

いや、姉は私を叱りつけてはくれないのではないか。

そうだ。きっと、私を憐れむように見つめるに違ひない。そうして私は一人、惨めに崩れ落ちるのだ。

なんて、喜劇だらう。

私は、短剣のグリップを握り締めた。

汗ばむ手に力を入れる。

もう、これ以上待つても、何も変わらない気がした。

頭を空っぽにした私は、彼女に短剣を突き刺した。
突き刺した、気がしていた。

私の腕は、誰かに止められていたのだ。

姉の寝室に入るのは、とても簡単なことだった。
ただ、一つだけ誤算があった。

姉の近衛が一人、まるで私の行動を見透かしていたように、部屋の隅に潜んでいたのだ。

「少年少女の一人旅か……。あ、わかつた！両親に交際反対されて勢いで駆け落ちちゃつたつてタイプだろ？」

ツバルは誰にともなく疑問を投げかけ、大げさなジェスチャーを交えながら一人納得して頷いた。

「今多いよな……若者たちの甘酸っぱい青春が引き起こす若さゆえの過ちつづーの？うん、とりあえず男のお前がしつかりしなきやだめだぞ」

な？と馴れ馴れしく肩を抱いてくる隣の男に、ルビーは冷たい視線を投げかけた。

「どうでもいいんですけど、何で一緒に汽車乗ってるんですか」

「え……。だつておれ、お前ら守らなきや」

「いらないって言つたんですけど……何なんだこの人」

襲撃者から逃れたあと、フブリとルビーはどうにか夕方発車の汽車に間に合つた。

ところが、思わぬおまけが……。そう、ツバルが何故か一人につき添つて汽車に乗りこんできたのである。そればかりではなく、あまつさえフブリたちと同じ車両に相席してきた。彼の自分たちに向けられた独り言を、必死に無視しようと努めるルビーの努力も虚しく今に至る。

「あのね、ツバル。好意は嬉しいけど私たちお金もないし、雇つてあげられないんだよ」

フブリがやんわりと割つて入つた。

「いらぬー

「は？」

「金なんていらぬーよ。おれはお前ら貧乏人の味方だからな！」
やけに『貧乏人』を強調した物言いだった。金銭的余裕がないのは真実であるが、そこまではつきり言わるとむしろ可笑しい。しか

し、ルビーは彼の言葉をそのままの意味で受け取ったようで、あからさまな嫌悪をツバルに向けた。

「何かイチイチ人の神経逆撫でますねあなた」

二人の掛け合いが何だかおかしく思えてフブリは笑った。

今朝の夢から続いていた憂鬱な気分が一気に吹き飛んだ気がする。ルビーは心底嫌がつていたが、思いがけない三人旅がフブリは少しだけ楽しかった。窓ごしに外を見れば、そんな自分の気持ちを反映するかのように、暗闇に浮かぶ明るい町の灯りが見えはじめた。

結局、有無を言わせぬ勢いでツバルは一人に同行した。汽車が隣町に到着してから、降車する二人の肩を抱いて離さなかつたのである。

「今夜はもう遅いし、ここで一泊しよう

荷物を上段の棚から下ろしながらルビーは目配せした。荷物は生活するための必要最小限のものしかない。

「そだね。ひやつ！」

フブリが突然頓狂な声を上げた。

「いただき～」

肩にかけようとしたリュックを、ツバルにもぎ取られたのである。ツバルはあつけらかんと笑いながら軽々とそれを持ち上げた。

「ツバル！？」

「ただの物取りだつたんですか！？」

「おいおいおい。レディーに対するただのマナーだろ。このおれが泥棒なんていう低俗なもんにみえるか？」

充分見える、という言葉をフブリは呑みこんだ。

町に下りると、もう夜だというのに、明かりの消えた民家は一つも見つからなかつた。近くに城があるようで、なかなか活気のある都會であることは見て取れた。遠くからでもはつきりと形のわかる中心部の噴水は、きらびやかな光彩を放つていて。

「大きい町だね～」

「人も多いぜ～。あー最近の若者は元気だねえ」

街頭を通り過ぎる若者たちを、ツバルは細目をして見ていた。

「年寄りみたいなこと言わないでくださいよ。えーと、駅員さんに
よるとこの町は……」

「温泉街ですよ~」

街の大通りに出ると、突然誰かに声をかけられた。

「お客さん今夜の宿もう決まつた？ 寄つてつて~」

「おいでませ~。今なら温泉入り放題のフリー・バスつきだよ~」

「美人の湯、あるぜ~誰でもお肌びかびか！」

宿の煙突からは暖かい湯気が揚がり、足元の斥候にはお湯の流れる
音が響く。そこは一面の温泉宿だった。どこの宿も寄せせに躍起に
なり、身を乗り出して自慢の宿をアピールする。ルビーが何か口に
出す間もなく、次の宿の寄せ声が耳に入った。

その活気はもちろんのこと、イルミネーションの洪水にフブリは目
をしばたいていた。夜だというのに町中が明るい原因はこれだった
のだ、とルビーは納得した。

「そこのおにーさん！ 混浴もあるぜよ~！」

「おっ、おれあそこオススメ！ 混浴だつて~」

「入つたこともないくせにお勧めも何もないですよ~。ほら、何あ
の値段……馬鹿高つ！」

店主の掲げていた看板に記されていた法外な値段に、ルビーは目を
白黒させた。

「これだけ宿があるとどれがいいのか……人がいっぱいよくわから
ないな。フブリ、大丈夫？」

大通りは宿の従業員だけではなく、街頭を往来する多くの宿泊客で
賑わっていた。人ごみで離れ離れになることのないように、ルビー
はフブリの腕をしつかり掴んだ。おれもおれも、という男の声が後
ろ手に上がつたが、ルビーは聞こえないふりをした。むしろ彼には
一刻も早くはぐれて欲しかつた。

すべての宿を見定めている時間も気力もなく、結局三人はフブリが
選んだ無難な値段の宿に潜りこんだ。

「温泉街だ～やつほー」

宿帳に記帳して部屋に案内されると、ツバルは子供のようごベッドに体を投げ出した。真っ白な寝台のスプリングが彼の体重によつて、ぎし、と鳴った。

「どうしたよ？ 騒、うづせ～。だつて温泉だよ温泉ー・？」

「悪いですが、そのテンションについていけません」

「何お前温泉知らねえのー？ 不憫だなー。あのな、温泉つてのはな……」

「…………」

ルビーはもはや黙つて首をうなだれるしかなかつた。

この男には人間の言葉じや通じない。

「せつかくだし、早く温泉入ろうよ！」

「えーと、女湯は今ちょうど清掃中みたいだね。あ、その荷物こつちに置いてください。その前に何か食べて……いや、先にぼくらがさつさと入ってきたほうが効率いいかな。すみませーん、朝食は何時ですかー」

ルビーは部屋の中を散策しながら、荷物を運んできた女中にてきぱきと指示を出した。ツバルはベッドの上を転がり、立つたままのフブリに近づいた。

「クイルビーつてセーリーもああなん？ ……痒いとこに気が利く男だねえ」

「昔からああいう性格なんだ」

ツバルたちの会話を後ろ手に聞きながら、ルビーは眉根を寄せた。

「ツバルさん。ぼくら先に入っちゃいましょう、温泉。十分後くらいに女湯が開くらしいから、フブリはもうちょっと待つてて」

「おつ、いよいよだなー。脱ぐとすごいよ、おれ」

見とれるなよ、と一人盛り上がつてゐるツバルを置いて、ルビーは部屋を後にした。

温泉は町全体を見下ろせる高層の露天風呂で、かすかにひのきの香りが漂つていた。足元には天然の岩が無造作に敷かれている。タイ

ミングがよかつたのか、二人の他に入浴客はいなかつた。

「あーいい湯だ！ 疲れが取れるな、な！」

「ええ……気持ちいいですね」

ルビーは満足そうに頷いた。隣の男は相変わらずさかつたが、それすら気にならないほど心地よい気分だつた。こつしてのんびりお湯につかるだけで、旅の疲れが癒されていく。部屋で一人待つているフブリにも、早く温泉に浸かつて体を休めて欲しいと思つた。

「お前……キレーな体してんな」

「は？」

暖かさに陶然としながら景色を眺めていたルビーは、ツバルの一言に硬直する。その男の顔を見ると、突然現実に引き戻されたような気分になつた。ツバルはルビーの顔をまじまじと見つめ、值踏みするように頷いた。

「男のくせに、その真つ白な肌といい、長い睫毛といい

「何近寄つてきてんですか！」

ルビーはお湯の中を這つてくるツバルに悪寒を感じて後退した。反射的に、近寄つてくる男に湯をかける。

「いや、おれ全然オッケイだから」

ツバルが言つて、ぐつ、と親指を立てて見せた。

「何が！？」

ルビーは喉の奥から搾り出すような声を上げた。

「変なこと考えないでくださいよ！ ……気持ち悪いなあ、もう」

「いや、オッケイだから……ホント。考えといて」

何を考えるというのか。

ルビーは温泉に入る前よりも更に疲労がひどくなつたように感じた。軽くうなだれると、きやつきやつ、と薄い壁越しに女性客の黄色い声が聞こえてきた。女湯の清掃が終わつたのだ。

「あー、女湯いいな。おれも入りてえ」

「フブリも入つたかな……。ぼくらはもう上がりましょうか」

後ろで、えー、という声が聞こえたが、ルビーはすたすたと脱衣所

へ上がつた。

二人が湯を出て着物に袖を通したとき

「…………きやあー！…………」

隣の壁からか細い声がかすかに漏れた。先ほどとは一ニュアンスの異なる黄色い声である。

ツバルとルビーが顔を見合わせた瞬間、

「きやあああああああー！」

今度ははつきりと、女の悲鳴が聞こえた。その合間に数人の女性の声が飛び交っている。

重い事態を悟つた二人は、適当に浴衣をまとうと慌てて外に飛び出した。……飛び出したはいいものの、女湯の前で立ち尽くしていた。簾越しでは中の様子は見えないが、喧騒が一層激しくなっていることは充分すぎるほど伝わってくる。腰掛け牛乳を飲んでいた老夫婦が、不思議そうに近寄つてきた。

「こりや緊急事態だ……！ 女湯見てこなきや」

いそいそと目前の簾をぐぐりとしているツバルの腕を、ルビーが反射的に制止する。

「ちょっと……！ 何言つてんですか、この変態！」

「じゃーどうすんだよ。あ、お前じさくさに紛れて女のふりして入るー、とか思つてんのかー？」

「あんたと一緒にしないでくださいー！ フブリ！ フブリ、いるのかーーー？」

ルビーはとにかく、一人外に置いてきたフブリが気がかりだつた。彼女は自分たちと入れ違いに入浴する予定だつた。もしかしたらちょうど今、何かが女湯で起こつてゐるこのときに、フブリが中にいるという保証はない。

しかし、フブリの声は聞こえない。というよりも、何人も女の声が入り混じつていて、何を誰が言つてゐるのかさっぱりわからない状態だ。

「おーい！ 女湯のおねーちゃんたちー！ 何があつたんだー！？」

「もーサイテー！」

ツバルの言葉と同時に、一人の入浴客が勢いよく飛び出してきた。

「あの……何があつたんですか？」

最初の女性客が出てきたのを皮切りに、しかめ面の女の子たちがぞろぞろ出てきた。ルビーはその先頭に恐る恐る話しかけた。

「のぞきよ、のぞき！ 気色悪いオッサンが！」

「すっげえムカつくんだけど！ 何あのオヤジ」

「超キモかつたよねー！」

数人の女の子たちは各自が文句をブツブツ漏らしながら、さつさと去つて行つてしまつた。その集団の中にフブリの姿は見えない。ルビーとツバルは、すっかり静まり返つた女湯に足を踏み入れた。がらんとした脱衣所にもフブリはいない。……代わりに、ボコボコに暴行されて顔の形を変形させた中年の男が丸裸で転がつていた。その顔は人間と思えないほど腫れ上がり、どこが目なのか口なのか一見してわからない。広い脱衣所に転がる姿はとても小さく惨めに見えた。おそらく先ほどの彼女たちが彼に報復し、その衣服を剥いたのであらうこととは想像に難くない。

「ひでえ……」

「女つて……」

ふと、ツバルが男の顔を凝視した。

「どうかしました？」

「……あれ……。おれ、こいつ見覚えあるぞ。おい、オッサン」

しゃがみこんで男に近づき、ツバルは何かを確信したように頷いた。男の耳たぶを引っ張り、そこにはつきりと話しかけている。

男は、恐らく意識が朦朧としているのだろう。薄くまぶたを開けるが、しばらく黙つたまま己の耳を引っ張る男を見つめていた。しかし、その金髪の男 ツバルを認識すると、

「…………ヒツ！ おま…………！？」

「おれのこと覚えてるよなあ？ オッサンまた懲りずにフブリを

追つてきたの？」

ツバルは硬直してしまった男を、憐れむように微笑んだ。男は耳を離されると、必死に両手を動かして床をかき、座つたまま後退した。

「また、つてこいつですか？ 今朝フブリを襲つた奴は」

立つたままのルビーは、やはり憐れみの目を彼に向かた。ここまで追つてくるその根性は認めるが、今の惨状は敵とはいえ同情を感じざるを得ない。

男は何か意を決したのかツバルを上目使いに睨みつけると、うつむいたまま黙つてしまつた。何を言つても微動だにしない。

「あ……しまつたかも」

ポツリとツバルが漏らした。男の反応に困り果て、一旦フブリのもとに戻ろうとルビーが提案した矢先だった。

「いや、もう一人いたなあと思つて。昼間フブリを襲つてきた奴」

「もう、何でそれを早く言わないんですかーーー？」

ルビーは、宿中を駆け回っていた。軽い歩調でツバルがそれを追いかける。

女湯にいた男は、晒しておきたいと言つ女の子たちの要望により、縛り上げてそのまま転がしておいた。しかしその後慌てて部屋に戻るも、フブリの姿はそこになかったのである。

フブリの荷物がなくなっていることから、彼女が入浴に行つたのか、または誰かが部屋に侵入してきたのか、仮説はいくらでも湧いて出てくる。とにかくフブリの身が現在危険な状況下にあることだけは確実だつた。

「仲居さん！」

酒を運んでいる女中を見つけると、ルビーはすぐに呼び止めた。フブリを探しはじめてからもう八人目になる。

「銀髪のショートカットで、これくらいのピアスをしてて、十五・六くらいの中肉中背の女の子です」

ジェスチャーを交えながらの説明を、女中は真剣な顔で聞きながら聞いていた。

「……あ、あの娘ね！ 何か慌ててあっちに走つていきましたよ」「裏手のほうですね！？」

ルビーは瞳を輝かせると、簡単に頭を下げてすぐまた走り出した。それをのんびりしたツバルが追う。

「さんきゅー。おねーちゃん」

ツバルは振り向きざまにウインクした。こんな状態であつてもこの能天気な挨拶に抜かりはないらしい。

二人は板敷きの渡り廊下を抜けて、外へ出た。ガラス張りのフロントでは、数人の客が談話しているところが見えた。ぐるりと迂回して裏手に回るが、そこには貯水庫や温水のメーターがあるばかりで

人影は見当たらなかつた。

仕方なくもと来た道を引き返すと

「あつ、ルビー！」

渡り廊下で、反対側から走つてくるフブリにばつたり遭遇した。息を切らしながら駆けてくる。

「フブリ！」

フブリは勢いよくルビーの胸元に飛びこんだ。

「誰か追いかけてくる！ 温泉に入ろうとしたら、昼間のおじさんが空から降つてくるし……！」

「大胆だなオッサン……」

フブリはルビーにしがみつきながら、周囲をきよろきよの氣にしていた。

「今もほら！ あつ、あの人ー！」

少女の指差す方向に、その男はいた。フブリを見つけるや否や、コートからナイフを取り出して向かつてくる。

「おおつ、誰かと思つたら昼間のナイフ野郎じやん」

二人の間を縫つて、ツバルが前に躍り出た。彼が構えると、男は一瞬たじろいだ。

「げつ……！？ あんた……」

「麗しの美青年剣士さまだよ。よつしや、来い！」

店のマネキンのような決まつたポーズをとつて手招きをするその姿に、ルビーは息を呑んだ。ツバルは押しも押されもしない、余裕の表情を見せてくる。三人の間に緊張が走る。

すると向かつてきていた男は急に速度を緩め、Uターンするとともと来た方向へ全力疾走しあじめた。

「あつ、逃げた！」

「おいおいおい！ そこ逃げるにじやねえだろてめー！」

格好つけていたポーズを虚しく崩すと、ツバルは激怒して男を追いかけて行つた。残された二人はぽかんとして、一瞬にして静かになつた渡り廊下を眺めた。フブリはルビーにしがみついたまま、動く

こともしない。

それから一分も経たないうちに、ツバルが男を引きずつて戻ってきた。

「ツバル、大丈夫？」

「こんな雑魚どもおれにかかるれば楽勝よ……」

前髪を搔き揚げながら眉を吊り上げ、格好つけてみせるが、なまじ先ほどの彼を見ているルビーには何とも思えなかつた。

それから三人は部屋に戻つた。ツバルが捕まえた男は部屋のシーツで後ろ手に縛り上げ、拘束した。時計を見ると、もう深夜の一時を回っていた。フブリは椅子に腰掛け、ツバルはベッドに体を投げ出した。ルビーに至つては、もう椅子を引く気力もなく、壁にもたれかかつてそのままずるずると床に座りこんでしまつた。名々が、しばらくそのままぐつたりとしていた。

しかしフブリは気持ちが昂ぶつているのか、すぐに立ち上がつた。長い旅の中で、襲撃者を捕らえたのはこれが初めてだつた。

「捕まえちゃつたね……」

「……うん」

神妙な面持ちで男を見据える二人に対し、ツバルは楽しそうにまじまじと彼を検分していた。

「オッサンかと思つてたらお前は結構若いな……いくつ？」

「二十五つス」

言つて、男ははつとしたように唇を結んだ。

「おれより年下じゃん。あのね、おれつて若く見えんだろ？ 特別におれの年齢を教えてやるけど、実はな……」

「いや、その付加情報はどうでもいいですよ。…………？」

ルビーが素早く突つこんだ。その瞬間、何か部屋の空気が変わつたような不思議な感覚に襲われる。訝しげに男に視線を落としてみるが、ほんやり何かを感じはするも特に変わつたところはなかつた。それは漠然とした気配のようなものだった。ルビーは首を傾げたが、誰も何も言わなかつたため氣のせいだと思うことにした。

大きく息を吐き、フブリは男の前に立った。しつかりと彼の目を見つめている。

「……どうして私を狙つてるのか、はっきり答えて」
男は、じつと座りこんだまま何も答えない。凍りついたように、まるで微動だにしない。

「私が殺されなきやいけない理由つて何?」

彼の口が動くことはなかつた。それどころか、女湯を襲つた中年の男のように目を逸らし、うつむいてしまつた。

「ねえ、答えてよ!」

沈黙に苛立ちを覚えたのだろう。フブリは衝動的に掴みかかつたが、男はされるがままに従うだけで、一向に口を開く気配はなかつた。

「フブリ……」

ルビーは感情の昂ぶりはじめたフブリをなだめた。自分も、怒りを感じていないといえば嘘になる。しかし、相手がここまで強情だとどうにもお手上げである。ルビーは途方に暮れてしまつた。

「……なあ、お兄ちゃん。吐けば楽になるぞう。おれも手荒なことはしたくなえしよ~……」

静まり返つた部屋の中に金属が擦れあう音が響いた。それが抜刀した音だとルビーが気づいたときには、ツバルは男に対してその切つ先を向けていた。男は一瞬体を震わせたが、やはりまたうつむいて沈黙してしまつた。

「駄目だねこりや。脅しもきかねえよ」

「…………あれ…………?」

じつと男を見つめていたルビーは、先ほどの不思議な気配を彼の体から感じた。

「どうしたの、ルビー」

「…………あ、わかつた!」

ルビーは突然ツバルを押しのけ前に出ると、男の袖を捲り上げた。そこに印された模様のような痣をツバルが不思議そうに覗きこむ。

「なんだあ?」

「魔法ですよ！ 何か変な空氣感じるなーと思つてたら……！」
の人、魔法がかけられます！」

勢いよく立ち上がったルビーが一人に叫んだ。ツバルはまだ痣を覗きこんでいる。

「人体にも魔法つてかけられんの？」

「魔法つていうのは契約なんだ。ものも人も、かけられる相手が納得したことならかけられるんだよ。……じゃあ、もしかしてさつきのおじさんも……」

ルビーは視線だけを合わせて頷いた。

「別の場所に魔法使いがいて、そいつがこいつらに魔法かけて指示出してる……なんてとこかね？」

ツバルがルビーに囁くと、それまで黙っていた男が急に頭を上げた。依然無言だったが、目を丸くして、怯えるように首を横に振り続けている。その必死の形相にフブリはたじろいだ。

「な、……？ 言うなってこと？」

「それは彼に聞いてみよう」

男に対峙し、痣に触れる。彼はこれから起ることを恐れているようを見えた。ルビーの手を振り払おうと体をゆすっている。

「ぼくと新たに契約すれば大丈夫ですよ」

「ほ、本当っスか！？」

言つて、男はまた慌てて口を結び、その代わりに今度は満面の笑みで首を縦に振つた。それが、契約をするという証なのだろう。

ルビーが痣に触れる。バチ、と何かが弾けたような音がして、一瞬男の肩から淡い光が漏れた。光が消えた次の瞬間には、彼の肩から痣が消えていた。

「おつ、おれは只のバイトなんスよ！」

痣が消えるや否や、男は勢いよく喋りだした。

「ナイフ投げが趣味で……地元じゃ、恋も決闘も狙つた獲物は外さない、っていうキヤツチフレーズで通つていたっス

「バイトって……じゃあ私を襲つたのは……」

「 そこ銀髪の娘を殺したら金をやるって大金を積まれたっス。遺体の始末はこっちでやるからお前が捕まる心配はない、って言われて……。そんなオイシイ話、乗らないほうがおかしいっスよ！」

男は半泣き状態だった。喉を詰まらせながら必死に話している。

「あ、あんたみたいな剣士がいるなんて話聞いてないんス！ 何か余計なこと話したら全部あっちに筒抜けになるっていう魔法をかけられてたんで、裏切るに裏切れないし……」

「誰に雇われたの？」

「そんなん知りませんよう！ おれら一人、町中でスカウトされただけなんスから……奴は顔も隠してたし、素性も明かしてはくれなかつたっス。とにかく終わったら金を払うつて約束で……！」

男は瞳を潤ませてうなだれた。がっくり肩を下ろして抵抗する気力もないようだ。

「後払いねえ……なんつーか」

「胡散臭いよね」

フブリがツバルと目を見合せた。

「ええ！？」

「正体を隠して暗殺を委託するような人間が、律儀に報酬を払つたりすると思います？」

「よくあるよなあ。自分は手を汚さずに、後で秘密を知つた暗殺者も始末する……みたいな話」

「ええ！？」

何となくルビーは、この男に同情を覚え優しく微笑んだ。フブリも同じ気持ちのようで、憐れみのまなざしを彼に向いていた。

拘束は解いたが、全員一致で彼にはもうしばらく一緒にいてもらうことになった。外に出せば、魔法が解かれた彼を雇い主が始まらないとも限らないからだ。

もはや夕食をとる気力もなく、三人はすぐにベッドにもぐりこんだ。ツインルームだつたため、床に敷かれた布団にはツバルが寝た。その隣にはナイフの男が、申し訳なさそうにちょこんと体を横たえて

いる。

「……しかし、釈然としねえな～」

「……え、何が？」

上掛けを直しながら、フブリは首だけを下に動かした。

「お前ら、何に狙われてるんだ？」

フブリはツバルに向けて困ったような笑顔を見せた。

翌朝、朝食をとつた後、三人は宿を出た。前日捕られた可哀相なナイフ使いの男は宿に部屋番として置いてきた。話してみるとどうも彼は暗殺者というには頼りなく、意外と小心者のように朝にはすっかりフブリたちに寝返つていた。

「荷物管理は自分に任せてくれさいっス！　あ、クイルビーさん肩に、ゴミがつ！　ツバルさん、今日も決まりますね～男前！　フブリちゃん、お気をつけて行ってくださいっス！」

深々と頭を垂れてごまをする男に、フブリは開いた口が塞がらなかつた。疲れがまだ残るメンバーの中では一番生き生きとしている。

「おお、ナイフ君なかなかいい心がけだな！　おれの格好よさがわかるやつに悪者はいねえつて」

「……信用できる？」

ルビーは呆れていたが

「悪い人じやないよ。……と思つ

その変わり身の早さがむしろ微笑ましく感じられて、フブリは苦笑した。

一応その後、女湯に置いてきたという中年の男の様子も見てきた。昨夜と変わらずに脱衣所に晒されていたので、フブリは見なかつたことにした。入浴客の女の子たちは、まるでそれがディスプレイの一つであるかのように素通りしていた。

宿を後にすると、これからのこと話し合うために近くのカフェに入つた。

店舗の中は小さかつたが、大きい町に相応のお洒落なカフェだつた。入り口には植物の蔓が巻きつき、看板には錆びついたベルがいくつもぶら下がつていた。わざと古臭い雰囲気を出しているのか、店内の壁はわざとらしく黄ばんでいた。天井にはぼんやり淡い光を放つ裸電球が一つ、隅の大きなスピーカーからはジャズが流れている。

フブリたちは一番隅の四人席に腰掛けた。

「おねーちゃん、じつちこつち」

ルビーの横でうるさいくらいに手を振っているのはもちろんツバルである。笑顔で近づいてくるウェイトレスの制服も、一昔前に流行したような少し野暮つたファッショングラフだった。店内にぴったり雰囲気が合っている。

「おれ、これね。特大メロンパフューム。お前ら何にする？ あつ二種のベリータルトもうまそー」

お姉ちゃん可愛いねー、とウェイトレスを口説きはじめるツバルを見てルビーは頭を押された。

「聞く気あります？」

「もち！」

ツバルは両の親指を立ててウインクした。メニューは彼が一人で独占していた。

「……フブリ、やっぱりやめよう。この人信用できないよ」「でも、なんて言つて断るの……。絶対地獄の底までついてくるタップだよ、ツバルは……」

「そういう話は本人のいないところで、小声でしろよお前ら……。なールビーおれら一緒に背中流し合つた仲じやーん。仲間はずれはやめようぜー」

馴れ馴れしく隣の肩を抱くも、もう慣れたのかその行動を先手に読んだルビーに簡単に払いのけられる。

「ぼくは流した覚えはありません。大体あなたが勝手にお湯かけてきただけじゃないですか」

ルビーは本気で嫌そうな顔を作つたが、ツバルは氣にも留めていないようだった。

「……ま、冗談は置いといて。話に入ろーか」

「うん……。えっと、何から話せばいいのかな……」

昨夜、フブリはツバルに核心を突かれた。ルビーと自分以外にそれを知る者はいない。これまで旅の経緯を誰かに話したことなく、

それ以前に第三者を巻きこむことを避けてきた。

しかし、ツバルはこれまでの旅で出会った誰よりも親密になつた人間といえる。ここまで関わつてしまつたのだ。むしろ何も話さないでいるほうが不自然な気がした。

ところがいざ、自分たちの旅の経緯を話そうとしても、言葉が続かないことに気づく。この旅には狙われる本人にもわからないことが多すぎるのだ。

「とりあえず、これを見てくれる？」

フブリは胸元から、首に下げていた小さな袋を取り出した。色褪せた紙片をツバルに手渡す。不自然な形の紙片には、流麗な文字が墨線に沿つてびつしり書きこまれていた。

「『……』のことを話すべきかどうか迷つていて。いや、話せばあの子は迷わずカラアへ向かうだろ？ 幸運なことに、何事もなく七年が過ぎた。

私たちの存在を知られていないのなら、わざわざこいつらから知らせることもないだろう。このまま何も知らずにこの村で生きることが、フブリにとってよいことなのかどうかわからない。けれどフブリが幸せなら』」

そこで言葉が途切れいたため、ツバルは不思議そうに紙片を裏返したが、何も書かれていなかつた。

「端っこ燃えてるっぽいな。焦げてて読めねえ」

ツバルはフブリに紙片を返した。

「死んだ養母の日記……の一部。他は燃えちゃつたから、シルヘットの形見はこれと、この写真しか残つてないんだ。あ、養母のシルヘットは六年前に亡くなつたの」

フブリは先ほどの袋から、大事そうに布で包んだ写真を出して見せた。写つているのは幼いフブリとルビー、そして中央で一人を抱きしめているのが養母のシルヘットだつた。日記ほどではないが、これも四角が焼け焦げていた。

「火事でも起こつたのか」

フブリはルビーと顔を見合させて視線を落とした。ルビーはフブリの気持ちを看取したようだつた。

「……えー、それは置いといて」

「ほんと咳払いをしたルビーが写真を再度包んだ。

「恐らくこの日記でシルヘットさんが言つてることは、フブリが狙われていることと関係があるとぼくらは思つています」

「初めて私が襲われたのは、一年前。私とルビーは幼なじみで、生まれ育つた辺境の村で、あの田もいつものように学校から孤児院に帰るところだつた……」

話しながら、当時を思い起しす。今もまぶたの裏に鮮明に浮かぶ光景　それは懐かしさと切なさが混じり合つた、複雑な思い出だつた。

「そしたら……銀色の、騎士が……」

苦しそうに途切れ途切れになる言葉をルビーが慌てて遮る。

「とにかく、フブリは一年前も昨夜のように襲われました。そのときに銀色の甲冑を着た襲撃者が言つたんです。『お前の養母は罪人だ』ってね。その後シルヘットさんの遺品を整理していたら、さつきの日記を見つけたわけです。襲われる理由も何もわからないままに逃げるよう村を出て、ぼくらはこの手がかりを行く先々で尋ねていきました」

「日記にも書いてあつたけど、『カラア』って、シルヘットが死ぬ直前にうわごとで言つていてね。その『カラア』が何なのか、追手から逃げながら調べてたんだ。で……」

「『カラア』は国名であることがわかりました。ただ、国交が一百年以上前に絶たれていて、情報に乏しいのが現状です。滅んだとか、幻の国とか言われてますけど」

ふーん、と首を傾げながら、ツバルは運ばれてきたメロンパフェを口に運んだ。

「シルヘットさんのことも行く先々で写真を見せて聞いていますが、依然有力な情報は見つかってません。彼女がどこの出身で、フブリ

の本当の母親とどういう関係にあったのか……フブリの出生についても彼女は何も語らなかつたんです」

「はいはい、しつもん」

ツバルがスプーンを顔の前で振り回し、続きを遮つた。

「その襲つてきた奴らつて昨日の奴らとおんなじなわけ？ あいつらがずっと追いかけてきてたん？」

「違う、かな。昨夜みたいな毎回違うタイプの、多分ナイフ君が言つてたように、行く先々で雇われたアルバイトーなんだと思つ」

「……じゃあ、一年前に襲われたつていう銀色の騎士はそれ以来見てないわけだな？」

フブリは黙つて頷いた。

「多分それはな、フブリを襲わせてる奴らが、フブリや他の人間に自分たちの正体を知られたくないねえからだと思うんだ。昨夜みてえなどうでもいい奴ら雇つて本人は高みの見物。フブリを襲う目的だけじゃなく、どこの誰が襲つてるのかも知られたくないわけだろ奴さんは」

そう、確かに襲撃者たちは必要以上に目立つ行動は控えているようだつた。顔を隠し、地味な服装で『暗殺』という任務の遂行だけを考えている。

「つてことは、直接襲つてきた人たちに聞いても、雇われているんじゃ何も知らないわけだよね。その、襲撃者たちに指示を出しているつていう指令塔に話を聞かなきやいけないんだ……」

「そういうこつた。そいつが姿を現すように仕向けりや……」

「でも、本当にそんな人がいるとして、どうやつておびき出すんですか？ それに、昨日の一人を雇つた魔法使いは、人体に魔法をかけることができる……ぼくより力のある人だと思います。まともに闘つて勝てるとは思えないんですけど」

うーん、とツバルはわざとらしく唸つて見せた。

「……じゃあな、こういうのどーよ」

肩をひそめて身を乗り出したツバルに一人は引き寄せられ、やがて

狭いカフェの末席で密談が行われた。

宿の別館にある簡素なバーは、真夜中だというのに大勢の宿泊客で賑わっていた。薄暗いカウンターの前には多種多様な酒瓶が並び、それぞれのラベルも凝ったもので目に留まった。カウンターでは一人のバー・テンドラーが酒を出し、数人の若い従業員が中に外にとせわしく出入りしている。若者が多かつたが、その辺りの居酒屋にいそうな酔っ払いの中年たちも混ざっていて騒がしく、決して洒落た店内とは言えなかつた。

人で埋め尽くされている小さなカウンターの片隅に、彼らは紛れた。「フブリ、大丈夫かなー……？」

ルビーは慣れない店内の雰囲気にそわそわと体を動かした。視線はきょろきょろ辺りを彷徨つて定まらない。

「まあ、とりあえず飲めや」

「はあ……。つて、ツバルさん！？」

バー・テンドラーの差し出したカクテルグラスがルビーに手渡された。ピンク色の液体がなみなみと注がれている。見れば、ツバルは大吉ヨツキを片手にニヤリと笑つてゐる。……足元には、すでに空になつた酒樽が転がつていた。

「すつげえ楽しい気分なの、ゲラゲラゲラ」

「酔つ払つてやがる……」

ツバルは聞く耳持たず、ぐびぐびと無遠慮に飲み続けた。

「ホラ見ろよ、あのハゲオヤジの頭！ 伸びて回つて、変幻自在かよ！ なかなかのエンターテイナーですなあ……えつ嘘、開くのそこー？ ……いやーん、ふふつ、おもしれー」

見渡すが、普通のハゲこそいれど、そんな面白い形体のハゲオヤジはいなかつた。明らかに彼はどこか違う次元へトリップしている。「しつかりしてくださいよ、ツバルさん！ ハゲはいない！ ……ああー……！ 何でこんな人の計画を真剣に聞いたんだ！」

「ぼくはバカだ、大バカだ……！」

「まあまあルビー……、「冗談はここまでにしておきましょう」ハック」

頭を抱えるルビーの肩を、ツバルがいつものように馴れ馴れしく抱いた。

「そんな酒臭い息吐きながら言われても……。もつ、大丈夫なんでしょうね本当に」

「そのために、お前の魔法があるんだろう。そつかいにどうよ？」ルビーは自分の耳元に意識を集中させた。かすかな話し声が、ゆっくり近づいてくるように耳の奥に重く響きはじめる。

『……ナイフ君って出身はどのあたり？』

『おれは南部のほうつスねー。ポンカンが名産品なんスよ、ウチの実家も作ってたつス……』

ポンカンか……。

ルビーはナイフ青年に関するどうでもいい知識を一つ増やした。彼らの身にはまだ何も起こっていないようだ。

「そうですね。今のところまだみたいですね……集中力切れるから、話しかけないでくださいよ」

「いつもその魔法フブリにかけてりや、襲われたときに便利じゃねえの？」

「……こういう、遠方で人の声を聞くような魔法っていうのは使い手の精神力をひどく消耗するんです。常に集中していなければいけないので。だから、実はナイフさんにかけられていた魔法は、あのときにはもうほとんど効力が切れかかってました」

「少しの間しかもたねえってことか？」

「ええ。よほどの魔法の使い手でも、せいぜい一日……それ以上は死にますよ。精神が衰弱して、眠らず食わずに飢餓状態のようなものに陥ります」

「ヒツ、ヒエエエー！？」

ツバルが突然恐ろしいものでも見たような悲鳴をあげたので、ルビーは身を硬くして構えた。

「なーんぢやつて。ゲラゲラ
この酔つ払い……。」

ルビーは張り倒したい気持ちを必死に抑え、耳元に精神を集中させ続けた。

一方、ナイフの青年は緊張でかちこちに固まっていた。足元に転がっている大きな布の袋をちらちら気にしながら辺りを見渡す。バーの裏口には人気がなく、ひつそりとした薄暗い路地を街頭が不気味に照らしつけている。暗闇の中、青年はじつと息を潜めて時を待っていた。先ほどまで袋の中身と気楽に話していたのが嘘のように、恐怖は暗闇の隙間を縫つてやって来る。

雇い主が金の受け渡し場所としてこの時間、この場所を指定してきたことを青年は初めて恐ろしく思つた。少女の遺体と引き換えに、という話だったが、もしここに自分が現れなかつた場合はどうなつていたのだろう。いや、もし少女を殺せなかつたことがばれたら……。考えるだけでぞつとする。そわそわしていると、人影が闇に紛れて現れた。帽子を目深に被つた男だった。

「……あ……ど、どうも……」

「……娘はその中か……」

男は、じろりと青年を睨みつけた。その横の袋に視線を移す。

この男は、袋の中で身を強張らせている人間が生きているとは考えもしないだろう。鼓動は心臓が張り裂けそうなほど鳴つた。外にまで聞こえているのではないかと心配するほど大きかつた。

「どうも、お前にかけた魔法が解けたようだ……」

男がポツリと漏らした。

「えつ、そなんスか？ あれえ……どうなんスかね」

青年は声の調子を明るく努めたが、語尾が不自然に高く裏返つた。汗が前髪を濡らして頬を伝つた。

「……効力が勝手に切れたのかもしれない」

ナイフの青年がほつと息をつき、しかしそうに次の緊張が走る。男

は早々と袋に手をかけた。

「確認させてもらつぞ」

「来ました。雇い主の魔法使いです！」

「よつしゃあ！ おとり作戦大せいこつう！ 行くぞルビー！」

「はいはい、行きますよ！」

ツバルはジョックキを勘定と一緒に勢いよく置いた。先行するツバルの後を追いながら、ルビーはバーの裏手にいる男たちの会話に集中していた。

「…………あれ？」

しばらくして、彼は予想外の会話の流れに首を傾げた。本来なら、ナイフの青年が他の魔法使いと契約していることをすぐ気づかれる、と思っていた。同じ魔法使いであれば、魔法の匂いはすぐに感じ取れる。しかし男はそれを言及するビコウか、気づいてすらいないような話し振りを続けている。

「…………魔法使いじゃ、ない…………？」

「んあ？ どうした？」

「いえ…………もしかしたらこの人…………」

ツバルは、こつそり足を踏み入れた従業員控え室の窓を開け放つた。その三階の窓から暗闇へ飛び降りようとしていると

「ルビー、ルビー！」

フブリが控え室の戸を勢いよく開けて入ってきた。

「！？ ツバルさん、ちょっと、待ってください！」

「え！？ 何よ！」

今まさに現場へ格好よく降り立とうとしていたツバルは、水を差されたことが癪に障ったのか、険しい顔でルビーを睨みつけた。

「フブリ、宿で待つてろつて言つたろ！ 狹われてるのは君なんだから」

「どうしてもおじさんが気になつて……」

「心配すんなつて！ ナイフ君も覗きのオッサンもおれが助けてき

てやつから

言つと、ツバルは颶爽と飛び降りた。何も階段を下りて裏口から出ればいいものを、という言葉をルビーは呑みこんだ。この計画の要は彼に言わせねばこれから行われる救出シーンにあるらしい。そう、ナイフの青年と中年の男をおどりにして雇い主をおびき出すという計画だった。

フブリが入つてゐるよに見せかけた袋には、実は中年の男が入つてゐる。雇い主が現れ、それを持ち去ろうとする瞬間に、ツバルが空から彼らを助けに現れる。強すぎる美青年剣士に雇い主は歯が立たず、その前にひれ伏す……というのがツバルのシナリオであった。上からではただ闇が見えるばかりで、何が行われているのかはわからぬ。路地裏に時折響く鈍い金属の音だけが、ツバルたちの鬪いを物語つてゐる。

「フブリ大丈夫……？ 疲れた？」

ふと横を見て、少女の顔がかすかに翳りを帶びてゐるのに気がつく。ここ数日、気の休まる暇もなく、充分な睡眠も取れていないことを思い出す。

「ルビーこそ……蒼白い顔して。すぐ貧血起こすんだから、気をつけなくちゃだめだよ」

フブリは微笑んだ。確かにルビーは、世の女性たちに負けず劣らず貧血を起こしやすい。体も弱く、流行の風邪は真っ先に引くタイプだった。

ツバルが控え室に戻つてきた。

「……逃げられた」

「はあ！？」

その第一声に一人は顔をしかめた。

「ちげえよ！ おれが弱いわけじやねえの！ 捕まえて話聞いたらそいつも雇われたつて言つんだ。魔法使いだと思ってたら剣使つてきやがるし。おれが驚いてる隙をついて逃げやがるし

「やっぱり、魔法使いじやなかつたんですね……」

「やつぱり、魔法使いじやなかつたんですね……」

「つてことは……えーと
フブリは必死に思考を巡らせ、一つの単語に思い至つたようであつた。

「失敗?」

「いやむしろ……危険が増したかも……」

しらけた目で見つめられ、ツバルはわつ、と顔を覆つて泣き真似をした。まだ酔いが残つてゐるようだ。とにかく予想外な展開の連續に三人が混乱していると、従業員が控え室に入つてきた。落ちこんでいるツバルを引きずりながら、急いでバーを出る。

渡り廊下を伝つて宿に戻ると、もう深夜だから当然なのが、通路はひつそりと静まり返つていた。忍び足で階段を上る。

フブリたちの部屋は一階だつた。すぐ傍に豪奢な造りの螺旋階段があり、そこからフロントが見下ろせる。預けていた鍵を受け取り、階段を上がつたところでルビーは何気なく窓の外を眺めた。

「…………あれ…………」

何かを見つけて、窓に張りついた。

「どうしたの、ルビー?」

「気のせいかな……。誰かがこちらを見ていたように感じたんだけど」

「バーの従業員とか」

ツバルがひよい、ヒルビーの肩越しに顔を出した。

「そういえば、ナイフさんたちはどうしたんですか?」

「一応、町ん中を回つて逃げた野郎を捜してもらつてる」

窓の外には、もう人つ子一人見当たらなかつた。毎晩のように躍起になつて宿泊客を呼びこんでいた従業員たちも消えている。イルミネーションの光も見えなくなり、それがあつた場所にはわずかに街頭の灯りが浮かぶだけだつた。

ルビーは首を傾げた。

「建物の影と間違えたのかもしれないね」

「いや、あながち見間違いじゃないかもしねえな」

「え？」

風が、急に入ってきた。否、誰かが戸を開けて宿に入ってきたのだ。
こんな真夜中に。

カラランカララン。ドアのベルが鳴った。

従業員らしき制服を着た男が足早に駆けて行くのが見える。がらんとしたフロントに、彼の靴音だけが空しく響いた。

「お客様、申し訳ないのですが、本日は満室でして……」

深夜の訪問者は、男の声に耳を貸そうともしなかった。

「銀髪の、フブリ・トリバンドラムという娘が泊まっているだろ?」

部屋はどこだ?「

フブリの身が緊張に強張る。

「しつ……。動くなよ」

ツバルが耳打ちした。

三人は、階段の影に座り身を潜めていた。ツバルが一番端から階下を見下ろし、二人はその陰に隠れている。幸い一階にいたため、訪問者は気づいていないようだった。

「さっき逃げたって人じゃないですよね?」

「いや……よく見えねえな」

フブリは手摺りの隙間から覗いて、恐る恐るその人物を確かめた。男は黒いフードを頭まですっぽり被っている。瘦せ型で、強そうなイメージはなかった。二人の背に隠れていたフブリは、声を出すことをできなくなっていた。強張る体を、無意識のうちに両手で抱える。

「大丈夫? フブリ」

「……平気……」

気丈に答えるが、内心怖くてたまらなかつた。ここまでダイレクトに自分を探している人間に遭遇するのは初めてだ。

「さつきの奴じゃないな……ん……?」

「どうかしたんですか?」

ルビーがツバルの肩越しに下を覗いた。

何やら、訪問者は先ほどの従業員と口論しているようだ。彼は、制止する従業員に目もくれず、上がりこもるとしていた。困ります、という声がフブリの耳にも届いた。男も何か言つていいようだつたが、二階からは聞き取れなかつた。

従業員がたまらず男に掴みかかつた。すると男は、あわてことか彼に剣を振り上げた。ツバルが素早くフブリの両目を覆つ。従業員の小さい悲鳴と、重いものが落ちたような、どさつ、という音がした。

「あのヤロー……」

短く舌打ちしたのはツバルだつた。

「あいつ、相当ヤバいぜ……。おい、フブリ連れて窓から逃げる」ルビーは口元を押さえて立ちすくんでいる。目の前の光景が信じられないよつで、硬直したままだ。

「ルビー！ フブリ連れて逃げろつてんだよ！」

「あつ……は、はい」

ツバルが、ルビーにフブリを押しつける。フブリは顔面蒼白になつていた。目にしなかつたとはいえ、何が起こつたか大体の見当がついたのだ。ルビーは無言のままのフブリを見て、ようやく我に返つたようだつた。

男は、気づいたときには、もう階段付近まで来ていた。

「ツバルさんはどうするんですか

「まあ何とかなるだろ、多分」

不安の残る適当な答えたが、ルビーは頷くとフブリの手を無理に引いて外へ出た。二階の窓からの外出は、幼い頃のいたずらで何度も経験していたため、難しいことではなかつた。

フブリとルビーは冷や汗をぬぐつと、誰もいない夜の街を走つた。注意深く周囲を気にしてはいたが、一人とも無言だつた。人影を見たような気がして、民家の陰に隠れる。誰もいないことを確認して、しばらくそこで様子を見ることにした。

夜の街は、恐ろしいほど寂に包まれていた。

「……あのひと、ひとを殺したんだよね」

はじめに口を開いたのは、フブリだった。

「あの人は、何もしてないのに。私が、私があそこにいたから」
フブリは涙声になっていた。寒気がして、反射的に体を小さく丸める。肩は小刻みに震えていた。

「私、どうして……」

「フブリ！」

その声が引き金となつた。震える両手が、ルビーの体にしがみつく。

「ルビー……怖いよ……。怖い……」

自分がどんなに弱い人間であるかを、幼なじみのルビーはよく知っている。

強く見せてはいるが、内面はとても小さくて、脆い。ひとたび感情の糸が切れれば、際限なく心を沈めてしまうのだ。

「大丈夫。落ち着いて」

ルビーが優しく、諭すようになだめる。

「ごめんね……。『ごめんルビー』

フブリは弱い自分が、心底情けなかつた。こういうときはいつも、ルビーに頼らないではいられない。喉元にこみ上げる嗚咽を押さえながら、しかしわからない、と思う。

これまで、襲撃者が自分を狙うことはあれども、他人に居場所を尋ね、あまつさえ傷つけるようなことはなかつた。それは彼らがその存在や行動を表沙汰にしたくないためだと思っていた。それは、ツバルの『おとり作戦』に誘われた男もまた雇われた人間だった、というところからも証明される。しかし、その仮説に先ほどの宿の訪問者は当てはまらない。

フブリは、一年前に初めて襲われたときのことを思い出していた。

「お~い！」

どこからか声が聞こえた。それがツバルのものだと気づいて周囲を見渡すと

「お前ら、無事か！？」

声は、頭上から聞こえた。見上げると、民家の屋根からツバルが降

つてきた。

「な、何でどこから来るんですか」

「仕方ねーだる。あのおっさん、しつこいんだもんよ。それより…」

…

ちら、とフブリに視線を移す。

「大丈夫か？」

「だいじょうぶ……」

まだ気分は悪かったが、フブリは何とか体を起こした。

「よつしや。じゃ、逃げるぞ。ほら、荷物」

わざわざ逃げるときに回収したらしい。荷物を受け取り、ルビーも立ち上がった。

「宿はどうなったんですか？」

「わかんねえ」

ツバルはさらりと答えた。

「じゃ、ただ逃げてきただけですか」

「うん。……あ、でもな」

フブリの顔色を窺つて、しばし間を置く。

「さつきの従業員は軽傷だつたみたいだぜ」

フブリが顔を上げた。

喉に刺さっていた骨が取れたような、急な開放感を感じる。涙が出そうになるのをこらえると、急に体中の細胞が動き出したように熱くなつた。フブリは、何に対しても頷いた。顔を上げると、本来の自分が戻ってきたように感じた。

そんなフブリにルビーは安堵したようで、彼の口元が緩んだ。

「落ち着いてる暇はないぞ。さつさと逃げないと」

「……うん！」

三人が家屋の隅から出ようとした瞬間、刃物が空を切り裂いた。しゅつ、という乾いた音が耳に焼きつく。

「おお！ 見つかっちゃったかー！」

どうも、ツバルの声は緊張感に欠けた。ひょうひょうとした動きで、

一人をかばうように前に出る。

「けつ、あんたもバイトか～？」

慣れた手つきで剣を振り上げる男だが、ツバルはいとも簡単にそれを避けた。はじめは強気だった男は、幾度もかわされるうちに、苦い顔つきになつていった。

ルビーはそれを、ぽかんと口を開けて見ていた。ツバルの剣技を見るのは初めてなのだから無理もない。

「……フブリを助けたって言うのも、あながち間違いじゃなかつたんだね……」

彼のツバルを見る目は少しばかり変わつたようだつた。

「あ、やべ……」

ツバルの咳きは、フブリにもはつきりと聞こえた。しかし誰がどう見ても、彼が優勢であることは明白だ。

「剣、宿に置いてきちゃつた」

「ええ！？」

思わず驚きの声が漏れた。ツバルは何事もなかつたかのようにあつけらかんと笑つてゐる。先ほどまでツバルに向けられていたルビーの尊敬のまなざしは、一瞬で消えた。

ツバルが後退したのを合図に、踵を返すと全力疾走する。後ろを振り向くと、男が眦を決し追いかけて来るのが見えた。

「ルビーよ、魔法でちやつちやつとお仕置きしてやりなさい！」

ツバルが、まるで自分のことのように誇らしげに言つた。

「馬鹿言わないでください。無理です！」

「何お前、そんなに弱いの！？『炎よー！』つて言つて人燃やせないの！？」

ツバルはどこで聞いたのだが、わけのわからぬ呪文を口走つていた。

「あつ、あのですね。弱いとか、強いとかじやなくて……『炎よー』なんて言わないし……。えー、魔法は万物が使い手の呼びかけに応えてくれるという原理で……」

「魔法は、人を傷つけることを許さないの」

長つたらしく講釈をはじめそうなルビーを、フブリがフォローした。
「おいしいご飯を誰かに食べさせてあげたい、って魔法をかけたら、稻は早く伸びてくれるんだよ。でも、彼らは自分が納得したことにして力を貸してはくれない。だから、守ることはできても傷つけることはできないってわけ」

走りながら話していたため、最後のほうは声がかすれた。

「へー。便利なようで、結構制限あるんだな」

「魔法が万能だと思つたら大間違いです」

感心するツバルを横目で流しつつ、ルビーが頷いた。

「ところで……」

息の切れてきたルビーが最初に後ろを振り向いた。

「撒いた、みたいだね……」

続いてフブリも振り向く。三人は余韻を残しながら、ゆるゆるとピードを落としはじめた。

いつの間にか町の外れまで出ていたらしい。夜の草原に、虫たちの鳴き声が静かに響いた。

「……い、今まで……あんな人はいなかつたんですね……。直接宿の人間にフブリのことを聞くなんて……」

もともと体力のないルビーは、かなり息が上がっていた。草むらに座りこむ。

「雇い主も焦つてきてんのかもな……」

遠くから、男の声が聞こえた。

「おーい。あんたら、旅人かい」

小太りの男だつた。町のほうから走つてくる。

「あんたらも、逃げたクチかい？」

不可解な言葉にフブリは眉をひそめる。

「逃げたつて……、町の人たち逃げてるの？」

「ああ、それが……おかしな連中が町中荒らしまくってるんだよ。

誰か探してみたいでね」

男は脂汗を拭きながら大仰に両手を広げた。

「町は今どうなってんだ？」

「詳しいことはわからないが、町中の家に押し入ってるみたいだよ。

火をつけられた家もあるとか……」

瞬間、フブリの瞳から色が消えた。

火……

フブリは、血の気が音を立てて引いていくのを感じた。

長く襲撃者から逃げてきたが、このような事態は初めてだった。最近は、襲つてくる人数も回数も少なくなってきた。ルビーと二人なら逃げられる自信もあつたし、相手が雇われた人間ならなおさらだ。だが、まさか滞在する町を

ふと、幼き日に養母と暮らした村を思い出す。

一面、赤くなつた田畠と、声にならない悲鳴……。

あんなことは、一度とあつてはいけない。

体は勝手に立ち上がつていた。

「フブリ！」

ルビーが止めるのも聞かずに、フブリは、再度町へ向かって走り出した。

「フブリが戻つてもどうにもならないだろ！」

「じゃあ、ルビーは町の人たちがどうなつてもいひつて言ひの！？」

金切り声が、夜の草原に響き渡つた。

ルビーは町へ駆け出そうとするフブリの腕を掴んで放さない。フブリは形相を変え、それを振り払つた。

「奴らは顔を知られるのを快く思つてないんだろ？ 恐らく、無茶なことはしないと思うぜ」

ツバルが、ルビーに出遅れて追いかけてきた。

「家に火をつけたんだよ！？」

フブリは目を見開いた。口元が震えているのが、自分でもわかる。それをぎゅつ、と結ぶも、感情の波は収まってくれそうになかった。「放火にどんな思い入れがあるかは知らないがなあ。今お前が出て行つたら、あいつらの思つっぽだろ」

ツバルの鋭い眼光が、フブリを射抜いた。肩をしつかと掴まれ、視線を離すことができない。流れる汗が髪の毛に絡みつき、フブリは言葉にし難い息苦しさを感じた。

「…………村が、燃やされたんだ……」

視線をつきあわせたまま、口の端から漏らした。蚊の鳴くような声だつた。

「私が住んでた村……シルヘットの……養母の思い出がすべて燃やされてしまつた」

フブリの視線は、いつしか遠くに向けられていた。過去の光景がまざまざと思い起こされる。

「それで……旅に出たのか？」

「……それが一番の理由です。最初の襲撃者は銀色の騎士でした。彼らはフブリ一人を狙つたのでしょうか、火をつけた家屋から村中に火が移り、結局たくさんの中のものを焼き尽くしました。その後、と

にかく逃げないと、村の人を巻きこんでしまつからつてフブリは……

……

ルビーが言葉をつなげた。フブリは黙つてそれを聞いていたが、その瞳にはがんとした意思を宿している。

「だから私、こんなところでじつとしてなんかいられないんだよ……！」

力強い想いだつた。ツバルをまっすぐに見つめる視線には、揺らぎがない。

「……なるほどねえ。気持ちはわかつた。……が、フブリはやつぱり行つちゃ駄・目」

反論しかけるフブリの口を大きな手が優しく塞ぐ。

「おれが行くから、待つてろ」

「つ、ツバル！」

フブリが反射的に掴みかかつた。しかし、彼は変わらずつかみ所のない笑顔を浮かべていた。

「じゃあ、ぼくも行きます」

ルビーが素早く前に歩み出た。

「ルビーは来るな。こんな奴が……」

言葉が不自然に途切れた瞬間、風が舞つた。

ツバルが足を振り上げたのだ。その狙いは、フブリの背後にあつた。

「いるかもしれないからなつ！」

風が頬の横を掠め、空を切つた。フブリは、その勢いに目を閉じる。何があつたのか、と考える間もなく、ことは終わつていた。

小太りの男が草むらにうずくまつてゐる。かたわらには、小刀が落ちていた。ツバルの蹴りが真正面からヒットしたよつて、ぴくりとも動かない。

「この人……さつき町から逃げてきた人じゃないか

ツバルを除く二人が驚きの表情を浮かべた。ツバルがぽりぽりと頭を搔く。

「あー……。恐らく、もう町に奴らはいないだらうなあ

「で、でも、火をつけたって……」

慌てて町を指差す。

「嘘だと思うぜ。今まで姿を見られることを極端に嫌つてた奴らが、急に自分をアピールするよつた行動に出るわけがない。で、町に火をつけた、人を捜してゐる不審者がいる、つて話をしてわざとおれらを町の外へ出るようになどいた……」

「そうなるとむしろ危ないのは、ここですね……」

冷や汗をぬぐつたルビーは、周囲を見渡した。依然続く夜の静寂に、虫の声だけがやけに響いて耳に残る。

「つてことで、ルビー、お前が一人で町の様子を見てきてね」

軽く放たれた言葉に、ルビーは目を剥いた。

「はあ？ ぼく一人ですか？」

頷くツバルは、やはり笑顔だつた。

「ここが危険だとわかつた以上、おれがフブリの傍にいたほうが都合いいだろ？」

そう言われれば、ぐうの音も出ないよつで、ルビーはただうつむいた。確かにツバルは、直接的な戦闘においてはルビーよりも遥かに強い上、頼りがいもある。何より彼はその腕を糧にして生きてきた傭兵なのだ。

それは、フブリも認めざるを得なかつた。ところが……

「申し訳ないんですけど……ツバルさんが町に行つてもらえませんか」

「ルビー？」

フブリは目をぱちくりさせて驚いた。

ルビーは未だ、ツバルへの懷疑の念を振り切れずにいるよつだつた。じつと、何かを確かめるよつたまなざしを彼に向けている。

「こんなときですが、はつきり言います。ぼくはまだあなたを信用していません」

「へえ……」

きつぱり言い放つたルビーを、ツバルは面白いものでも見るよつた。

眺めた。

「ルビー。ツバルはそんな人じゃないと思つよ。……変な人だけど」「いいんだ、フブリ。おれが妖しいつづーか妖艶な美しさを醸し出しているつづーの？ それはもう、生まれたときからのおれの宿命だつたのさ……」

誇らしげに豪語するも、ツバルは『怪しい』の意味を明らかに取り違えている。

「しかしよ。今の状況じゃ、そんなことも言つてられないんじゃねえの？ 事実、昼間のように襲われたら、お前じやフブリを守れないと」

「それは承知の上での提案なんですけどね……」

フブリが心配そうな顔つきで、小さく呟くルビーを見つめた。ルビーは腕を組んで少し考えると、口を開いた。

「……わかりました。必ず、フブリを守つてくださいね」

「もちろん」

脳天から出したような、高らかな返事が上がる。その態度に、ルビーはあからさまに不機嫌そうな顔をして見せた。

「フブリに何かあつたら許しませんから」

「お、大げさだよルビー」

ルビーの声は、氷のように冷たく鋭いものだった。その雰囲気に耐えかねたフブリが、二人の間に割つて入る。

「じゃあ行くけど……、様子を見たらすぐ帰つてくるよ。任せますけど、ツバルさんの返事にはやはり不安が残るので」

言つて、ルビーがフブリのピアスに手をかざした。その指先から、わずかな光が漏れる。

「何だソレ？」

ツバルが不思議そうに覗きこむ。

「魔法です。フブリが危なくなつたら知らせること頼みました」「これっぽっちも信用してねえのな……」

呴く彼の背中は寂しそうだつた。

実は魔法は、手をかざさずともかけることができる。

ルビーはフブリのピアスに乘じて、ツバルの上着の裾にも魔法をかけていた。むしろ、そっちが本命だったのだろう。

怪しい行動が逐一わかるように、遠くにいても声を聞き取れる魔法だった。先ほどナイフの青年にかけたものと同じものである。簡単に言えば盗聴器だ。

フブリはルビーのその動きに気づいたが、何も言わなかつた。別にツバルを疑うわけではないが、ここでルビーを止めたところで何がどうなるというわけではない。更に二人の溝が深まるだけだろう。

「おれの剣も頼むぞー！」

そんなこととは露知らず、ツバルはルビーの後ろ姿にのんきに手を振つた。

「さて……」

ルビーの姿が見えなくなると、ツバルは一転して身を構えた。フブリが生睡を飲みこむ。

「来たな」

彼は、にいつ、と笑つた。

「フブリ！ かがんでろ！」

「はいいつ

咄嗟のことに声が上ずつたが、気にしてもらられない。

現れたのは、見たことのない黒ずくめの中年男性だった。剣は持つていなかつたが、布の隙間から見え隠れする鋭い眼光だけは、今日会つたどの襲撃者よりも恐ろしかつた。指先が淡く光つていて、フブリはその光に見覚えがあつた。

「あつ、あー！ ジャあこの人が雇い主！？ 魔法使いの！」

「そういうこつた！」

それからのツバルの動きと言えば早いもので、フブリは思わず見とれてしまった。剣がないとはいえ、ひ弱な中年魔法使い一人、ねじ伏せるのは簡単だ。

ツバルは、男の顔を見て何かに気づいたようだつた。その微妙な表

情の変化を、フブリは一瞬不思議に思つたがすぐに忘れた。ツバルが雑木林の中に魔法使いを押しこむように足を振り上げる。やがて、フブリからは一人の姿が見えなくなった。

「ツバル・リアノーラ……」

林に入ったところで、ツバルは動きを止めた。

「まさか、あんたがあの娘を見つけていたとはなア」

「……お前、何故雇つた襲撃者を宿に押し入らせた。目立つ行動は慎んできたんだろ」

「あんたがいるって話をさア……娘の死体を回収しに行つたバイトに聞いたもんでね。でなきや、こんな表舞台にわれが出てくることはなかつたさ……。相変わらず田立つ金髪じやないか」

ツバルは冷ややかな目で男を見つめると、一歩踏み出した。男は笑つて後退する。

「おつと、まだおれは誰にもあんたのことを言つてないぜエ？ 報告するつもりもねエよ……。おれはただ、あんたがいるって話が本当かどうか確かめたかつただけさ……会つてみたかつたんだ。個人的な興味でね」

男は舐めるように上目遣いでツバルを見つめた。その様子に舌打ちすると、ツバルは唾を吐き捨てた。

「ツバル！」

フブリは、雑木林から姿を現したツバルに駆け寄つた。そこに魔法使いの姿は見えない。林のほうを覗き見るが、人影も見当たらなかつた。

「あ～、あいつ逃げちまつた……。林の中は走りづらいし、あいつなかなか足が速くてよ」

苦々しくも満面の笑みを浮かべるツバルに、反射的に微笑み返した。しかし、その笑顔はすぐに消え去ることになる。

街の方角から、小さな煙が上がっているのが見えた。

初めは温泉宿の湯気だと思った。しかし、その煙は宿のある方角から伸びてはいない。明らかに湯気とは吹き出す勢いも異なつた。高く、高く、天に向かつて伸びている。

「…………」

わななく口元を両手で塞ぐ。

ツバルが慌ててフブリのもとに駆け寄り彼女の腕を掴んだ。しかし、フブリはそれを振り切つた。

「私、行かなきや…………」

「フブリ！」

ツバルの声を後ろ手に聞きながら、フブリは丘を駆け下りた。自分に何ができるというのだろう。何もわからない。ただ、勝手に体が動いて止まらなかつた。

そこは、夜だというのに真昼のように明るかつた。

地元の警備隊が消防団となつてバケツリレーを繰り返している。彼らの行く手にあるのは、大きな集合住宅だつた。全長六階の縦長で、あまり新しくない建物のようである。火の手は、フブリがそこに着いたときにはすでに住宅全体を包んでおり、焼却にも時間がかかるようと思われた。その勢いに、フブリはただ立ち尽くすしかない。近隣の家屋から騒ぎを聞きつけてきた野次馬たちが、取り囲むように建物を見つめていた。警備隊の数人が、ごつた返す野次馬を統制しようと努めていたが、彼らの勢いに呑まれてしまつていて。壁から壁へ伝つている洗濯物をかける物干しが、音を立ててぼろぼろ砕け落ちるのが見えた。

こんなにも大きな建物が、炎に包まれて崩れ落ちていく。

フブリが野次馬に紛れて呆然とそれを見上げていると、突然誰かに腕を掴まれた。ツバルだつた。

「お願い、助けて！」

若い女の声が野次馬の中から上がった。見れば、生まれたばかりの赤ん坊を抱きしめている母親が、警備隊に向かつて叫んでいた。

「私の子どもなんです……！ 女の子が中にはいるのぉ！」

体裁も構わずに顔中を涙でぐちゃぐちゃにして叫んでいる。警備隊はなだめるように母親の肩を撫でたが、それを契機に彼女は赤ん坊を抱いたまま、うすくまつて大声で泣き出してしまった。

炎が、彼女の横顔を痛いくらい照らしつけていた。

「どうして……こんなことになっちゃうんだろう……ね……」

フブリは母親を見つめながらぼんやり呟いた。

ツバルは無言で首を横に振った。その意味をフブリはすぐに看取したが、彼女の悲鳴のような泣き声が、耳にやけにまとわりついて離れない。

母親のそれに呼応するように赤ん坊の泣き声が響き渡った。

耳を貫くその命の叫びに、フブリは体を震わせた。

「……ごめんね、ツバル。私、やつぱり駄目だ……」

「おい、フブリ……！？」

フブリが一步一歩足を踏み出し、その腕をツバルが慌てて掴む。その歩は止まるどころか、目的地に向かつて加速はじめた。ツバルは緩めに握つていた腕に、思い切り力を入れて彼女を引き寄せた。

「駄目だ！ 馬鹿な真似はよせ！」

フブリは一瞬振り返つたが、わななく唇で叫んだ。

「もう、誰にも何も、失つて欲しくないんだよ……！」

「やめる……！ フブリ！」

自分で驚くほど強い力だつた。ツバルの腕を振り解いて炎の中に飛びこむ。止めに入る警備隊をすり抜け、まっすぐその入り口へ向かつた。

ツバルは野次馬の波に押されながら、どんどん遠ざかつて行くフブリに呼びかけ続けた。誰かが建物に飛びこむフブリを目にして悲鳴を上げた。だがそのときにはもう、フブリの姿は完全に炎の中に消

えて見えなくなっていた。

「フブリ！」

ツバルの声は虚しく空を切つた。

脆くも崩れ落ちてくる天井をかわしながら進んだ。ミシミシ音を立てる階段を慎重に上る。床のところどころに火が燃え移つていて足がもつれた。足元を見れば、もう焼け落ちて穴が開いている床もあつた。そこから見える階下の様子にぞつとする。

フブリは、口元を押さえながらひたすら前へ進んだ。炎の勢いも凄まじかつたが、充満している煙も半端ではなかつた。前がほとんど見えない状態である。汗が額を伝つて臉に落ちるのがわかつた。火の粉が行く手を遮るように舞う。

煙が視界を塞ぎ、どれだけ歩いたのかもわからなくなつた。崩れていく柱に子どもの落書きを見つけた。それだけではない。床の傷跡、壁の染み……

すべてを、炎が呑みこんでしまう。

この真つ赤な怪物が、思い出も人の命も、簡単に連れ去つていってしまうのだ。

「ゴホッ、ゴホ……」

煙を大きく吸いこんでしまつたらしく、喉がひりひりした。体中が焼けつくような痛みに襲われる。

「誰かー……！ 誰かいないのーーー？」

喉の奥から必死に声を絞り出す。

「誰かー……」

熱くて、それ以上は声を出せなかつた。喉元を押さえて膝をつくと

「…………あー…………」

焼け落ちる建物の音と炎の爆ぜる音の合間に、子どもの声が聞こえた気がした。

「…………ママあー…………」

フブリは、壁にもたれながら体を起こした。スカートに小さな火が燃え移り、足元から煙が上がつた。それを手で乱暴に消すと、何と

か体を持ち上げ歩き出す。体の節々が痛い。何だか頭もだるくて、思考が行動に追いつかなかつた。
とにかく、声のする方向に歩いた。

その日、真っ赤な化け物が、村を呑みこんだ。

銀色の甲冑を着た騎士……

私の家……

シルヘットの思い出……

私の家族の思い出……

お前の養母は罪人だ

罪人だ

罪人だ

だめ……

お願い、燃やさないでえ……！

消えてよお！ 燃やさないでよお！

持つてかないで

その思い出だけは、持つて行かないで
シルヘットが本当にいなくなっちゃう
シルヘットが……

「ママア ！」

泣き声にはっとする。

フブリは、部屋の隅でうずくまつている小さな女の子に気がついた。足を引きずるようにして近寄ると、優しくその体を抱きしめる。少女はしゃくりあげながらフブリにしがみつき、その胸に顔を埋めた。
「……大丈夫だよ。お姉ちゃんが、ついてるからね」
少女を抱き上げ、出口を探す。いつの間にか周囲は火に囲まれ、退路がなくなつていた。入ってきたときよりも明らかに火の手が回つ

ている。同時に、煙の量も想像をはるかに上回るものになっていた。フブリは少女の口元にハンカチをあてがい、なるべく煙を吸わないように身を屈めた。

しかし、もはや彼女の体は限界だつた。足取りはおぼつかない。目の前もかすんできている。どこから逃げていいいのか見当もつかない。ただ、事務的に足を前へ動かした。

「フブリ……」

目の前が傾いでいる。ゆらゆら揺れる陽炎の奥に、人影を見たような気がした。

「フブリ！」

名前を呼ばれたような気がする。口を動かすが、自分の声は聞こえない。抱きしめている少女の泣き声も、もう聞こえなかつた。不思議と体の痛みも消え去つていた。何もかもが麻痺したような感覚の中で、ただ、自分の名を呼ぶ低い声だけが耳の奥に反響した。何度も、何度も……

「フブリ！」

急に、体が浮いた。否、誰かに抱きとめられたのだ。

「フブリ！ しつかりしろ！」

その男は、無遠慮にフブリの頬を叩いた。その鈍い痛みに薄く瞼を開けると、彼の顔が目前にあつた。

「ツ……バル……？」

男はその返事に歯を見せて笑つた。ほつとした様子で、肩を揺らしながら大きく息を吐いている。

「よつしゃ、大丈夫だな！ お前がその子助けたんだぞ、しつかり守れ！ しつかり立つて、歩いて、おれについてほら、外に出るんだ！」

ツバルは後ろを支えながら強引にフブリを立たせた。

少女の泣き声が耳をつんざき、建物の崩れる音、炎の爆ぜる音が同調出した。

少女の泣き声が耳をつんざき、建物の崩れる音、炎の爆ぜる音が同

時にフブリの感覚中枢を襲つた。煙は息苦しく、体中が焼け焦げるような痛みを感じた。

その後、どうやって外に出たのかは記憶にない。

とにかくツバルの誘導に従い、時には彼に抱えられながらフブリは炎の海から抜け出した。

「ありがとう、ありがとう……」

母親の言葉が耳を通過して、気づいたときにはフブリは火災現場近くのベンチに、シーツを頭から被つて座つていた。ぼんやり遠くを眺めると、木々の隙間から、まだ火の燃え盛る集合住宅が見えた。消防団と野次馬たちの声が入り混じつて聞こえる。もくもく立ち上る煙を眺めながら、フブリは生まれ育つた村を思いおこした。

唐突に、涙があふれ出す。

頬を伝う涙を、大きな手がぬぐつた。ツバルは真っ黒になつた顔で、いつものように能天気な笑顔を見せた。

「…………私…………のせい…………」

ポツリと口の端から漏らす。

「…………私がもしあの日、村にいなかつたら…………？」銀色の騎士が言う通りに殺されてたら…………？」

フブリは、口元を押さえて体を丸めた。

「私が…………わたしが村のみんなの思い出を、奪つた…………あのときに、もう一度とこんな、誰かを巻きこむような、誰かを悲しませるようなことはしないって誓つたのに…………」

感情のたがが外れた。

大粒の涙が次から次へとあふれてくる。それを押さえることもせずに、フブリはしゃくり上げた。その小さく丸まつた体を、ツバルが抱きしめた。頭を優しく撫でられて、フブリは養母のそれを思い出した。彼の胸に顔を埋めると、一層切なくてたまらなくなつた。

「あの火事な…………、住民の火の不始末だつたって。お前を襲つてきた奴らはなんも関係なかつたんだよ」

「…………え…………」

フブリはわが耳を疑い、優しいツバルの顔をじっと見つめた。

「フブリのせいじゃない」

その一言で、ぶわっ、と感情があふれ出した。

「…………つて……」

ツバルの衣服を掴む手に力が入る。その途端、火の中に飛びこんだときの体の痛みがまた戻ってきた。それだけではない。痛いやら嬉しいやらで、フブリは胸がいっぽいだつた。

「だつて…………あたしのせいで、あたしがむ、村を焼いたようなものなんだから…………全然関係ないこんな、ま、まちまでやかれたらどうしようかって…………」

大きな腕がフブリをすっぽり包んで抱きしめた。

「大丈夫。みーんな無事だつたからな。フブリのおかげだ」

ツバルが優しく耳打ちした。

フブリは涙が止まらなくなり、ろれつの回らない言葉でしゃべり続けた。自分が何を言つているのかわからなかつた。ただ、彼の腕の温かさで何かが溶けたように感じる。ぽろぽろと、繫ぎとめていたものがあふれ出すのだ。

「あつ…………あたし…………村…………みんな…………焼けちゃつた…………ぜんぶ、なくなつちゃ…………」

「よく頑張つたなあ」

ツバルの大きな手が彼女の頭を撫でた。

フブリは、声を張り上げて泣いた。

シルヘットが死んだときでさえ、こんながむしゃらに泣きはしなかつた気がする。

悲しいのではなかつた。後悔から解放されたかつた。心の奥に押しこみ、澱みのように溜めこんでいたものを吐き出したかつたのだ。

「フブリー！」

ルビーの声が遠くから聞こえて、フブリは上体を起こした。近寄る彼は、涙で頬を濡らすフブリに気づき、激しく動搖したようだつた。

「フブリのピアスにかけた魔法が……きゅ、急に消えたから何がかったのかと思つて……そしたら近くで火事が起つてゐるし。つて、何その格好!? どうしたの、一体!」

涙の次は、そのぼろぼろに焼け焦げた風体に驚いたようだつた。フブリは顔中を炭まみれにして、服のあちこちも黒ずんでいた。

「ルビー……」

フブリは、涙を流したまま彼に微笑んだ。ルビーは困惑した様子で、何があつたんですか、と視線をツバルに向けたが、彼はわざとらしく両手を掲げるだけだつた。

火の勢いは依然強いままだつたが、フブリはもう、一年前の火事を思い起こすことはなかつた。

炎が奪い去つて行くことができなかつた思い出は、ずっと心の中に残つてゐる。

ルビーの肩越しに、遠くで火の粉が優しく舞い上がるのが見えた。

「あんたの剣がなくて宿中探し回つたら、空いた酒樽の中に入つたんですよ」

ルビーは開口一番、ツバルを恨めしそうに睨んだ。

昨夜のフブリに起つた一件を聞いて以来、ルビーのツバルに対する不信感は更に大きくなつたようだつた。彼らの溝が深くなつた原因が自分であることを知つてゐるだけに、フブリは慌ててツバルを擁護したが、ルビーは聞く耳持たなかつた。ツバルはといえば、そんなルビーの様子を気にすることもなく、といつよりは気づいていないようで、いつものように彼の肩を馴れ馴れしく抱いてゐる。ルビーはカフェのウエイトレスが運んできた紅茶をすすつて、じろり、隣の男を睨みつけた。

「……まあ、とりあえずはツバルさんの言つてた通りでした。町は静かなままで、フブリのことを聞きこんでる人もいなければ、民家

に押し入つて暴れてる人間もいなかつた……。火事だつて、偶然起
こつたものでしたしね。ただ、やっぱりわからないんですね」

「宿に入つてきて、私の名前を出した人でしょ？」

フブリもルビーに合わせるように眉をひそめた。頬を覆う幾つかの
ガーゼが、昨夜の惨劇を物語つてゐる。それはツバルも同様で、彼
にいたつては大きな火傷を負つたため包帯も巻かれていた。

「そう……、あの人も雇われた人間だつてことがはつきりしたわけ
だけど……」

昨夜、宿に戻るとナイフの青年が襲撃者たちを捕まえて戻つて來て
いた。

捕獲された襲撃者は三人。死んだフブリを金と引き換えに受け取り
に来た男、宿に押し入りフブリを名指しした瘦躯の剣士、町人を装
つて町が襲われていると虚偽を吐いた小太りの男。その中に、最後
にフブリが目撃した魔法使いの姿はなかつた。

三人はそれぞれがバラバラに別の町で雇われた人間で、一人として
雇い主の正体を知つてゐる者はいなかつた。宿に押し入つて従業員
を傷つけた男も、そうするように命じられただけだと言う。

「その雇い主の魔法使いが遠くから彼に命令してゐたとして、何故
わざわざ昨夜に限つて自分の存在をアピールするように男を宿に送
つたんでしょう？ あんなことをしたら、フブリが逃げるのなんて
目に見えてますよね。しかも昨夜に限つて派遣される襲撃者の数は
多かつた」

実はですね、と咳払いを一つしてルビーは言葉を切つた。

「あの襲われた宿の従業員、記憶を失つてゐたんです。つまり魔法
使いが後から戻つて、フブリを探してゐる人間がいた、という記憶
を消したんですよ。わざわざ自分からそれを公開するような真似ま
でしておいて、何故後から隠蔽するのか……」

「私考えたんだけど、それつて私たちを町の外におびき出したかつ
たんじやないのかな……？」

「それだよ」

ルビーは思いついたように人差し指を立て、身を乗り出した。

「おびき出す必要なんてないんだ。あれだけ人を雇つてゐるんだから、フブリを殺したいなら彼らだけでこと足りるはずだ。今までそれでよかつたはずだ。わざわざ外にぼくらをおびき出して、わざわざ指令塔が姿を現す……。その必要性がわからない」

「気が変わつて、自分の手で止めをさしてやりたくなつた……とかじゃねえの？」

巨大モタルトに顔を突つこんでいたツバルがようやく頭を上げた。
「いえ……、もしかしたら……あのときばかりは、フブリを殺すことが目的ではなかつたのではないでしようか……」

ルビーは、隣のツバルにわざわざ向きなおし、彼に問うように言つた。

一瞬、沈黙が落ちると

「フブリちゃん！」

店内に数人の男がぞろぞろと駆けこんできた。

「あ、ナイフ君！」

「おれら、それぞれ家に帰ることにしたつス。金も手に入らなかつたし、上手い話は今回のもつこりごりなんで、やつぱり真面目に働くつスよ」

襲撃バイト仲間の男たちはすっかり意気投合したようで、周囲から見ていて暑苦しいほど肩を寄せ合つていた。一見すると何の集まりなのだから共通点が見出せない謎の集団である。

「そつかあー。ナイフも頑張つておれみみたいに格好よくなれよ」

ツバルの言葉にナイフ青年は瞳を潤ませた。男たちは三人に深々と頭を下げるなど、大きく手を振りながらカフエを出て行つた。店内にいた客たちは、嵐のごとく通り過ぎた謎の集団が気になつたのか、彼らが外に出た後も目で追つていた。

結局彼らの名前も最後までわからず仕舞いだつた。

「そろそろ行こうか、ルビー。ツバルも」

「別にツバルさんは来なくてもいいですけどね」

フブリを危ない目にあわせないよう」という約束を破ったことを、まだ根に持っているらしい。ルビーのツバルに向けた言動の一つ一つには棘があった。その冷たい雰囲気にいたたまれなくなったフブリは、まだタルトを頬張っているツバルを無理矢理引っ張った。

「えつ、どこ行くの？」

その当事者といえば、何も聞いていなかつたようで、ルビーに対して能天気に笑いかけた。ルビーがもう慣れた動作で頭を抱える。

「これから聞きこみに行くんだよ。初めて来た町ではこれを欠かさないの。シルヘットのこと、カラアのこと……あんまり期待はしないけどね」

「カラアっていう国は本当にもう、なくなってしまったのかもしれないな……」

ルビーが遠くを見つめながら溜息混じりに呟いた。

「あるよ」

座りなおしたツバルがコーヒーをする合間に、喉を鳴らしながら言った。

「え？」

「カラア、あるよ」

「え……ええつ！？」

二人は、店内に響き渡るほどの大聲を出した。ルビーに至つてはツバルに掴みかかりそうな勢いだった。

「な、何で知ってるんですか！」

ルビーの言葉は、大きかつたがどもつていた。まるで信じたくないというように、首を真横に振つている。

「そうだよ、今まで誰も、カラアを知つてゐる人はいなかつたんだよ……いろんな町で聞きこんだけど、はつきりとその存在を知つてゐる人はいなかつた。古い図書には一百年も昔に国交が絶えたつて……その当時もどこにあるのかすらわからない幻の国つて言われてて……本当に伝説のような国で」

「もとから国交なんてないに等しい国だつたようで、その書物が残

つていた国だつてカラアについては漠然とした情報しか持つていなかつたんですよ！」

フブリとルビーは大声でそこまで連ねると、スイッチが切れたように声を出すのをやめた。身を乗り出し、ツバルの返答を待つてある。当のツバルといえば、激しくまくし立てる一人に気圧されて、ぽかんと口を半開きにしている。

「……いやあ、おれの友達が昔住んでたことがあつてよ」「カラアに……住んでた……？」

「その友達、まあおれとはかなり長いつき合いがあつて、そいつがまた変な奴で……」

ツバルがべらべら繋げているどうでもよい話は、フブリの耳にはもう入らなくなつていた。

カラアに住んでいたことがある。

フブリは、途端に目を輝かせた。

「初めて見つけた……！ カラアを本当に知つてる人……！」

フブリは、感極まつてツバルに抱きつきそうなほどだつた。嬉しそうにしているのは、喜ぶフブリを目にしたツバルも同様だつた。しかし、ただ一人ルビーだけは、強張つた表情を崩すことはなかつた。

あれは、何年前のことだつただろうか。

突然、痩せこけた黒髪の少女が、ふらりとやつてきた。

それで、いつの間にかそいつは、おれの家に住みついた。

どういいういきさつだつたかは思い出せないが、そう、おれは年甲斐もなく十も歳の離れた少女に、恋をしたのだ。

もともとひょうきんな友達がいた反動だらうか。おれは自分でも思うがあまりお喋りなほうじやない。

だから惹かれたのかもしれない。

彼女は明るく快活で、まるでここに似合わない性格だつた。何が楽しいのか、いつもからからと笑い、冷えきつた人々の心を温める少女。それは真つ暗で、未来なんか見えやしない、そんな生活に突然差しこんだ日の光だつた。

その笑顔からはとても想像がつかないけれど、少女は、おれなんかよりもずっと真つ暗な道を歩んできた。ひとりぼっちで誰にも愛されず、何度も心を打ち砕かれてきたのだらう。しかし、それでも彼女は微笑むのだ。

おれは彼女の笑顔がとても好きだつた。

けれど、彼女にそれを面と向かつて言うのは照れくさくて、おれはいつも心に反して無愛想な態度を取つた。彼女はおれのそんな性格もすべて見透かしていたから、きっとおれが本当に言いたいことも知つていただろう。

思い起こせば、言葉にして伝えたことは一度もなかつた。

何となく一緒にいて、何となくおれたちは恋人なんだ、と認識するだけのことたりたから。

今になつて、言つておけばよかつた、と思う。
もう一度と、それを伝えることは叶わないのに。

ツバルは何が好き？ 出身はどこ？ 血液型は？

はつきり言つて、異常なほどの変わりようだった。彼女の変貌を、ルビーは何と形容していいのかわからない。ただ、彼女がツバルに心を許しているのは誰が見ても一目瞭然。

「え？ ツバルが何？」

ところが、たまに話しかけてもこの少女ときたら、ツバルに対する己の入れこみに気づいていないようで、のんきに返事を返してくる。「……だから、の人まだ信用できるって決まつたわけじゃないだろ。不用意にベラベラぼくらのことを話すのはどうかと思うんだ」「やだ、ルビーってばまだツバルのこと疑つてるの？」

フブリは大きく口を開けて、からから笑つた。真剣な表情を作つていたルビーとしては、それを馬鹿にされたようで面白くない。

「フブリは能天氣すぎるんだよ……！ もうちょっと危機感を「あ、ツバルそこの荷物とつてくれる？」
てんで聞いていない。

「ん？ これ？」

そして、彼女を変貌させた元凶 ツバルは、いつの間にかそこになじんでいる。つい先日まで二人旅だったという事実を知らぬ者の目には、その姿はまるで初めてから三人で旅をしてきたように映るだろう。小さなポシェットを手渡す優男を、ルビーは冷淡な瞳で見つめた。

この状況が、ルビーにとつてはここ数日の悩みの種だつた。

ツバルが、カラアを知る男友達のもとへ案内するといつた日から、フブリはすっかり夢想に浸つてしまつてゐる。

一年も探し続けていたものの手がかりが、ようやく見つかったのだ。当然な反応である。彼が命がけでフブリを炎の中から救い出したと

いう話も、後でフブリ自身から聞いた。しかし、だからといって彼の言葉をすべて信じるには、まだ情報が足りなさ過ぎる。

「あんな変な人の言うこと、何でも信じるなよ」

ツバルが不在の時に進言してみるも、フブリの答えはいつも決まって同じだった。

「変だけど、いい人だよ」

剣もあんなに使えるし、優しい人だよ、と彼女は陶然として語った。
「あの人、絶対怪しいよ。大体、そんな『凄腕』の剣士が何でぼくらなんかに構うんだよ。あんなに強いなら雇い口くらい、いくらでもあるだろ?」

「きっと困ってる人を放つとけない性分なんだよ」

本当に疑いなど微塵もないようなフブリの笑顔に、ルビーは顔をしかめた。

「『凄腕』が、それだけで何のメリットもないのについてくる?」

「何か突っかかるね、ルビー」

「別に……」

ルビーは旅の間中、暇があるとツバルを観察していた。確かに剣技は素晴らしいものの、しかしルビーは彼を『いい人』とはどうしても思えなかつた。

フブリにベタベタくついたと思えば、今度は自分の肩を気安く抱いてきて、ルビーはたまに、彼が害虫に見えることがあつた。そもそもこの男、無意味なボディータッチが多すぎる。

しかし、そんなのんきな顔の反面、剣を振るときの彼の表情を、ルビーは見逃していない。

前後はひょうひょうとした態度で、相手をあしらうツバルだ。しかし、一瞬だけ、剣を振るその一瞬だけは違つた。そこには、別の顔が現れる。ルビーは、このツバルという男が、何か不可解な二面性を持っているように感じていた。

しかし、その旨をフブリに伝えたところで、何も変わらない。

じつとツバルを見つめるフブリの瞳は完全に盲目。他人の言葉など、

もう耳に届いてはいないのだろう。だが、ルビーはツバルに対し、どうしても漠然とした違和感を抱かずにはいられなかつた。

「……ルビー、どうしたの？ 具合でも悪いの？」

だから、フブリが自分の顔を心配そうに覗きこむまで、ルビーは自分が沈黙していたことに気づかなかつた。拾い集めた薪木がするりと手を逃れ、ぼんやりしていた自分にはつとする。火をくべる準備をしていたフブリが、落ちた薪木を集めている。

「え、あ、うん。ごめん、何の話だっけ？」

聞き返すと、フブリは更に心配そうに顔を歪めた。その表情にどきりとして、ルビーは慌てた。

「だ、大丈夫だよ。ほら、最近は滅多に倒れないだろ？」

「倒れんの？」

ツバルが鼻で笑つた。途端にルビーの眉根がきりきりと寄る。

「うん……ルビーってこう見えて、っていうか見たまんまなんだけど、体が弱くて」

「……自慢じゃありませんが万年貧血常習犯です」

ツバルに弱みを見せるのはフブリの手前、面白くなつたが、事実である以上仕方がなかつた。

「お前、男のくせに体弱いのか。病弱美少年つていづコンセプトも悪かねえけど、今は丈夫な男がイケてる時代よ？」

「別に好きで体弱めてるわけじゃないので放つておいてください」誰のせいで悩んでいると思つて……。ルビーは心中で悪態をついたが、やはりツバルは能天氣に笑うだけだつた。

このあっけらかんとした態度が一番の問題である、とルビーは考へるようになつっていた。乗せられるまい、とは思つものの、いつの間にか彼の調子のいいペースに巻きこまれている。

今日だつて、本当ならばもうカラアを知るという友人宅への道程をたどつてゐるはずだつた。

それをこの闖入者が『腹減つた』だの『もっとエネルギーを溜めこ

「……その友達の家つてのは、本当に歩いて行けるんでしょうね」
野営の準備を整えながら、ルビーが聞いた。

フブリと村を出た頃は、金銭的な問題もあり一端の宿に泊まることは滅多になかった。そのため、こうした野営の準備は手馴れている。「任せとけって！ 三年くらい会ってねえから」

「全然任せられる年数じゃないですよー？」『から』の意味わかんないし！？」

ツバルはさしたる問題でもないというように、安心しろ、と肩を叩いた。その動作が一番大きな不安要素であることを、彼にはそろそろ気づいてもらいたい。

「でもさ、その友達の家がカラアにあるってわけではないんだよね？ その人にカラアの場所を聞いて……それから、また長い道のりになりそうだね」

焚き木に火をつけて、フブリはため息をついた。けれど同時に、嬉しそうに口の端を上げている。

「知つてた、ツバル？ カラアはね、旅人たちの理想郷なんだって。とても美しくて、不幸なんてない天国みたいなところなんだって」フブリが話しているのは、旅の途中『カラア』を捜しているときに耳にした御伽噺である。

実は、書物を調べずとも、その国の名を知る者は各地に少なからずいた。ただ、彼らはほとんどが長く旅を続けてきた旅人で、夢物語としてカラアの存在を語っているに過ぎなかつた。

旅人たちは、その国を『幻の国』と呼んだ。誰一人、そこへたどり着いたものはいないと彼らは笑つて言つた。古い文献に書かれていることも、昔の旅人がでつち上げた作り話だ、と。それが存在するかどうかは、彼らにとつて意味なきことだ。本の中の御伽噺のように、『幻の国カラア』を想像し理想郷にすることで、旅人たちは渴

いた心を癒していったのだ。

「……ツバルさんは、カラアのこと、何か友達から聞いてないんですか？」

「知らない。カラアは可愛い女の子が多いって話は覚えてんだけどなあ……」

適当に考えこむ振りをして、にへら、と笑い返す男にルビーは冷たい視線を投げた。ツバルを睨みつける少年のその視線に、フブリは慌てたようだつた。二人の男の間に割つて入る。

「る、ルビー！ ツバル！ えーと、あつ、そうだ！」

フブリは思い出したように手を一つ叩いた。

「その友達のいるところって何て言うの？ そろそろ地図でちゃんと確認しよ！」

彼女の気遣いはあからさまで、ルビーは嘆息した。ツバルと自分の仲をどうにか修復しようと試みているのだろうが、その先にツバルへの信頼があると思うと、ルビーには頭の痛い気遣いだつた。

「そこは、『最果て』って呼ばれるんだぜ」

ツバルは鍋を火にかけ、温泉宿からくすねて来た酒を杯に分けた。

「それが、村の名前なんですか？」

「いや、名前のない村でな。村人が適当にそう呼ぶようになつたんだと」

ルビーは杯に口をつけながら、地図を広げた。

「場所的には全然、最果てではないんですけど……」

そんな地名は、地図にも載つていない。山間の、どう考へても人が住めそうにない場所に、ツバルがペンで赤く丸印をつけた。ルビーが人差し指をかざすと、その部分が青白く光り『最果て』と刻まれる。ツバルが大仰に歓声を上げた。

「地図にも無い小さな村だから、村人たちは自分たちの村が最果てって信じてるんじゃない？」

フブリがっこり微笑み、またか、とルビーは思った。

というのも、ここ最近ツバルに自分が反論する度、フブリは必ずと

言つていいほどツバルのフォローに回るのだ。それも、最近はやら執拗になつてきているように感じる。やはりこれも、あまりよい傾向とは思えない。

「ここからどれくらいかかるの?」

「ん~歩つて一週間かそこら。近くでよかつたな」

ツバルは笑つたが、ルビーは硬い表情を崩さない。

「つて言つても、山の中歩き続けるわけですよね? 大丈夫、フブリ?」

鍋のシチューを分けていたフブリは、くすくす笑つた。

「私は大丈夫だよ。むしろルビーのほうこそ大丈夫? 本当にすぐ

倒れるんだから、無茶しちゃ駄目だよ」

「えっ、マジ! ? お前そんなに弱いの?」

「うつ……」

喉を詰まらせるとこ見えて、ツバルは何が嬉しいのか瞳を輝かせている。

「確かにその細い体じゃない。よし、おれが今度三日で腹筋の割れる秘伝のエクササイズ伝授してやるよ! 」

ルビーは丁重にそれを断つた。

「フブリ! 一緒に寝ようぜ! 」

自分の毛布を広げて手招きをしてくるツバルに、ルビーは声を失つた。

「ツバルさん、変なこと言つてフブリを困らせないでください」

拾つた焚き木用の木の枝で、ツバルの頭を小突く。小突くというよりは、容赦なく先端を叩きこんでいるといったほうが正しい。むしろ、突き刺さつて欲しいところだ。

「だつておれ、一人で寝るの怖いんだもん。フブリは、おれと寝るのは、嫌? 困る?」

「えつ、ええ……！？」

次の瞬間、ツバルは急に真面目な顔でフブリの手を握り締めたかと思ひきや、こんなことを口走っていた。フブリはといえば、真つ赤になつて、確かに困つてゐる。

「怖いなら一人で温泉街に戻つてください」

焚き木が、今度は躊躇なく頭めがけて振り下ろされた。フブリが慌ててそれを止めたため、ツバルは大惨事を免れた。

「あつはつはー、容赦ねえなルビー！」

フブリはそれに合わせて苦笑したが、赤みのさした頬は、なかなか熱が引かないようである。

彼女がツバルに好意を抱いているのは明白で。

ルビーにしてみれば、ツバルに疑いを持つていても、複雑な心境を感じざるを得ない。

そんなことを考えていると、ふと、視線を感じた。ツバルが何を思つたか、まじまじと自分の顔を見つめていたのだ。

「お前、キレイな顔してるし、隣で寝てたらちょっと嬉しいかもな……。よし、今夜は男同士肌を寄せ合つて寝るか、ルビー！」

「何か滅茶苦茶氣色悪いこと言つてませんでしたか前文ーー！？」近寄らないでくださいよッ！」

毛布をかぶつたままにじり寄るツバルを避け、必死に後退する。

「いや、おれ全然オッケイ

「だから何が！？」

ルビーは、一人納得して頷くツバルに、身の危険を感じた。

夜は、更けていく。月の光が森の木々を仄かに照らして揺らめいた。木々の隙間を縫つて、雑魚寝している三人の旅人の顔も薄暗く彩る。ルビーは火の後始末をして、おもむろに空を見上げた。満点の星空にぽつかりと浮かぶ月は、どこか儂く消え入つてしまいそうな淡い光を漏らしていた。

横になると、フブリは疲れていたのか、すぐに眠つてしまつた。穏やかな寝息を立ててゐる少女を見やり、ルビーが安堵の吐息を漏ら

す。

「よかつた……」

「何がいいんだ？」

ルビーの咳きに、ツバルが不思議そうな顔をする。

「夢に、うなされることがあるんです」

ルビーは、フブリの上かけをそっと直した。それに反応したのか、少女の体が少しだけ動いた。

「……悪夢なんです。それも、決まって同じ夢を」

彼女の辛さを噛みしめるように、ゆっくり言葉をつなぐ。

ルビーは、すでに横になっていたツバルの隣に寝転んだ。満天の星空を見上げ、ため息を一つ。

「幼い頃の夢ですよ。大好きだった、養母が死ぬ光景らしいです。

……多分、当時のショックが強くて、今でも夢に見てしまうんですね……」

「そういえば、フブリは養子だつたっけ？」

思い出したようにツバルが咳き、ルビーが頷いた。

「そうです。詳しいことはわかりませんが、本当の両親は、生まれたときに亡くなつたとか……。それからは、どういういきさつかはわかりませんけど、シルベットさんがフブリを引き取つたらしくです。でも、彼女も流行り病の熱病で……」

そうか、と一言漏らしたツバルは、同情を覚えているのか、どこか寂しそうだった。寝返りを打つたその背中も、いつもより小さく見えた気がした。

「あの、ぼくからも質問していいですか」

「ん？」

昼間とは打つて変わって、おとなしい反応だった。夜はさすがに静かになるようだ。いや、もしかしたらフブリの前でだけ、わざと明るく振舞つてているのかもしれない。

「カラアは、本當にあると思っているんですか？」

「あるんじゃねえの？ 知り合いか、実際に住んでたらいいからな

声の調子は変わらなかつたが、ツバルは一瞬笑みを漏らしたよつて見えた。

「信じてるんですか？」

今度ははつきりと、笑い声が漏れた。

「信じてるよ……。カラアは、幻なんかじゃない」

まるで、自分もそこに行つたことがあるかのような口ぶりだつた。

「たまたま都合よくフブリを助けたあなたが、たまたま都合よくカラアの居場所を知つていた。……そんなうまい話、信じられると思ひます？」

ツバルの背中をまっすぐとらりえるルビーの瞳に、暖かさはなかつた。

むしろ、懷疑と、多少の嫌悪に満ちている。

返事は無かつた。

「ツバルさん。あなたは、何者なんですか？」

「さあ……

ツバルは、短く答えて口を閉じた。

鈍色を含んだ葉が揺れ、木々の隙間から光の雨を降らす。深い森林の暗闇の中、旅人たちの歩みを手助けするものは、それだけであった。

人気のない処女地の森を、慣れない足取りで進む三つの影。彼らは、ぼろぼろになつた衣服を身に着け、体のあちこちに木の葉を張りつけていた。頭はぼさぼさで、顔には細かい引っかき傷もあつた。三人が、こんな格好になつているのには、理由がある。

その一時間前、彼らはいつも通り道なき道を歩き続けていた。

最近は、山道を通りでいるからか、襲撃者の数も減つた。襲われても、ツバルがいるため、さして障害にはならなかつた。一人きりで旅をしていた頃に比べれば、格段に快適性は上がつていて

「うう、こんな山奥まで来たのは初めて」

フブリは、足元を取られないように注意深く歩いた。小夜にかけて降つた雨が、まだ土を湿らせていて。

ツバルの友人宅へ向かう旅は、進むに連れ、険しい道のりになつてきついた。『最果ての村』は深い森の奥にあるということだから仕方がないが、そこに道標すらないことには驚いた。

「本当に、こんなところに人が住んでるんですか？……あいたつ！」

ルビーが、頭を長い木の枝にぶつけた。それを見て、声を出して笑つたのはツバルだ。

「氣いつけて歩けよ。もうちょっと行つたところへ、多分すぐ村あるから」

「多分ですか……」

「ひやつ、じ、ごめんルビー！」

湿つた土はよく滑り、フブリは何度も転びそうになつた。その度、

前を歩いていっているルビーに追突しそうになる。ルビーは、はらはらしていたが、彼もさほどフブリと相違ない状況なため、振り向くこともままならないようである。ツバルの足は軽快だったが、残る二人はそれを追いかけるので精一杯だった。体中、緊張で脂汗が滲んでいる。

「ここの中だから

何とか急斜面を登り終えて平地に到達したとき、ツバルが振り返った。

二人はもう、へとへとで、声を出す気力もないようだった。

「何だ？ お前らスタミナねえな！ いい若いもんが、そんなんじゃ駄目だろ」

「……ツバル……年寄り臭い……」

余裕のツバルからかなり遅れて、フブリとルビーは平地に着いた。せいぜい肩で息をしている。

「……で……どこ？」

フブリが、きょろきょろ周囲を見渡す。

「だから、ここの中」

ツバルの指差す先には、空があった。フブリが首を傾げると、彼の指先は垂直に下降し……谷底に向けられた。切り立つた崖を目の前にして、フブリは絶句した。

深さは相当なようで、その底は暗く、見えない。ただ、大きく伸びた木々の頂点が見えるばかりだ。ただ一人、ツバルだけが、あつけらかんと笑っている。

「あの、まさか……冗談ですよね？」

ルビーの顔が、見る見るうちに青ざめる。

「いや。ここの中だから。行こうぜ」

「行こうって、ど、どうやつて？」

一縷の望みをこめて、フブリは聞いてみた。ルビーはもう、何となくその降下方法の見当がついてしまったようで、ますます顔を青くしていた。

ツバルが、おもむろに一人の肩を組んだ。がつしりと掴むその腕には、不安以外の何物も感じられない。

「ま、何とかなるだろ」

「ならない！」

悲鳴のような叫びはツバルの耳を通り過ぎただけだった。彼はさしたる問題もないというように笑い、二人を抱えて地面を蹴った。

「ひつ……」

声に鳴らない声だけを後に残し、三人は谷底に消えた。

「ひやああああああああ！！」

「ひやつほ　　！」

楽しそうなのは、もちろんツバルだ。フブリは、目をきつく閉じた。死ぬ。絶対死ぬ。

もう、それしか浮かんでこなかつた。

しかし、一向に思考が途切ることはなかつた。意外と人が落ちるのは遅いものなのだな、と思い、恐る恐る目を開いてみると、

フブリは我が目を疑つた。

空を飛び交う鳥たち、雲の隙間、木々の頂点

それらすべてが、静止して見えた。

落ちているというよりも、まるで、空を飛んでいるような感覚だつた。ルビーが魔法でもかけたのだろうか？　いや、それよりも、ルビーはどこにいるのだろう。見渡すが、落下しているのはフブリ一人だつた。周囲にはルビーも、肩を抱いていたツバルもいない。たつた一人、青く切り取られたジオラマのような空の中に立つている。フブリは、急な吐き気に襲われた。

切り立つた崖が、目の裏に焼きつく。

先ほど、三人で跳んだ崖の先に向かつて、走つて来る幼い少女の影が見えた。

薄暗い深い森の先の、崖だつた。花々が歌を口ずさみ、暗い葉の樹木が生い茂つてゐる森だつた。

少女は、崖の先に浮かぶ光に向かつて走つていた。何かを恐れるよ

うな怯えた表情で、逃げるよう走っていた。

彼女は光に飛びこみ、暗闇に染まつた谷底へ落下していった。ゆっくり落下する自分に微笑むその少女の顔が見え、フブリはぎよつとした。

少女は、他でもないフブリ自身だったのだから。

「フブリ！」

はつとして、目を開く。

心臓が急に動き出したかのように、激しく脈打つていた。心配そうに覗きこむルビーの顔が視界に入る。

「よかつた……！」

痛いくらい抱きしめられて、フブリはぼんやり状況を把握した。ツバルと肩を組んで、谷底へ向かつて飛び降りたことを思い出す。

「な、大丈夫だつて言つたる」

ツバルが、ルビーの背後から顔を出した。彼は体中に傷を負つていた。視線を移し、それがツバルだけでないことに気づく。自分を抱きしめるルビーも、そして自分も少なからず怪我をしているようだつた。

「ツバルさんが、あんな危ないことするからですよー！」

「でもなあ……おれ、ここ来るときはいつもこの方法だし」

からから笑うツバルに、ルビーは頭を抱えた。

フブリは一人のやり取りを聞きながら、まだぼんやりする思考を必死に巡らせ、現実に戻ろうと試みた。途端、嘔吐をもよおし、口元を押さえて屈みこむ。

「フブリ？ 大丈夫？」

言わんことじやない、と漏らし、ルビーはフブリの背中をさすつた。フブリには、吐き気の原因がわかつていた。

切り立つた崖を見た瞬間から、気を失い、夢を見ていたのだ。最も記憶に残る、最も恐ろしいあの夢を。

恐る恐る上を見やると、そこには夢の中の崖とはまったく異なるそ

れがあつた。落下中に確かに止まつて見えたあの薄暗い森は、もうどこにも見当たらない。もちろん、崖の先に光も見えなければ駆けてくる少女もいない。

木々の隙間から、優しい光が差しこみ、フブリは目を細くした。

「ごめん。もう大丈夫」

落ちついたフブリは、ルビーの腕をそつと離した。

「ツバルが、私たちを庇ってくれたんだよね。ありがとう」「ツバルは自分たちに比べるとずいぶん怪我を負っている。フブリは傷だらけのツバルに頭を下げた。

「落としたのおれだしな。しかしお前ら、見るも無残な格好してるな〜」

「言つておきますけど、ツバルさんが一番ひどいですよ」

三人が三人とも、木の葉やら枝やらを体中に張りつけていた。髪の毛はぼさぼさで、服もところどころに穴が開いている。

密生する木々たちはクッショーンになつてくれたが、同時に体もぼろぼろにしてくれたようだ。

「森の妖精さんに見間違えられたらどうするかな」

「あなたのような怪しい妖精はいないと思つんで、安心してください」

真顔のツバルを尻目に、ルビーはフブリの衣服に魔法をかけた。

「あつ、いいな〜！ おれにもおれにも」

ツバルは、修復されたフブリとルビーの格好に、目を輝かせた。ルビーは子どものように騒ぐツバルの反応を流しつつ、彼の衣服にも魔法をかけた。

「一応説明しておきますけど、ぼくの魔法で傷は治せませんから、ここまでです」

ツバルは、一瞬でもとに戻つた衣服に感動していた。身体の傷はさして気にしていないようだつた。

「よつし、お前ら！」

いつも通りの大声であつた。

「あれば、『最果て』だ！」

彼が指差す先には、小さな門があつた。奥のほうは見えなかつたが、切り開かれた森の面積からして、かなり小さい村であることがわかる。日のあたらない森の奥に民家があるというのは、とても異様な光景であつた。

「本当に、こんなところに村があつた……」

フブリは、半ば呆れたような声で呟いた。驚きはするものの、感嘆する気にはならない。

「さて、裏に回るぞ」

「え？ あそこから入るんじゃないの？」

フブリは門を指差した。ツバルが口の端を上げて、目配せする。眼を凝らせば、そこには二つの人影が見えた。

「門番ですか？ あんな小さな村なのに、やけに厳重ですね……」

「あれに見つかると、やつかいなんだよな」

何がやつかいなのか聞く間もなく、二人はツバルに引きずられて、再び深い森の奥に入った。

ここは、昼間でも暗かつた。

深い森に囮まれ、決して何人たりとも近づくことのない場所だつた。村人は外界へ出ることを許されず、誤つて足を踏み入れた者は、住人になるか、屍になるかの一択を迫られる。

村人よりも多く存在する兵たちはいつも通りに、我が物顔で村を徘徊している。鎧の擦れる金属音と彼らの笑い声は、村人に不快感しか与えなかつた。監獄のような生活に満足する者はおらず、当然村の中に活気はなかつた。人は、自分が飢えないために田畠を耕し、ただその地で朽ち行く日を待つた。

外界に希望を持つことは、決して許されなかつた。

女は、村の中でただ一人の医者だつた。布を深く被り、兵たちに遭

遇しないように、裏道を歩く。ところが自宅はもう田前だということころで、突然誰かに腕を掴まれた。

「あつ……」「

丁寧に編みこまれた紫の三つ編みが、首の両側で揺れ動いた。真っ赤な胸のリボンも、跳ねて躍る。

「おい、お前。ちょっとつき合えよ

二人の、若い兵だった。

女は、ロングスカートを翻し、自分よりも小さいその男を見下げた。頭の布を取り、と命令されたため、彼女はそれに手をかけた。

白い布から覗く橙色の双眸が、彼を鋭く射抜く。

「へ～。なかなかイイじゃないか。少し、でかいけど」

兵の一人が、女を吟味するようにじろじろと眺めた。

「……あなたがた、ここには最近配属されたばかりですね？」

女は、布を被りなおし、微笑んだ。しかし彼らに、彼女の咳きは聞こえなかつた。否、聞く前に声が遮断されたのだ。

兵の一人が彼女に手を伸ばしたときだった。

二人の兵を、突然の衝撃が襲う。

兵たちの体が、構える間もなく空を舞う。風が切れた、と女が感じたときにはもう、彼らは地に伏せて動かなくなつていた。

それが剣圧であることに気づいて、女は布から顔を出した。兵たちは、のびてはいたが、顔色を見たところ、恐らく峰打ちだろうと推測できた。

「大丈夫ですか、お嬢さん」

胡散臭い金髪の男が、手を差し伸べていた。女は布の隙間から、まじまじと彼を見つめた。

「……ええ。ありがとうござります」

女には少しの間があつたが、ややためらいがちに、男の手を取つた。

「な、何？ どうしたの、ツバル」

銀髪の少女が、息を乱して駆けてきた。やや遅れて、瘦身の少年がそれに続く。ツバルは少女たちに構わず、女の手を握り締めると、

そつと腰を抱き寄せた。

「きや……」

女は咄嗟のことで力が抜け、ツバルに体を預けた。強く抱きしめられると、その頬が朱に染まった。

「ツバルだ」

「ツバルさま……」

女は長い睫毛をかすかに伏せ、彼の腕に身を任せた。

「何あれ……」

その光景を眺めながら呆然と眩くルビーに対し、フブリは気が気がでなかつた。

森を抜け、裏口から村に入つたはよいものの、ツバルが何かを見つけて突然全力疾走をし出したため、フブリたちはわけもわからずそれを追いかける羽目となつた。彼が剣を鞘に収めているところと、その足元に転がっている男を見れば、からまれている村娘を暴漢から助け出したという現状は大方理解できた。

しかしそれだけでは足りないらしく、ことあるごとにツバルはその女性を口説きはじめている。

ツバルが女好きであることは薄々感じていた。というより、九十九%確信はしていた。確信はしていたけれど……

「つ、ツバル……」

意を決しツバルに向かつたが、振り向いたのは女のほうだった。フブリは思わず立ち尽くしてしまつた。

すらりとした長身、整つた目鼻立ち、長い睫毛、両肩で踊る三つ編みの流れは、吸いこまれそうなダークヴァイオレット。メイクはナチュラルかつ巧みで、自然な女性らしさを醸し出している。

一言で言えば、彼女は美しかつた。

フブリの中で、普段ならば黙して働く女の本能が、告げた。この女には、勝てない、と

「…… puff」

途端に漏れたその声に、フブリは呆然とした。

女が、急に笑い出したのだ。それも、先ほどまでの清楚なイメージを打ち壊すような、大笑いだった。

「あーっはっはっは……！」

「え、な、な……！？」

フブリは状況を把握できないまま真っ赤になった。女は素早い動きで頭の布を完全に下ろし、ツバルを押し出すと、フブリに顔を突き合させる。間近で見ても、やはり美しい女だった。

女は、笑いすぎて涙が出たらしく、目の淵をこすっていた。

「ごめん、ごめん。いや、あんたを笑うつもりはなかつたんだ」急にたががはずれたような女の様子に、ルビーは首を傾げた。フブリは混乱していたため、ただぽかんと彼女を見つめることしかできなかつた。

「こんな可愛い娘たぶらかすなんて、お前最低だな！」

女は笑いながら、ツバルの肩をばしばし叩いた。

「つて、知り合いでですか！？」

驚くルビーに、女が相槌をうつ。フブリは、まだ現状が理解できなかつた。

「紹介すつか！ これがおれの男友達、クルージュ・エーレブルーだ」

「え……。何だか今、ものすごく受け入れたくない単語を聞いた気がするんですけど……」

ルビーが恐る恐る聞いたので、フブリは目をぱちくりさせた。

「男友達」

「よろしく！」

先ほどまで女……だつたその人物は、グツ、と親指を立てて見せた。

「男！？」

二人の悲鳴のような叫びが、村中にこだました。

外は風が強かつた。窓はガタガタと音を立て、家屋が軋む音も、切れに聞こえた。

フブリは風の音に時折耳を傾けながら、温かいお茶に口をつけた。一日歩き詰めだつたため、フブリの表情に残る疲労の色は濃い。カップから立ち昇る湯気が、体中に沁みこんで骨まで溶かしていきそうだ。

ここは、ツバルの男友達、クルージュの自宅である。クルージュは、流れる濃紫髪を可愛らしい三つ編みにした、一見すると体格のいい美女であつた。しかしこれは、実は彼のとんでもない悪癖である。「こいつの女装趣味はすごいぞ。スカート以外、はいたとこ見たことねえもん、おれ、な、変人だろ？」

顔の傷に消毒液を塗りながら、ツバルが笑つた。

「類は友を呼ぶつて、本当だつたんですね」

「さすがツバルの友達だよね……」

その点に関しては、二人同時に納得できた。

しかし室内を見渡してみれば、女装趣味の変人宅とはいえ、家の中は思つていたよりもまともであつた。むしろ、清潔感にあふれる、さつぱりした内装である。人形やら、レースやらで装飾された家を想像していたフブリは、少しほつとした。ただ、暖炉の傍に乱雑に放置されている白衣と、大きな棚に並べられた小瓶の群れには首を傾げた。

「クルージュ、あれは何？」

棚を指差すと、キッチンで湯を沸かしていたクルージュが、顔をのぞかせた。

「ああ、それはな……」

クルージュの言葉は、勢いよく入ってきた風の音にかき消された。玄関近くに座つていたフブリは、突然の強風に目を剥いた。

「せんせー」

十歳前後の男の子が、風とともに、玄関から入ってきた。彼の身長では、ノブに頭が届くのがやつとりしく、重い扉を必死に押しこんでいる。

「せんせー。隣のニールシェ婆が、怪我したのー」

「あのばーさん、また何か無茶したんだろ。しばらく絶対安静って言つてたんだがなあ」

キッチンから出たクルージュは、白衣を羽織り玄関口にかけてある大きな黒鞄に手をかけた。

「ちょっと出てくるけど、ツバル、留守は頼んだ」

クルージュは、ツバルの返事も待たずに男の子に引かれて、足早に外へ出て行つてしまつた。

「驚いたろ？ あれでも、ここでは唯一の医者なんだぜ」

棚の瓶は薬瓶だったのだ。とてもまつとうな仕事をしているとは思えない彼の姿を思い浮かべ、フブリは笑つた。

「女装趣味なお医者さん、初めて見たよ」

「あいつも、昔は傭兵稼業やってたんだけどな。剣の腕は、おれ以上だつたんだぜ」

「つていうか、剣士で女装趣味つて医者より危なくないですか……？」

ルビーが不安そうに呴いた。

「ツバルとクルージュつて、傭兵時代の友達なの？」

カツブを流しに運びながら、フブリは柵に立ち並ぶ小瓶を眺めた。

「いや、おれらはもつとガキの頃からの腐れ縁。十歳くらいだったかなあ……あいつと初めて会つたのは」

「同郷なんですか？」

「いや、全然違うけど。実はな、俺はその頃からもう『凄腕』の頭角を顯してたから、立派に一人立ちして剣で生計立てたわけよ」

「へえ……」

誇らしげに腕を組むツバルに、ルビーは生返事を返した。

「で、たまたま雇われた先であいつと一緒になつて、まあ何年か仕事を共にしたんだな」

「じゃ、幼なじみなんだね」

「まーな」

ガタガタ、と突然音がしたので三人は同時に目を合わせた。それが風に叩かれた戸の音だと気づき、頬の緊張を緩める。外は依然強風に見舞われているようだ。

「じゃあその幼なじみさんに聞きますが、一体何なんですか？」の村は

「え？ 何が？」

ツバルはきょとんとして、急に真剣になつたルビーに聞き返した。ルビーは慣れた動作で頭を抱える。

「ここに来るまで、いーろーいーろー疑問があるんですよー」

「おう！ 若いうちに疑問があるつてことはいいことだ！」まるで意味の通じていらないような返答だった。

「こんな小さな、人の寄りつかなそうなところに村がある理由、そして何故か村中をどこぞの国の兵士が闊歩している理由、入り口に厳重な警備が強いられている理由、それから……」

「それから？」

フブリが首を傾げた。ルビーがその視線に目配せして頷く。

「……何だか、妙な違和感があるんだ。魔法、いえ、それに近しいもの……村全体が変な空氣に包まれているような……」

「おれはこここの住人じゃねえからなー。わかんない」

ツバルのどうでもいいような返答に、ルビーは明らかに嫌悪を指示した。ツバルにとつては普段の接し方なのだろうが、どうもルビーは彼のその態度をよい方向へは受け取れないようだ。険悪な空気が漂い、フブリは息を詰ませた。

確かに村に来てからの疑問は尽きないが、それはこれからクルージュに聞けばいいことで、何も今よそ者のツバルを問い合わせる必要はない。

「知らないんじゃしょうがないよ、ルビー」

フブリは明るクルビーをなだめた。

「フブリはさ、ツバルさん……」

「え？」

そのとき、再び強風が玄関から入つてきた。

クルージュが帰つてきたのだ。フブリは、このときほど救われた気持ちになつたことはなかつた。

「ただいま」

間の抜けた声は、風にかき消された。クルージュの整えられた美しい三つ編みは、今やぼろぼろだつた。しかし格好が乱れたことにより、初めて彼が男性に見えて、フブリは吹き出した。

「やー……。今日はいつも以上にすごい風だ」

クルージュが、着ていた上着を放りながらぼやいた。

「いつもこのくらい吹いてるんですか？」

「ん……。いや、まあ……吹くかな」

言葉を濁したクルージュを、ルビーは不思議そうに見つめた。

「みんな揃つたことだし、飯にしよーぜ、飯」

まるで家の主であるかのような、態度の大きいツバルだつた。

「ああ、うん。じゃ、おれちょっと買い出しに行つてくるよ。皿とか足りないし」

「えつ、今帰つてきたばかりなのに悪いよ。私が行くよ」

慌ててフブリが立ち上がる。いや、とクルージュがそれを制止した。「よそ者が村にいることが知れると、大変だから」

クルージュは、もう外に出る準備をしていた。村の正門に門番がいたことを考えれば、彼らにとつて確かに自分たちは招かれざる客ということになるのだろうか。そういうえばツバルも、『見つかるとやつかいだ』と言つていたことを思い出す。

「クルージュ。フブリを連れて行けよ」

背後から飛んだツバルの発言に、フブリやルビーはおろか、クルージュさえも驚いたようだつた。

「「」の村に来たからには、青木さんに会つて帰んなきや損だし」

「……ああ、そうか。見たことないんだもんな」

少し考えこんだクルージュは、フブリをじっと見つめた。

「ここの一応観光名所なんだが……来るか？」

「観光名所なんてあるの？ うん、行きたい！」

フブリは途端に目を輝かせた。こんな辺鄙な村に、と疑問は残るものの、旅行気分で楽しかった。勝手に進行する三人の会話に、ルビーだけが眉根を寄せた。

「あの、ぼくも……」

ルビーの口が開きかけたとき、ツバルの腕が彼に絡みついた。反論する間もなく、少年はキッチンの方向へ強引に引きずられていく。

「おれたち、飯作つて待つてるからよ～」

「ちよつ、何勝手なこと言つてるんですか！？」

必死の抵抗も空しく、笑うツバルの腕から、彼は逃れることができなかつた。

「変なもん作るなよ、ツバル」

二人の後ろ姿にクルージュは苦笑した。

「ところで青木さん……つて誰？」

「会つてみてのお楽しみだ」

キッチンに消える二人を見送つてから、クルージュはフブリに小さくウインクして見せた。

「ただし、外に出たら、あまりきょろきょろしないようにすること。村人を装つて」

頭に、先ほどクルージュが被つていた布をかけてもらう。風が冷たから、と渡された厚着のケープも羽織つた。端に編みこまれたピンクの刺繡に、思わず笑みを漏らす。

外は、思つた以上に強い風が吹いていた。扉を開けていきなりの突風に、フブリは思わず声を出してしまいそうになり、慌てて口を塞いだ。

家の近くに、兵士が数人、立つていたのだ。

「そのまま、普通に歩け。もし何か話しかけられても、黙つているように」

小声のクルージュに、フブリは心の中で頷いた。『ぐり、生睡を飲みこむ。平常心を何とか保つたまま、ぎくしゃく歩いた。どうか何事もなく通り過ぎられますように、と祈る。

しかし願いも空しく、兵士の一人が、おい、と声をかけてきた。呼び止めた兵はフブリのすぐ間近に迫り、フブリは、心臓が飛び上がりそうな感覚を覚えた。

「その小さいのは？」

「おれの患者ですが、何か？」

平然と、クルージュが答える。

「おい、お前。頭の布を取つてみる」

言われた通りに黙つていると、急に兵たちの無作法な笑い声が聞こえた。

「ババア、こんな近くで話しても聞こえねえのかよ！」

布で前は見えなかつたが、どうやら疑いは晴れたらしい。クルージュが診察に行つた、老婆だと思つたのだろうか。

「失礼します」

「ばあさん、カマ医者に診せてると、あんたも男になるぜ」

兵士の笑い声は、立ち去つた後も長く聞こえていた。クルージュに止められていなければ、飛び出して殴つてやりたいところだつた。

「静かにな」

クルージュが呟いたことで、まだ近くに兵がいることを知つた。一体、この村には何人の兵士が滞在しているのだろう。

そつと布の隙間から覗くと、どんよりした家屋が一定間隔で立ち並んでいるのが見えた。これだけ深い森の中なら、日差しが届かないのはわかる。しかし、村が暗い理由は、それだけではない気がした。兵士が横行する大きな通りで、フブリはまだ一人の村人にも出くわしていない。誰もが家の中に閉じこもつてている。

この村には、活気がまるでなかつた。

「あの、『めんね。住んでる人に、こんなこと言つのはどうかと思
うんだけど、この村つて何ていうか……』」

「変だろ」

フブリが言い切る前に、クルージュが割つて入つた。

「そんな顔するなつて。ここに住んでる奴らは、みんな変だつて思
つてるからさ」

申し訳なく瞳を伏せるフブリの肩を、クルージュは優しく叩いた。
「こんなとこ、好き好んで住む奴なんかいやしないんだ……」

「え？ ジゃあ」

クルージュは？ と言葉をつなぐことはできなかつた。彼が、走り
だしてしまつたのである。

丘陵のふもとは、おびただしい数の兵たちで埋め尽くされていた。
まだここにいる時間が一日に満たないフブリにも、一日で頑丈な警
備であるとわかる。

ちょうどそれを見下ろせる丘の頂に着いたとき、クルージュはフブ
リの頭を掴み、屈ませた。

「あれが、青木さんだ」

『それ』は、無造作に張り巡らされた金網に囲われて、窮屈そうだ
つた。金網を更に兵士が隙間なく囲む。その中央で、『青木さん』
と呼ばれた大樹は精一杯自身の巨体を誇示するかのように高く、高
く空に向かつて伸びている。

枝の隙間からは、神秘的な青い光が淡く漏れていた。その不思議な
威圧感に息を呑む。

「でつかい……」

じつとそれに見入つっていたフブリは、ようやくそれだけを口にした。
「こんなに綺麗な木、私見たことない

無粋な金網を前にしても、滲み出る美しさは隠せなかつた。特にど
こが綺麗なのか、と問われれば答えに迷つてしまつ。『形』でも『
色』でもない何かが、その神秘的な光を生み出していくように感じ
られたのだ。

「そりやそうだ。あれは、普通の木じゃないからな」「青く光る魔法でもかけられてるの？」

「ゆらめく淡い光は、何か非科学的なものを彷彿とさせた。

「そんないものじゃないぞ……」

クルージュの横顔が哀しそうに見えて、フブリは押し黙つた。

『青木さん』はそんなクルージュの心境を汲み取つたかのように、弱々しく光つた。実際は目に見えてそんな変化があつたわけではない。ただ、フブリにはそう見えたような気がした。

「え？」

「ん？ どうした？」

フブリが急に口を開いたので、クルージュは驚いたように振り向いた。

「今、何か言わなかつた？」

「いや、何も言つてないが……」

クルージュは怪訝そうにフブリを見つめた。

周囲を見回すも、依然村は静かなまま、人影が見えなければ話し声すら聞こえない。ただ風の音だけが、耳の奥につるさく響いて残つた。

「そろそろ買い物して帰るか。風も寒くなってきたし、ツバルたちがマズい夕飯用意して待つてる」

クルージュが丘を降りるようにフブリを促す。

踵を返し帰途につくも、フブリは再度振り向き様に周囲を見渡した。やはりそこには誰もおらず、丘の下には相変わらず大樹が金網の中で淡く光っているだけだった。

「……に……」

だから、フブリは氣のせいだと思った。

「あなたに、決めた」

風の音に乗つて聞こえた誰かの声を、氣のせいだと思った。そのときフブリは、まだ気づいていなかつた。

大樹が、風をまとつていたことを。

その風が、まるで生き物のよう、唸っていたことを。

「そこお酒入れるところじゃないですよ！」

「フライパンの中身を軽快に炒めていたルビーが叫んだ。

「クッキングは手早くアバウトにこなすのが男だろ！」

隣のツバルはあふれ出しそうな鍋に酒瓶を直に突つこんでいる。

「アバウトどころの話じゃないですよ、ソレ！？ あー！ そんなに入れたら今までの下味がつ！」

ルビーはついにたまりかねてフライパンを手放し、鍋担当のツバルを押しのけた。しかし時すでに遅く、彼の手にした酒瓶はもはや空になっていた。恨めしそうに睨みつけるも、当事者は口笛を吹いて悪びれる様子すらない。

「お前、酒あんま飲まないんだっけ？」

「そうですけど……、フブリはぼくより弱いです」

ルビーがげんなりしながら生返事を返すと、ツバルは目を輝かせた。

「脱ぐの！？」

「あ……。もう嫌だ、このおっさん……。

ルビーはがっくり肩を落とした。

「フブリー早く帰ってきてー！」

叫んだ瞬間、玄関から強風が入ってきた。

フブリたちが帰ってきたのだ。ツバルはそれを見つけるや否や、あふれそうな鍋などお構いなしに駆け出した。

「フーブーリー お帰り～！」

両手を広げてフブリに突進するツバルめがけ、ルビーは鍋蓋を投げつけた。男の脳天に空飛ぶ鍋蓋が直撃し、「ゴキ」と嫌な音がした。

「お帰りフブリ。大丈夫だつた？」

ルビーは何事もなかつたように微笑んで、フブリを迎える。

「青木さん、すごく綺麗だつたよ。青く光ってる、こーんな大きな

大樹なの」

「青く光る大樹？」

ルビーは目をぱちくりとさせた。それが魔法なのかどうかフブリに問うも、彼女にはわからない。

「気になるか？」

「え、ええまあ」

クルージュに突然話しかけられて、ルビーは驚いたようだった。

「あなたは魔法使いか。今日はもう風が強くなつたから、明日連れてつてやるよ」

「はあ……、ありがとうございます」

クルージュが買つてきたばかりの食器をツバルに手渡す。フブリは騒々しかつたキッチンを覗きこんだ。後始末の大変そうな、見るも無残な惨状であつたが、テーブルに揃えられた鮮やかな食器類はそれを微塵も感じさせなかつた。

「飯はできたのか？」

「おうよ！ おれの特製ディナー！」

クルージュの背後から、ツバルが皿を抱えて顔を出した。

「これツバルが作つたの？ 料理上手なんだね」

その料理群の完成度の高さにフブリは感嘆の声を漏らした。すかさずルビーがツバルの肩を小突く。

「あんたは邪魔してただけでしよう。ぼくが作つたんだよ」

「な、ルビー 何てことを！ 二人の愛の結晶を一人で作つたなんて

……！」

途端にツバルは泣き真似をした。

「気持ち悪いこと言わないでくださいよ！」

フブリは吹き出した。ツバルに鍋蓋で報復しようとしていたルビーが、一瞬静止する。フブリは微笑んで、何でもない、とだけ答えた。

「さ、じゃあ飯にしようぜ～」

「うん」

温泉街を出てからずつと、ルビーのツバルに対する疑心が気がかり

だつた。

それが出会いって間もない頃、だつたならわかる。けれど、もう随分一緒にいるというのに、彼はツバルを認めようとしない。仲間同士で疑つたり傷つけ合つたりするようなことが、フブリには耐えがたかつた。

だから、フブリは一人のやり取りを見て、嬉しくなつた。一人が少しでも打ち解けてくれて本当によかつた。けれどそれを口に出せば、またルビーに要らぬ疑心を思い出させてしまつから、嬉しい気持ちは胸の中にしまつておくことにした。

「……一人とも、あんまり仲がよくないから、私心配だつたの」

しまつておくはづだつたのに、何故かパンを口に運んだ瞬間、ぽろりと滑り出る。何つ、とツバルが大げさに切り返した。

「おれはルビーも好きだし、フブリも好きだぞ！」

「ルビーは？」

フブリは対面しているルビーに投げかけた。

「……あ、あのね。ぼくは、別にツバルさんの方が好きとか嫌いとかじやなくて……」

ツバルを睨みつけながら、ルビーが口に運んでいたスプーンの手を止めた瞬間

わつ、とフブリが顔を覆つた。

「ふつ、フブリ！？」

ルビーはあまりに突然な出来事に、激しく動搖したようだつた。フブリはルビーから視線を逸らすと、はらはらと涙を流した。その悲しみに暮れた表情にルビーもクルージュも、ツバルですら目を剥く。「二人が仲よくなれないのは私のせいだわ……！　私の努力が足りないから……ツ！」

「な、何を言つてるんだよ！　だから、ぼくは別に好きとか嫌いとかじやなくて……」

対処に困つているのだろう。所在なさげにあたふたと動くルビーは、いよいよ立ち上がつた。

「おれたち仲よしだよな～！ なつ、ルビー」
と、突然ツバルがルビーの隣に移動し、手馴れた動作で彼と肩を組んだ。

「なな何するんですか！？」

ルビーは抵抗したが、

「仲よしだよな！」

と念を押されたため、なすすべないようであった。

「…………ハイ

ルビーは機械的に頷いた。

フブリはじつと、笑いながら（約一名、口元を震わせながら）肩を組む男たちを見上げた。そして、満面の笑みを浮かべると

「よかつたあ。一人が仲よしで私も嬉しい！」

と手を叩いて見せた。

ルビーが胸を撫で下ろすように、細く息を吐いた。肩を抱いて離さないツバルを引き剥がすと、彼は寂しそうに席に戻つていった。フブリはその後ろ姿を目で追いながら、ふと我に返つた。

ところで、何故自分は、泣き真似などしてみせたのだろう。

「どーでもいいけど肉食いすぎだぞオマエ」

横を向けば、取り皿に山盛りの肉を盛つているツバルと、それに突つこむクルージュの姿。

「しょーがねえだろ。ここに来るまで野宿したり崖落ちたり、大変だつたんだからよー」

正面には疲れた表情で黙々と食事を続けるルビー。フブリは首を傾げた。

一瞬、自分が何をしていたのかわからなくなつた。そう、青木さんを見て帰つてきたら、二人が仲よく夕食を作つていて、それが嬉しくて……

「フブリ？」

「ううん。なんでもない」

大げさに首を横に振つて、フブリは食事を続けた。ここ連日歩き詰

めで疲れていたのだろう。フブリはそう自分に言い聞かせ納得した。

「それで、話を聞かせてもらえますか？ クルージュさん」

ルビーは心持ち身を乗り出した。

「ああ……カラアのことだな？ おれの知っていることは少ないが、

夕食の後にでも……」

好意的に受け止めてくれたクルージュだが、その好意は

「やだ」

という一言に搔き消された。

「え？」

全員の驚いたような視線が声の主に集中した。

「今日疲れてくたくただもん。ねえ今日は早く寝て、明日話そりよ
視線の先には、だらしなく肘をつき、大きく欠伸をするフブリの姿
があつた。礼節の欠片も感じられない少女の態度に、クルージュが
苦笑する。

「おれは構わないが……」

「フブリ、早く聞いてここを出たほうがいいよ。クルージュさんに
は悪いけど、ここつて治安よくないみたいだし、何より早く知りた
い、つて君が言つてたじやないか」

ルビーはフブリの態度に少なからず苛立ちを覚えたようだった。
ところがルビーが反論した途端、カチヤン、と音を立ててフブリの
指からフォークが滑り落ちた。

「…………固いわ」

「へつ！？」

ルビーは頓狂な声を上げた。

「私、融通のきかない男つて嫌いよ」

鋭く放たれるその声は重く冷たく、一寸の迷いもなかつた。

「あーあ……ルビーつて顔はいいけど、頭固いわよね」

瞬間、ルビーの体はゼンマイの切れた玩具のように動かなくなつた。
凍りついたような空気が部屋中に漂い、ツバルとクルージュが息を
呑む。

「なあ、何かフブリ変じやねえ？」

「出合つて半日も経つてないおれに聞くなよ」

「固まつたルビーには田もくれず、フブリは」ともなげに食事を続けている。

「おーいルビー？ あ、ダメだこりや。完全に石になつてら……」ツバルが硬直したままのルビーの目前で手を振るも、彼はぴくりとも動かなかつた。

「あれ、私……」

サラダにフォークを刺している状態のまま、フブリは、はつとして顔を上げた。

どうもおかしい。

瞬時に意識が飛んだような感覚だつた。一体自分は今何をしていたのか。何を言つていたのか。

恐る恐る隣に視線を移せば、そこにはルビーの石像が

「え、え、え、ルビー！？ わわ私、今なんて言つた……！？」フブリは慌てて彼の体を揺さぶつた。少年の身体はなされるがままに揺れるばかりで、まったく反応が返つてこない。

「『ルビーって頭固い上に女心がわかつてない朴念仁だわ！』」

「微妙に脚色されてるぞ」

素早いツバルの返答にクルージュが突つこんだ。

「違つ……ち、違うよ？ ルビーのこと頭固いなんて思つてないからね私！」

フブリは混乱していた。まるで滅茶苦茶な行動をする自分がわからなくて、涙ぐむ。自分の不可解な拳動についてくることができなくなつた、二人の男の白い目が突き刺さつて痛い。

「どうしたんだろ、意識が遠のいて……わ、私何だか変だよ。へ、ん……」

声は次第にか細くなつていいく。それに合わせてフブリの頭は、テーブルにつきそうなほど傾いていった。

「フブリ、どうかしたのか？」

さすがにおかしいと思ったのか、ツバルが少女に手を差し伸べた。

刹那、フブリの顔が上がる。

「どうもしないわ」

先ほどまで泣きそうな顔をしていたフブリだったが、面を上げると別人のようになっていた。

「そこのあんた」

「え、おれ？」

ツバルを上から下までじろじろ観察するフブリの目は、完全に据わっていた。

「ツバルも結構見た目だけよね。女と見れば見境ないの？ そういう男に限って、一生ちゃんとした恋人もできずに一人寂しく人生終えるのよ」

鼻を折られ、ツバルはあんぐりとした。

「…………なんか知らんがフブリが毒舌だ……」

「こういつキャラなんじやないのか？」

「違いますよ！」

「あ、復活した」

クルージュの言葉に反応したのか、固まっていたルビーが動き出した。

「じゃあ、ツバルの飯にでも当たつたか？」

「そ、そうですよ。ツバルさん、あんた夕食に何か変なもの入れたんじや……」

冗談交じりに笑うクルージュであつたが、ルビーはそれを真顔で受け止めていた。

「やめてっ！」

お構いなしに食事を続けていた当事者の少女が、まるで外にまで届きそうな怒声を発した。三人の動きはそれと同時にぴたりと止まつた。

「二人とも、争うのはやめて！」

「争つてたか……？」

クルージュが冷静に聞き返したが、そんなもの、フブリの耳には届いていない。

「二人が仲よくなれないのは私のせいだわ……！　私の努力が足りないから……ツ！」

「ええつ！？　またそこに戻るの！？」

フブリがわづ、と顔を覆つた。

「私の……私の……！」

ルビーがどうしていいものかわからないうらしく、フブリの周りを右往左往している。

「う、うわああああ
ん！」

声をかけられずにいるルビーをよそに、フブリは食器が音を鳴らすくらい勢いよくテーブルを叩いて、叫びながら階段を駆け上つていってしまった。

「フブリ！？」

ルビーは、少女の名を呼びながら、彼女の後を追いかける。嵐が去り途端に静かになった居間に、一人の男だけを取り残して。

「フブリー！」

フブリは背後に少年の鬼気迫る声を聞きながら、気が遠くなるのを感じた。

＊＊＊

クルージュは、フブリのために一階の部屋を一つ空けてくれた。男三人は居間に雑魚寝するらしい。それは昼間、クルージュと『青木さん』を見に行く前に決めたことだった。

その自室の扉の前で、フブリは立ち尽くしていた。

食事の席を何故か一人立ち上がってから早三時間。拳動不審な自分を心配して追いかけてきたルビーも、もう眠ったかもしれない。

「わ、私どうしちゃったんだろ……！？」

部屋の中をうろついたながら、フブリは自問した。自分のことだと

いつのに、何故夕食時にあんなことを口走ったのかさっぱりわからない。それをこじて三時間延々と考えていてもわからないことが、一番わからない。

「どうもしないわ

あつさり言われて、フブリは拳を握り締めた。

「どうもしてよ……つて、あれ？ あれ？」

見回すも、部屋には自分以外誰もいない。それはそうだ。ずっと独り言を言っていたのだから。

そう、独り言だった。

『どうもしないわ』と、確かに今、自分の口が……

フブリは、悪寒を感じて首を横に振った。

「そんなこと、あるわけないよね！ 井、まるで私の口が……

まるで、自分の口が勝手に

「勝手に口が喋り出したのよ」

「~~~~~！？」

咄嗟に口元を覆い隠す。

今度は確かに聞こえた。どう考へても、今のは自分の声としか思えない。フブリは両手で強く口元を押された。荒い吐息が指の隙間から漏れて、沈黙の中に響いた。

「お、落ち着けフブリ・トリバン・ド・ラム。疲れてるんだよ、きつと。」

「そうそう、山道は辛かつたもんね。早く休まなきゃ」

何とか不可解な現象に理屈をつけたかった。自分を納得させて、深呼吸を一つ そして、ベッドに潜りこむ。

「あたしはまだ眠くないわよ」

ところが、フブリの体はぐるりとベッドから反転し、また扉の前に立ち尽くす形となってしまった。

「つてええ ！？ 何やつてるの私！？」

背後のベッドと目前の扉を交互に見やり、フブリは悲痛な叫びを上げた。もはや、この現象に理屈をつけることはできない。頭が混乱して、眩暈がする。これではまるで、何かに体を操られているよう

ではないか。

「操つてんのよ」

フブリは、自分の口から出る、自分の言葉じやない言葉に耳を塞いだ。

「あたしよ、あたし」

「あ、はは……な、何言つてるんだろ私」

誰にともなく笑いかける。部屋には誰もいないが、もはや笑うしかなかつた。フブリは、田の前が真つ暗になつた氣がしてよろめいた。

「まだわかんないの？ あたし、幽靈なの。あんたに取り憑いたのよ」

「へ？」

間の抜けた声が出た。

幽靈

幽靈が、取り憑いたつて

幽靈が……

「え、え……ええええええ

！？」

「ルツ、ルルルルビー！」

ちょうど湯を上がって居間に戻ろうとしていたときだつた。ものすごい勢いで階段を駆け下りてくる少女に、ルビーは驚きを隠せなかつた。フブリは足早にルビーのもとに駆け寄ると、彼の夜着にしがみついた。その必死の形相に、ルビーが目を丸くする。

「フブリ！？ どうした？ まさかこんなところまで襲撃者が……」

ルビーは、すかさず構えて周囲を見渡した。

「私、取り憑かれた！」

「は……？」

ルビーは、きよとんとして、しがみつくフブリを見つめる。状況が

呑みこめなかつたため、何もない廊下に構える姿勢を崩さない。

「取り憑かれちゃつたの！ 女の子の幽靈！」

「……はあ？」

思わず鼻の奥から抜けるような、どうでもいい声を発してしまった。自然に指先は眉間へ向かう。とてもじゃないが、二の句が継げない。本当に今日のフブリはおかしい、と思つ。やはり変なものでも食べたのだろうか。後でツバルを問い合わせよう。

「ど、とりあえず落ち着いて。何言つてるのかわからぬよ」

「だから……。……」

「フブリ？」

フブリは、突然スイッチが切れたようにうつむいたまま黙りこんでしまった。その顔を覗こうとすると、またスイッチが入ったように唐突に頭が上がった。あやうくルビーの顎に直撃するところだ。

「ごめんね、ルビー。あたし、寝惚けてたみたいだわあ。うふふつ

スイッチがオンになつたフブリは、やけに黄色い声色で科を作つて見せた。普段の彼女ならば到底有り得ない動作に、ルビーは開いた口が塞がらなかつた。フブリは、呆然としているルビーの肩に腕を回し抱きついた。そして背伸びをすると、彼の頬に小さく口づけて言つた。

「お・や・す・み」

何事もなかつたように階段を上るフブリの背を、ルビーはただぼんやり眺めた。

「…………お、おやすみ…………？」

疑問符だけを残し、フブリたちの『最果て』での最初の夜は更けていくのであつた。

手のひらを掲げてみる。

紛つことなき、自身の手のひらだ。それをぎゅう、と握つてみる。

大丈夫、自分の意志で動く。

立ち上がって着替えをして、鏡の前に立てば、いつもの見慣れた自分の姿が映し出される。フブリは鏡に映つた自分に気の緩んだ笑顔を向けた。

「よかつた……やつぱり」

しかしその言葉は詰まつて出なかつた。代わりに

「まさか夢だなんて思つてるんじゃないでしょうね」

といつう言葉が自身の口から発せられ、フブリは途端に青ざめた。

「い、い、い、いやああああ

！」

早朝の怒声に驚いて駆けつけた最初の人物はツバルであつた。

「フブリッ！？」

パジャマ姿に剣を構えるその姿は明らかに滑稽であつた。しかし、フブリにはツバルの形態を笑う余裕がない。今にも泣き出しそうな顔で自らの口を必死に塞いでいる。

遅れてルビーが階段を駆け上がつてきた。

息を切らしながら部屋に駆けこむや否や、フブリの背中を撫でるツバルを発見し、ただちに手持ちのフライパンで殴りかかる。

「こつ、この変態口リコン剣士がああ

！――」

「うわつ！ マジギレすんなお前！？ つてか誤解だし！ 明らかに！」

本気でかかるルビーに、さすがのツバルも対処が遅れた。ツバルの脳天に金属が食いつむ音が、家中に響き渡つた。

「いや……、つていうかあの状況じゃ誰でも誤解しますよ」

ルビーは、不本意ながらツバルの頭にできた巨大なたんこぶに氷を

当てながらぼやいた。

「……えへ……何だつて？ つ、ツバルが……」

くつくつくつ、と必死に笑いをこらえているのはクルージュである。

「あはははは！ 何！？ ツバルがフブリを襲つたって？ しかも朝つぱらに？ ぎやーははは！」

「……ごめん、ツバル」

げらげら笑い出したクルージュから視線を逸らし、フブリは申し訳なくうつむいた。

「フブリのせいじゃないよ！ ツバルさんが悲鳴の直後にフブリに触つてたから、てつきり」

「おれ、被害者なんだけれども……」

ルビーに睨みつけられて、ツバルはしょんぼりと肩を落とした。クルージュは笑いすぎて涙まで流している。

「いやー、あんたら最高。メシできたから、そ、そのたんこぶ冷えたら来いよ！」

やはりまだ笑いの余韻を残しながら、クルージュは居間に消えた。フブリが足早にその後を追う。

「ん？ どうした、フブリ？」

「あ、あの……ね……」

クルージュは皿を器用に三つ持ちながら、視線だけをフブリに向けた。

「ちょっと折り入つて立ち入つたことを聞くけれども……！」

しかし、彼女のその真剣な瞳に呑まれたのか、クルージュは皿を手放し体勢をフブリに向き直した。

「どうした？」

「この家、その……幽霊とか出たりする！？」

あまりの突飛な質問にあつけにとられたのか、クルージュはしばらく押し黙つた。しかしそれも束の間、彼は抱腹絶倒し、テーブルにもたれかかって崩れ落ちた。拳句ヒーヒー言いながらバシバシ壁を叩き出している。

「…………」

フブリは予想通りの反応に即座に頭を抱えた。誰か信じてくれる者がいてくれれば、と思ったが、ここまで笑われるともうクルージュには手の施しようがない。ルビーにはタベ話したが聞く耳持たず、未だにツバルが食事に毒を（どんな毒だ）盛つたと思っている。ツバルはツバルで今朝話したが、よしよし怖い夢を見たな、と背中をさするばかりであった。

「誰も信じないわよー。あはは」

幽靈が自分の口を借りて喋り、フブリはこれが現実であることをいい加減認めざるを得ないことに気づいた。
もはやこの幽靈、自分でどうにかするしかない。

フブリはいよいよ腹をくくつた。

「誰だか知らないけど、さつさと成仏させてみせるからー！」

成仏なんてしないわよー、と舌を出す自分の口を押さえ、フブリは意気込み食卓についた。その鬼のような幼なじみの形相に、ルビーだけが目を丸くしていた。

立てつけの悪い窓が軋んで鳴つた。

外から内部が見えないように窓の外側に板が打ちつけてあるため、日の光は入らない。しかしふブリは、昼間でもどんより曇つた暗い村の様子を想像することができた。

今日も風の勢いが強い。まるで村の濁つた空気を排出しようと頑張つてているようだ。

クルージュは食事を済ますと、足早に村の往診に出かけてしまった。村人の数は少ないが、具合のよい者は少ないらしい。日の当たらない閉鎖的な村に住んでいれば当然だらう。きっと幽靈もそんな村人の一人だつたはずである。

「何か、未練があるんだよね……」

「そういうことね」

「病気で亡くなつた、とか」

「はずれー」

フブリは朝食から一人ごとをブツブツ呟いている。自分で幽霊と会話をしているのがわかるのだが、他者からすればただの独り言にしか見えないのが辛いところだ。

「あの……何か昨夜からフブリが尋常でないような気がするんですが、どうですか」

ルビーとツバルがひそひそ話しているのが耳に入り、とてもじやないが、いたたまれない。

「ん、でも不思議ちゃんなフブリも可愛いよね」

ツバルの返答に、ルビーが盛大にため息をつくのが聞こえた。だが集中していれば、幽霊と話すことも特に違和感はない。彼女が同じ年頃の少女のように感じられるからだろうか。

「この村に昔から住んでるの？」

遠田に自分を見つめるツバルとルビーの視線が痛いが、そんなことは気にしていられない。今、フブリにとつて重要なのは、いかにしてこの幽霊を成仏させるかなのだ。

「まーね」

「じゃあ、何でこんなところに村があるか知ってるんだ」

幽霊は一瞬口を開じた。

「え、ちょっと、そこは黙るの？」

「最果てはね、とある王国の秘密を守っているの」

「秘密……？」

「そうよ。たくさんの兵が村中を歩き回って、おかしいと思つたでしょ？ あれは、その秘密が外界に漏れなによく見回つている兵士たちなの」

幽霊は大きな顔をして、まるでそれが自分の体であるかのように腕を組んだ。

「でなきやこんな山の中に村なんか作らないわ。こんなところ……好き好んで住んでる人間なんかいやしないもの……」

似たような二コアンスを、フブリはどうかで聞いたことがあった。そう、クルージュの言葉だ。

この幽霊の言つていることが真実だとして、その『秘密』を守つて
いる村にずっと住み続ける村人たちは何者なのだろうか。好き好んで、村に住む者はいない。ならば、彼らはここに住むことを誰かに
強いられているのだろうか。

よそ者の自分には、彼らが兵士たちと一緒に画しているように見える。決して平等ではない。明らかに村人は奉制されているのだ。

「ふ、フブリ……？」

もとからここに存在した村を、秘密を持った国、とやらが占領したのだろうか。そして、秘密を村の奥深くに隠した……。

「フブリ！ 何してるんだよ！」

「えっ？」

考えこんでいたフブリは、下方から聞こえるルビーの大声に目を丸くした。

いつの間にか、自身の腕は何かにしつかとしがみついていた。それが何なのか把握するのに、そう時間はかからなかつた。腕が痺れて、痛い。

「…………あ…………ええええ！」

フブリは、ルビーを見下ろした。

そう、ルビーは下にいた。部屋の柱をよじ登り、柱にしがみついたまま天井付近で動かないフブリを、ルビーは顔面蒼白になりながら見上げている。

「ななな、何やつてるの私は…………！」

これにはさすがのツバルですら顔を蒼くしていた。

「私じやない！ 私じやない！」

フブリは必死に首を横に振つた。しかし、しがみついたままそんな余裕があるはずもなく

「も、もうダメ…………！ 腕、痛い…………落ちる…………」

「フブリ、ちょっと待つてろ！ 今行くから！」

柱をずり落ちるフブリは、ツバルの手によつて何とか救い出された。

「あはは、他人の身体つて面白いわねー」

幽霊が楽しそうに笑い、

「も、もう嫌……！ 早く成仏して……！」

フブリは半泣きで心の底から叫んだ。

* * *

「お前ら、何やつてんだ？」

宵の間もない時刻、往診から帰つてきたクルージュが最初に発したのがこの一言だった。

「フブリ！ それは帽子じゃないよー。」

「その鍋はまだ洗つてないから、こっちにじとけ！」

「私じゃないの～！ 私じゃないんだよおおー。」

何故か鍋を頭に被つて離さない少女と、新しい鍋を勧める男と、頭の鍋を引き剥がそうと必死な少年。

クルージュは軽く眉間にしわを寄せて唸つた。何故この連中は人の家でいきなりコントをはじめているのだろうか、という声が聞こえてきそうな仕草である。

「どうでもいいけど、鍋……返せよ？」

フブリは、冷たく響くクルージュの捨て台詞に耳を傾けながら、軽く眩暈がするのを感じた。

昼間、柱をよじ登つてからその後、フブリの奇怪な行動は休みなく続いた。それが幽霊の仕業だとわかつてゐるだけに、彼女の動きを止められない自分が悔しい。結局、幽霊の馬鹿馬鹿しい動きが納まつたのは、夕食が済んだ頃だった。

「……で」

食後のお茶をすすりながら、機を待つていたようにクルージュが口を開いた。

「落ち着いたか？」

ぜいぜい肩で息をしながら、フブリはただ首を縦に動かした。疲れているのは幽霊に振り回されたフブリだけに限らず、フブリの行動

につき合つたルビーとツバルも同様であつた。

「いやー、フブリは面白いなあー」

「全然面白くないですよ！ 本当にあんた何か毒でも盛つたんじゃ
ないですか！？ 昨日の夕食！」

フブリはまた関係が悪化しはじめた一人を見やり、肩を落とした。
それを引き起こしたのは他でもない自分自身なのだが、それだけに
なんとフォローしていいものか見当もつかない。

「じゃ、じゃあ、気を取り直して！」

幽靈も疲れたのかそれとも飽きたのか、ともかく身体に自由が戻つ
た今がチャンスだ。まともな人格で話せるのは今しかないような気
がした。

「カラアのこと、聞かせて！ クルージュ」

フブリは先ほどまでの自分を忘れないがため、ひと際明るく努めた。

「ああ……そうだな。何から話そうか」

ごくりと生唾を呑んで身を乗り出す。いよいよ一年間追い続けてき
た『カラア』の正体を知ることができるのだ。

「カラアが遠い昔から国交を絶つているのは知つているな？」

フブリとルビーは同時に頷いた。そこまでは一人が旅の途中で調べ
た確かな情報だつた。

「いいか。カラアは噂されるほど美しい国じやない。あんたたちが
何も知らずに行くなら……」

クルージュは、わざと言葉を切つて、フブリの首に手をかざした。

「……殺される」

一気に空気が重くなつた。お茶のカップを置く音だけが、広がる沈
黙の中に落ちる。風の音だけは、まだ強く聞こえていた。

「殺されるつて……穏やかじやないね」

フブリが、テーブルに置いた拳に力をこめ、喉を鳴らした。ルビー
も彼女と同じ状態のまま、一言も口にせず黙つてしまつていて。ツ
バルだけは我が家のようにソファーに寝そべつて顔だけをこちらに
向けているが、ともかくも室内に緊張が走つた。

「要はあんたたちが、よそ者だつて氣づかれなければいいわけさ。そこら辺は大丈夫だ。カラアへ行くまでは、おれが保障する」少しだけ、クルージュの調子が軽くなつた。それが、自分たちを怯えさせないようという気遣いであることがわかつたから、フブリは口元を緩めて見せた。ツバルは一つ、大きな欠伸をすると風呂に行つてしまつた。彼自身は『カラア』にはまるで興味がないようだつた。

「カラアは旅人からは『幻の王国』と呼ばれているが、カラアの中では、そこだけの通り名がある。カラアの人間は、『魔法の王国』って呼んでいるんだ。それには理由があつて……」

話をどこからつなげていいのかわからないうらしく、クルージュは少し考えるよう間に置いた。

「うん。まず、カラアが何故、他国から隔絶されなければなかつたのか、つてどこから説明するな。存在すら定かでない幻の王国……」そう思いこませる本当の理由は、おれたち他国の人間に、決して知られてはならない秘密があつたからだ」

秘密、という単語に何か引っかかりを感じる。

「秘密、というか、取られたくないものだ」

「それつて、誰でも欲しがるようなものなの？ お金や宝石みたいに？」

真剣な面持ちで尋ねると、暖炉の火がフブリの心に呼応するように、静かに爆ぜた。

「似ているが、根本的なものが違うな。カラアに大事に保管されていたのは、『魔法』なんだ」

「魔法？」

魔法は、魔法使いがものに呼びかける行為であつて、物質ではない。保管でくる魔法などフブリは聞いたことがなかつた。

「ただの魔法じゃない。世界を揺るがす『大魔法』だ。……しかし、どんなものなのがわかるつていいない。大陸やものや人を一瞬で消せる、とか何でも意のままに操れる、望みが叶う……とか、噂はいろ

いろいろあるんだけどな

「カラアの人でもわからないの？」

「ああ、誰も知らない。ただ一人……カラアの王を除いて」

「王さま？」

図らずも続いてしまったオウム返しをフブリは申し訳なく思つたが、クルージュは気にしていない様子だつた。

「その魔法は、代々王が保管する。王位を継承した者に受け継がれていく、っていうシステムらしい。でもな、そんなすごい魔法、外に出れば誰だつて欲しくなるだろ？」

フブリは、小さく相槌を打つた。

「とにかく自国にも他国にも、誰かに悪用されたら困るわけだ。何だつて、それ一つあれば、世界を支配することが可能かもしれないんだからな」

だから、国は自らの存在を隠し、他国との交流も途絶えた、と、クルージュはつけ加えた。そこまで一通り話し終えると、彼は深く椅子にもたれこんだ。

「えつと、じゃあ、その大魔法は王さまが持つてて、それを取られないように、カラアを『幻』に仕立て上げたつてことか」「けど、その国つて結局どこにあるんですか？」

長く沈黙していたルビーが突然、口を開いた。

「国交を絶つているといつても、国一つ、数百年もの間誰にも見つけられないなんておかしいですよ」

確かにルビーの言つ通りだ。カラアがいくらその存在を隠そうとしていたとしても、長い年月の間、旅人や学者が誰一人気づかないなど現実的でない。誰も足を踏み入れないような未開の地にあるとしても。

そこまで考えて、引っかかっていたものがフブリの頭の中でつながつた。

「この村……!? 青木さん！？」

クルージュは小さく頷いた。

「そう、カラアは大樹の根にある」

「それって、地下にあるってこと?」

「いや、正確にはカラアへの唯一の入り口が、だ。カラアを作った大魔法使いは、その国をまったく新たな次元に移し変えた」

「じ、じげん?」

思わず声が裏返った。クルージュが苦笑してつけ加える。

「えーと、つまりこことは世界が違うってことだ。この村はカラアに続く最後の通路。だから、こっちの次元の『最果て』」まさかこんなにも近くに『カラア』があるとは思わなかつた。ただ純粹に嬉しさだけが先行してフブリは思わず手を叩いた。

「すごい……すごいよ! 幻の王国つて、そういうことだつたんだ。素敵な国なんですよ?」

そのときカラアは、フブリの中で、旅人たちが語る御伽噺の理想郷とすっかりリンクした。しかし瞳を輝かせるフブリに対し、クルージュは目の色を曇らせた。

「この村は、大魔法を守るために作られた防波堤だ。外界に決してカラアの存在を知られることのないよう、厳重な警備を布いている。それはあんたらも見ただろう?」

「あ……」

「この村で生活する奴らは、たまたまここへ迷いこんでしまつた旅人か、カラアを抜け出そうとした国民だ。ちゃんと故郷もあるし、そこに帰りを待つ家族もいる。だが、ここに一度迷いこめば一度と外へ出ることは許されない」

『好き好んで住んでいる人間などいない』。クルージュと幽霊の言葉が蘇る。フブリは村中の濁つたような空気、その根源を知ったような気がした。村の中が暗いのは、日の光が入らない場所にあるから、という理由だけでは決してなかつたのだ。

「ここに、こんな村があるという事実さえ、決して外に漏らしてはならない。ここに住人はカラアのために、死ぬまで囚われていなければならぬんだ」

フブリは思わず顔を歪めた。

「今の王は狡猾さ。カラアを知る者は生きて国を出られない。おれは、そんな国が嫌でカラアを出た」

「それで、捕まっちゃったの？」

「いや、おれは自分からここに戻つて来たんだ。村に囚われた奴らが哀れでならなかつたから……おれにも何かできることはなかと思つて、医学も勉強した」

何ともいえない虚脱感に襲われ、フブリは椅子にもたれかかつた。興奮が嘘のように冷めていく。それは、カラアが想像していたような美しい国でなかつたからだろうか。それとも、カラアを嫌いながら最果てに戻つてきたクルージュに同情しているのだろうか。

どちらでもいい。ただもの哀しくて切なかつた。

「さて……カラアのことはあらかた知つてもらえたかな？」

「……うん……」

先ほどまでとは打つて変わつて暗い表情になつたフブリに、クルージュは苦笑した。

「あんたらがカラアを探してゐる大体の事情は聞いた。それで、おれから話を聞いてどうする？ 行くのか？」

フブリは押し黙つた。答えは話を聞く前から決まつていたはずなのに、言葉にならない。

「その入り口、次元の穴つてのはやつかいなどいろにあつてな。兵士たちをどう巻くかが問題なんだ」

「……青木さんの根元にあるつていう？」

「そうだ。どうにかあの兵士たちの目をかいぐぐつて、金網を抜けなきやならない」

「あ……そつか」

大樹の周りを囲んでいた金網と兵士の群れには、突破口がないように見受けられた。あの厳重な警備をかいぐぐつて大樹の根元にたどり着くのは、至難の業だ。

「大樹の兵士たちは、おれが何とかするから大丈夫だ」

押しも押されもしない口調でクルージュは言い切り、フブリも心を決めた。

「私、行かなきやいけないんだ。行って、シルヘットの遺言の意味を知りたい。きっとそこに行けば私が狙われる理由もわかる気がする……ううん、それしか手がかりはないんだ」

「フブリ」

ルビーが小さく咳き、フブリはそれに目配せした。クルージュは静かにフブリを見つめ、しばらくの間静寂の中に風の音だけが響いた。

「アリカ・チュリカマタつていう……」

「え？」

突然の低い声に、フブリは戸惑った。小さく息をつくクルージュは、ちょっとした御伽噺だよ、と説明した。

「……アリカつていう、女の子がいました。彼女は、とても明るくて、村の人々の暗く凍つた心を、次々に溶かしていきました」

何の話だろう。ぼんやり耳を傾ける。

「村はいつしか明るさを取り戻し、しかし、その村を支配していた国は、それを許しませんでした」

それが、カラアと最果てのことだ、と気づいたフブリは、いつしかその物語に聞き入っていた。

「魔法の国に続く穴は、もともと森全体に颁布されていました。しかし王は、何人よりも国に近づくことのないように、老齢の大樹に入り口を封印しました」

クルージュは、静かだったがはつきりとした口調で、休むことなく続けた。

何故だか、そのとき幽霊はおとなしかった。彼女も静聴したいのだろうか、とふいに思つた。

「しかし、入り口を封印するには、その魔法を持続させるための力強い命が必要だったのです……」

「ふと、風の音がやんだ。」

「国に逆らつた少女は、次元の穴を永久に封じこめるための、大樹

の生け贋になりました。大樹となつた少女は、その苦しみと哀しみから、村を、冷たい風で包み続けました。そして、彼女を愛した男は、再び暗くなつた村に、一人取り残されました……

フブリが、口をはさむことはなかつた。何を言つていいものなのか、皆目検討もつかなかつた。

静かに、紫の頭が上がる。

「こんなことをする国に、フブリは行きたいと思うか……？」

寂しく笑うクルージュの瞳が揺らぎ、フブリは、何も答えることができなかつた。

ただ、勝手に涙があふれて、止まらなかつた。

「アリカ」

部屋に戻ると、灯りをつけることもせず、フブリはキャビネットの上に立てかけられている鏡に向かつて話しかけた。

「あなたなんでしょ？ アリカ・チュリカマタ」

身を乗り出し、鏡に鼻が届きそうなくらい顔を近づける。

「ねえ、どうして私に取り憑いたの？ クルージュに会いたかったからじゃないの？」

フブリは黙つたままの幽霊に対し、語氣を強めた。一人で鏡に話しかける姿は他人から見れば、それはとても異様な光景かもしれない。

「……そうよ」

鏡に映つた自分の口が、意思とは関係なく動く。

「あたしはアリカ・チュリカマタ。大樹の生け贋にされた哀れな村娘」

アリカは 身体はフブリなのだが 髪を搔き揚げて自嘲するようになつた。

「あたし、どうしてもあいつに言つてやりたいことがあつたの。ずっと風を起こして伝えようとしてたんだけど、あいつは……気づいてくれなかつたから」

次の瞬間、意識はフブリの手に渡る。アリカが黙つたとき、彼女に代わるように意識を前面に押し出せるのだ。意識を交代しながら会話するリズムを、フブリは段々とつかめるようになつてきた。

「あの風はあなたが起こしていたの？」

「まあね。大樹の中で、あたしの意識はずつと生きていた」

アリカは表情をくるくるとよく変える。鏡の中の少女は、顔は同じだが、仕草はフブリとまったくの別人だ。

「生きているけど口もきけないし、ただあたしにできるのは風を操ることだけだった」

毎日のように強風で村を包んでいたのは、この幽霊の少女だったのだ。

「あいつ、馬鹿なのよ……」

アリカはため息交じりに吐き捨てた。そのため息が向けられた相手は言わずとも知れている。

「いつまでもあたしが死んだことにして、あたしが死んだのはおれのせいだ、って。あいつ一人くらいなら最果てを簡単に抜け出せるのに、いつまでもここに医者として残っているのも、あたしに対する贖罪なの。要するにあたしつていう存在を免罪符にして生きているのよ。いい迷惑よね」

アリカはまた自嘲気味に笑つた。

肉体を共有している今、フブリにはアリカの気持ちが手にとるようになる。決してクルージュを責めているわけではない。彼女は、クルージュを今の状況に追いやってしまった自分に腹を立てているのだ。

「馬鹿みたいにずっと昔のこと引きずつて、カラアを憎み続けて……」

アリカの切ない想いが伝わって、フブリは眉をひそめた。

「ホント、馬鹿……」

暗い室内に、少女の乾いた声だけが重苦しく響いて、そして沈んでいった。

「あ、ルビー」

部屋を出て、階下にちょうどルビーの姿を見つけた。ルビーは腕にたらいと手ぬぐいを抱えていた。

「今からお風呂。フブリ、先に入る?」

「ううん、ルビーに譲るよ」

別に入浴のために降りて来たわけじゃないし、とフブリは微笑んだ。

「昼間は変な行動してごめんね。私、多分疲れてたんだ」

本当に、トルビーは容赦なくフブリにげんこつを当てる。フブリ

は軽く頭を押さえ、少しだけ唇を尖らせて少年を見上げた。

「それより聞いた？ カラアへ行く予定」

「ええと、明後日の早朝だよね。兵の数が普段より少なくなるっていう

カラアへ行く日程は部屋に戻る前にクルージュと話し合い、とりあえず決まった。本格的な段取りは明日の夜、クルージュの往診が終わってから再度話し合う予定だ。

「……あのさ、青木さんの話、びっくりしたよね」

浴室に向かうルビーを追いかけながら、フブリは独り言のようになに漏らした。

「生け贋に捧げられたって話？」

そう、と軽く相槌だけを打つ。どうせ言つても信じてもらえないことはわかっているため、自分の中にいるアリカの存在は黙つていることにした。

「驚きはしなかつたけど……何となく青い木の話を聞いたときに気づいたから」

「知つてたの！？」

フブリは目を丸くして詰め寄つた。

「青は魂の色なんだよ。だからもしかしたら……って思つてはいた。過去に似たような魔法を使つた人がいなかつたわけでもないし」

「魔法は、人を傷つけない。なのに、どうして」

愕然とした。そんな魔法があるなんて知らなかつた。

「ぼくらは、万物に『呼びかける』わけだけど、まれに『命令』できる人もいる。相当な経験を積んだ魔法使いでないと無理だろ？ うけど」

フブリの真剣な声色と表情に驚いたのか、ルビーは少し躊躇いがちに話した。

「過去にそういうことやつた人つて……どうなつたの？」

「死んだよ」

間髪入れずにはつきりと言われ、フブリは衝撃を受けた。しかしも

つと衝撃を受けたのは、恐らくフブリのリアクションにぎょっとしたルビーのほうである。彼女がそこまで大樹の生け贋に感情移入しているとは夢にも思つていなかつたのだろう。

「め、『命令』するつてことは、自然を支配しようとしたことと同義なんだ。手痛いしつ返しを必ず被ることになる。……だから、ああいうのは自爆覚悟の大博打魔法なんだ」

「あの、魂つて、もとに戻せないの……？」

フブリは小動物のような瞳でルビーを見上げた。少年の喉が苦しげに鳴る。

「フブリの言いたい」ともわかるけど……多分、……無理だと思う。もう魂が大樹と融合して何年にもなるんだろう？ 肉体も保存されていないうだうし、ぼくじゃ、うつん、どんな魔法使いでも、もつ……

…

「どうしても……？」

本当に申し訳なさそうにルビーは声のトーンを落としていたが、その気持ちは嬉しくとも納得はできない。実際にアリカと先ほどまで話していた立場としては、そんなに簡単に諦められる問題ではないのだ。

「フブリ……」

「ううん、『めん。あはは、ごめんね、ルビー』

ルビーのほうが自分よりも落ちこんできたので、フブリは明るく笑つてみせた。

「変なこと言つて……『めん……』

ルビーは少し間を置いて、大きくうなだれるフブリの肩にそつと手を添えた。しかしコソコソ二秒、彼女の右手がその甲をロツクオンし、直ちにひねり上げる。

「うぐあッ！？」

予想だにしないフブリの攻撃にルビーは悲痛な叫びを上げた。

「……どーせ戻れないことなんてわかつてんのよバーク」

「バーク？」

ルビーは涙目になりながら、しかしひブリの言葉に手の甲をひねられる以上の打撃を受けたようであった。

「当たり前のこと言つてんじゃねえつてのよ、ボケが。できない言う前に『ぼくがやってみせる』へりこのこと言つてみなさいよ」

「ボ……」

明らかにフブリの追撃についていけないルビーがただ口をぱくぱくさせていると、少女は最後の止めを刺す。

「あなたの器はミジンコ以下決定ね」

「みじんこ……」

「今度また下らない」とぼざいたら踏み潰してやるから、鼻を鳴らし大股で去つていくフブリ。ルビーは硬直したままその後ろ姿を見送った。

数分後、浴室をガラガラ開けて出てきたツバルが

「あーいい湯だつた！ ルビー風呂開いたぜー。……つて何風化してんのお前」

戸の前で固まるルビーを軽く叩いたが、彼に目立つ反応はなかつた。「だいじょーぶかー？ もーい？」

ツバルの声が聞こえているのかいないのか、風化したルビーの意識はただ砂のようにならざりざりと音を立てて崩れていくばかりであった。

＊＊＊

そこは、巨大な城だつた。

しかしその大きさに反し外見は決して華美なものではなく、白塗りの壁がただひたすら続く質素なものであつた。城下町を一望に見渡せる外壁のない回廊は、開放的な雰囲気を漂わせる。城主が、市民に親しみやすい城を造ろうとした意志が窺える。

城下町は、いつものように灯りの洪水であふれ、廊下からもそこが賑わっていることが見て取れる。夜が更けたとはい、まだ二十三

時を回つていない。当然である。

しかし、城の中に灯りはなかつた。

静まり返つた城内に、ゆつたりとした足音だけが響き渡る。それは高い天井に反響して、ひどく重苦しい音に変化した。

足音の主は、周囲に視線を巡らせて歩みを止めた。

どこからともなく入ってきた風が、彼の灰色の髪を揺らす。奇妙なことに、城の中には物音一つなかつた。真夜中でもないとうのに、誰一人として活動している者はいない。侍女も、兵士も、銀色の甲冑をまとつた騎士ですら、各々が寝台の中で、または床にそのままひれ伏すように倒れこんでいる。

「さて、少し……効き過ぎたかな」

灰髪の男は冷や汗をぬぐつた。彼がパチンと指を鳴らすと、その階の扉という扉が一斉に開き、そこから何枚もの毛布が飛んできた。それはもう、扉が次から次へと開いたり閉まつたりするものだから、とんでもない騒音だつた。しかし、誰一人として扉のすぐ傍に倒れていた兵士ですら、目を覚ますことはなかつた。毛布の群れは、床に横たわる彼らの体を静かに覆つた。

城壁を越え外に出て、男は口笛を一つ、空の果てまで響くように吹いた。風に乗つたその音は、男の体を包み、闇の中に彼の体を取りこんだ。風に乗り、闇に溶けこみ、雲の隙間を抜け。そう考えている間に、風が男を目的の場所へ運んでいく。それを目にする者は、まるで彼が一瞬にして消えてしまつたように見えるに違ひない。そして夜の闇は、消えた男のことなどぞ知らぬ顔で、また静寂に満ちていくのだ。

灰髪の男は、深い森に囲まれた辺鄙な村落に降り立つた。否、村とは呼べないかもしれない。そこはどこを見回しても真つ暗で、遠くにはいくつかの家屋が並んでいたが、人の住んでいる気配などなかつた。ただ、目前の廃屋で腐つた木の窓がギイ、ギイ、ともの悲しい音を上げるばかりだ。

途端、強風に思わず目をつむる。

耳元で、一定のリズムを刻む轟音が通り過ぎた。高らかに唸り声を上げるそれは、まるで彼の訪問を拒むかのように舞い、土埃を上げた。

「移動魔法はお疲れになつたでしょう」

廃屋の影から、三人の男たちが現れた。みな、闇に紛れる黒のフードを被り、背を丸めて小さくなつてはいる。灰髪の男はさして驚かず、むしろ待つてはいたように笑顔で彼らの出迎えを受け入れた。

「……お待ちしておりました。大魔法使いさま」

中央の男が、しわがれたガラガラ声を出した。灰髪の男より一回り、二回りも年を取つていそうな老人だ。彼が、握ればつぶれてしまいそうな、小さな体を折り曲げると、両脇の男も軽く頭を垂れた。老人の口は、明らかに歓迎する気など毛頭ないような態度で義務的に動いた。語尾がきつく上がつたのを、灰髪の男は聞き逃さない。彼らは下げた頭を戻す動作の最中、灰髪の男を蔑するように睨め上げた。冷たい視線の群に射抜かれても、しかし男の笑顔は一寸も動かない。

「すまなかつた、と私に言う資格はないのだろうね」

小さく呟くと、男の一人が眉をぴくりと動かした。灰髪の男と言えば、わざとなのか気づいていないのか、あつけらかんとしている。

「ここにいる『旧女王派』はこれだけなのかな？」

「それはお答えするわけにはいきますまい。貴方は今の私たちにとって……」

老人は一瞬言葉を選ぶように間を置いて、首を横に振つた。

「とても危険な存在だ」

「裏切り者、と言つてくれて構わないよ」

自嘲するように灰髪の男はこもつた笑い声を漏らした。

「オーガスターさまは……ッ！ どうしてバレッタさまを見捨ててしまわれたのですか！？」

オーガスターと呼ばれた灰髪の男は、歩み出た若い男を一瞥した。まだ少年といつてよいような相貌だ。彼は、喉の奥から絞り出したよ

うな奇声を発した。

へたをすれば今にもオーガスターに掴みかかりそうな少年を、老人が制止する。

「……行つてください。もうすぐ兵が見回りにやつてきます。貴方が何のために今更ここに来たのか、我々には理解しかねますが……彼らが待っています」

「ありがとう」

オーガスターはそれだけを残すと、廃屋の扉に手をかけた。三人の男たちは彼の後ろ姿をじつと見送り、やがて闇に隠れるようにちりぢりに散つていった。

闇の中に三つの影が消えた直後、遠くから小さな灯りが廃屋に向かって差しこんだ。重そうな甲冑を揺らしている兵士風の男が、大きく欠伸をしながら歩いてくる。彼は寝ぼけ眼で周囲を見回し、懐中電灯をかざしたが、ギイ、ギイ、と切ない声を上げる廃屋に目配せすると、また一つ大きな欠伸をして通り過ぎた。

風は容赦なく全身に体当たる。それは痛いほどの衝撃を与え、緩やかに体温を奪つていった。

扉を閉めるのも一苦労だった。力いっぱい引いて、すぐに鍵をかける。ようやく強風から解放されたオーガスターは、大きく深呼吸して彼らに微笑んだ。

先客は、一人。

「そろそろ来るだろうと思つていた。……オーガスター」

一日見た限りでは女性のように見える紫髪の男が、強張った表情で重苦しく呟いた。卓の上で手を組んだまま、顔だけを扉に向けている。オーガスターは一瞬、切なそうに目を伏せた。

「久しぶり……」

漏らすと、黙つてうつむいていた金髪の男が、隣の椅子を引いた。

「座れよ」

「ありがとう……と」

まじまじと一人の男を見つめる。

「一人とも、老けたね」

腰を落ち着け、オーガスターは呑気に笑つた。強張つた表情の男たちは、その言葉が少なからず予想外だつたようで、目をぱちくりさせた。しかし、オーガスターの口元に作られた笑みからは、嫌な素振りは微塵も感じられない。彼のこの一言で、緊張していた室内の空気は一瞬和やかなものになつた。

「お前が言つなよ。お彼らの中じゃ、お前が一番年長なのを忘れたか？」

紫髪の男がオーガスターにお茶を差し出しながら笑つた。しかし、それを受け取る彼は、顔つきだけを見れば、三人の中では、一番年若く見えた。

オーガスターは白い長衣に、やわらかな灰髪、極めつけに基本はゆつたりした動作だ。顔つきは若くとも、その動きや服装には年寄り臭いものがある。いや、もつと適切に表現するならば、彼には年長者を思わせる威厳があつた。

「さて、三年ぶりで申し訳ないんだが、今日も時間がない」
オーガスターは、お茶の味を楽しみながら、ゆっくり口を開いた。とても時間がないようには思えない動きだつた。

「抜け出して来て、国王さまに感づかれなかつたか？」
「城の人間全員を、眠らせてきた」

さらりと答えるオーガスターに、紫髪の男が吹き出した。

「さすがの私でも、眠らせておく時間には限界があるからね。だから、時間がないんだよ」

しかしにこりとしたその表情に、焦りの色は見えなかつた。

「そんな危険な真似してまで、何故ここに来た」

金髪の男が、和やかな雰囲気を打ち壊すような勢いで冷たく放つた。

「もう一度と会わねえって、言つてたよな。オーガスター」

「そうだ……確かに、そのつもりだつた」

「……」だつて危ねえ場所だ。旧女王派の奴らも命がけであんたを……

…

紫髪の男が金髪の男に目配せしたが、金髪の男はすぐに視線をそらした。

「言わせろよ、クルージュ。おれはまだ、こいつには言いたいことが山ほどあるんだ」

「いいから、その辺にしておけ。オーガスターにも言いたいことがあってここに来たんだろう。そつだろ？」「今すぐにでも殴りかかりそうな金髪の男を、クルージュが慣れた口調でたしなめ、落ち着かせる。オーガスターはクルージュに向かつて頷いた。

「お前たちが今やろうとしていることを全力で止めに来た……と言えばわかるだろ？」「オーガスター……！」

金髪の男がオーガスターを睨めつけ、下唇を噛んだ。その仕草にオーガスターはただ苦笑するだけだ。

「そう、まさかお前たちが本当に彼女を見つけるなんて……いや、もうこの話はよそうか」

オーガスターは視線を手元のカップに向けた。残り少なくなつたお茶の表面に、その寂しげな瞳が揺らいで見えた。

「旧女王派に話を聞かなければ、お前たちが最果てに来ていることを私は知らなかつただろ。私はもう旧女王派ではないはずなのにね……。彼らは、私の過去の功績に免じて恩赦を与えてくれたようだつたよ。……哀れみを感じて、私にお前たちの情報をくれた」

「それで、このタイミングでここに来たわけか……」

「そう、お前たちの計画を食い止める、好機だ」

オーガスターが一息に言い切ると、二人の男は彼を凝視したまま動かなくなつた。

「ここでお前たちの動きを封じたいが、しかし」

視線を動かすまでもなく、オーガスターにはわかっているようであつた。金髪の男はオーガスターがこの室内に入ったときから、既に帶剣を構えている。それはあまりにも自然な動作で、金髪の男がこの訪

問者を快く思つていなければ明白だった。

「……返り討ちに遭うだろうね」

オーガスターが呟いて、わずかに微笑む。

「それをわかつて、ここに来たのか？」

金髪の男が怪訝そうに眉をひそめたが、オーガスターはやはり微笑むだけだった。

「いても立つてもいられなかつた。無駄だとわかつても、私は……」

カップに映る揺らいだ瞳を、オーガスターは一気に飲み干した。
なあ、とクルージュが口を開いた。

「アリカのことを、話したんだ。そしたらあの子……すぐにでも泣きそうな顔してた」

「そうか……」

「それで、おれ、どうしたんだろうな。『カラアに君は行きたいと思つか？』つて、いつの間にか口走つてた」

その一言に、オーガスターも、金髪の男ですら目を剥いて動搖した。

「クルージュ」

「何言つてるんだお前……！　ここまで来て」

金髪の男の声には、わずかな嘲笑も混じつていた。

「大丈夫だ、わかつてるよ……」

クルージュは金髪の男に優しく笑いかけた。金髪の男はわずかな苛立ちを手元のカップに向けた。カチヤン、と大きな音が無音の室内に響き渡る。

「オーガスター、おれは今……少しだけ迷つてる」

テーブルの中央に置かれた一つきりのランプが、クルージュの顔に色濃い影を作る。

「三年前、おれたちが今と同じように旧女王派の手助けのもと、ここに集まつて話したときのことを覚えているよな？」

オーガスターは頷いた。

「あのときは、お前の思想なんかバカみたいだと思つてた。『すべ

ての人が幸福であつて欲しい』なんてバカみたいなことを口走つて
旧女王派を抜けた裏切り者……そう思つてた。でも、あの子に實際
会つて、お前の言つていたことも少しほはわかつたんだ」

「クルージュ」

オーガスターは田を見開き、口元を押された。彼にとつてそれは、と
ても意外な言葉だったようだ。

「でもな、オーガスター。おれはやつぱり許せないよ……」

クルージュは、じつと、遠くを見つめている。

「おれは……リラを、幸せにしたいとは思えないんだ……どうして
も」

クルージュは、苦虫を飲みこんだような顔で、口の端から呟いた。
静かだつた。あまりにも長い静寂が続く。

オーガスターは何も言い返さず、ただうつむいた。

「もう、帰らなければ……魔法が切れてしまう

沈痛な面持ちで、ポツリ、呟く。

「次に会つときは、本当に敵同士だ」

「ああ」

このやり取りを見て、敵対関係を想像する者がどれだけいるのだろうか。逆に、長年寄り添つてきた親友同士のイメージを思い浮かべる者のほうが、多いことだらう。しかし彼らはそれぞれが『敵である』という見方にまつたく疑問を持つていないように、額き合つた。扉を開けると、煙のようにオーガスターは消えた。風に呑みこまれるように、静かな夜の風景に溶けて消えた。後にはただ、風の音が扉を叩くばかりだつた。

しかし次の瞬間、それは現れた。

廃屋の扉の影から何かが生まれるように、そこから人間が 消え
たはずのオーガスターが突然姿を現したのだ。一人の体が、驚きにの
けぞる。

「ちよつと忘れていたことがあつたよ」

オーガスターは金髪の男の上着をじつと見つめた。

「何だよ？……「わつ！」

オーガスターが彼の肩を軽快に叩く。すると、バチリ、という何かが切れたような音とともに、光が弾けた。男は突然己を襲つた大きな衝撃に立ちすくんだ。

「お前は昔から魔法の気配にはからつきしだつたが、これは……フエアじやないからね」

訝しげに上着をまくりあげて確かめる金髪の男に、クルージュが駆け寄る。頭の上に疑問符を浮かべている金髪の男に手を振ると、今度こそオーガスターは去つた。

残された二人は、ほんと、今しがた彼の姿があつた場所を見つめた。

そこにはまだ暗闇が広がるだけ。人の声一つない寂しい村を、暗闇が彩るだけであった。

金髪の男が悔しそうに、唇を噛みしめた。その寂しく丸まつた肩をクルージュが優しく叩く。

風が小さく唸つた。

それに呼応するように、扉がギイ、ギイ、と哀しそうに鳴く。

「すべての人気が幸せに……か……」

まるで子どもの戯言のように、クルージュは吐き捨てて笑つた。

ルビーは、深夜に話し声が聞こえた気がして、目を覚ました。風の音は依然大きかつたが、その合間に小さく聞こえる人の声を、彼は確かに耳にした。

周囲を見渡せば、両隣に寝ているはずの一人の姿がないことに気づく。シーツにまだぬくもりが残つているところを見れば、彼らが今しがたどこかへ出て行つたことは明白だ。

まだ、ツバルへの疑いが消えたわけではない。

ひょうきんな男を装つてはいるが、フブリと一人きりになつた瞬間、豹変するとも限らない。そう思つていた。何者であるかはつきりしない以上、用心するに越したことはないと。

だから、ルビーは声の主がツバルであると考えた。ツバルとクルージュが、自分たちの寝静まつた時間帯をわざわざ選び、密談しているのではないか。

しかし起き上がって周囲に耳を傍立てるも、声がどこから聞こえているのかはわからない。居間を出て、玄関や浴室をそつと覗いてみるが、人の気配はなかつた。

一旦部屋に戻り、その声が、ずっと自分の耳元で聞こえていたことに気づいた。

そこで、ルビーは思い出した。

以前、フブリのピアスにかけた魔法に乗じて、ツバルの上着にも魔法をかけたことがあつた。温泉街で襲撃者から逃れた際、遠くにいても声を聞き取れる盗聴器のよつな魔法をかけた。あのときは彼がフブリと一人きりになつたとき、怪しい行動をしたらすぐわかるようになると仕掛けたのだつた。

ルビーは、耳元に全神経を集中させた。魔法をかけた上着に、呼びかけるのだ。

「……カラア……と思う……」

「……の計画を……好機……」

かすかに漏れる単語を拾つが、はつきりしたものは聞き取れなかつた。ツバルとクルージュの声、それからもう一人、聞きなれない男の声もあつた。恐らく会話をしているのは三人だ。

切れ切れに聞こえる会話に、あのとき、もっと強く魔法をかけていればよかつた、トルビーは後悔した。ずいぶん前にかけた魔法だつたため、効力が切れかかっていたのだ。

合間に、『国王』という単語が聞こえて、ルビーはどきりとした。一瞬、耳を疑う。

その瞬間、バチリ、と何かがはじけた。その音が聞こえたときには、もう遅かつた。声は、完全に聞こえなくなつていて。

ツバルが、感づいたのだろうか。

いや、彼には魔法の素質は少しも感じられなかつた。そういうもの

は、魔法使いであればすぐにわかる。

では、クルージュか……？

確かに、彼は多少の教養をつめば、簡単な魔法の使い手くらいにはなれそうだった。しかし、こちらの魔法を一瞬で消せるような、そんな高レベルな魔法を突然使えるようになるとは、考え辛い。

ルビーは、風の吹きすさぶ外を、窓越しに眺めた。

三人目の、男……。

ルビーは、その言葉を静かに呑みこんだ。

夢を見た。

幼い自分が、ベッドにしがみついて泣いている。

ああ、いつもの夢だ、とフブリはすぐにわかつた。

シルヘットは息を引き取り、ルビーが自分の名を呼びながら家に入つてくる。

ここまででは、現実と同じなのだ。幼いフブリはただ泣きじゃくり、ルビーは呆然とシルヘットの死を見つめる。

そして、フブリは何故か、逃げるよう走り出す。

何が怖いのかはわからない。ただ、逃げなくてはいけなかつた。

幼い自分も、ルビーも、シルヘットもいない、たつた一人の空間で。薄暗い森を駆け、恐怖を振り切ろうとする。

この森は、フブリに恐怖以外の何ものも与えなかつた。

森の先の光に飛びこみ、フブリは崖から転落する。光の先が崖だと知つてゐるのに、夢の中の自分は決して止まつてはくれない。深い闇に、なすすべもなく落ちていく。

フブリは、その瞬間、不思議な哀しみを感じてゐる自分に気がついた。

夢から覚めたフブリは、おもむろに着替えると、家を出た。時刻は深夜の三時を回つたばかり。誰にも気づかれないように、足音を忍ばせて階段を下りる。悪夢を見た直後なのに、不思議な爽快感があった。

アリカが大きな欠伸をした。

「こんな夜中に、どこ行くわけ？」

「青木さんに……会いに行こうと思って」

ルビーと昨夜話してから、フブリはずつと考えていた。

クルージュはカラアに行きたいか、と問うた。そこはフブリにとって最終的な目的地である。一年追い続けてきた目的を目の前にして、今更引き下がることなどできない。

しかし、クルージュとアリカをこのままにしていくのもフブリには心残りだった。ルビーには魂をもとに戻すすべはないと言われたが、どうしても自分を納得させられない。もう一度、最後にもう一度だけ、自分の目で大樹を確認しておきたかった。見たところで何ができるわけでもないのだ。そんなことはわかつていて。ただ、諦めるのはその後にしたい。そう思った。

あのさあ、とアリカが間の抜けた声を出した。

「ちよつ……静かにしてよ。誰かに見つかったら……」

フブリは自分の口を慌てて塞いだ。夕方でもあれほどの兵がいた村である。深夜とはいえ、見回っている兵士がいないとは限らない。兵士が通るため道は整備されており歩きやすいのだが、その分彼らに姿を見咎められる可能性も高いのだ。

「大丈夫。あたしが何年ここにいると思つてんのよ。どの時間にどの兵士がどこを動き回つてるかくらい、熟知してるわ」

「それならいいんだけど……。で、何？」

フブリはほつと胸を撫で下ろした。アリカがいる限り、兵士に見つ

かる心配はなさそうだ。

「クルージュって、ぶっちゃけどう思つ？」

「は？」

唐突に、しかもとんでもなく場違いな質問を投げかけられた。

「だから、クルージュをどう思つ？」

しかしアリカはフブリの動搖などお構いなしだ。

「……えーと、女装趣味の医者」

フブリはしばらく悩んで、ほんやり思い起こされるクルージュの特徴を述べてみた。ところがアリカはその答えに納得がいかないらしく「そういうことじゃなくて、好きか嫌いかと問つていいのよ、私は！『元カノとして！』

いきなり怒り出した。

「は！？ な……何で私が！？ クルージュを好きにならなきやならないの！？」

フブリは思わず大声を出してしまい、それから慌てて周囲を見渡した。だつてさあ、とアリカは鼻を鳴らした。

「あいつ、あんなんで結構イイ面してるじゃない？ 下はスカート

でもさ、顔も中身も悪くないし……」

だからといって、元彼女としてクルージュの印象を聞かれても返答に困ると言つものだ。

「ちょ、私、まだクルージュに会つて数日しか経つてないんだよ？」

そ、そんな目でクルージュを見れるはずないじゃない！

「そう？ あたしとクルージュは一目ぼれだつたけど」

「あ、そう……」

単なるのろけだったようだ。

「あたし十四のときに初めてクルージュに会つたのね。もう七年になるかな」

呆れるフブリに構わず、アリカは話しあじめた。

「実はあたし育ての親に身売りに出されて、どうしようもなく森の中をまよつてたらここにたどりついたの」

その当時を懐かしがつてゐるのか、アリカはどこか楽しそうだつた。

小石を蹴りながら軽快な足並みで通りを渡る。

「クルージュはまだ医者じゃなくて、何でも屋みたいなことやつてたわね。あの格好だからさ、笑つたわねー当時は。聞けばカラア出身なのに最果てにいる変わり者だつて言つて、女装趣味なのに剣士だし」

フブリは黙つて彼女の話に耳を傾けた。

「あ、ごめんね。下らないことしゃべつて」

アリカは少しだけ申し訳なさそうに頭を搔いた。

「ここつて若い女の子いなかつたからさ、フブリと話せてすごい嬉しいの。こつして人間の足で歩けるのもすごい新鮮なのよ。だつて七年も木の一部だつたわけだからさ」

木の一部、という言い回しが切なかつた。彼女の気持ちを本当に理解することはできないけれど、それが若い少女にとつてどれだけ辛いことなのか、想像に難くない。

「……アリカ。失礼だけど……あなたの肉体つて、やつぱりもう……」

…

アリカは何も言わなかつた。けれど、答えがなかつたことでフブリは彼女の気持ちを看取した。

「ごめん、変なこと聞いて」

「フブリの言いたいことわかるわよ。あたしが大樹から解放されても人間に戻れたらいいなー、とか思つてるでしょ」

「うん……」

ふふ、とアリカは声に出して笑つた。

「ありがと。その気持ちだけで充分よ」

胸が痛む。たとえ本人が本氣でそう思つていても、フブリはどうしても納得できなかつた。

「でも、アリカ」

フブリは立ち止まつた。

「クルージュに気づいてもらいたくて風を起こしてゐたつて言つて

たよね？ 言いたいことがあるつて……」「…………

黙りこんでしまったアリカに、フブリは嘆息した。彼女がわざとだんまりを決めこんだと思ったのだ。

「アリカ」

「…………」「…………

「アリカつてば」

少し語氣を強める。すると、蚊の鳴くような小さな声が、己の唇からわずかに漏れた。

「…………も…………」「…………も…………

「え？」

「…………フブリ…………あたし…………やば…………かも…………」

「…………アリカ？」

その様子がおかしいことに気づいたフブリは、何度も彼女に呼びかけた。しかし、そう感じたときにはもう、自分の言葉以外何も出でこなくなっていた。

冷や汗が頬を伝う。

「アリカ！」

轟音とともに、突然風が砂埃を上げて舞つた。まるでアリカを連れ去っていくかのよう、遠くへ舞つて消えていく。

「アリカ？ アリカ…………つ！」

フブリは、砂埃を呆然と立ち尽くして眺めていた。

何があつたというのだろうか。

つい数分前までは欠伸をするほど余裕のあつたアリカが、突然苦しんでいるような声を出し、消えた。そう、消えたのだ。まさか、これが成仏したといつことなのだろうか。しかし、このように何の前触れもなく、消えてしまうものなのだろうか。

「違う…………。アリカは、きっと」

そこにいる。フブリは、根拠もないのにそれがわかつた。

大樹だ。

風はまだ静かに吹いている。確かに彼女の声だ。彼女の命は、まだあそこで生きている。それがわかる。

優しい風が、走り出すフブリの背中を押した。

しかしアリカといつナビゲートを失った今では、兵士に見つかる危険性と隣り合わせの状態である。フブリは、クルージュのフードを深く被り、細心の注意を払って歩いた。あと少しで大樹が見える、というところまで来たとき、若い兵士にすれ違った。慌てて民家の隙間に隠れるが、彼はフブリの影をとらえたようだつた。まっすぐ近づいてくる足音に、フブリは身を固くした。兵士が、暗闇にカンテラをかざす。

しかし、そこに人影はなかつた。

遠ざかる足音に、フブリは安堵した。しかし、背後で自分を抱えたまま物陰に隠れる金髪の男には、言葉も出なかつた。

「一人で外に出たら危ないって、クルージュは言つたはずだよな？」

口調はいつも通りだが、そこに笑顔はなかつた。フブリはうつむいたが、すぐに思い直し、真剣な面持ちでツバルに詰め寄る。

「青木さんに会いに行きたいの！ 私、どうしても納得いかなくて、もう一度確認したいことが……！」

勢いを増すフブリは、ツバルの手によつて口を塞がれた。驚いていふと、ツバルはからからと笑つてみせた。

「……悩むのはいいことだ。若いうちは、悩むのが一番！ ジヤ、カラアに出立する前に、青木さん見に行つてみつか！」

途端に表情を明るくするフブリに、ただし、とツバルがつけ加える。「これからは、こんな危ないことするんじゃねえぞ。何か危険なことするときは、まずおれに相談すること」

頭に軽くげんこつを置かれ、フブリは、たまらず笑顔をこぼした。

「ごめん。……と、ありがと、ツバル」

二人は、真夜中の村を慎重に進んだ。さすがに、深夜は見回りが少なくなるようで、そこから大樹までは、誰一人会うことはなかつた。

金網近くにはたくさんの兵士がいるため、その上にある丘陵からしかそれを見る事はできない。

大樹は、昼間とまったく変わらぬまま、美しく立っていた。枝の端々から神秘的な光が漏れる。暗い村の中で、そこだけが昼のようになるかつた。

か細い女性の声が聞こえた気がして、フブリは辺りを見渡す。しかし周囲にはツバル以外、誰も見当たらなかつた。

それがアリカ自身の声だとフブリには即座にわかつた。

「アリカ！ アリカでしょ！？」

「フブリ？」

突然大樹に呼びかけはじめたフブリを、ツバルが慌てて制す。あまり大声を出しては兵士たちに気づかれてしまつ危険性があるからだ。

「アリ…………」

身を乗り出したフブリをツバルが抱きとめると、少女はうつむいたまま、ぴくりとも動かなくなつた。

「フブリ、どうした？ おい…………」

ツバルが心配そうに覗きこもうとする

「……ふはあッ！ あ びっくりした！」

ゴン、という音とともに、勢いよく上がるフブリの頭がツバルの顎に命中した。

「消えたかと思った！ どうしたの、一体！」

すぐ傍で顎を押されたままうくまるツバルには目もくれず、フブリは自身に向かつて話しかけた。アリカが身体の中に戻ってきたのだ。

「あたしにもよくわからないのよ。何かに引っ張られるような感じになつて、段々とフブリの声が遠くなつて、気づいたらここに……」

理由はお互いわからないが、ともかくアリカは成仏したわけではなかつたのだ。安堵すると同時に、フブリはある事実に気づいてはつとする。

「つ、ツバル。あの、少しだけ一人してくれる？ あ、別に兵士

の中に突つこんだりとか、危険なことはしないから

他人から見れば、フブリとアリカの会話は単なる危ない独り言にしか見えない。幽靈に話していると言つて、ツバルにならもしかしたら信じてもらえるかもしれないが、今更真剣に説明する気にはならなかつた。

ツバルは顎を押さえながら小さく了解、とだけ呴いて後退した。

「……で、一体何が起こつたのかな」

ツバルが遠ざかつたのを確認して、フブリはひとりごつ。

「精神が長く離れていたせいかもしれないわ……ま、でも今回の一件で学ぶことはあつたわね」

アリカは大きくため息をついて、それから苦笑した。

「あたし、もう青木さんと一心同体なんだわ、やっぱ」

それは、何かを諦めるような物言いだつた。大事にしていたものがもう修復できないくらい壊れて、それを心の底から受け入れた人間の呴きだつた。

「アリカ」

「ちょっとだけ、ちょっとだけだけだけど……人間の女の子に戻れて、嬉しかつたな」

ぽつりぽつりかすれる声で、少女は呴いた。

「何言つてるんだよ」

フブリは、思わず下唇を噛みしめた。

「やだ、泣かないでよ、フブリ」

下唇を噛んだ反動か、フブリの相貌には涙が溜まつていた。

「違うよ、これは、アリカでしょ？」

強がつて瞼をこするが、それは多分、一人分の涙だと思う。

「伝えてほしいの、フブリ、あなたに」

「え……」

まつすぐ大樹を見据える。風が、身体の隙間を通りて力強く唸つた。

「多分、あたしがこうして意識を外に出していく時間は、もう短い。だから、クルージュに、伝えてほしいの」

声は自分の身体から発せられているはずなのに、不思議にもすぐ傍にアリカという少女が実体を持つて現れたような錯覚に陥った。

流れる黒髪に白のワンピースを着た少女が、そこにいた。アリカは、微笑みながらフブリに話しかけた。

「じ、自分で伝えなきや駄目でしょ……！ クルージュだつて、ずっとアリカのことを想い続けているんだよ！？」

心の底から叫ぶも、目の前の少女はただ微笑むだけだ。

「あたしがさ、フブリの体を借りて話したら、あいつ絶対生半可な希望を抱いちゃうもの。……あたしが死んだって事実を、あいつはいつまで経つても受け入れられないわ」

「でも……」

「あのね、あたしが生け贋になったときの話を聞いて、フブリ」風が大樹を揺らして、光の粒子を撒き散らした。その光の粒々がアリカの体に絡みつき、まるで意思を持っているかのように点滅した。少女は光の中で微笑んだ。

フブリは口を出そうとして、やめた。アリカの声はあまりにも真剣で、この話が彼女にとつてとても大事なものであるということがわかつたからだ。

「はじまりは『村人が協力して暴動を起こし、最果てから逃亡する計画を立てている』という噂だった」

咳くアリカの瞳は、まっすぐフブリを見据えていた。今は暗くなってしまったこの村に、噂が流れるほど活気があつたとはとても信じられない。アリカが村の人々の心を溶かし、彼らに笑顔をもたらした、というクルージュの話は嘘ではなかつたのだ。

「ずっとそんな噂が流れてたのよ。そしてあの夜、噂はついに現実になつた。誰かが兵に掴みかかった。それは些細な口喧嘩で……でも、みんな、もう怒りを抑えることなんてできなかつた」

アリカは小さく首を横に振つた。

「口喧嘩はいつしか武器の打ち合いとなり、ひとり、また一人、倒れていった。それでも、村たちは立ち向かった。彼らを突き動

かしたのはたつた一つ、暗い復讐の念だけ……」

恐らく、当時のそれは血がにじむような惨憺たる状況であったのだろう。その苦しみは当事者たちにしかわからない。瞳に暗い影を落とす少女を、フブリは哀れむことしかできなかつた。

「噂のままで終わればよかつた。けれど事態は最悪の結果で幕を閉じるの」

アリカは目を伏せて、ゆっくり瞬きをした。

「村人たちは、全員暴徒とみなされ捕らえられた。多くの犠牲を払つた暴動は……完全な村人の敗北に終わつたのよ……」

フブリは思わず顔を歪めた。目の前のアリカも、もう笑つてはいない。

「カラアはね、こう言つたそつよ。『この暴動を計画した代表者は名乗り出ろ』と」

けれどアリカは、休むことなく続けた。

「そんなのいるわけがないわ。だつてそれは、ただの噂だつたんだもの。現実は、ただ誰かががむしやらに兵に立ち向かい……ただ誰かが剣を抜いただけ。でも最果てとしては、カラアへ『暴徒扇動の罪人を罰した』っていう戦果を挙げたかつた。……たとえその暴動が、先導者のいない突発的な事故だつたとしても……。それで最果ての兵士が下した結論は、『村人を扇動した娘を見せしめに殺す』だつたというわけ」

「ひどい……」

身につまされる思いを感じ、思わず口の端から漏らした。アリカにとつて、他人の同情ほど無意味なものはないに違いない。だが、話を聞くことしかできない自分に、彼女に同情する以外の何ができるというのだろう。フブリにはそれがわからなかつた。

「別に罪人は誰でもよかつたの。ただ、村で最も若い、それも女が生け贋には最適だつた。そう、もう一度と村人が馬鹿な考えを起さないようにするために」

改めて、カラアの狡猾さを知つた気がした。幻滅したというよりは、

彼女の話すカラアが、もはや理想のカラアとかけ離れた別の国のようにさえ思えてならない。

「最初は大樹に魔法をかけて、入り口を封じてたらしいわ。でもそれもさすがに限界があった。それを半永久的に封じるためには、強い魂が必要だつたの。だから……ね、村人の生きる意欲を失わせ、大樹の贊も手に入る。まさに一石二鳥つてわけよ」

アリカは一呼吸置いて、フブリに近づいた。朱色の瞳に間近で射抜かれ、どきりとする。

「暴動のひきがねになつた、最初に兵に掴みかかつた若い男　それが、クルージュだつたの」

耳元に囁かれる事実はあまりにも衝撃的で、フブリは我が耳を疑つた。寂しげに笑うアリカの笑顔は、クルージュのそれとまったく同じで、胸が苦しくなる。

「だから、クルージュは今も悔やんでる。あたしが自分のせいで死んだつて、アリカが大樹の中で苦しんでるのにおれだけ幸せになるなんてできない、つて」

頬を伝う熱い感触に気がついた。いつからだろう、涙があふれてとまらない。

それは自分の意思ではなかつた。もう一つの心が、自分の身体を媒体にして流れこんでくる。アリカの悲痛な想いが痛いくらいわかつて、フブリは涙をぬぐうことさえできなかつた。

「ごめんね、身体貸してくれて、ありがとね」

目の前にいた黒髪の少女は、もついたかった。光の粒子が背景の色に溶け、消えていく。

「アリカ……」

心の中に、アリカの声が反響して痛い。

「クルージュに……伝えて……おね、がい……」

耳元で聞こえていた声が遠くなつていいく。少女の願いは、喉の奥から絞り出したようにか細くなり、そして風の音とともに消えていった。

「アリカ！？」

胸を押されて問いかけるも、応答はない。本当にひび、彼女は自分の体から離れてしまったのだ。

「アリカ！？ ねえ、アリカ！ アリカ！」
「フブリ？」

ツバルは、突然のフブリの大声に驚いたようだつた。そんなツバルの様子に、フブリもまた、驚く。

「……聞こえなかつたの？ ツバル。今までここに……」
何が、と聞き返すツバルを、まじまじと見つめた。金網を囲む兵士たちを見ても、何も変わっていない。黒髪の少女は、幻だつたのだろうか。確かに彼女は目の前に現れ、つい先ほどまで自分と会話していたと思っていた。

見下ろす大樹は、ただ静かに風に揺れ、淡い光を漏らし続けるばかりであった。

＊＊＊

「せーのツ！」

クルージュが浴室から戸を開け放つた瞬間、彼とルビーは同時にフライパンを振り下ろした。

金属の塊はターゲットの脳天に命中し、男は悲鳴を上げる間もなく崩れ落ちた。無遠慮に家の中を物色していた兵士の一人である。

「……まさか、ぼくらの存在がばれるなんて思つてもみませんでした。しかもいきなり家宅捜索つて」

ルビーは頭の鍋を被りなおした。

「最近家の中が騒がしかつたからな……」

クルージュのぼやきに、ルビーは多少なりともここ数日の生活を後悔した。よくよく考えれば一人住まいのクルージュの家で話し声（というより叫び声）が頻繁に聞こえたら、それは明らかに怪しい。

「自業自得ですね……つてうるさいな、もう…」

クルージュの黒袍が所構わぬ飛んで、背後から迫ってきた兵士の気を逸らせた。魔法で人を傷つけることはできないものの、陽動することができた。

「おみ」と…

クルージュが緊張感もなく拍手した。こうこうこうはツバルに似ている、とルビーは思う。

兵士たちが侵入してから一人は後退を続け、最終的に奥間の浴室を拠点に動いている。何しろ敵の人数が半端でなく、真正面から立ち向かうには無理があった。そのため何とか兵士をおびきよせ個々に潰し、現在居間直前のキッチンに隠れて体勢を整えている。

「このままじゃ、キリがないですよ！」クルージュさん

「わかつて。一気にカタをつけたいところだな。ルビー、あれ全部動かせるか？ フォローはおれがやるから任せろ」

クルージュが指差した先には、棚に綺麗に陳列された薬瓶の群があつた。

「いいんですか？ 貴重な薬なんじゃ……」

「どうせこうなつたらおれも村にはいられないし、いいさ

「じゃありますよ！」

ルビーが勢いよく立ち上がると、それを見つけた兵士たちが一斉に向かってきた。同時に、薬瓶が次々に空を飛んでいく。しかしすべての小瓶を一度に動かすことはできないため、ルビーは一点集中で数人の兵士の周囲にそれを飛ばした。

小瓶の追撃をうまく通り抜けた兵士が、無防備なルビーに襲い掛かる。それを見計らったようにルビーの脇からクルージュが勢いよく飛び出す。

兵士たちは恐らく、それがよく知る村医者だと頭で判別する前に意識を失つた。一人、二人、三人、次々に倒れていく。あまりの速さに、ルビーはそれを目で追うことすらできなかつた。それだけ、クルージュの剣戟は素早いものだつた。ツバルと対等 いや、それ以上だ。

「本当に剣士だつたんですね……」

ルビーはぽかんと口を開けて、折り重なるように倒れた兵士の山を見下ろした。

「もう数年握つてなかつたがな」

苦笑しながら、クルージュは古い剣を鞘に戻した。

「とりあえず、ツバルとフブリを連れて来るんだ。こうなつた以上、騒ぎが大きくなる前にカラアへ向かつたほうがいい。予定より早いが、仕方ないだろう」

「あ、そうですね！」

ルビーは返事をしながら階段を駆け上った。

兵士たちの突然の侵入に気づき応戦したのはクルージュとルビーだつたが、そのとき居間にツバルはいなかつた。そのため、彼は二階のフブリを守りにいったのだろうと安易に想像がついた。

しかし、扉を開けて、ルビーは愕然とした。

「おい、ルビー、早く来い！ 第一波が来るかもしれないぞ」

ルビーは恐る恐る階下のクルージュに振り向き、凍つたような表情のまま呟いた。

「フブリが……いません……」

それと同時に、新たな兵が数人、玄関を無遠慮に突き破つて侵入して來た。

＊＊＊

アリカの声が聞こえなくなつてから、風は強さを増したように思えた。

伝えてくれと言つている。フブリにはそれがわかつた。

「ツバル、家に帰ろう」

「おう、満足したか」

頷くと、ツバルは辺りを見回して、意味ありげに口元に人差し指を立てて見せた。

「ばれちゃつた……」

彼の言葉の意味を理解するまで、そう時間はかからなかつた。背後から、数人の兵士がこちらに向かつて走つてくるのが見える。彼らの目標は明らかに自分たちに向けられていた。

「ツバル！」

「大丈夫、フブリはこの美青年剣士さまが守つてやるからなー」「ツバルはフブリを庇うように前に出て、帶剣を構えた。

しかし兵士たちの動きは途中で止まつた。フブリたちのいる丘陵の頂上に着く前に、突然ばたばたと倒れはじめたのだ。

フブリとツバルが目を見合わせると

「フブリ！」

ツバルのものではない声が聞こえた。

ルビーが、必死の形相で駆けてくる。後ろには、剣を鞘に収めるクルージュの姿も見えた。

「ルビー！」

駆けつけたルビーは、感極まって、フブリを抱きしめた。

「な、何でこうこう危ないことするんだよ！ 一人で出歩くなんて

……」

フブリは、何が何だか理解できないま、彼の背に手を回した。なだめるようにさする。普段冷静なルビーが、このように取り乱すのは珍しい。

「ご、ごめん……」

彼にいらぬ心配をさせてしまった自分を恥じ、フブリは向こう見ずな行動を反省した。

「そこから先は、後でゆつくりな」

フブリたちの間にクルージュが割つて入る。

「グッドタイミングだ」

彼の言葉に反応したかのように、それは起こつた。金網を囲つていた兵たちが、見張り交代で入れ替わりはじめたのだ。フブリは、いつの間にか夜が明けかけていたことに気がついた。

「いいか。あと少ししたら、見張りが薄くなる。その混乱に乘じて、あんたらは次元の穴へ向かうんだ」

混乱に乘じるとは、どういう意味だろ？ フブリがそれを問う間もなく、クルージュは早口で続けた。

「入り口は大樹の根元にある。あれだ、わかるか？」

指差すほうを細目をして見ると、根の間に確かに小さな穴のようなものが見えた。人一人が通り抜けられるかどうかの大きさで、細かい根が周囲をびっしり覆いつくしているため、その奥底は見えない。「中の地下通路を通って細い道に出たら、一箇所に固まってじつとしているんだ。あとは、勝手にカラアへ転送されるのを待てばいい。手でもつないで一緒に待つんだぞ。でないと、まったく別のところに転送されるから」

言いながら、何かを握り締めたクルージュに、フブリはふと目を留めた。それが蒂剣だと気づいたときには、もう遅かった。

「ツバル。あとは頼んだ」

言つや否や、クルージュの体が目の前から消えた。いや、彼は丘陵を滑り落ちたのだ。

兵たちが待つ、大樹のふもとへ、真正面から。

「クルージュ！？」

まさか、と身を乗り出すフブリを、ツバルが止めた。

「お前らは、こっちだ」

抗議するフブリの背を、ルビーが押す。見ればルビーも、沈痛な面持ちだった。ここに来る前に、こうすることを彼から聞いていたのだろうか。

何故、今まで考えなかつたのだろう。

自分たちがカラアへ行くということは、あの兵士の群れを突破しなくてはならない。おれが何とかする、と言つていたクルージュの姿が思い起こされて、フブリは目頭が熱くなつた。

「大丈夫だ。あいつなら……」

青ざめるフブリに、ツバルが優しく笑いかけた。

しかしクルージュは、身一つで大群に突つこんで行つたのだ。剣の腕は確かなようだが、やはり多勢に無勢である。周りを囲まれ、身を守るのが精一杯のようだつた。

もし逃げられたとしても、もうこの村にいられるわけがない。

カラアを知つた者は、外に出れば殺される。王は、狡猾で恐ろしい人間だ、とクルージュは言つた。クルージュは、追われることを覚悟の上で、自分たちをカラアへ導いてくれた。死にに、行つたようなものなのだ。

三人は、丘陵を裏から静かに下ると、兵たちの視線がクルージュに集中しているのを確認して、金網をぐぐつた。しかしひブリは、ツバルに促されても、大樹の根に近寄ろうとはしなかつた。焦れて腕を掴むツバルを振り切り、元来た道を走り出す。

「フブリ！」

ルビーの呼ぶ声も、もう聞こえなかつた。

「クル
ジユ！」

腹の底から、彼を呼んだ。

聞こえているだらうか。聞こえて欲しい。伝えなくてはならない。

「アリカは、カラアを恨んでなんかいなつて！ あなたの傍で、あなたを見守れて、嬉しいつて！」

力の限り、叫んだ。

風の音が、耳元を通り過ぎる。唸り声を上げるそれは、とても哀しく、しかしとても優しい流れを帯びていた。

「だから、恨まないで！ 風に、耳を澄まして！ 彼女がまどつているのは、決して憎しみの風なんかじゃない！」

クルージュがフブリの声に反応したと同時に、兵もその存在に気づいた。

金網に向かっていく兵たちを、クルージュが押さえこみ、彼の背に、一振りの剣が振り下ろされた瞬間

風が舞つた。

かつてないほどの強風に、兵たちは次々に座りこんだ。

人が立つていられないほどの強風だった。しかし不思議と、フブリの周囲だけは穏やかな風で包まれた。フブリだけではない。ルビーも、ツバルも、そして、クルージュも。

大樹が、体全体を、守り抱いているような感覚だった。

「アリカ……？」

クルージュが、まるで夢を見ているような声を出した。
兵たちが次々に吹き飛ばされる中、ツバルは、突然はつとしたように、フブリに駆け寄った。

「今だ。行くぞ」

フブリは、大樹を見上げて動かないクルージュから、目を離さなかつた。じつとそれを見つめたまま、ツバルに引きずられる。
一瞬、クルージュが、フブリを振り向いた。穏やかに微笑んでいる。
遠ざかる彼の唇は、『ありがとう』と動いているように見えた。
風も、微笑んでいるように温かかった。

名残惜しそうに自分を見ていたフブリが穴にもぐつたのを確認して、
クルージュは大樹にそっと手を添えた。風は、依然強く、兵たちに吹きつけていた。

触れる幹から、アリカの声が聞こえる気がする。頬を撫でる風が、

やわらかい。

少女が、美しい黒髪をなびかせて笑っている。

そんな幻を見た気がした。

その少女の笑顔があまりにも幸せそうだから、涙に歪む顔で必死に笑顔を作った。

クルージュは、アリカとともに、願つた。

「……フブリ……どうか無事で……」

祈るように、呟いた。

大樹の根の下は、地下とは思えないほど広く、明るかつた。広い通路の至るところに、魔法の火が灯っていたのである。浮かぶ火の玉に、フブリは感嘆の声を漏らした。さすが、魔法の国と言つだけはある。

「クルージュ、大丈夫かな……」

フブリが、ふと口の端から漏らす。

アリカが助けてくれたとはいえ、その後どうなったのかはわからない。ここに兵士が追いかけてこないとこを見ると、まだ彼らは風に足止めされているのだろうか。

「大丈夫だ。フブリのおかげで、あいつも……」

感謝するように咳き、ツバルは笑つた。最後のほうは、濁されたようで聞こえなかつた。

フブリはツバルに真正面から向き直つた。

「ツバルに言つておきたいことがあるんだけど」「

「ん？ 何？」

満面の笑みには少しばかり言いづらかつたが、心を決めた。今言わなければ、ずるずると言えないままになつてしまつ。

「ここまで、ついてきてもらつて嬉しかつた。でも……、ツバルとはここでお別れしたほうがいいと思う」

ツバルが、目をぱちくりさせた。

実は、これは今になつて考えたことではない。熟考した上での結論だつた。貴重な戦力である彼を失うことは痛いし、それ以上にフブリは、せつかくの楽しかつた三人旅の終わりが辛かつた。しかし、自分の都合で彼を振り回すことが嫌になつていても事実であつた。もうこれ以上彼を巻きこむことはできないと思う。

「護衛してもらつているけど、私たちはお金もないし……。だから、これ以上はつき合わなくていいんだよ。私たちは……」

フブリが言い終える前に、ツバルの手が頭を掴んだ。

頭を無遠慮に撫でる大きな手に、フブリは動搖の色を隠せなかつた。

「ばか。んなこと気にしなくていいんだよ」

いつも以上に、優しい笑い声だつた。

「おれは、好きでフブリたちを守つてんの。楽しいからいいの。おれの勝手なの」

子どものような理屈に、フブリは思わず笑つてしまつた。彼は、せつかくだからカラアも觀光しなくちゃな、とつけ加えた。外觀が変わらないため、入り口からどれほど歩いたのかはわからない。見上げれば天井は、先ほどより少し低くなつてゐるような気がする。いつの間にか、深いところまで足を進めていたのだろうか。「それより……、ここで待つていれば、勝手にカラアに行けるんですね」

しばらく黙つていたルビーが、口を開いた。

「ん？　ああ。じつとすれば……」

「では、じつとしていてください」

早かつたため、フブリは彼が何と言つたのか、はつきり聞きとれなかつた。ただ、ルビーの手が唇に合わせて少しだけ動いたのはわかつた。

「……ルビー……。これは、何の冗談だ……？」

歩くツバルの手足が突然止まつた。その声は、笑つていなかつた。ツバルの体は石のようになり、動かなくなつた。息つく間もなく驚くフブリを、ルビーが強引に掴み引き寄せる。

「魔法は、人を傷つけないんじやなかつたか？」

「ぼくには、あなたを傷つける意思はありませんから」

ツバルの影に魔法がかけられていることに、フブリはすぐに気づいた。影を縫いとめて、動けないようとしたのだ。

「ルビー、何してるの！」

「フブリは黙つてて」

いつもより強い語氣に、フブリはびくり、と身を痙攣させた。声が

大きいわけではなかつたが、そこには怖いくらいの威圧が含まれていた。

「……以前、温泉街でツバルさん、フブリと一人きりになつたときがありましたよね」

フブリには、何故ルビーが今、このよつた話をするのか、少しも見当がつかなかつた。

「フブリと一人きりになつた後、あなたは襲撃者のアルバイトを雇つた、魔法使いと話しましたね？……ぼくは、あなたの会話を聞いていました。奇妙なことに、魔法使いはあなたのこと知つていて、あなたをおびき出すために宿を襲わせたと言つた」

あのとき、ルビーがツバルの上着に魔法をかけたことをフブリは黙認した。しかし、まさか今、それが問題になるとは思つてもみなかつた。

「ルビー、あれは……！」

「逃がしたんじゃないですか？　あなたは、フブリを狙つている男たちの、仲間だつたんじゃないですか？」

何か口に出す前に、ルビーの早い言葉がそれを遮つた。フブリは、ルビーが何を言つているのか理解できなかつた。とてもじゃないが、状況に思考が追いつかない。

「それだけじゃない。昨夜、一体どこへ行つていたんですか？　あのクルージュさんとこそこそ密談を」

「ルビー、やめてよ！」

フブリがついに悲痛な声を上げた。

「……魔法は時間が経てば、勝手に切れます。行こう、フブリ」
フブリは呆然と、彼のなすがままに、半ば引きずられるよつと歩いた。

「待て！」

背後から、ツバルの叫び声が聞こえた。地下道に反響して、耳の奥に響き続ける。

「ツバルさんは、襲撃者たちの仲間だつたんだ。こんなところ、早

く出よ!」「う

こんなときに、彼は何を言つているのだ!。目的地だつたカラアは、目前に迫つてゐるといふのに。

フブリは、力の入らない体をルビーに任せ、ほんやりと足を動かした。

「カラアなんて、ないんだよ」

その一言に、フブリは総毛立つた。背筋が寒くなるのを感じ、同時に止まつてゐた思考が動き出す。

突然足の止まつたフブリを、よつやくルビーは振り返つた。

「ツバルは、ツバルは、そんな人じゃないよ」

ようやく、それだけが言葉になつた。喉が詰まつて震え、うまく声にならない。ルビーの顔が段々と不機嫌なものになつていいくのが見て取れた。

「ぼくは聞いたんだ。昨夜、あの人はクルージュさんともう一人誰かと、おかしな話をしていたんだよ」

ルビーは、フブリの肩を掴むと、言い聞かせるように顔を寄せた。

「そんなの理由にならない!」

フブリは声を荒げた。

今まで自分を助けてくれたツバルが、敵だとは思いたくなかった。「ツバルにだつて何か事情があつたのかもしれないじゃない。あ、あんなことしなくたつて……！」

「フブリは、ツバルさんが好きなんだろ!」

かたくなに否定するフブリに苛立ちを覚えたのか、ルビーは遂に大声を出した。

突然のことにつ、フブリは目を白黒させた。首を横に振るも、顔は勝手に赤くなる。

「な……なに言つて……!? ルビー、ちょっと変だよ！ どうしちゃつたの……！？」

「いい加減、認めろよ！」

怒鳴り声が、地下中に響き渡つた。反論する隙を与えない迫力に氣

圧され、フブリはたじろいだ。

「カラアなんて、あるわけないんだ！ あんなの、夢見た人たちが
でっち上げた、文字通りの『幻』なんだよ！」

本当に、彼はどうかしてしまったのではないだろうか。

クルージュの話は、どう考へても作り話には思えない。今まで一緒に旅してきた理由さえも、彼は否定しようというのだ。

「でも……でも、この村だって、カラアの管轄下としか考えられない。カラアはあるんだよ。クルージュだって命を張つて、私たちを送り出してくれたじゃない！」

涙が出しそうだった。

自分たちを送り出してくれた彼らの、存在をけなすルビーに、心が痛んだ。

「それは……」

一瞬喉を詰まらせたルビーを、フブリは見逃さなかつた。

「ルビー、ねえ目を覚ましてよ！ 私たち、ツバルに助けられてここまで来れたんだよ。カラアは……」

「フブリは、カラアに行っちゃ駄目だ！」

掴まれた肩を搖さぶられた。鈍い痛みを感じて、顔を歪める。肩に食いこむその力は、高まる感情に合わせて強くなつてゐるようであつた。

「わ、私、ツバルを助けに行く」

いつの間にか声は震え、涙が出ていた。

肩の手を強引に剥がして、ツバルのもとへ向かつた。

「フブリ！」

振り向くことなく、走つた。

今は、ルビーが怖かつた。

何が彼をここまで追い詰めたのかはわからない。フブリはとにかく、今すぐその場から立ち去りたかった。

すると、何かにぶつかり、フブリはよろめいた。ぶつかったものを見上げて驚く。

「ツバル！？」

彼が、歩いていたのだ。

「軽い魔法だつたみたいだ」

ツバルは笑うが、フブリはもう、自分が何をすべきなのかわからなかつた。

自分のもと来た方向から、早い足音が聞こえた。少年の、自分を呼ぶ声も。

しかしフブリは、立ちすくんだままだった。

ツバルの腕にしがみつき、怖いものでも見たよつて、立ち戻りしている。

頭が、回らなかつた。

必死に思考を巡らす。落ち着け、と反芻させる。

ルビーは、自分を心配してくれていただけだったのかもれない。

そんな都合のいい解釈が、今更浮かんだ。

そうだ、と改め、ルビーのもとへ駆け寄りつとしたとき

体が、浮いた。

ルビーが、自分の名を呼んでいる。

しかし、もう彼は追いつけないくらい、遠くにいた。伸ばす手も、届かない。

フブリは、ツバルとともに、次元の穴に呑みこまれ

「ルビー　！！」

叫ぶ声は空しく、狭い通路に反響して、やがて、消えた。

リラ・コスモレドがどんなに弱い人間であるかを、私はよく知っている。

精神的な面が脆弱で、本当は声を荒げたり激しく動き回ったりすることに慣れていない。また、人の上に立つ器でもない。それは、リラ自身も知っていることだ。

思い起こしてみれば、私が小さかつた頃、彼女と話した記憶はありません。

私は生まれたときから大人ばかりの環境で育つたから、私の身近にいた同年代の子どもといえば彼女だけであった。

それなのに会話が少なかつたのは、彼女が人づき合いの苦手な子どもだったからだ。

彼女の性格を一言で表すならば、内向的というのが最も適切だろう。いつも柱の影からこちらを覗いている少女 そんな印象が残っている。彼女が自分から誰かに話しかけているところを見たことはない。こちらが話しかけても、蚊の鳴くような声で事務的に口を動かすだけで、視線を合わせることもなければ「冗談に笑うこともない。外で遊ぶよりも中で読書をしているほうが好きだったから、少女はいつも血色の悪い顔色をしていた。

いつだつたか、私が父からもらつた大事な指輪をなくしてしまったことがあった。

それを偶然拾つたのがリラだつた。眉をひそめながらうつむき、まるで腫れ物にでも触るよつに指輪を渡す彼女の姿を、私は鮮明に覚えている。

当時は率直に、あまり関わりたくない子どもだと思った。友達になりたいとも思わなかつた。

その後、私は同年代の男友達に恵まれ、ますますリラとの距離は遠くなつた。

子ども時代に内向的な性格だつたせいだろうか。人づき合ひはいつまで経つても苦手なようだが、リラは動植物に慈愛を注げる女性に成長した。

私にすら見せたことのない笑顔を、リラは彼らに向けた。

しかし私は、彼女のそんな姿に目を向けたことはなかつた。リラが植物を育てていることなど、こんなに近くで何年も過ごしてきたと、いうのに、気づかなかつた。そこにある彼女の存在を、まるで空気のように思い、ただ通り過ぎただけだったのだ。

私は、実際に彼女と真正面から向き合つたことはなかつた。面と向かつて彼女の気持ちを少しでも知るうとしていれば、あんなことにはならなかつたかも知れない。

彼女がどんな場面で、何を怖がつて、何故植物が好きなのか 少しでも歩み寄れば簡単にわかつたことなのに。

けれど、今は少しだけわかるのだ。

何故、私が落とした指輪を、彼女が恐る恐る渡したのか。

彼女はただ、緊張していただけだつたのだ。汗ばむ手で私に触れるのは失礼だと思い、顔を歪めて素早く手渡した。それだけだつた。

わかり合えない者など、この世にはいないと私は思つ。

相手のことを知る努力をして、一歩踏み出せばいい。相手を理解しなければ、何もはじまらない。

リラ・コスマロードは弱い人間だ。

けれど、私は彼女の下に残ることを選んだ。

誰かが哀しむ姿は、もう見たくなかったから。

私は物思いにふけっていた。

私は人と接することが苦手だ。

それはもう物心がつく前から……恐らく生まれ持った人格の一部といふものなのだろう。

昔から人より草木や花が好きで、庭師の手伝いをすることはしきりだった。幼い頃、母に頼みこんで自分専用の温室まで作つてもらつたほどである。ガラス張りで、加温設備がしつかり整つたそこに、私はたくさんの花を揃えた。毎日手入れをして、人に接するときの数十倍も気を遣つた。

私は一日の大半を温室で過ごす。おかげで花々は季節を彩る美しい薔薇を開き、私の心を癒してくれた。

私が毎日必ず顔を合わせるものと言えば、その草花たちと一人の人間だけだった。

本来なら私は何人たりとも会いたくはない。一人の時間が好きなのだ。しかし一人は私の身の回りの世話をするために、そしてもう一人は

「今年はアリックサムが咲くといいね」

その男は、突然話しかけてきた。いつの間に温室に入ってきたのだろう。いつもこの時間になると、どこからともなく現れる。

私は黙々とプランターの移動に専念している。日中は日当たりが変わるために、花たちの状態や特性に合わせて場所を変えるのだ。

「昨年はうまくいかなかつただろう?」

私が振り向きもしないのに、彼は勝手に話し続けた。

そう、アリックサムは昨年植えつけに失敗してしまった。甘い香りの小さな花を見ることができなかつたのが、とても残念だった。

「今行くわ、オーガスター」

「別にせかしているわけじゃないよ……好きなものに打ちこむのは

いいことだ

オーガスター・ササンクロスは本当に申し訳なさそうに微笑んだ。こういうときの正直な表情はすぐに顔に出る男なのだ。その実直さは私が一番よく知っていると思う。

オーガスターは私が一番重いプランターに苦戦していると、横から割りこんで簡単に持ち上げてしまった。最後のプランターだった。

「これはあっちだね」

このプランターは私がまず持ち上げようとして、しかし必ず最後にオーガスターが移動させる。数年前からそれは決まっていた。いつもと変わりない習慣だ。私もオーガスターも、毎日同じ行動を繰り返している。

私は睨め上げるように男を見上げた。

「行こう、リラ」

彼の差し伸べた手を握つて、私は温室を出る。巨大な城の中で、温室のあるこの庭園だけが、私の唯一心安らぐ場所だった。無駄に敷地の広い私の城　　その広さが、むしろ私には窮屈だつた。城壁は空を覆いつくすほど高くそびえ、東西南北に位置する塔は摩天楼のように高く、高くその存在を誇示している。どこまでも終わりが見えない廊下は、恐らく五十人の兵士が並んで歩いても余りある広さだ。この城を一周するのに、一体どれだけの時間がかかるだろうか。想像するだけで気が遠くなる。

白塗りの壁がひたすら長く続く回廊を歩きながら、私は男に問うた。

「今日の予定は？」

「昼過ぎに護民官が謁見に来る。それから、明後日はシエル港町の視察に行つてくれ。数ヶ月前から君を歓迎したいと申し出ていたから、きっと手厚くもてなしてくれるよ」

港町の話はずいぶん前から出てはいた。ただ、私が気乗りしなかつたことで見送っていたのだが、いよいよもつて、そもそも言つていられない状況らしい。相手の町が招待したいと言つてているものを断り続けるのは、あまりに失礼な行為だ。

「脇からせとんどの兵团が訓練で出払うと聞いたけど」

オーガスターがそれ以上何も言わなかつたので、私は自分からそれを

「ああ、これは間違った。お前が見たいのは、

オーガスタは本当に嬉しそうにっこり笑つた。

ああ、また騙された。自分からわざと言わず、私がそれを口に出すのを誘発させるための罠だったのだ。はつきり言って、この男は魔法使いよりも役者が向いていると思う。お得意の口八丁手八丁で、いつも私の心を見透かす。

だ。そこまで私がどれだけ政務に力を入れてしるかを探してしるの

政が嫌いなわけではない。勉強は好きだし、紙の上ならいくらでも政務をこなせよう。だが、それを実行に移すとなれば私には荷が重い。なぜなら私は人づき合いが苦手で、人前に出ればまともに提言などできない性格なのだから。

しかし、今この生活を作ったのは私自身だ。私には仕事をこなす義務がある。ただ、オーガスターのいかにも上から見下ろすような態度が、気に食わないだけだ。

「浮かない顔だ。眉間に皺が寄っているよ。」
ううと、私は頭を更に下がかう。

やがて、さうした女性に向がって、腰を下ろしてはいたのである。

少しぐぐもつた、高い女性の声だつた。柱の影から現れた彼女は、私の側仕えの侍女、ベルイヤールだ。私が幼い頃からずっと仕えてくれている女性で、毎日顔を合わせる人間の一人、でもある。歳も近いため、人見知りをする私にしては珍しく、割と何でも話すことのできる希有な存在だ。

「陛下、兵团が出立前にじ挨拶をしたいと申しております。訓練所のほうへ足を運んでやつてくださいませ」

「あ……ええ、わかりました。今行きます」

出立にはまだまだ時間があるというのに、せっかちな兵隊だ。できることなら避けて通りたいその『ご挨拶』を思い浮べ、私はため息をついた。というのも『ご挨拶』の際には、自分も何か兵に向かつて獎励の言葉をかけてあげなければならぬからだ。地平線の果てまで並んでいそうな兵の群れの前に立ち、私は一人で喋らなくてはならない。心臓は張り裂けそうなほど高鳴つてゐるし、気が重たくて仕方ない。私は本当に、そういうつたものが苦手なのだ。オーガスターがそれを横目に嬉しそうにしているのが憎らしい。

「陛下。その間、私は外の様子を見てても宜しいですか？　この間城下でおきた魔法使いによる放火事件が気になるので」

私が眉をぴくりと動かしたことに、彼は気づいているだろう。私の不信感を買うことを知つていながら、しかしオーガスターは平氣で口にするのだ。放火事件のことは知つていた。それをオーガスターに観察してきてほしいと思っていたことも事実である。ただ、自分が命令する前に勝手に動こうとする彼の態度が、私は嫌いだつた。

「……兵を、つけさせましょう。ベルイヤール、彼に誰かつき人を」「ありがとうございます、陛下」

頭を軽く下げてみせるオーガスターから、私は視線を逸らした。つき人などというのは表向きの名目にすぎない。オーガスターがどこかへ出かけるときには、例えそれが國務であつても監視をつける。拒否することはできない。それは私も彼も承知の上で結んだ、いわば二人の契約なのだ。

私はオーガスターを信用していない。

どんなに優しい言葉をかけてきても、どんなに私の政務を助けてくれても、それはもうこれから先、ずっと変わらない。

私は王だ。この国　カラアを背負う唯一人の王。民からもてはやされ、議会に期待を寄せられ、臣下に忠誠を誓われる存在。王が臣下を疑うなど、普通は有り得ないことなのだろうか？　だが、私は彼を疑わずにいられない。いや、オーガスターだけではない。私に接するすべての人間が、私に牙を向けないという保障が

どこにある。誰も、信用できない。

「そういう人間なのよ……私は……」

自嘲して呟くと、とてつもなく寂しくなる。

ベルイヤールに連れ立つて訓練所に向かう私を、オーガスターは遠目に見ていた。いつもそうだ。いつもそつ、本当は彼に監視されているのは、私のほうなのだ……。

宵の月も出はじめて間もない頃、私はようやく一田のスケジュールを終え、部屋に戻ろうとしていた。

広い回廊が、今日は殊更広く感じる。ほとんどの兵が訓練でいなくなったことで、城内は静かな空氣に包まれていた。普段ならばこの時間帯は、鎧をガチャガチャ言わせながら廊下を闊歩する兵たちでごった返すはずなのだ。外を見れば、城下町の活氣ある灯りが光の洪水となつてあふれている。まるで城内の暗さを際立たせるために光っているかのようだ。

「湯浴みの用意は整つておりますゆえ、今日は早めにお休みになつてください」

私がぼんやり外を眺めていたせいだろうか。隣を歩いていたベルイヤールが少し強い口調で言った。

そんな静かな城内に、何やら喧騒が聞こえて、ふと立ち止まる。誰かが言い争つているという感じではない。大勢が各自独り言をついているような、とりとめのない話し声の羅列だ。

「何からら……」

「少しここでお待ちになつてください」

私が訝しげに首を傾げると、返事も聞かずに、ベルイヤールは小走りに声のするほうへ走つていった。王の安全を守るため、彼らはどんな些細な出来事にも慎重になる。要するに、何事も私の命が最優先というわけだ。だが、私にはこの喧騒がそんな大袈裟なものだとはとても思えなかつた。

「ベルイヤール、どうしたのですか？」

追いかけてきた私に、侍女は少しばかり難色を示したようだつた。

「申し訳ございません、陛下。何やら外で騒ぎが……」

彼女が姿勢を正すのとほとんど時を同じくして、遠くから侍女が大声を上げながら駆けて來た。

「陛下、こちらにいらっしゃいましたか！」

「どうしたのですか？ 一体何が……？」

よほど切羽詰つた顔をしていたのだろう。彼女は私の心配をほどくように、やわらかく微笑んで見せた。

「それが、城内に賊が入りこんだと……報告がありました」「侵入者が出たということね？」

すかさずベルイヤールが緊張した面持ちで確認する。

「ええ、ベルイヤール。何分状況が把握できていないものだから、キングー二ヤ侍女長さまは侍女全員に招集をかけたわ。広間に集まれという命令よ」

「では、陛下もご一緒に……！」

しかし、私はベルイヤールたちとともに歩ける自信がなかつた。足元が揺れている。ここから一步、踏み出すことは予想以上に困難だ。「私のことは気にせず、先に行つてください。一階の広間でしじう

？ 私もすぐに向かいます」

それを感づかれないように、精一杯微笑んだ。

「しかし、そのようなわけには……！ 陛下をお守りすることができたちの最優先事項です」

「私なら大丈夫。それより、早く侍女長たちと合流して、現状をまとめて報告してちょうだい」

躊躇しているベルイヤールに、強く頷く。

「……それでは、申し訳ありません、陛下」「丁寧に一礼し、一人の侍女は足早に駆けていった。

侵入者、という単語を私は頭の中で反芻させた。いつも恐怖は、思いがけないとこから突然私に襲いかかつてくる。私が恐れていたものが来たのかもしれない。違うかもしれない。オ

「ガスターが手引きしたのかも知れない。違うかも知れない。震える足元が白くぼやけているのに気づき、私は慌てて頬を叩いた。こんなところで気を失うわけにはいかない。深呼吸をして、震える足を前に出してみる。

一刻も早く、私も安全な場所へ逃げなくては

「集合かかつたぜ！ 城に残つてゐる兵士は、持ち場がある奴以外全員広間に集まれとさ！」

ひと際明るい声が聞こえて、はつとした。駆けていく三人の兵士の姿が見え、私は咄嗟にそれを追いかけた。

「おつ、何、仕事？ 警戒態勢！？ ヤバくない？」

「大魔法を盗みに来たバカがいたらしいよ」

若い兵があつけらかんと言い、鼻で笑つた。

「何で大魔法を盗みに来たつてわかるわけ？」

「いや、おれも詳しくは知らないんだけどさ。何か侵入者が大声で『大魔法を頂きに来た！』とか言つてたらしい」

「うわ、救いようのないバカ……」

軽い会話の流れには、少しの危機感も感じられなかつた。彼らの話を聞いていると、徐々に、私の恐怖も和らいでいくのがわかる。このような非常事態に、と普通は怒るところなのだろうか。しかし私は何も言わず、こつそり彼らの後を追いかけた。

「だからあんま警戒ないみたいよ、今回。兵团ほとんど留守だから、まともに動けるのおれらだけじゃん？ でもそんな馬鹿泥棒一人相手なら、楽勝で捕まるだろつて話でさ。銀の騎士もお役御免だし」

「銀の騎士は気味悪いからな。なるべくなら出てきてほしくないし、それはそれでよかつたよ」

「でもさあ、そもそも大魔法つて何なんだろうねー」

女性のように細い兵士が人差し指を立てて見せた。

「おれが聞いた話ではさ、何でも世界を焼き尽くす炎が出せるとか」「えへ、ぼくは人の心を読むことができるつて聞いたよ？」

「いやいや、その実体は、手を触れたものがすべて食べ物になると

いう素敵魔法なのさ！」

小太りの兵士が満足げに体を仰け反り、彼は両脇から同時に突っこみを入れられた。

大魔法は、王家の血筋に代々継がれる禁断の魔法だ。その正体は、それを唯一使用できる王と、製作者の末裔である大魔法使いしか知らない。誰かが正体を知れば、盗みに来る。誰かの手に渡れば悪用される。だから、王は大魔法を自らの体に保管する役目があるのだ。カラアの長い歴史をたどれば、そうやってこの国がどれだけ必死に大魔法を守り抜いてきたかがわかる。だが、王は保管することはできても守ることはできない。

大魔法を守るため王に仕えるカラアの護り手 大魔法使い。

その血族は、遙か昔、それはもう神話に届きそうな頃、大魔法を創りカラアを別の次元に移した。恐ろしいほどの強大な力を持つ、恐らく世界一の魔法の使い手。彼らは王を守り、大魔法を守る。いつの時代も、王と大魔法使いは二人三脚で大魔法を守ってきた。そう、他者から見れば、今の私とオーガスターもそういうことになるのだろうか。うわべだけを見れば……。

気づいたときにはもう、前を走っていた兵士たちの姿はなかつた。早く広間に向かおう。侵入者がいるとなれば、城内といえど油断はできない。引潮が満ちてくるように、不安が舞い戻ってきた。侵入者がいるのだ。その事実だけで、この身は震え、意識が薄れしていく。私は急いで階段を下りた。

「魔法が消えた！」

悲鳴が聞こえ、私はそれが何を意味するのかわからぬまま、突然広がつた真っ暗な世界に立ち尽くした。

いつもは広い室内が、今ばかりは窮屈に感じられる。広間は城中の侍女と、訓練に参加しなかつた数人の兵士ですし詰め状態となつていた。中央のテーブルには心もとないカンテラが十個、暗闇の中にぼんやり淡い光を放つている。

私がここにたどり着けたのは、私の身を案じて迎えに来てくれた侍女数名のおかげである。彼女たちがカンテラを手に駆けつけてくれなければ、私は暗闇の中、今も恐怖に身を震わせていたに違いない。

「侍女長さま！ 侍女全員揃いました！」

年配の侍女が老婆とも言える女性 侍女長に報告をしている。私は隅の椅子に腰掛けながら、じつと彼らの様子を窺い見ていた。

私の姿を見つけると、オーガスターがすかさず駆け寄ってきた。放火事件の経過を聞いたかつたが、今はそれどころではない。

「話は聞いたか？」

「ええ……」

臣下の報告は以下の通り。夕刻を過ぎた頃、何者かが宝物庫に忍びこもうとしているのを目撃した兵士がいた。倉庫番だつた彼は不審者を捕らえようとし、しかし返り討ちに遭い鍵を奪われた。

「けれど、彼が目を覚ましたとき、宝物庫の中は物色された形跡はあれども、盗まれたものはなかつた……」

「そう、お目当ては国宝の剣でも、盾でも、美しい宝石でもなかつたわけだ」

とてつもなく広く頑丈な警備を布いている宝物庫に、見張りが一人しかいないなどということは、普段ならば到底有り得ない。恐らく犯人は、兵团が今日の夕方からいなくなることを知つていて、その時間帯を狙つてきたのだろう。しかしせつかくうまく城へ入れたと

いうのに、彼は金銀財宝には興味がないらしい。

本当に大魔法を狙つているのだろうか。私は侵入者を笑い飛ばして

やりたくなつた。

「今日は多くの兵团が外に出払つていますし、近衛隊もおりません。今動けるのは私たちだけです。よろしいですか？ 我々が命をかけて国王陛下をお守りするのです」

侍女長が沈痛な面持ちで声を出した。今城の中で動けるのは、この広間に集まつた人間だけなのだ。数だけを見れば大したものだが、その九十%は非力な侍女たちである。戦力になるとはとても思えない。先ほど廊下で見かけた三人の兵もいるが、彼らは訓練に参加できなかつた落ちこぼれ組である。

近衛隊は本来ならば王の側に残るべきなのだが、今回は私が彼らを訓練に行かせた。近衛の一人であるオーガスターがいれば、日常の護衛はこと足りる。何より私は四六時中見張られているという空気から、一時的にでも逃れてみたかったのだ。それと時を同じくしてこのような事態が起こつたことは、とてつもなくタイミングが悪かつたとしか言いようがない。

つきましては、と侍女長はわざと言葉を切つて、その男に視線を移した。

「大魔法使いさまのご意見を伺いたい」

広間の中で唯一の戦力と言つても過言ではないかもしれないオーガスターは、緊張感のない微笑を浮かべた。

「魔法の火を消すとは、犯人はよく城のことを調べているね」

魔法の火、とは夜になると城内をくまなく照らす照明だ。日が落ち、室内が外より暗くなると、壁という壁に一定間隔ではりめぐらされた筒の中に、自動的に火が灯る。普段は自動だが、城の西には遙か昔に大魔法使いが造つた管制塔があり、そこから手動で灯りの消灯点灯をることができる。一説では初代大魔法使いが永遠に続く魔法をかけたという話だが、そんな魔法が存在するとは思えない。管制塔の詳しいメカニズムは未だ解明されていないのである。

「管制塔へ行つてみたが、私の呼びかけには応えない。自動的な復旧を待つしかなさそうだ」

「侵入者は管制塔を壊したのですか？」

私はすかさず問うた。

「それに近いことをしたのだろうけど、そんなに簡単に壊れるようなものではないから大丈夫だ」

「では、大魔法使いさまの魔法で火を再度灯して頂けますか？」のんびりしたオーガスターの受け答えに苛立ってきたのか、侍女長の口調は先ほどより早くなっていた。

「私が今一時的に火を灯すことは容易いが、少々精神力を使うね、こういう魔法は」

持続させる魔法というのは、使い手の精神をひどく消耗させる。国内一の魔法の使い手ともてはやされるオーガスターさえ、その例には漏れない。

「つまり、その間に何かあつたら……」

誰かが生睡を飲みこむ音が聞こえた。

「私は動けない、というわけだ」

静寂が落ちる。しんとした室内にオーガスターの声だけが重苦しく響いて、私は息を呑んだ。

あまりに広範囲な持続魔法をかけている間は、それに精神を集中させているため、他のことができなくなってしまう。だがオーガスターが動けなくなるというのは、今日のこの面子を見た限り、あまりにも不安だ。

「侵入者の居場所はわかっている。今は東の塔だ」

「おお、と誰かが大仰に声を上げた。

城に魔法をかければ、城内にいる人間の居場所の特定はできる。侵入者を寄せ、と城壁に呼びかけるのだ。普通の魔法使いなら首を真横に振るような、広い敷地全部に魔法をかけるなどといふことも、この男にはいとも簡単にできる。

「ならば早く移動魔法で東の塔へ飛んできたらいかがですか？ここにいつまでも籠つてはいるわけにはいかんでしょう。お強い力をお持ちの大魔法使いさまならば、侵入者一人捕まえることなど魔法

で容易くできるのではないのですか？」

黙つて頬杖をついていた年老いた文官が、不機嫌を前面に出した物言いで言つた。何もできない人間ほど、こういう状況下でよく吼えるものだ。

「移動魔法はひどく疲れるから……あまり使いたくはない。もしものときに魔法が使えなくなつたら問題だらう？」

もしものとき、という一言が重く圧し掛かる。広間にいる全員が同じように思つたのか、気落ちした表情を浮かべた。

「大魔法使いさまは、何かあつたときのためにここに残つて陛下を守つて頂くのが最良でしょ？」「

静かに頷く侍女長にオーガスターは目配せをした。

「そうだね。私は一人で勝手に出歩けない身であることだし」

私はどきりとして、その男の後ろ姿を見つめた。皮肉だらうか。私が彼を監視していることを、遠回しに嫌悪しているのだろうか。

「何で出歩けないんですか？」

「あんた新人だから知らないのね。オーガスターさまは、本当は……」侍女たちのひそやかな話しが聞こえて、私は思わず立ち上がつた。ガタン、椅子が音を出すくらい勢いがあつた。全員の視線が一斉に私に集中する。その中にオーガスターの冷めた視線を見つけ、私は言葉を失い立ち尽くす。

「ご命令を、陛下」

オーガスターは、恭しく頭を垂れた。冷え切つていたように見えた彼の瞳は、むしろ温かさに満ちていた。その微笑に悔しくとも私は落ち着きを取り戻す。

「とにかく、ここにいる兵士と数人の侍女は東の塔へ向かい、侵入者の確保を急いでください。残つた者は城内の見回り、それから宝物庫や管制塔の見張りを強化してください」

敬礼の後、止まつていた時間が動き出したかのように、広間の中は慌しくなつた。少ないカンテラをどう使つか、というところが一番の問題だったが、侍女の中に多少なりとも魔法の経験を積んだ者が

いたことが救いだつた。彼女たちは自らの手のひらに炎の玉を作り出し、何とかそれを持続させた。火を灯している侍女は、その間精神を集中させなくてはならないから、もう一人の侍女とペアになり、灯り役と見張り役で分担することにしたようだ。

ぞろぞろと人の波が消え、途端に広間はまた静けさを取り戻した。もちろん私は広間に残つた。ここにいるのは、私とオーガスタ、ベルイヤール、そして数人の侍女と文官だけである。残されたカンテラは一つ。人がいなくなつて広く感じるはずの広間も、灯りの範囲が小さくなつたことで、更に狭くなつたような錯覚さえ覚える。と、突然広間の扉が開いた。扉の前を見張っていた侍女たちが駆けこんできたのだ。

「な、何か、何か……」

二人の侍女は、涙声であたふたと辺りを見回した。まるで幽霊でも見た子どものような怯え方だ。

「どうしたのですか？ 落ち着きなさい」

呂律が回らなくなつてている侍女の肩を、私はなだめるようにさすつてやつた。本当は何が起こつたのか理解できず、怯える自分もいるのだが、自分以上に慌てている人間を目にすると、割と冷静になれるものだ。

「くつ、黒いものがザザザ つて！ ザザザーつて！
「いっぱい動いてあつちに行つたんですね！」

彼女たちがジエスチャ－混じりに説明するも、それは到底私には解読できそうにもなかつた。

「ざ、ざざざー……？」

何を見たのかはわからないが、その擬音が不可解すぎることは充分すぎるほど伝わる。侵入者は東の塔にいるといつ。だとしたら、それは侵入者とは関係のない生き物だろうか。虫や、ねずみ、はたまた幽霊が……。そこまで考えて、私は自分の頬を叩いた。

私が息を詰まらせていることに気づいたのか、オーガスタが背中を軽く叩いた。

「私が見てこよう」

扉へ手をかけるオーガスタの衣服の裾を、咄嗟に掴む。

「ま、待ちなさい、オーガスタ！」

オーガスタは驚いたようだつたが、やがて微笑んで問つた。

「……宜しいですか？ 国王陛下」

先に許可を得てから行動して欲しいものだ。その言葉を、私は無理矢理呑みこんだ。

「わ、私も行きます。あなたを一人にするわけにはいきませんから」この暗闇に乗じて、オーガスタが何かを企まないとも知れない。いや、もしかしたら侵入者が大魔法を奪いに来たというのはカムフラージュで、実際はオーガスタの仲間かも知れない。私は沸々と沸きあがつてくる疑念に身を任せ、彼を掴む手に力をこめた。

真剣な瞳で見つめると、オーガスタは一考する間もなくすぐに私の手を取つた。

「でしたら私も！」

「陛下が行かれるのなら私も！」

「どういか陛下はお残りください！」

侍女たちの申し出はありがたかったが、大勢で歩き回つても利になることはない。私はベルイヤールだけを供に連れ、オーガスタの後に続いて外に出た。

轟音が聞こえ、私は身を縮ませた。それはベルイヤールも同様だつたから、私たちは手を握り、身を寄せ合つて、そろそろと歩いた。

「大丈夫。ただの風だ」

オーガスタだけは平然と言い払い、カントラを手にさくさくと先に進んでいる。

「私、お化け屋敷とか苦手で……」

「私もよ、ベルイヤール。おかしいのはあの男です」

「あまり嬉しい褒め言葉ではないね」

びくびくしながら背後を歩く私たちに背を向けたまま、オーガスタは声を出して笑つた。

しかし、扉の付近を一周してみるも、侍女たちの言つていた『黒いもの』はどうとう見つからなかつた。

「風の音と、木の葉の影を見紛つたのかもしませんね」

ベルイヤールはほつとしたようで、広間に戻る頃には笑みを浮かべる余裕さえできていた。私もそれに感化され、意志とは無関係に、顔がほころぶ。

刹那 首元に冷やりとした感触が走る。

私が背後に人気を感じたのは、それから数秒後。東の塔へ向かつたはずの兵が何かを喚き駆けてくるのは更に後で、それよりも先に、オーガスターの私を呼ぶ声が聞こえた。そしてベルイヤールの、悲鳴も。

「リラ！」

「動くな！ 少しでも動いたら、お前たちの王は死ぬぞ」
オーガスターの声に呼応するように、耳の後ろから怒声が飛んだ。私の体を掴んで離さない背後の人物が、首元に当てているのが刃物であることを、私はもうわかつていた。あまりにひんやりしているそれは、私の体温をすべて奪つていくかのように地肌に吸いつく。

「へ、いか……」

ベルイヤールが咄嗟に手を伸ばしたが、刃物を見止めると体内の時間が止まつたように動かなくなつてしまつた。

「そこにいるのは大魔法使いだな。移動魔法でもしてみる。お前がおれの背後に回つた瞬間、すぐに首をかき切るからな！」

さすがのオーガスターも、ここまで言われたら動けない。背後のこの男、大魔法使いのことも移動魔法のことも知つてゐるとは、魔法使いだろうか。恐らくそうだ。オーガスターなら、移動魔法など使わずとも、刃物に魔法をかけて弾き落せばことはすむ。だがそれをしないといふことは、男が魔法使いで、オーガスターが魔法をかけてもすぐには刃が主人の手元に戻ることを知つてゐるからだ。

ああ、だがそんなことはどうでもいいのだ。やはり大魔法を奪うと、いうのはカムフラージュだったのだ。ついにこの日がやつてきた。私を殺しにやって來たのだ。

怖い、怖い、怖い

背後の男は私を捕らえたままじりじりと後退し、ある程度オーガステたちと距離をとると、踵を返して走り出した。私は引きずられるようにして走つた。抵抗する、などという考えは起こらなかつた。思考が麻痺したような感覚が、長く、長く続いた。

どれくらい走つたのだろうか。

腕に鈍い痛みを感じて、顔を上げる。私は後ろ手にきつく縛られた。その現実に言いようのない不安と恐怖を感じ、氣を失いそうな激しい眩暈に襲われた。思わずその場にへたりこむも、男は何も言わず、じつと私を見下ろすだけだ。目元以外はマスクで覆つているため、顔はわからない。その姿も、今は私の恐怖を煽る材料にしかならない。

「……あ、あなたは……旧女王派なのですか？」

恐る恐る、口を開く。語尾は震えて、上手く声にならなかつた。

「旧女王派？ 何だ、それは」

予想外の返答だった。旧女王派を知らない。旧女王派ではない。私を殺しに来たのではないのだろうか。では刃物を突き出して私の命を脅かす、この男は一体何なのだ。

「つ……」

再度喉元に刃物を当てられ、私は血の気が引いていくのを感じた。身体の震えが止まらない。

「答える」

恐怖で、もはや声も出なかつた。人は本当の窮地に陥つたとき、叫ぶことすらできなくなる。

「大魔法はどこにある？ 宝物庫にはなかつたようだが」

「……し、りません」

本当に知らない。私は恐怖の中に入り混じる、自嘲したい気持ちを懸命にこらえた。

「嘘をつけ。大魔法は国王が持つていると、誰もが言つている」

大魔法は王の体内にある。それ自体に実体はなく、手渡せるものでない。

「……あなたは、私を殺しに来たのではないのですか？」

「おれは大魔法が欲しいだけだ。お前を殺す気はねえよ」

この侵入者は、本当に大魔法を奪うことを目的として城に乗りこんだのだ。旧女王派ではなかつた。未だ緊張した状況下にあるものの、私は胸がすく思いで安堵のため息を漏らした。

ようやく状況を把握する余裕が生まれた。灯りはなかつたが、月の光が射していたため、慣れればそれほど暗闇でもない。窓の外に浮かぶ月は思いのほか近かつた。ここは恐らく東の塔の最上階である。塔へ向かつた兵たちが侵入者を捕らえるのは、思いのほか簡単だつたのだろう。それで、油断した。男は彼らの手を逃れ、ちょうど広間を出ていた私の姿を見つけ、今に至る。多少は違うかもしねいが、大体の成り行きはそんなところだろう。

月の光が男の横顔を照らしつけ、私は思わず、あ、と口に出してしまつた。

何故、気づかなかつたのだろう。高いトーンを無理に低く装つた声。私よりも低い身長、幼い相貌。

「女……の子？」

暗闇では見分けることは難しいかもしない。だが、マスクをしていても、その輪郭や身体の曲線はわかる。目を凝らせば、確かに目の前の侵入者は少女であつた。

「……女で悪いかよ」

もはや隠す意味もないと悟つたのか、少女は黒いマスクを脱ぎ捨てた。

「何故、大魔法が欲しいのですか？」

まだ年端も行かぬ少女が、危険を冒してまで城に乗りこみ、大魔法を狙う理由が私には見当もつかない。

「おいおい、王さま。あんた全然状況がわかつてねえのな。質問してるのはおれなんだぜ」

「答えてくれたら、大魔法の在りかを教えてあげます」

私は自分でも驚くくらい、自然に微笑んだ。年下の少女とわかつたからだろうか。先ほどまでの恐怖はすつきり消えてなくなつていた。

「……嘘じや、ねえだろな」

「ええ」

少女は私を舐め回すように見つめ、どこか釈然としない表情でため息をついた。

「つい先日、おれの両親が死んだんだ。うちには代々受け継いできた大きな農園と屋敷があつて、それを守ることだけがおれたちの生き甲斐だった。だけど一月前、近くの町の領主が屋敷の権利書を偽造して、屋敷を奪いやがった。……両親はそれを苦に自殺したんだ」少女は眉一つ動かさず、ずっと一点を見つめながら話した。この年頃に両親を喪うことは、とても辛く哀しいものだ。私も、彼女よりずっと幼い頃に両親を亡くしているから、その気持ちちは痛いほどわかる。

「おれはあいつらに復讐してやりたい。だけど、屋敷に忍びこんであいつを殺したら、おれは絶対に捕まつて死刑にされる。おれがいなくなつたら、今度は弟たちがきつとひどい目に合わされる。だけど、大魔法があれば何だってできる。誰にも気づかれずにあいつを殺せる！ あの糞野郎をぶち殺して、父さんたちの仇を討つんだ！」もし仮にそれを手にできたとして、それを使えるのは国王だけだということをこの者は知らないのだ。何て浅はかな 口に出しかけて、私は思いとどまつた。

殺したいほど憎い人間がいる。まるであの頃の自分を見ているかのようではないか。ふ、と私は口元を緩めた。

「けれど、このままだとあなたは国に対する反逆罪で捕まりますよ」

「大魔法を手に入れたら、それを使って逃げるぞ」

気丈に答える少女の瞳には、明るい未来しか映つていない。無鉄砲ともとれる計画は歳相応と考えるべきなのだろう。しかしそれはあまりにも幼すぎる。現実はもっと残酷で、少女にすら容赦のない仕打ちを与えるというのに。

「あなたは愚かですね。大魔法なんて、国王がでっち上げた嘘かもしれないのに。そんなもののためにあなたは自分の人生を投げ捨てたのです」

一息に言つと、少女は怒りを剥き出しにして私に掴みかかった。

「嘘なはずがないだろ！」

自由のない体をいきなり上に持ち上げられて、私は低く呻いた。私

の苦悶の表情に気づいたのか、少女はすぐに手を放し、ぱつ悪そ
うな顔をした。

「考へても見なさい。今まで、誰かが大魔法を使つたところを見た
ことのある者がいますか？ それを記述した歴史書がありますか？
大魔法が本当はないなんて、即席の嘘だ。大魔法がなければ、国を
ここまで隔離して守ることに意味はない。だが、未だかつて大魔法
が使われた経験がないというのは、本当である。

「……そんな、馬鹿な……。嘘だろ！？ あんたが、それを持つて
いるんだろ！？」

私は何も答えなかつた。少女はよろよろと後退し、

「そんな……」

崩れ落ちるよに腰を落とした。

「おれ、どうなるんだ？」

先ほどまでの明るい色は、その瞳の中から消え去つていた。代わり
に、わずかな恐怖がそこに見え隠れする。

「だから愚かだと言うのです。投獄されればわかります。地下へ閉
じこめられて、未来永劫日の目を見ることがなく朽ち果て……銀の騎
士として生きることになりますよ」

「銀の騎士……？」

「自らに魔法をかけ、自身の記憶と意思を完全に消し去り、死ぬま
でカラアのために働く囚人たちです。そういう恐ろしい魔法が、負
の遺産としてこの国にはたくさん残つているのですよ」

感情の含まれない平坦な口調で連ねると、少女は固まつたまま動か
なくなつた。

銀の騎士は、恐ろしい魔法だ。王の命令にのみ従う、最強の兵器。
そう、囚人は己の肉体をカラアに捧げ、心持たぬ兵器として生まれ
変わる。しかし彼らは命令に絶対服従ではあるものの、意思がない
ため、扱いにくい。人の多い戦場に出れば敵と味方の区別もつけら
れない。殺せと命じればその者が住む村ごと焼き尽くす。
できることなら使いたくはない。人でありながら人でないものに変

化した彼らが恐ろしい。けれどもつと恐ろしいのは、彼らに平氣で命令を下せる自分だ。

黙つたままの少女を見やり、私は静かに目を伏せた。

「いいいいやあああ！ オーガスタさま！」

間抜けにも捕獲してきた侵入者に逃げられ、拳句王を人質に取られた兵と侍女たちが、一斉に悲鳴を上げた。しがみつく彼らを引き剥がし、オーガスタは通りをそつと覗く。

「ザザザーって動きました、今！ 黒いの、黒い塊がいつぱい！」

「少し静かにしていなさい」

オーガスタがたしなめるように言つても、騒々しい悲鳴は止まぬようであった。

黒い物体が流れるように通りを抜けていったのを、確かに全員が目撃した。もう幻でもなければ幽靈でもない。

オーガスタがそつと柱の影から顔を出した瞬間、小気味よい音とともに、彼の顔面に何かが直撃した。紙で作ったおもちゃの剣だ。

「悪い魔法使いめ！ 姉ちゃんを返せ！」

黒い塊の正体 黒マントを羽織つた少年が三人、口々に喚きたてながら、オーガスタを力の限り殴りつけている。殴るといつてもまだ五、六歳程度の少年たちだ。ぽかぽか叩いていふと言つたほうが正しい。

「いたた……」

それでも勢いもつて何度も叩かれれば多少のダメージにはなるらしく、オーガスタは困つたような顔で己の身をかばつた。

「おつ、オーガスタさまに何てことを！ この方は偉大な大魔法使いさまですよ！」

ベルイヤールが少年たちを見下ろして、一喝した。彼らはその剣幕

に驚いたのか、一瞬たじろいで、しかしまさぐに攻撃を再開した。

「いいんだ、怒らないであげて」

田配せするオーガスターに、ベルイヤールは不満そうにして少年たちを無言で睨みつけた。

「さつき姉ちゃんを兵士が引きずつていぐのを見たんだ！」

「東の塔から？」

オーガスターはそつと囁くよつこ、優しく言った。

「だけどその後、彼女は兵たちの手を逃れて、うちの大事な王さまを人質に逃げたんだよ」

「えつ、そうなの？」

少年たちは目を丸くして、攻撃の手を止めた。

「でも、また塔に戻つたみたいだから……そのお姉ちゃんのところへ、一緒に行こつ」

微笑んで彼らの手を取ると、オーガスの姿はよつくり暗闇に沈み、

次の瞬間には消えてなくなつた。

後に取り残された兵士たちは、ぼんやりと、彼らが煙のよつに消えた空間を見つめていた。

少女は何も言わず、私の捕縛を解いた。

「いいんだ、もう……どうせ捕まるんなら、早くしてくれよ」
打ちひしがれた少女の瞳に、私は良心が痛むのを感じた。本来ならば城に乗りこみ大魔法を狙うなど、とんでもない反逆罪だ。だが、私は彼女を罰する気も、銀の騎士にする気もなかつた。これだから王として甘いのだ……。そうは思うが、自分の性格を曲げてまで彼女を罰することに意味があるとは思えなかつた。

「嘘よ」

「え？」

少女は力ない視線をこちらに向けた。

「先ほどの話は嘘よ。大魔法は確かにある……けれど大魔法は、王の肉体そのものだから形を持たない。大魔法を保管し、唯一使用することができるのは王だけなのよ」

一息に言つと、少女は一瞬驚いたような表情を見せたが、更にそれを曇らせた。

「あんたしか使えないのか……」

「ええ」

「じゃあ、どうちにしろ無駄足だつたな……」

自嘲するように、少女は笑つた。

「領主を殺して、その後どうするつもりだつたの」

問い合わせるように身を寄せると、少女は目を丸くした。人質だつた女が急に自分から近づいてくれば、それは予想外な展開に違ひない。

「その後……？」普通に弟たちと暮らす。親父たちの残してくれた屋敷で……」

「だけど、あなたはきっと思い出すわ。人を殺したこと……それは一生あなたにつきまとい、決して消えることはない」

彼女のすべてを一蹴するつもりで私は言つた。

「そんなことない！ おれは、おれはあいつを殺せれば、それで

」

「それで、終わりではないの。殺して、そこですべてが終わるわけではない。明日も明後日も日は昇るし、世界はいつも通りに動くのよ。その中で、あなたは生きていかなければならぬ。罪の意識をまとつたまま、生きていかなくてはならないのよ」

その苦しさを、私はよく知つてゐる。罪を犯した人間がどうなるのか、いや、どうやってその後を生きていかなくてはならないのか。犯した直後からはじまる、とてつもなく長い悪夢との闘い、呵責、苦痛。すべての悪意は自分に向けられ、犯した罪の重さだけ、それは容赦なく還つてくる。

「でも、おれは……」

私が急に大声を出したからだらうか。少女は、途端に顔を歪めてへたりこんだ。

「おれ、怖いよ……」

がんがんと、頭に釘を打ちつけるような痛みを感じる。少女の絶望する顔を見ていると、嫌な思い出があふれ出してくるようだ。城に忍びこんだ理由を聞いたときから思つていた。あまりにも私に似すぎているのだ、この少女は。

「私も怖いわ。さつきだつて、誰かが私を殺しに来たと考えて恐ろしくてたまらなかつた」

そのせいだらうか。言いたくないことまで、勝手に口を突いて出る。「王さまを殺しに来る馬鹿なんていないだろ。王さまがいなくなつたらカラアは駄目になつちやうから」

そんなことはない。何故なら私は……

「でも、私は大魔法を持つていらないの」

「何で……？ 王さまが持つてるんだろ？」

ぽかんと口を開ける少女を、私は眉をひそめて見ていた。

「私は王じやないの」

馬鹿みたいだ。何故、自分から弱みを見せる。やめろ、言つな。頭

のどこかで声がするも、それに反抗するよつこ、一向に私の口は止まらない。

「だつて、リラ・ロスモレードさまは王をまだ、つてみんな言つてるぜ」

「そうね……。だけど、私は王にはなれなかつたの……」

苦しげに咳くと、少女が心配そうに私の顔を覗きこんだ。いつの間にか、私のほうが彼女よりも沈んでいた。

「あなたは逃げなさい。そう、東の塔なら、確かにここに……」

きょろきょろ見渡して、壁の端に見覚えのある落書きを見つける。落書きの矢印が薄く指差す場所には、大人の目線では気づかない、誰も目を向けないような小さなくぼみがあつた。近くにあつた小石を、そこにはめると、子ども一人が通れるくらいの小さな穴が、何もないはずの壁にぽつかりと開いた。壁を隔てた向こうは外だ。穴からは暗闇に支配された空と、そこにのんびり浮かぶ月が見えるはずなのだ。だが、あるはずのない穴は、塔の造りをまったく無視し、空の中に長く続く抜け道を出現させた。

「姉さんと見つけてよく遊んだ抜け道……よかつた、昔のままね。大丈夫、オーガスターも侍女たちも、この抜け道を知つてゐる者はいないわ」

少女は呆気に取られていたが、やがて思ひ直すよつこに首を横に振つた。

「だけど、弟たちを残して行くわけには……」

「弟を連れて來たの？ なんて」

考へなし。

やはりまだ考へが子どもだ。この少女だつてせいぜい高く見ても十三、十四、弟はもつと歳の低い、もつと考えなしな子どもであることは想像に難くない。

「私がちゃんと家に帰してあげる。だから心配しないで、早く逃げなさい」

少しだけ焦りを含んだ声で言つた。私が東の塔に来てからしばしの

時間が経過した。オーガスタなら、私たちの居場所を魔法で探し出すことなど容易い。彼のことだから、きっと見つければすぐに移動魔法で駆けつけるだろう。彼が来る前に少女を逃がすならば、一刻の猶予も許されない。

「どうしておれを逃がしてくれるんだ？」

何の疑いもなしに、少女は私に感謝の言葉を述べて問うた。何て素直なのだろう。もしかしたら、この抜け道は私が彼女を陥れるための罠かもしれないのに。弟を無事に帰すという保障はどこにもないというのに。

「あなたが私に似ているから。多分……」

自分と同じ道を選ぼうとしているあなたを見ていると、腹が立つから。

その言葉を、私は呑みこんだ。それは決して、少女への同情ではない。自分へ対する怒りだ。彼女に言つても意味はない。

「オーガスタがそろそろ来るかも知れないわ」

私は少女を抜け道に押しこんだ。彼女の細身でも少しきつそうだったが、通り抜けられないことはなさそうだ。

「なあ、大魔法使いも銀の騎士なのか？」

顔だけをこちらに向ける少女に、私は思わず微笑んだ。大魔法使いが銀の騎士なんて、どこからそんな発想が出てくるのだろう。

「どうして？」

「だつて大魔法使いは、あんたの姉さんを殺したんだろ」

衝撃が、体中を走った。

その話を、他人の口から聞く機会がまだあるとは、思わなかつた。もうこんなに時間は経つたといつのに、本当に思いがけないところで記憶は舞い戻つてくる。

「……何故、それを……」

私の唇は震え、体温は指先から急速に冷えていった。

「父さんが言つてた。今の大魔法使いは、先代の国王を殺した罪人だつて」

罪人。そう、多くの国民にとつてオーガスタは忌むべき罪人だ。オーガスタは先代国王殺しの罪で捕らえられ、しかし大魔法使いといふ不可侵の存在ゆえ、罰することはできなかつた。だから、私は彼を軟禁して常に監視状態に置いている。その事件から十年以上経つた今では、彼に警戒心を持つ者はほとんどないが、国民の中には彼を疎ましく思つてゐる者がまだ存在する。

だが、私の知る真実は国民が知るそれとは違つ。国民は知らない。姉が何故殺されたのか、本当は誰に殺されたのか、その犯人が今どんな気持ちでいるのか

「だから、怖いんだろ、あんた。自分の姉を殺した人間が側に仕え

てるなんて、気味悪いもんな」

「いいえ、それは違うわ……」

祈るように、呟いた。

「私は、私が、怖いの。……自分が、怖いのよ……」

少女が眉根を寄せる。私は彼女の背を優しく押してやつた。

「さあ、早く行きなさい。早く……」

少しだけ名残惜しそうにこちらを見つめ、少女は穴の奥に向かつて足を動かした。彼女の姿が豆粒くらいになつたのを確認し、くぼみにはめた石を外す。小さな音を上げて、穴の開いた壁は何事もなかつたように、もとの状態に戻つた。

それからオーガスタたちが来るまで、さほど時間はかからなかつた。風に乗つて、その男は何もないところから現れた。彼にしがみついていたベルイヤールが、きつく閉じていた目を開き、私の姿を見止めると即座に駆け寄つてきた。

「陛下！ ご無事でしたか！？」

「オーガスタ、ベルイヤールも。どうしたのですか？ そんなに慌てて……」

必死の形相に気づかない振りをして、私は平然と言つた。

「ど、どうしたって……！ リラさま！」

ベルイヤールは泣き出しそうな声を出した。つい先ほどまで、国王

が生きるか死ぬかの瀬戸際にあつたと思つていたのだ。その気持ち
はわからないでもない。

「姉ちゃん！」

と、オーガスターの脇から飛び出した三つの黒い影 小さな少年たちが、きょろきょろと辺りを見渡してオーガスターに憤慨した。

「おい、魔法使い！ 姉ちゃんがいないじゃないか！ 姉ちゃんはどこだ！」

なるほど、この子たちが例の弟というわけだ。どこか憎めないあどけなさを持った彼らの目線に、私は膝をついて合わせた。

「あなたたちのお姉さんなら、家であなたたちの帰りを待つているのではないかしら」

「え……」

ぽかんとした相貌が三つ、私を見つめる。

「早くお帰りなさい」

私は彼らを門の外まで案内するように侍女に言ひつけた。少年たちは考える間もなく、侍女に連れ出つて、外で待つ姉の下へ帰つていつた。

「だから、侵入者はどこへ行つてしまつたのか！ 捜索しなければなりません！」

息巻く兵士から視線を逸らし、私はため息をついて見せた。

「侵入者？ 何のことですか？」

「何のことつて、大魔法を狙つて忍びこんだ不届き者ですよー。彼の苛立ちは、聞いていて具合の悪くなるくらい伝わつてくる。私は更に深く嘆息した。

「そんなのはいません。夕方からの騒ぎは、城下の子どもたちが城に迷いこみ、管制塔で間違つて火を消してしまつた。それだけのことです」

べらべらと嘘を並べ立てる。そつは言つても半分は嘘ではないのだから、よしとしよう。

「そ、それだけって……。宝物庫が荒らされていたし、管制塔だつて見張りがいたのに、あんな子どもに入りこめるわけが……」

「ここまではつきり言わると、反撃のしようもないのだろう。兵士は明らかに私の言葉に気圧されていた。よし、もう一押し。

「宝物庫から盗まれたものはありません。それにあの子たちの小さい体なら、見張りに気づかれず管制塔に入れるかもしないでしょう」

口を突いてよく出るものだ。私は嘘を連ねながら、自分で感心していた。しかしここで、兵士も反撃の一手に出た。

「東の塔から、確かに私たちが侵入者をここまで連れてきました！ 陛下を人質にとつて、奴が逃げたところまでみなが見ていくのですよ！」

喉が一瞬詰まる。東の塔から侵入者を捕らえ、彼らは私の前に現れた。そして次の瞬間、私は少女に刃物を突きつけられていた。あのとき確かに、多くの人間が侵入者の少女を目撃した。

しかしこの兵士、何という田舎者……。私がどう反論しようか悩んでいると

「もしかしたら、お化けだつたのかもしれないよ」

脇からひょっこり顔を出し、オーガスターは楽しそうに笑った。

「おっ、オーガスターさまも見ていたではありませんかっ！ 陛下の喉元に刃物を当てて逃げる侵入者の姿を！」

捲くし立てる兵士に、オーガスターが鋭い眼光を向ける。微笑んではいるが、その瞳には少しの温かさも感じられない。

「うーん、それが本当だとして、君は明日訓練から帰つてきた軍団長殿にそう報告するのかな？ 東の塔から侵入者を捕らえてきました。だけど油断していくて逃げられ、あまつさえ陛下のお命を危険にさらすような真似までしてしまいました……と

「あつ……」

ついに兵士は万策尽きた。口をモゴモゴ動かしながら固まつた彼の背中を、オーガスターが軽快に叩く。

「あれは君が見た幻だつたのかもしれないよ？ そう、子どもたちが迷いこんだことに動搖して、君は幻を見たんだ……」

さすが、一枚舌の役者である。いや、もう役者の域は超えた。彼らはカラアーの詐欺師になれる。

私は、彼が文官と話し終わるのを待つて、側に寄つた。

「嘘つき」

開口一番、そう言つと、オーガスタは薄く笑つた。

「君もね」

「知らないわ。私はあなたほど演技が上手くないもの」

それより、と彼に詰め寄る。それだけでオーガスタは私の意図を理解したようだつた。小さく頷く。

「領主が不正に権利書を偽つていたといふ件、明日から調べさせることになった。あとは地方の役人に任せて、十中八九、彼女たちに土地は戻つてくると見ていいだろ。明らかに偽造なら、すぐに見抜けるという話だつたよ」

「そう……それはよかつたわ」

私は細く息を吐いた。

これで、彼女が領主を殺すなんて馬鹿な真似をしなくて済む。そのために大魔法を盗むなんて突飛な考えも……。

「陛下。湯浴みをなさつて、早くお休みください」

寝室の用意やら湯の用意やらをして、急いで駆けて来たのである。ベルイヤールはぼさぼさの頭で、エプロンドレスの裾を濡らしていた。普段はそんなことのない肅々とした侍女のそれに、私は驚いてしまつた。

「すみません、もう時間も時間なもので……」

視線に気づいたベルイヤールが恥ずかしそうにうつむいた。よく考えれば、侵入者がやつて来てからずいぶんな時間が経つた。一度そう考へると、どつと疲れが押し寄せてくる。

私はオーガスターと別れ、湯に向かつた。

着替えて外に出ると、ベルイヤールが壁にもたれかかつたまま、こ

つくりつくりと首を揺らしていいる姿が目に入った。

「陛下……すみませ……ん。私、何だか眠くて……」

ベルイヤールがとろんとした瞳をしばたいた。眠気を何とかこらえようと必死らしい。私は苦笑して彼女に下がるよう命じた。申し訳なさそうに一礼をして去つていく彼女だが、足取りもおぼつかないようで、見ているこちらがはらはらした。

「疲れたのでしょうか……」

誰にともなく咳き、私は自室に戻った。寝室護衛の兵が一人、屈強そうな体を反り返していたが、私を見つけると背筋を正して扉を開いてくれた。一人が大きな欠伸をして 同僚に睨みつけられていた。

真つ暗な室内に自分の影だけが細長く伸びる。今夜はベルイヤールがいないから、自ら髪に櫛を通さなくてはならない。

ところが、ランプに明かりを点けようと思つたところで、私の意識は急速に遠のきはじめた。

それは尋常でない眠気だった。

「私も、疲れたの……ね……」

足元がふわふわして、気持ちがよかつた。そう、疲れたのだ。こんなに眠くなるほど、疲れたのは初めてだ。

私は何とか寝台にたどり着いた。体を投げ出すように、そこに飛びこむ。もはや毛布を首元に寄せる気力もなかつた。

「…………眠い…………」

私は自身の体が欲すまま、深い眠りに落ちていく。

遠のく意識の彼方で、オーガスターのゆつたりとした足音を聞いた気がした……。

シルベットは大好きなかぞくです。

でも、おかあさんではありません。

だったら何なんだよ、って学校のともだちに言われました。

シルベットは『よつぼ』なんだって教えてもらいました。『よつぼ』

つていうのはおかあさんのかわりの人です。

わたしのおかあさんは、わたしをうんざり死んでしまったんだ

つて。

でも、わたしにはシルベットがいるのに、ルビーにはかぞくがいません。

だから、『じいん』って『う家』で、かぞくの『ない』子どもたちといつしょに生活しています。『じいん』には『んちゅう』先生がいるけど、あれじやあおとうさんって『よつぼ』おじいちゃんです。『んちゅう』先生はやさしい人だけど、ちょっと耳がとおすぎて話がつらじないの。

わたしのおかあさんは死んじやつたけど、ルビーは自分のおかあさんとおとうさんにしてられた、って言つてました。

だから、わたしはルビーのかぞくになつてあげることにしました。わたしは女の子だから、おかあさんのかわりになれます。だから、ルビーの『よつぼ』です。

シルベットは、ずっとフブリの『ねば』にいるからね、って口ぐせのようになります。

わたしあるつとルビーの『ねば』にてあげよつと思つます。

ずっとひゅうひ、ねばにこてあげよつと思つます。

<字数が足りりず投稿できないのですが、これ以上付け足す気はない
ので、以下管理人の独り言です。5章までお付き合いくださつてあ
りがとうございました。前6章構成となつておりますので、最後ま
でお付き合いいただければ幸いです。>

フブリは、まどろみの中、ひたすらルビーの名を呼び続けていた。その声は頭の中で反響し、いつまでも途切れる事はなかった。

「…………」

ふいに、体を揺すられる感覚。

フブリは、重たいまぶたを動かした。

「フブリ！」

耳元の大声に、はっと我に返る。

目の前にツバルの顔が唐突に現れ、ぎょっとする。男は自分の体を抱き締め、苦しげに喉を鳴らしていた。

「ツバル…………！？ あれ…………わたし…………」

慌てて途端に体を離すと、ツバルは目を細くした。

どうやら自分は、ずいぶん長い間気を失っていたようだ。火照った顔を必死に冷ましながら、頭を働かせる。そう、大樹の穴に引きずられるような感覚の後、急に気が遠くなり

「ここが、カラア？」

「多分な」

しかし周囲を見渡すも視界は一面緑に覆われていて、最果ての森と何ら変わりはなかった。

「フブリが寝てる間に、ちょっとそこら辺をうろついてきた」

ずい、と目の前に果実が差し出される。どこから拾ってきたのか、両の手にも余る巨大な果実だった。しかも、まだら模様が点々と染みを作っている。これは、俗に『腐っている』という状態ではなかろうか。

クルージュがツバルの料理の腕を酷評していたことを思い出す。

「うまいぞ。食つてみ」

フブリは丁重にそれを辞退した。

「森の外は見てきたの？」

「もうちょっと行くと、町があつたからな。多分、カラアに来れたと思ひやせ」

フブリが捨てた果実を頬張りながら、ツバルが答えた。

立ち上がり少し歩いてみるも、見えるのはやはり木々ばかりで、目新しいものは見つからない。ツバルはかなりの距離を散策してきたのだろう。

見渡す限りでは、ルビーの姿も見当たらなかつた。

「ルビー……どこに飛ばされちゃつたんだろ……」

悲愴に暮れ、フブリはポツリと呟いた。

クルージュによれば、ひとつところに固まつていなければカラアの別の場所に転送される、という話だつた。もし自分と異なる場所にルビーが転送されていたとして、それを搜すことは可能なのだろうか。遠い異国之地で一人きりになつてしまつた彼の身の安否が、何より気がかりでならない。

「……カラアにいることは確かだから、いずれ見つかるだろ」

ツバルの投げやりな返答に、フブリは複雑な気持ちを感じざるを得ない。大樹の地下でのルビーの行為を、フブリはどうフォローしていいかわからなかつた。どう考へても、あのときのルビーは様子がおかしかつた。

けれど、だからといつて彼の身を案じないわけがない。ツバルに非はないが、フブリはこの現状でルビーを責める氣にもならなかつた。

「迷ついていたらどうしよう……」

「……まあ、どうかな」

やけに曖昧なツバルの態度に、フブリは胸が痛むのを感じた。しかし何か言おうにも、彼が歩き出してしまつたため、フブリはそれに従うしかなかつた。

どれくらい歩いただろか。木々の隙間を通り抜けながら道なき道を行く。息が切れ出した頃、ようやく道が開け、日の光が見えてきた。突然飛びこむ明るい世界に思わず目をそばめる。白くぼやける光の奥には、広大な都市が広がつていた。

「……わあ……」

森を突き抜けた先は断崖だつた。山頂からの絶景にフブリは胸を踊らせた。

「これが、カラア……」

見下ろすふもとの都市は、小さな農村で育つたフブリに充分すぎる感銘を与えた。遠くにどこまでも広がる土地を見渡せば、恐らく田前のこれも、大国の中の一都市に過ぎないのだろうと予想がつく。

フブリはしばらく、その景観に目を奪われた。

二人は崖から少し迂回し、山を慎重に下りた。目前に町並みをとらえると、フブリの興奮は更に高まつた。

「でつかい……」

それしか出ないようなフブリを横目に見て、ツバルが吹き出した。けれどその目は極めて真剣だ。

「落ち着けよ、フブリ。ここは、あの『カラア』なんだからな」
フブリはクルージュの話を思い出し、気を引き締めた。理想郷とはかけ離れた国なのだと心中言い聞かせて、目の前の現実はそれとあまりに違すぎる。夢から覚めるようにと頭を振るが、どうやらこの興奮までは到底抑えられないようだつた。

天まで届きそうな高い建物は、隣家との間隔がないくらいぎゅうぎゅうに建つてゐる。道行く人の波は、閉鎖された国だからだろうか、フブリが知らない民族衣装のような服を着ていた。

初めて見る都会の喧騒に、フブリは胸を膨らませて軽快に歩いた。目にする何もかもが新鮮だつた。

「お前、人の話聞いてねえだろ……」

目を輝かせ、きよろきよろするフブリを、ツバルは無理矢理路地裏に引っ張つた。

「「」、ごめん、ツバル。こ、こうとこ、私初めてで……」

フブリは彼の言わんとすることを悟り、じどうもどろになりながら弁解した。

「わからないこともねえけどよ……。さ、まずは服をどうにかすつ

か

「え？ これ、駄目かな」

フブリは、自分の身を確認した。縁を基調とした普段通りの格好だ。
「こここの奴らを見たろ？あの格好してたほうが、目立たねえからな」

どうりで道行く人の視線がこちらに集まるはずだ。自分のいた世界では普通の服も、カラアでは異質な格好に取られてしまふらしい。服は意外と近くにあつた。というより、見渡す限り近くの建物はみなファッショն関係の店舗だつた。通りを歩く足並みも若者が多い。どうやらここは、ショッピング街のようである。

「つ、ツバル……！ 服が、ガラスの中で浮いている……！」

フブリはガラス張りのディスプレイを指差したまま、動かなくなつた。

ショーウィンドウに張りついているフブリを、慌ててツバルが引き剥がす。明るい笑顔で近寄つてくる店員は、見慣れぬ異国の服をまつた客に、明らかに不審感を覚えたようだつた。その態度には、さすがにはしゃいでいたフブリも緊張を取り戻す。

ツバルは、適当に軽そうな衣服を一着手に取ると、慣れた足取りでカウンターに向かつた。カラアの通貨はクルージュから多めに援助してもらつていたため、服を買つても路銀に困ることはないだろう。まだこちらを上目遣いで不審そうに眺める店員だつたが、表情をちらとも変えない青年に何も言えないでいるようであつた。あくまでもしらをきつて堂々としているツバルに、フブリは初めて尊敬の念を覚えた。

店の化粧室で着替えると、二人は何事も無かつたかのように外に出た。フブリが大きく息をつく。

「ツバル、すごいね」

「だろ？」

微笑むツバルの服装を改めてまじまじと見て、フブリは吹き出してしまつた。

変？ と、くるりと回ってみせる男の姿は、無理に着飾らせられた人形のようだつた。普段が黒を中心とした服装なだけに、明るい色は浮いて見える。

「なつ、なんか似合わない……」

「そう言つフブリは……んん~……」

ツバルの視線がじろじろとフブリの体中を這つた。

「可愛い！ うん、地元つ子に見えんぜ」

フブリが笑うと、ツバルが思い直すように、腰に手を当つた。

「これからどうするかねえ？」

「ルビーを探さなきや」

ついつい浮かれてしまつていて自分を恥じる。ルビーは今も一人、異国の中をさまよつてゐるのだ。これほど広大な土地なら、きっと途方に暮れでいるに違ひない。こんなところでいつも方向音痴つぶりを發揮されていたら、と思うとフブリは気が気がでなかつた。

「とりあえず飯でもどうだ？」

ツバルの指差す先には、小さなレストランがあつた。提案されて、ようやくフブリは、自分の腹の虫が鳴いてることに気づいた。

「腹が減つてちや戦はできない、つて言つしな~」

「そう言えば私、昨日の夜から何も食べてないや……」

今朝はアリカと大樹に向かい、そのままカラアへ来ることになつたため、朝食を口にすることができなかつた。それに気づいた瞬間から、ぐうぐう鳴る腹の音が、急に大きくなつてきた気がした。

「だからあの果物、食つとけつて言つたんだ」

そう言つツバルには賛同できなかつた。

レストランに入り、フブリはここでも驚いた。メニューも、食べ物も、テーブルの隙間を縫い、滑るように飛んでいたのだ。皿は、中身などお構いなしというようなスピードで飛んでいたが、不思議と中身がこぼれたり形を崩したりすることはなかつた。

「飛んでる……」

あんぐりと口を開けて空を見上げているフブリをよそに、ツバルは

服と同様、適当に料理をオーダーしていた。

やがて、自分たちのテーブルにも当たり前のように料理の皿が飛んできた。それを夢中で搔きこむも、フブリにはそれが美味しいのかどうか、いまいちわからなかつた。テーブルの上ではランプが踊り、ナップキンは勝手に自分の口元を拭いていたからである。

「魔法ばっかだ……」

店を出たフブリは、疲れ果てた声を出した。

「どこもかしこも、魔法だらけ。魔法の国って言う名前は伊達じゃないね」

見上げる空を、人が歩いている。靴に魔法をかければああいう芸当ができることを、フブリは知っている。しかしあれは靴に大変な負荷がかかるため、不安定で危ないのだ。

「魔法の国は、みんな魔法使いなのかな？」

「いや…… そうでもないと思うぜ」

ツバルも空を見上げていた。先ほどまで頭の上を歩いていた人は、もういなくなつていた。もしかしたら靴が壊れて落ちたのかもしれない、とフブリは思った。

「ほら、あいつなんか剣を持つてるだろ」

「あ。本当だ」

路地に立つて過ぎ行く人の波を見ていると、ちらほらと帶剣をしている人を見かけた。

「そうだよね。魔法は才能だつて、ルビー言つてた。どんなに頑張つてもできない人もいるつて」

幼い頃、学校で花瓶を割つてしまつたとき、ルビーが瞬きする間もなく花瓶をもとの状態に修復させたことを覚えている。思えば、初めて自分が目にした彼の魔法はそれだった。魔法使いなど、その存在すら知らない老人たちがほとんどだった農村では、誰もがその事件に驚いた。村に一つきりの新聞社が、初めて夕刊に号外をつけたのを覚えている。孤児院の院長先生など、腰を抜かして寝こんでしまつた。

「ルビーは、自分で魔法を学んだのか？」

「ううん。昔ね、村に立ち寄った魔法使いの人に教えてもらつたんだつて。私はよく知らないんだけど、そう言えれば、いつの間にか使えるようになつてたつけ」

淡々と答えるフブリに、ツバルは、ふうん、とだけ漏らした。

「その魔法使い、フブリは見てねえの？」

「私がいなきだつたの」

いつの間にか、周囲の景色はまたく変わつていた。遠くに潮の引く音が聞こえる。

「海だあ……！」

フブリは感極まって、大きな橋に駆け寄つた。目前に広がる青は、どこまでも終わりがない。沈み縹る夕日の色がそれに混じりあい、ときには相容れぬように反射して、何ともいえない情緒を醸し出していた。

旅をしてきたものの、フブリは海というものを見たことがなかつた。知識でしか知らなかつたそれに、目を奪われる。心ここにあらずといつた様子で、その青さに吸いこまれるように、フラフラと橋の欄干にしがみつく。

なんて、大きいのだろう。

川も湖も、これに比べたら、隕石のかけらのよつなものだ。

「こんなところに海があるなんて……」

「港町みたいだな」

自分を気遣つてくれていたのか、しばらく黙つていたツバルが口を開いた。船が一艘、風に帆をはためかせながら、光の波間に消えていくのが見えた。

「綺麗だね……それに、何だか」

フブリは、言葉に詰まつた。切ない気持ちがこみ上げてくる。

「何だか……、不思議に、懐かしい。海は、人が生まれた原始の場所なんだよね……」

呟くフブリを、ツバルはどこか寂しそうに見つめていた。

「『めんね。行こう、ツバル』

ところが、二人はそのまま、歩き続けることができなくなつた。橋の向こうから、ツバルの名を呼ぶ男の声が聞こえたのである。一瞬ルビーが自分たちを見つけたのだと思った。しかし、目を凝らせば声の主が、まったくの別人であることはすぐにわかる。ツバルは、その人物を見止めると、肝をつぶしたような顔をして動かなくなつた。

「ツバルじゃないか……！？」

男は目を丸くして駆け寄ると、周囲を気にするように見回し、路地裏に二人を押しこんだ。フブリは突然の出来事に、なされるがまま従うしかなかつた。

「お前、いつの間に戻つたんだ！？」

男の言葉に、今度はフブリが目を丸くした。

『戻つた』？

「俺は、お前が無実だつて信じてたんだ。クルージュは生きてるのか？ バレッタさまは……」

「やめろ！」

ツバルが、小声だが気迫のこもつた声で、男のそれを止めた。普段のひょうきんなツバルからは想像できない、真剣な瞳に声を呑む。彼が動搖するのを、フブリは初めて目にした。

バレッタという人物はわからないが、クルージュのことは知つている。ツバルの態度から察するに、自分には聞かれたくない話のようだ。ツバルが、フブリを背に隠した。すると男が、閉口したまま動かないフブリの存在に、ようやく気づいた。何かを確かめるように、少女を凝視する。

「お前……その子はまさか『例の』……」

それを聞いた瞬間から、フブリの足は走り出していた。

カラアに『戻つた』ツバル。

『例の』フブリを捕まえたツバル。

カラアへ自分を導いた『クルージュ』。

何てことだろう。何故ツバルが、ここまでついてきたかが、こんな形でわかるなんて。

もし、彼がカラアの人間だつたら？

理由はわからないが、自分を襲つた人間たちと共に謀して、自分を狙つていたとしたら？

自分を追いつめるためにカラアへ案内した？ クルージュの協力を仰いで？

仮説は、いくらでも湧いて出てきた。もつと冷静になつていればよかつた。思い起こせば、確かにルビーの言つていることは的を射ていたのだ。

わかつてはいた。しかし、納得したくはなかつた。
ツバルは、大人で、優しくて、とても素敵で……。

けれど、ルビーは、いつだつて正しかつた。

どうしてあのとき、彼を信じてあげられなかつたのだろう。
どうしてあのとき、彼を怖いと思つてしまつたのだろう。
後悔が、体中を覆いつくした。

「…………ルビー…………！ ルビー！」

必死で走る彼女の背後に、彼はもう、迫つていた。
「待て！ フブリ！」

ツバルの声に、少女の体が振り向くことは、なかつた。

「……波の音……」

自分にしか聞こえないほどの、小さな声だった。

「陛下。もう少ししたら、ここを出ます」

ベルイヤールがノックの返事も待たずに扉を開けた。地につきそなほど頭を垂れている。

「わかりました」

私は、彼女を振り向こうともしなかった。自分のために宛がわれた無駄な装飾の多い部屋で、ぼんやり窓の外を眺めている。私がもつとこじんまりした質素な部屋を好むことを、主人は知らなかつたのだろう。

いや、これが、一国の王に相応しい待遇なのだ。間違つてはいない。私は、絶え間なく聞こえる波の音に、軽く耳を塞いでみた。即位した直後は、この音が嫌いでたまらなかつたことを思い出す。

「ベルイヤール」

部屋を後にしようとする侍女を、呼び止めた。

「私は、いつここを出るのですか?」

ベルイヤールは、何か言いたげな顔をして、深く嘆息した。

走るフブリは、すぐにツバルに追いつかれた。

強い力で腕を捕まれ、逃げようがなくなった。

「いや! 離して!」

がむしゃらに体を揺するも、簡単に押さえこまれてしまつ。

「落ち着け、フブリ! おれの目を見ろ!」

ツバルは、フブリの両手を引き寄せ、顔を近づけた。目を逸らそうとする彼女の顎を掴み、無理に自分のほうを向かせる。フブリは、

視線を合わせたまま、凍りついたように動かなくなつた。揺らぎのないツバルの双眸は、少女をとらえて離さない。

二人、固まつたまま、時間だけが過ぎた。

「……落ち着いたか？」

しかし、ツバルを見つめるフブリの目は懷疑に満ちていた。わずかに潤んだ少女の瞳にツバルは少なからず動搖したようで、一瞬視線をそらした。

「少し早いが、すべて話す。落ち着いて聞けよ」

その提案に、返事をする気にはならなかつた。

フブリの大聲で野次馬が集まつてきていたため、ツバルは場所を移すことにしてたようだ。人通りの少ない路地へ逃げるようになつて移動する。フブリはうつむいたまま、黙つてそれに従つた。

「おれは確かに、カラア生まれの、カラア育ちだ。騙していたことは謝る」

噴水がある小さな通りで、ツバルは静かに頭を下げた。フブリは、何を話されても動じるつもりはなかつた。ただじつと、彼を見つめている。

「フブリ、カラアは、お前の本当の故郷なんだ」

一瞬、心臓が跳ね上がるかと思った。耳を疑つも、目の前のツバルは依然真剣な表情を崩さない。

「シルヘットが、よく最期に伝えたもんだとthoughtよ……」

口元を無理に引き上げながら、ツバルは視線を落とした。

震える唇を塞ぐ。フブリの鼓動は、もはや体を突き破りそうなほど強く波打つていた。

「おれも、シルヘットも、クルージュも、先代のカラア国王に仕えていた。シルヘットは侍女で、おれたちは王を守る近衛だつた」電気が体中を流れるような、衝撃が走つた。脳天から痺れしていくような感覚に、眩暈を感じる。

「王の名は、バレッタ・コスモレド。フブリ、お前の本当の母親は

……

「何、言つてゐるの……？」

わななく唇が、かすかに漏らした。

「私、王さまなんて知らない。カラアなんて知らない」

「フブリ、落ち着け」

意識が混濁し、涙が出そうになつた。突然、自分が自分でないものになつた気がして怖かつた。

そんな真実を、このタイミングで、知りたくなどなかつた。

「何言つてるのよお！？」

フブリは力の限り、腹の底から叫んだ。

私は宿を出ですぐに、華美な馬車に乗ることになつた。従者の目を盗んでそつとため息を漏らす。町の視察が嫌いなわけではない。ましてや、町 자체が気に食わないとか、波の音が耳障りなわけでもない。

ただ、私は、疲れていた。

ここ数年、体の重い日が続いている。まだ自分の体は若いはずだったが、急に歳を取つたように、すべてが億劫になつてしまつた。考えることも、人の目を気にすることも疲れた。まして先日、城に侵入者が忍びこみ、少なからず私の命を脅かした事件があつたばかりである。精神が確実に磨り減つているのを実感せざるを得ない。馬車へ足をかけるとき、私はふと、遠くを見やつた。言い争つような声が聞こえたのだ。

声の主は、まだ幼い少女と金髪の青年だつた。

若いカツプルの痴話喧嘩か、と視線をそらそつとして、言葉を失つた。少女の容姿が、まぶたの裏に焼きつづく。

一瞬私は、夢を見ているのかと思つた。その少女は、あまりにも似すぎていたのだ。

気が動転して、彼女から目を離せなくなつた。すると、少女の周り

だけがスポットライトを当てたように突然暗くなつた。私は心臓が飛び出るかと思つほど、鼓動が速くなるのを感じた。

少女はゆつくり、振り向いた。そして、私の姿をとらえ、笑い出した。

まるで道化を見たように指を差して、腹を抱えて笑つてゐる。

激しい嘔吐感に襲われた。

「陛下？ どうなさいましたか？」

ベルイヤールの声が聞こえた気がしたが、それはすぐに私の思考を素通りした。

「何故……今頃……」

少女の笑う顔が、忘れかけていた暗闇の記憶を呼び戻す。心臓が張り裂けそなへらい脈打つて苦しかつた。

殺してやる。

耳元で声が聞こえた。私は震える両手で耳を押さえた。この声を聞くのは本当に久しぶりだ。

ふらつく足を、雑踏に向けて一步踏み出してみる。駆け寄る侍女たちを振り払つと、私はまっすぐ少女のもとへ向かつた。不思議と、一步一歩進むたびに足取りは軽くなつた。私の行動に困惑した従者たちが追つてきているのだろうか。背後から連なる足音が聞こえる。けれど、私は人ごみの中を、ためらつことなく通り抜けた。

銀髪の少女が、私を見て笑つてゐる。

ああ、考えていた通りだ。

少女に一步一歩近づくたび、思考はクリアになつていくようだつた。やらなければいけない。やつてしまえばいい。

私は、腰元に差した護身用の帶剣に手をかけた。

＊＊＊

フブリは錯乱していた。

落ち着け、とツバルに囁かれても、もう声にならない声しか出てこ

ない。

喚き声が聞こえたのか、フブリたちの周囲を歩いていた民衆の視線が、ちらほりと集まってきた。ツバルは慌てたようだが、フブリにとつてはどうでもいいことだった。

また路地裏に自分を連れこもうとするツバルから逃れようとして、フブリは、こちらに向かってくる一人の女性に気がついた。やわらかな茶髪の女性。一般人の服装とはまた違う、不思議な出で立ちだった。

「だれ……？」

迷いなく自分のもとへ向かってくる彼女から、フブリは目が離せなかつた。女性は、まるで怖いものでも見たように、全身を強張らせていた。

彼女は何を怖がっているのだろう。

ぼんやり考えていると、ツバルがフブリを押しのけ前に出た。

「リラ！」

金属の重なる音と同時に、声は聞こえた。

その男の大声で、止まっていた時が動き出したように突然視界が開け、体の動きが止まる。雑踏のざわめきも聞こえてきた。気づけば、少女に帶剣を振り下ろしている自分と、それを剣で止めている男がいた。

銀髪の少女は、にこりとも笑つていなかつた。

「お前……は」

剣を止めている金髪の男には、見覚えがあつた。

あまりの驚きに、声が出ない。彼は不敵に笑うと、私の剣を簡単に撥ね返した。わずかな衝撃に身体が仰け反る。

「フブリは、まだ殺させるわけにはいかねえんだ」

フブリ。

そう、そんな名前だつた。

剣を弾かれ、それを握り締めていた右手が、じんじんと疼いた。

「陛下！ どうなされたのですか！？」

背後から従者たちの声が聞こえたときには、少女たちの姿はどこにも見えなくなっていた。

見渡せば、周囲にはたくさんの野次が集まっていた。ざわめく大通りに、自分を中心とする人の輪ができている。私は震える声で呟いた。

「……追ってください……」

ベルイヤールが、困惑した表情を浮かべた。

「彼は、姉を殺した反逆者、ツバル・リアノーラです。あの二人を、追ってください」

私は、呼吸を整えはつきりと、言葉をつなげた。右手の痛みが、少女が幻でないことを、物語つていたのである。

少女の腕を強引に引き、ツバルは裏道をひたすら走った。後ろを振り向くこともせず、薄暗い通りを突き抜ける。

「痛い！ ツバル離して！」

ツバルからの返答はなかつた。彼の額には汗の玉が浮き、フブリが今まで見たことのないような険しい表情をしていた。それだけ彼に余裕がないということだ。

「ツバル……」

だから、フブリは何も言えなかつた。問い合わせたいことはたくさんあるが、今がそのときでないことは全身で感じてわかる。迷つたが、彼について、とりあえず逃げなくてはいけないと本能で悟つた。

「見つけた！ こつちだ！」

「早く騎士を連れて来い！」

そう遠くない背後で声が聞こえた。一人ではない。数人の足音もそれに紛れて向かつてくる。

「ちつ……手際よすぎだぜ」

ツバルは小さく舌打ちをして、フブリを通路のくぼみに押しこんだ。

「つ……！」

突然のことにつぶりの顔が歪む。しかし、フブリが小さな痛みに驚いている一瞬の間に、それは現れた。突如日の光を遮る、巨大な影。全身を銀色の甲冑に身を包んだ、大きな騎士が立つている。

その体躯は、細い裏道を歩くにはあまりに窮屈そうだ。しかし環境によつてその動きが鈍ることはなく、一目見た限りではとても重そ

うなその鎧の腕を、騎士はまるで空氣のように軽く持ち上げた。

「銀色の、騎士……」

フブリは、自分を隠すように立つてゐるツバルの影から、ぼんやり彼らを見つめた。一年前、村に火を放つた騎士だ。間違いない。

くっくつ、とツバルが喉の奥から漏らした。

「銀の騎士まで連れて来てたのか……。遠征先でも抜かりがねえな！ リラア！」

叫ぶツバルの身体は、いとも簡単に銀の騎士に跳ね飛ばされた。あまりに速すぎて、フブリはそれを目で追うことができなかつた。ただ見えるのは、黒い壁に背をつけて崩れ落ちたまま、動かないツバルの姿だけ。

「ツバル！」

ツバルの右手から力なく剣が落ちる。

「あ……」

フブリは震える身体を必死に押さえこんだ。少しでも気を抜けば涙が出そうな戦慄を覚える。ツバルがこんな簡単に倒されたなど、フブリには信じがたかつた。彼の強さを知つていて、衝撃は大きい。

銀の騎士は、ツバルの腕を引きずるようにして無理に立たせると、踵を返した。ツバルがフブリの体をくぼみに押しやつてくれたため、彼らはその存在に気づいていないようだ。

最後の力を振り絞ったのか、ツバルは弱々しく顔を上げて、フブリにウインクして見せた。彼の唇がかすかに動く。

「いいか……スラム街へ行つて、旧女王派と合流しろ。そのピアスを見せねばわかるはずだ」

フブリは涙目になりながらツバルの声に耳を傾けた。引きずられていく彼の身体は握りつぶされた紙のように小さかつた。

「それから、あいつには気をつける。あいつは、恐らく……」

ツバルの声は段々遠くなつて、やがて聞こえなくなつた。

一人、薄暗い通路に残され、フブリは身体を震わせた。目をこすり、恐怖を少しでも感じないように走り出す。

ツバルの身が心配だつた。彼は、何故銀の騎士に捕まつたのだろうか。

フブリは彼が銀の騎士たち おそらく襲撃者 の仲間であると

思っていた。ルビーの推測もそうだった。銀の騎士がカラアにいるとわかつた以上、フブリの命を狙っているのがカラアの人間であるということははつきりした。ツバルは、先代国王の近衛であつたと言っていた。では、その近衛が騎士に捕まる理由は何なのだろう。また、自分たちに身分を隠して近づいた理由は？

カラアに来てからわからないことばかりが怒涛のように押し寄せて、フブリは混乱の海原に一人取り残された。

これからどこへ行けばいいのかわからない。スラム街など、探せるのだろうか。こんな得体の知れない国に一人残され、無事に帰ることができるのだろうか。唐突に不安が思考を支配した。一度そう考えると、恐怖は決壊した防波堤のように次から次へとあふれてくるのだ。

「ルビー……ツバル……私、どうしたらいいのかな……」

どのくらいの時間が経過したのだろうか。途方もなく歩き回って、ようやくフブリは道らしい道へ抜け出た。

大きな通りを歩く人の数は昼間より格段に減つており、いつの間にか日が落ち、空が暗くなっていたことに気づく。ようよると近くのベンチに腰掛け、遠い空を見上げた。カラアの星は故郷で見た星とまったく同じ空に浮んでいて、フブリは涙がこみ上げてきた。胸が痛くなる。

「何泣いてんだ、ねーちゃん」

声が聞こえた。

フブリは首をもとに戻したが、『じし』じ目をこするも、そこには誰もいない。きょろきょろ辺りを見回すと、こつちだこつち、という声が足元から聞こえた。

「女の子がこんな時間に一人で出歩いてたら、おかされるぜ」
フブリの腹の辺りまでしかない、小さな少年だった。年のころは五、六歳といったところだろうか。背丈に合わないダブダブのオーバーオールをまくり、手織り綿の帽子を田深に被っている。

「……こども……？」

フブリがきょとんとしていると

「こどもあつかいすんじやねーよー。おれはもう七さいだぜー。」

むつとした様子で少年は息巻いた。

「あ……、『』、『めん』

フブリは反射的に頭を下げた。その瞬間、張り詰めていたものが解けたのか、突然腹の虫が鳴いた。頭を下げたまま硬直し、頬を染めるフブリを少年が覗きこむ。

「ねーちゃん、腹減つてんのか？」

「……そうみたい」

ますます赤くなるフブリを見ると、少年は思案に暮れるように腕組みをして、黙ってしまった。

「ここで何してんだ？ もしかして行くところないのか？」

フブリは小さく頷いた。

「……おれのアジトに来るか？」

「アジト？」

「ホントはなかま以外は駄目なんだけど、ねーちゃん悪い奴にはみえねーし、困ってる奴は助けろって父ちゃんが言ってたからな」

少年はフブリのスカートの裾を引っ張った。よろよろ立ち上がる。

「あ、ま、待つて」

「アジトにはねーちゃんみたいな、親にすてられて行くところない奴 いっぱいいるかんな。寂しくないぜ」

フブリの言葉などお構いなしに、少年はフブリの手を引いた。再び暗い路地裏に入り、少年は何を思ったのか狭い通路の隅に置かれたたちまち一人はバケツの中に吸いこまれた。

フブリが訝しげにそれを見ていると、少年はバケツの底から一枚の紙を取り出した。不思議な文様の描かれたそれに彼が足を乗せると、たちまち一人はバケツの中に吸いこまれた。

「ひゃああ！」

フブリは頓狂な声を上げた。今まであつた薄暗い街頭が、夜空が、汚れたポリバケツがない。何もない真っ白な空間を飛んでいる。身

体が宙でぐるぐる回転しているような感覚だった。少年の小さな腕を離さんとばかりにきつく抱きしめる。

「あわわ……」

「何だよ？ いどうまほー初めてなのか？」

少年はあっけらかんと聞いてきたが、フブリは頷く余裕すらなかつた。

「私魔法使いじゃないのに、移動魔法なんて使えないのに…」

「まほう使いが一般人用に作った、いどうまほうじんだよ。今はそんな珍しくないぜ？ ねーちゃんどんなイナ力から来たんだ？」

少年の声が耳元を通り抜け、フブリが気を失いかけた頃、ようやく回転が止まつた。

フブリは、地面に大の字になつて転がつていた。吐き気がして咄嗟に口元を押さえこむと、少年が困つたように頭を搔いた。上体を起こし見上げれば、そこには先ほどと變らない真つ暗な空と、点在する星の群れ。しかし、周囲の景観はまったく變つていた。

「……こー、どこ？」

密着して立ち並ぶ建物は、まとまりのない雑居の群れだつた。そろかしこに壊れたフェンスや落書きが見える。建物の隙間から小さな呻き声が聞こえ、フブリは思わず立ち上がりつた。目を凝らせば、道端で眠つていたり、壁にもたれかかつたまま動かないでいたりする人影が目に入る。閉鎖された空間のような印象を受ける。あまり治安のよさそうな場所とは思えない。

「もしかして、ここってスラム街！？」

「え？ ああ、そうだけど」

先ほどまで呆けていたフブリが突然叫んだものだから、少年は目をぱちくりさせた。

「じゃあ、旧女王派つて知つてる！？」

「つ！ ねーちゃん、まさか国王の手下か？」

フブリは大きく首を横に振つた。

「私、ツバル・リアノーラつて人に言われてここに来たの」

「あんた……それは本當かい？」

フブリの問いに答えたのは、少年ではなかつた。

それほど若くない男が数人、フブリたちの背後に立つてゐる。フブリは一瞬たじろいだが、男たちの物腰はやわらかく、こちらを傷つける意思がないことがわかつたため緊張を解いた。

「ツバルさんがカラアに戻つてきたのか

「ツバルが……」

彼らは、口々にぼやき嬉しそうに顎を合つた。会間に感嘆の声が漏れる。

「このピアスを見せると言われたの」

耳元の髪を搔き揚げると、男たちは驚いたようにフブリを見つめ、一斉に跪いた。突然思いもかけない行動を起こされ、フブリも少年も一驚を喫し、立ち尽くすばかりだつた。

「……バレッタさま……」

誰かが呟き、しばらくして、中央の男がフブリに恭しく手を差し伸べた。

「どうぞ、こちらへ。ぼくたちは旧女王派のメンバーです。我々は貴女をお待ちしておりました」

フブリが案内されたのは、雑居の中にひつそりと隠れた薄汚れた建物だつた。一見すると一般人の住まいにしか見えないが、中は思いのほか広い。宿を開業できそうな数の部屋、終わりの見えない螺旋階段、いくつか厳重に施錠された扉もある。そのどれもが鉄の匂いを漂わせ、重苦しい雰囲気をつくつていた。踊り場には小さな灯りが灯つていて、それだけでは階段全体を照らすには至らず、フブリは薄汚れた壁に手をつきながら進んだ。触れる壁からひんやりと冷たい感触が走る。風通りがいいのか、通路は寒いくらいの冷氣に包まれていた。

最上階の鍵を外し、男は丁寧にフブリの手を引いて中へ入つた。生唾を飲みこんで、恐る恐る扉の隙間を覗きこむ。そこは、大きな円

卓一つと椅子が無造作に並べられた、会議室のような造りになっていた。円卓の周りにはたくさんの老若男女が集まり、何やら真剣な面持ちで会話をしたり、地図を広げたりしている。しかし彼らはフブリの姿を見止めると、口々に何かを囁きあい、額き合つた。室内は一気にざわめいた。

「よひこそ、フブリさま！」

「お会いできて光榮です」

部屋に入ると、すぐに数人の男女が駆け寄り、フブリを押すように頭を下げた。

「え、あ、頭上げてください！」

フブリは申し訳ない気持ちでいつぱいになり、彼らよりも深く頭を垂れた。慣れない敬称がくすぐつたくてたまらない。

「このように接せられるのは慣れませんかな」

しわがれた声の老人が、フブリに歩み寄つた。小さな腰を痛そうなくらい折り曲げている。

「みな、貴女がカラアへ来てくださるのを心待ちにしていたのです」「それはどういう意味ですか？ 私、本当に何もわからないんです」フブリはうな垂れた。

「貴女は何も聞かずにここに来たのですか？ それでは貴女の母上、バレッタさまのこととも？」

「ツバルから少しだけ、聞きました……。でもそんなこと信じられなくて、私、混乱してしまって。ツバルから詳しく聞く前に、彼は銀色の騎士に連れて行かれてしまつたんです」背後で静聴していた集団が色めき立つた。

「そうですか、ツバルは囚われてしまったのですね……」

「ツバルは私をかばつてくれたんです。でも、どうして彼が私に正体を明かさずに近づいたのかわからぬ。クルージュも、王さまの近衛だつたんでしょう？ けれど彼もそんなこと一言も話してくれなかつた」

フブリは早口で連ねた。できることなら疑問のすべてを吐き出して

しまったかった。

「彼らなりに、貴女を気遣つたのでしょうか。貴女がまさか王の娘カラアの正統な第一王女であるなどと、言つても信じてもらえないと思つたのではないですか」

老人の瞳にまっすぐ射抜かれ、フブリは思わず喉を詰まらせた。途端に鼓動が速くなる。

「……その、それは本当、なんですか？ 私が、王女なんて」

恐る恐る尋ねると、老人はおろか周囲の旧女王派たちも微笑んだ。

「貴女のしているピアス……それはバレッタさまのものです」

無意識のうちに、フブリは自身の耳たぶに触れた。シルヘットからもらつたステイックピアス それが、まさか母のものだとは知らなかつた。

「貴女は紛れもなく我らの愛するバレッタ・コスモレド国王陛下の御子。フブリ・コスモレド王女です」

続けざまに言られて、二の句が告げなくなつた。シルヘットの娘だつたフブリ・トリバンドラムという存在が、あつさりとなくなつてしまつた。その現実を呑みこむのは、やはりまだ時間がかかるようと思える。

「さあ、こちらへ。少し長い話になりますかな……。お茶を用意してもらいましょう」

老人にエスコートされ、フブリは円卓の奥に連れて行かれた。古びた扉が一つ、薄暗い角に浮かび上がる。不安げに辺りを見回すフブリに気づいたのか、老人は彼女の歩に合わせてゆっくり手を引いた。窓が一つきりの、小さな個室だった。手作りと思われる木のテーブルに、椅子が四つ置いてあるだけで他は何もない。月がもの悲しそうに空に浮び、少しだけ開いた窓から涼しい風を送りこんだ。

「どうぞ、フブリさま」

老人に促され腰掛けると、女性が白いティーカップを差し出した。

「あの、さまつていうの、やめてください。私は、そんな風に呼ばれるような人間じゃないし」

女性は田をぱちくりとさせたが、困ったように微笑んで退出してしまった。

「突然環境が変ったのだから、惑つのも無理はありません。そのうち慣れますがよ」

「そうは思えなかつたが、女性に申し訳ない気持ちもあつたので、はあ、と曖昧に言葉を濁した。

「旧女王派って何なんですか？」

小さな部屋に老人と一人、押しこめられているという状況は腰が浮いてしまう。フブリは单刀直入に聞いた。

「そうですね。では、我々旧女王派が結成されたことの顛末からお話ししましょう……」

老人はなかなかティーカップに口を運ばないフブリにそれを勧め、彼女が一口飲みこむのを待つてから、話しあじめた。

「十五年前、その事件は起きました。フブリさま、貴女がお生まれになつた年です。当時の国王はバレッタ・コスマロード陛下。その先代の王、つまり貴女の祖父母さまはすいぶん前に崩御され、バレッタさまは貴女の年の頃にはもう国王に即位されておいででした」自分年の頃には。それを一瞬想像しようと試みるが、とても十五歳の国王など簡単に浮んではこない。

「女性でも、王さまになれるんですか？」

「カラアでは、王家に男女の区別はありませぬ。たとえバレッタさまの後に男の御子がお生まれになつていったとしても、第一王位継承権は長女のバレッタさまにあります」

外界から閉ざされたカラアなりの風習なのだろう。フブリにとつては特殊に感じることが、カラアの人間にとつては当たり前のことなのだ。改めて、カラアと自分の住んでいた世界の遠さを知つた気がした。

「お母さんは、私を産んでもぐに死んだとシルベットから聞きました。それは本当ですか？」

「哀しいことですが、眞実です」

一縷の望みをかけて聞いたのだが、それは儂くも打ち砕かれてしまつた。シルヘットの言葉を信じていなかつたわけではない。だが、もう一度確認せずにはいられなかつた。

「でも、お父さんは生きてるんですね？」

その質問に、老人は難色を示したようだ。あまりよい返事が期待できないことを、フブリは彼の瞳から悟つた。

「貴女のお父上は、名のある伯爵家の『長男です。ただ……バレッタさまと結婚してすぐに病に伏せられ、そのまま帰らぬ人となりましたが……』

「そう、なんですか……」

急に力が抜け、フブリは椅子にもたれかかつた。もとより、本当の父母のことなど知らぬまま、自分は死んでいくのだろうと思つていた。だから、それを今更知つたところで驚きはあれども哀しみはない。肉親の死でも、まるで他人事のように案外簡単に受け入れられるものようだ。

「ですが、母上さまは病死ではありません。十五年前、バレッタさまは寝室で何者かに命を奪われました」

一息に言われ、フブリは一瞬耳を疑つた。

「え……」

凍りつくような空気が個室を包む。しかし老人は表情一つ変えず、淡々と続けた。

「ツバル・リアノーラはバレッタさまの優秀な近衛でありましたから、そのとき事件の現場で犯人を捕らえようとしたしました。しかしツバルは力及ばず、バレッタさまは重症を負い、シルヘットの助けのもとカラアを出て貴女さまを産んだ直後に息絶えたのです」

「お母さんは、誰かに殺されたんですか！？」

色を失い、思わず立ち上がる。手元のティーカップが力チャリと搖れた。母が自分を産んでもすぐ死んだことはシルヘットから聞いて知つていたが、まさか殺されていたなど、知る由もない。

「そうです。そして、バレッタさまを殺したのは、リラ・コスモレ

ド。……現在のカラア 国王であり、バレッタさまの実の妹君です更なる衝撃がフブリを襲う。

「い、妹……？ お母さんの妹が殺したって言つんですか？ そんな、まさか……」

「リラ・コスモレドは狡猾な女です」

フブリの戸惑いを覆い隠すように、老人は語氣を強めた。

「王位欲しさに姉を殺し、その罪をバレッタさま直属の幼い三人の近衛に着せました。それがツバル・リアノーラ、クルージュ・エーレブルー、そしてオーガスター・ササンクロスの三人だったのです」

オーガスターという名前は聞いたことがなかつたが、ツバルとクル

ジュが母の近衛だつたことはもう知つている。

愕然とした。母を殺した上、その罪をツバルたちに着せ、自らはのうのうと王の位についている、リラ・コスモレドという女。彼女はまんまと国王の位を手に入れたのだ。

「王位、王位なんかのために……？ 自分が国王になるためにお母さんを殺したんですか！？」

フブリには信じがたかった。実の姉を、そんなもののために殺したというリラの考えが少しも理解できない。一国の王位というものはそれほど価値の高いものなのだろうか。家族を自らの手で傷つけてまで欲しいものなのだろうか。

老人はフブリが落ち着くのを静かに待ち、カップに口をつけた。薄暗い室内に沈黙が落ち、フブリは興奮する自分を落ち着かせ、座り直した。

「三人は濡れ衣を着せられ、国を追われました。ただ一人、オーガスターさまだけは囚われ王城に残りましたが、それぞれが散り散りになり身を潜めて、蜂起するときを待つていたのです」

「リラに、復讐するときを……」

うつむいたまま、視線だけを老人に向けると、彼が頷く姿が見えた。

「その一方で、バレッタさまの死に疑問を持った民は少なくありませんでした。あれば信頼のおける臣下であつたツバルたちが、バ

レッタさまに牙を向くなど考えられなかつたのです。そうした疑問を持つた者たちがいつの間にか集いはじめ、身を潜めて機を待つてゐるツバルたちの存在も知りました。こうして旧女王派ができたのです

老人はそこまで言い終えると、お茶の残りを一気に飲み干した。

「バレッタさまは当初、シリヘットと共にうまく逃亡し、どこかで生きていると思われておりました。しかし、その希望が打ち砕かれけれど同時に、貴女さまがお生まれになつていたということを知つたのです」

希望、という言葉が胸に突き刺さつて痛い。旧女王派の歴史が長いこと、彼らが団結力の強い組織であることは、建物に入つたときから感じていた。彼らはすつと、リラを王の台座から引きずり落とし、彼女に報復する日を夢見てきたのだ。そんな哀しいことを、ずっと希望にして生きてきたのだ。

老人は硬直したまま動かないフブリに、優しく微笑みかけた。

「フブリさまは、我らの新しい希望です。貴女さまが先頭に立つて、我ら一同蜂起する日を、ずっと待ち望んでおりました……」

「すげー！ おうじょさまだぜ、おうじょさまー！」

「ヴィティムは静かにしてなよ！ 失礼でしょ！」

「お前こそだまつてろよー おうじょさまを連れてきたのはおれなんだぜー！」

「あんた実の姉に向かつてその口の聞き方はどーなのよ！ いい加減にしな、このガキ！」

「いてて！ てめーふざけんなよブスゴリラー！」

ぎやあぎやあ足元で喚く一人の子どもにぼんやり視線を落として、フブリはため息をついた。

老人と一対一で話して個室を出てから、彼女の周りには旧女王派が絶え間なく押し寄せた。彼らは憔悴しきつたフブリのことなどお構いなしに、彼女を拝み、口々に贊美の言葉を述べて去つていった。自分が王女である事実を未だ呑みこめないでいるフブリとしては、それらが苦痛でしかない。そそくさと最上階の広間を後にし、付近の踊り場に座りこんで今に至る。

頭が重かった。もう、しばらくは誰とも会いたくない。

「よオ……」

ところが、この王女殿下に無謀にも軽々しく話しかけてくる男が現れた。どことなく他の旧女王派とは毛色が違つよう見える。

「久しぶり

「……え……？ 誰？」

久しい覚えなどまったくなかつたフブリは、まじまじと男を見つめた。三十、四十代……だろうか。それほど若くはない。濃朱の短髪に、黒い瞳。顎の辺りには無精ひげが生えている。彼はツバルよりも長身で、その細身に合つた、ゆつたりとしたローブを着ていた。

「あんときは真っ黒だつたから覚えてねエかな……。ほら、こんな

フードかぶつてさア……

男は頭に布を被るようなジエスチャーをして見せた。フブリは思わず彼を指差す。

「温泉街の、魔法使い！？ バイトを雇つてた！」

「覚えて頂いて、光榮だね！」

にやりと口の端を上げ、男は足元で言い争いを続けていた二人の子どもの間に割つて入る。

「おれはイエリコ。こっちの氣の強え娘が姉貴でオリヴェンサ。で、ちつこいのが弟のヴィティムだ」

オーバーオールの少年 ヴィティムは、イエリコの腕の隙間から横目で姉を睨みつけた。一方の姉、オリヴェンサも口の端を引っ張つて対抗している。

「おめへら、喧嘩も大概にせーよ」

「だつて父ちゃん、こいつうるせーんだもん！」

ヴィティムはイエリコの後ろに隠れながら、顔だけを出してあつがんべをした。

「うるさいのはあんたでしょ！ このバカ！」

「バカつて言つほうがバカなんだぜ！ バカバカ！」

「あーうるせエガキどもだぜ……」

困つたように頭を搔く男をじつと觀察するも、なかなか温泉街で会つた魔法使いと彼を同一人物として認識し難いものがある。黒いフレードの奥から見えた鋭い眼光が印象に残つていて、あのときはまさか彼が一児の父親だとは夢にも思わなかつた。

しかし、自分を暗殺しようとしていた魔法使いが旧女王派にいると、いうのはおかしくないか。

「……あなた、旧女王派じゃないでしょ？」

肩をすくめるフブリに、イエリコは苦笑した。

「ああ、あんときはおれ、リラの部下だつたからなア……。いやア、すまん、すまん」

フブリは更に嫌悪の眼差しを男に向け、身を固くして一歩後ずさつた。

「そんな怪しい目で見るなつて。まア、あんときバレッタの娘を仕留められなかつた、つてことでクビになつたのぢ……。そんで行くとこねエし、仕方なく旧女王派にいるつてわけよ」

場を和ませようとしているのだろうか。大げさに両手を上げてみせるイエリ「だつたが、かつて自分を殺そうとした相手に笑い返せるはずもなく、フブリは冷たい視線を投げ続けた。

「じゃあ、やつぱり襲撃者たちはカラアの兵士なんだ。今の国王……リラが、私を殺そうとして刺客を放つた……」

憶測が現実になつたことが辛くて、フブリは下唇を噛んだ。今まで自分の命を狙つてきた襲撃者たちが、国王リラ・コスマレードの部下であることは容易に想像がつく。彼らはカラアの存在が外界に洩れることを恐れ、何も知らないバイトに『フブリ・トリバンドラムを暗殺する』ことを命じた。そうして間接的にフブリを始末しようとしていたのだろう。

リラは、姉だけではなく姪の自分までも殺そうとしていたのだ。

「そういうことだな。おれがバレッタの部下やめてリラの下に就いたときも、姉が生きてるかもしれない、私を殺しに来るかもしれない、つてすげエ取り乱してたのを覚えてるぜ。そいやつて怯えるような臆病者なんだ。リラ・コスマレードって女は

「あなた、お母さんにも仕えてたの！？」

渡り上手というか、卑怯者というか……、その仁義なき生き方に驚きを通り越して呆れてしまった。

「まあね。渡り奉公が信条だからな。長いものには巻かれろつて奴か？ なア、オリヴェンサ」

「オヤジは最低なコウモリ野郎なんですよ。だからお母さんにも逃げられて、いい年なのに家すら持つてないんです」

父親譲りの長い赤髪を揺らして、オリヴェンサは鼻を鳴らした。

「ふーん……」

フブリは殊更彼を冷眼視した。

「おいおい、余計なこと言うなよ、オリヴェンサ。ヴィティムはそ

「なんこと言わねェよな？」

実の娘とフブリの白い目が思いのほかダメージを『えた』ようだ。さすがにイエリコは苦笑して、ヴィティムの頭を撫でた。

「父ちゃんはウラギリモノだつて、ここのみんなは言つてるぜ！ いどーまほうじん作れるから生かしてるつて」

イエリコはがくりと肩を落とした。そのリアクションが何だか可笑しくて、フブリは建物に入つてから初めて笑つた。

「……おれは本当はあんなもん作りたくねエんだ。一つ作るのに時間も精神力も浪費する上、一回飛んだだけで壊れちまう」「だからいどーまほうじんつてすげー高いんだぜ」

子どもらしいジェスチャーで、ヴィティムは大げさに両手を広げてみせた。フブリが興味津々に耳を傾けてきたため、得意そうである。「ここにつながつてたポリバケツも、移動魔方陣だつたんでしょう？ そんな高価なもの、あんな簡単に使つちゃつてよかつたの？」

「あれは簡易移動魔方陣。まア、本場のミニチュア版つてとこだな……。簡単に作れるが、その分飛べる距離は一キロ以内」

「だから、アジトの入り口を隠しておくのには最適なんです。本当は表通りのすぐ近くにここはあるんだけど、あのポリバケツから飛ばないと、この場所には決して来れないの」

父に続いて、オリヴェンサがフォローした。一瞬でとても遠いところに移動したような氣でいたが、実際はそれほどでもなかつたらしい。カラアの魔法技術の発達力には圧巻せられる。

旧女王派の数人に呼ばれ、イエリコが軽く手をふつて階下へ降りていつた。壁にもたれ、ずるずると腰を落す。ちょうどヴィティムと同じ目線になると、彼は首を傾げた。

「ねーちゃん、疲れてんのか？」

「え……？ うん……そうかもね」

実際自分の身体が疲れているような自覚はなかつた。しかし現在の行動を冷静に分析すれば、これは疲れているという状態なのだろう。

「ねーちゃんは、おれたちを助けてくれるおうじょさまだもんな。

そりや疲れるぜ」

ヴィティムの言葉に、フブリは違和感を覚えた。

「助ける……私が、助けるの……？」

「王女さま？」

首を真横にするくらい折り曲げて、オリヴェンサは顔を覗いてきた。隣のヴィティムも不思議そうにしている。

「ヴィティム……。リラ・コスマレドって……今の国王がまつてどんな人なの？」

「おれはよくわからんねえけど、旧女王派のおひちやんたちは今の王さまは駄目だつて言つてる」

「それは、実のお姉さんを殺したから？」

「ぐり、と両の首が動いた。

「もうすぐ本当のおうじょさまがやつてきて、リラを殺してくれるつて。そしたらおうじょさまが王さまになつて、カラアは助かるんだつて言つてた」

ヴィティムは得意げに笑つてみせた。オリヴェンサも嬉しそうに笑つてフブリの膝にしがみつく。

「ねえ、王女さまはあたしたちを助けにきたんでしょう？」

「でも、そんなこと言われても、私は……」

できない、という言葉がはつきりとは出てこなかつた。喉の奥でしこりのようになつて、フブリは思わず眉をひそめる。

「私は國を救うなんて、そんなことのできる人間じや、なくて……」

ただの、十五歳の女の子です。

王女なんかじやありません。

「私は……」

けれど、頭の奥ではつきりと発音されてくるはずの言葉は、声になつてくれなかつた。それが、変えようのない現実だからだ。今逃げても、必ず自分について回る現実だからだ。

突然、歓声が聞こえた。はつとする。

「こよいよ反逆の徒、リラ・コスマレドに正義の鉄槌を下せる日が

やつてきた

踊り場からそつと覗きこむと、会議室の円卓を囲うようにして多くの旧女王派が立ち上がりしている姿が見えた。中には小さな子どもの姿も見える。彼らの視線は、恐らく旧女王派のリーダーである老人に集中していた。

フブリは、ぼんやりと老人の演説を眺めていた。だから、自分がメンバーに促され、旧女王派の面前に立たされるまで、まともに話を聴いてはいなかつた。彼らの声は耳を素通りしていった。老人がフブリを中央に立たせた。それが、自分にコメントを求めている行為だと知っていても、フブリには何を言つていいものかわからぬ。室内は水を打つたように静まり返り、聴衆はフブリへ向かって一際熱い視線を送つた。

何かを期待している瞳だ。

その期待するものが何なのかを、フブリは知つてゐる。けれど、それに応える自信はない。浮き足立ち、視線を室内に這わせ、うつむくことしかできなかつた。

「フブリさまがついていらつしやるんだ！ 失敗する気がしねえよ！」

誰かが叫んだ。

「リラに正義の鉄槌を！」

それに呼応するように一人、二人 重い静寂が支配していた室内は、一気に大歓声に包まれた。しかしフブリは、うつむいたままだつた。握りしめたままの拳がわずかに湿つていてことに気づいても、うつむき続けている。

「これでやつとりラを国王の台座から引きずり降ろせるつてもんだ

！ 一週間後が楽しみだぜ！」

「……一週間後？」

不安そうに老人を見ると、彼は迷いなく頷いた。

「一週間後、我々は王城へ乗りこみます。計画は何年もかけて熟考してありました。残すは計画の要となるフブリさま、貴女の存在だ

けだつたのです」

「ちょ、ちょっと待つてください。王城に乗りこむなんて、私は……」

納得していません。

言葉はやはり出てくれなかつた。

「王都は遠い。このときのために作つた移動魔方陣で、数人の旧女王派が王城へ向かいます」

彼らにとつてはあらかじめ計画されていた作戦なのだろうが、つい先ほど真実を知つたばかりのフブリにとつて、それはあまりに唐突な展開だつた。

「旧女王派はここにいる我らだけではあります。王都や城内には別働隊が潜んでいます。彼らが城に火を放ち、それを合図に我々も乗りこみます」

フブリは青ざめて、首を真横に振つた。

「火を放つ！？ そんなの駄目！」

それだけは何があつても駄目だと思った。その炎が自分の村を襲つたこと、それによつて多くの人間が苦しんだことをフブリは身をもつて知つてゐるのだから。

「ほんの威嚇です。リラを引きずり出したら、すぐに我々の手で消火する手はずになつてゐるのです」

「でも、そんな……」

けれど、彼らのリラに対する憎悪を、自分はどれだけ理解できると いうのだろう。何年も、復讐する口を待ち焦がれて、それだけを原動力にして生きてきた彼らを。

「フブリさまは、リラが憎くはないのですか？」

怖いものでも見たように、フブリは老人を見つめた。

「貴女さまはバレッタさまと同じように、心優しい方であると我々は思つています。お辛いのでしたら、強制はいたしません。けれど、我々は……」

老人は一息ついて

「貴女さまにリラを殺して頂きたいと思つてゐる」
はつきりと言葉を連ねた。

背後で止まぬ歎声が、一瞬聞こえなくなつたように思えた。老人の
その一言だけが切り取られ、頭の中をぐるぐる回つてまとわりつく。
「殺す……、殺す……！？ そんなことしなくとも、國の人たちに
私が名乗り出れば信じてもらえるでしょう？」

唇が震えているのがわかる。その動搖を老人は見透かしているよう
だ。フブリを不安にさせないようにと微笑んで何度も頷いて見せる。
彼の瞳はとても優しい。そのとても優しい瞳を持った人間が、人殺
しをしようとしている。

「いいえ、リラはここ数年で少しずつ国王としての地盤を築きつつ
あります。突然現れたバレッタさまの御子……それを信じるもののが
いかほどのことか」

「……でも、私、人を殺すなんて」

「リラをこのまま野放しにしておくわけにはいきません。現実問題、
フブリさまのお命をも彼女は奪おうとしている。あの王を生かして
おけば、またいつ十五年前と同じことが起こるとも知れません。形
だけでいいのです。彼女の首は我らが刎ねる。その後で、それはフ
ブリさまがなさつた正義の行為であると公言すればいい」

「私……」

ひどく疲れた。唇が乾いて、もう動かない。

背後の歎声は未だやむことを知らない。

「さあ、フブリさま」

老人が、フブリに差し出したのは、装飾の少ない短刀だつた。

「貴女の母親を殺した女です。貴女を國から追いやり、あまつさえ
ツバルやクルージュ、シルヘットを不幸へ導いた女です」
シルヘットの名が思わずところで飛び出し、フブリはどきりとした。
正直、バレッタという実母がリラに殺されたという事実にはピンと
くるものがない。もつと時間が経てば違うものなのかもしれないが、
今はそれを心の底から受け入れたという気持ちにはなれなかつた。

だが、シルヘットの思い出を焼いたのはリラだ。

リラが銀の騎士をフブリたちの村へ送らなければ、今でもフブリはルビーと共に、村で平和に暮らしていたのだ。

養母の作る煮豆のスープの匂い。

彼女のエプロン、日なたの匂い、暖かい家族の抱擁。

思い浮かべるシルヘットの顔は、年を追つごとに風化して、ぼやけていった。彼女の顔を思い出せなくなつてしまつことが何より哀しいとフブリは思う。

火を放つのは嫌だ。

けれど、考えてみれば、それを先に仕掛けてきたのはリラのほうではないか。

王位などという下らないものを求め、実の姉を殺して、姉の部下を貶めて、そんなことが許されるはずがない。

リラを殺せ

リラを殺せ

リラを殺せ

「リラを……」

意識は高揚する旧女王派の歓声に呑みこまれ、消えていった。

朝が来た。

宛がわれた個室で着替える。城で働く侍女の制服だ。もしものときのために、と旧女王派が用意してくれた。短刀を腰にくくりつけると、もうもとの自分ではない気がした。

「私は、フブリ・コスモレド……」

鏡に向かうと、それは自然に滑り出た。けれど、先週までのような違和感はない。それを受け入れたからだろうか。むしろ言葉にすることで妙に落ち着く。

これは仇討ちだ。親の仇を子が討つ それはとても自然なことだ。
何も間違ってはいない。何も……

「よオ……もう出立かい？」

階段の途中でイエリコに会つた。下ばかりを向いていたフブリは、それに気づかず危うく衝突するところだつた。

「あなたは行かないの？」

「おれは信用されてねエんで……。子守兼留守番さ。移動魔方陣作つたのはおれだつていうのに冷てエよなア……」

フブリが苦笑すると

「餓別だ……旧女王派が信じられねエと思つたら開きな」

イエリコが四つ折の紙片を差し出した。

「城壁は魔法を吸収するけども、城壁を左にずっと伝つていくといことがあるぜ……」

その説明だけでは疑問が残るもの、フブリはとりあえず礼を言つて彼を通り過ぎた。

先発隊は既に早朝、王都へ向かっている。魔方陣の数は少ないため、それこそ数名の精銳だけが先に乗りこむ手はずになつていた。今頃はもう、王城に潜んでいるという旧女王派が火を放ち、先発隊が城へ斬りこんでいるはずである。やはり火を放つという行為だけはま

だ、しこりのようにならぬつて辛かつたが、フブリはそれを忘れようとした。仕方のないことだ、と言いきかせ自分を納得させる。

移動魔方陣は、正方形の厚みのあるタイルだった。薄いピンクの光が四隅から漏れている。

「あちらへ行つたら、フブリさまは後方で待機されているだけで新しいのです。何も心配することはありません。貴女が我々を見守つてくださるというだけで、旧女王派の士気は上がるこことでしょう」魔方陣を前にしてじつとしている、老人が優しく微笑んだ。彼は足手まといになるため、ことが済んでから王都へ向かうと聞いた。

「私が先に行きます。フブリさまは、それに続いて魔方陣を踏んでください」

若い男がフブリの手を引き、あ、と漏らす間に、フブリは男に続いて魔方陣の中へ吸いこまれていった。

ゆらゆら漂つような、心地よい感覚。それは、ヴィティムと共に吸い込まれた。ポリバケツの中とは、明らかに異なる。遠くでかすかにきらめく光の粒子に、全身が呑みこまるような感覚を覚え、フブリはきつと目を閉じた。

次の瞬間、耳をつんざく喚声と熱気に眩暈を感じてよろめいた。火の粉と砂埃が目の前で舞い上がる。それは煙と共に立ち昇つて、真っ白な城壁を無遠慮に覆っていた。

立ちぬくすフブリを、共に移動してきた旧女王派の面々が引きずるようにはじまつて城から遠ざける。フブリはじつと城を見つめながら、彼らに連れ立つて視界をふさぐ砂埃の中を走った。

これほどまでに巨大な建築物を、フブリは見たことがなかった。遠くに広がる終わりのない白い城壁。天まで届きそうな城門。城郭を更に囲う兵士たちは、どれも屈強そうな大男ばかりだった。そこに果敢にも旧女王派のメンバーが挑みかかる。彼らは兵士と違つて軽装なはずなのだが、兵士たちも突然の襲撃に混乱しているのだろう。フブリが一目見た限り、旧女王派のほうが優勢のよう見えた。

銀の騎士の姿は見えない。彼らがもじいたら、と心のどこかで案じ

ていたが、どうやら杞憂だつたようだ。先発隊が対処したのだろうか。数年間、緻密な計画を立ててきた彼らのことだから、銀の騎士に対抗するすべも考えていたに違いない。

金属の交わる音、誰かの悲鳴、喚声、炎が爆ぜる音。兵士が旧女王派の男に斬りつけられる場面から、フブリは目を逸らさなかつた。彼は胸を押さえ、倒れこみ、地に伏して動かなくなつた。見るからに頑強そうな鎧の隙間から、鮮血があふれ出し、土を染める。それは、あまりにあつけない命の終わりだつた。

「フブリさまがいらしたぞ！」

誰かが叫んだ。

喚声は歓声に変り、まるで彼らの勝利が約束されたかのように、旧女王派は喜び合つた。

しかしフブリは、戸惑つていた。迷いはもうないはずだつた。だが、現実は想像していた以上に重くのしかかる。一国の城へ攻めこめば、当然誰かが命を落とす。『フブリ・コスマレド』になるということはそういうことなのだ。考えなかつたわけではない。しかし、できれば考えたくはなかつた。やはりまだ、自分は現実から逃げているのだ。

「フブリさまは後方へ！」

耳元で叫ばれ、フブリは自分が前進していることに気がついた。

「でも……」

今、戦況はどうなつてているのだろうか。リラはもう殺されたのだろうか。あまりに城から離されて、フブリは落ち着かなかつた。フブリを守るように囲んでいた旧女王派の一人が前線へ飛び出し、それと同時にフブリも旧女王派の隙間を縫い、城へ向かつて走り出した。自分を呼ぶ声が背後から聞こえたが、フブリは振り向かなかつた。母親を殺した女を、見てみたい。

巨大な城を前にして、フブリは唐突にそう思つた。

会つて、何をするのだろうか。彼女に短刀を突き刺すのか、それとも窮地に陥つた彼女をせせら笑つてやるのか。

わからない。ただ、衝動的に足が動いた。

城門を死守する兵士たちをすり抜ける自信はない。裏に回るうとも、どこまで走つても城壁に終わりはなさそうだ。ふとポケットの中に手を入れ、ある感触にたどりつく。取り出すると、それはイエリコからもらった餓別だった。紙片には不可思議な模様が書きこんである。

「簡易移動魔方陣……！」

フブリは小柄な身体を生かし、兵と旧女王派の隙間を軽々と抜けた。背後の追跡は完全にフブリの姿を見失っていた。城壁をひたすら左へ進むと、少し離れた場所に見慣れたポリバケツを見つけた。迷わずバケツの蓋を開け、紙片を放り投げるよう地に落とし、飛び乗つた。くるくる回るような感覚とともに、体がポリバケツの中に吸いこまれていく。フブリは田の前に広がる白い空間の先に、無意識に手を伸ばした。

「い、つた…………！」

着地の際に、頭を強く打つ。天井が一重、二重にも見える。フブリは瞬きを繰り返し、頭をさすりながら立ち上がった。

「うう……たんこぶができる…………」

自分の着地の仕方が悪いのか、イエリコの魔方陣が悪いのか、とにかくフブリはこれを仕掛けた魔法使いの男を少しだけ恨めしく思つた。

そう遠くない場所から喚声が聞こえる。フブリは周囲を見渡した。イエリコが元・城に住める魔法使いであつたことを考えれば、ここは城内であると考えて間違いないだろう。彼の卑怯な性格を考えれば、城に何も言わず自分だけの脱出経路を作つていた、という仮説がしつくりくる。

「あいたッ！」

何かに頭を小突かれ、フブリは前のめりに倒れこんだ。振り返れば、そこには喚きながら突進してくる鶏の群れ……

「わ、わ…………！」

「ケツ、ケツ、と耳元で騒がれ、フブリは慌てて出口を探した。

敷き草と羽が体中に張りついて、なかなか前進できない。

「もう、何でとこを移動先にしてるんだよ！」

鶏たちの攻撃を受けていると、何やら焦げ臭い臭いがして、フブリは嫌な予感を感じた。小屋の隅から煙が上がっている。

「火が回ってきてる！」

小さな攻撃を体中に受けつつ外に飛び出ると、鶏たちは颯爽とどこかへ駆けていった。

むせかえるような血の臭い　悲鳴にも似たような、混沌する喚声、淀んだ空。目の前にそびえ立つ城壁を隔てた向こう側に、戦場が見える。フブリは息苦しさを感じて、鶏小屋から一度離れた。小さな火の粉が小屋の角に燃え移り、煙を生み出している。フブリは上着を脱ぐと、煙を吸いこまないよう口元を押さえながら火元を消した。

外の喧騒に反して、中はひつそりと静まり返っていた。旧女王派の姿も見えない。兵士は表に総動員されたのだろうか。城内の警備は恐ろしく手薄になっているようだ。精巧な造りではあるが、城の内装は決して華美なものではなかった。だだっ広い真っ白な床が延々と続くばかりである。ただ、そのスケールの大きさには驚かされる。高い天井と、それを支える巨大な柱に、フブリは見入ってしまった。

「おい」

背後からの声に、フブリは瞬時に身を硬くする。慎重を期して歩いていたつもりだったが、その兵士の足音には気づかなかつた。

「まだ逃げていなかつたのか？　侍女は……いや、お前見慣れない顔だな。どこの所属だ？」

所属。そう、自分は今、侍女の制服を着ている。しかしアドリブでかわそうにも、上手い機転が思いつかない。黙したままのフブリに焦れたのか、兵士が一步踏み出した。じりじりと後ずさり、足元に何かが触れた。横目で確認したそれは、誰かが落とした剣だつた。兵士はその存在に気づいていない。

顔全体をすっぽり覆っている兜は頑丈そうだ。けれどこれしかないとフブリは腹をくくり、素早く剣を取り、彼の背後に回る。相手は着ている鎧の重さゆえ、動きがフブリよりも鈍い。

今だ。

彼の一瞬の隙をつく、そのチャンスは今しかない。生睡を飲んで鞘を握る手に力をこめる。考える前に、フブリは鞘のまま剣を振り下ろした。

「！」、「ごめんなさい！」

出せる力を振り絞って、兵士の頭を殴打した。しかし、やはり女の力では彼を氣絶させるには至らなかつたらしく、彼はフブリに向かって反撃してこよつとした。兜に覆われ顔は見えなかつたが、明らかに殺氣立つている。

その動きが尋常でなかつたため

「「めんなさいいい！」

フブリは無我夢中で、鞘を兵の頭に振り下ろし続けた。

「重いなあ……よくこんなもの毎日つけていられるよね……」

床でのびている兵から失敬した鎧と兜に身を包む。そのびひりも重い上に、サイズが大きすぎて合わなかつたが、城内を歩き回るには顔の隠れたこの姿が最適だと思い、我慢した。

近くで足音が聞こえた気がして、フブリは慌てて柱の影に隠れた。数人の兵士が通路を通り過ぎる。のびてている兵士を鶏小屋の中に隠しておいてよかつた。

どれだけ進んだらうか。何度か兵士とすれ違いそうになり、その度に肝を冷やしながら渡り廊下を走つた。走るといつても、慣れない鎧姿である。他者から見たら、それはとても滑稽な姿であるに違いない。

突き当りの門をくぐると、大きな庭園に出た。

普段ならば、朝露に濡れた草花が景観を彩り、蝶がその周りに弧を描いて飛び回るのだろう。そんな情景が目の裏に思い浮かぶ。しかしそこは今や、煙の充満する火の海と化している。庭の隅に建てら

れたガラス張りの温室にも、火の手が迫っていた。

「怖い……怖い……」

すぐ傍でか細い声が聞こえて、フブリは身を強張らせた。

女が一人、火の海の中に立っている。

「姉さん、オーガスター、助けて、助けて」

フブリは、その女性に見覚えがあった。何かに怯えているような瞳、軽いウェーブのかかった流れる茶髪。彼女は、港町でツバルに斬りかかってきた女性だった。

「消えて……お願い、消えて……」

女は、手持ちのショールで小さな火の粉を振り払っていた。そんなものでこの火の勢いを止められるはずもないのに、何度もその行為を繰り返している。彼女の背中はとても小さく、ひどく弱々しく見えた。

「リラ……」

フブリは小さく呟いた。

女は気配に気づいたのか、突然フブリのほうを振り向いた。身を隠すこともせず立ち尽くしていたフブリは、はつとして顔を逸らす。しかし考えてみれば、鎧を身に纏っているのだから、顔を隠す必要はない。

「そこあなた！」

「は、はい」

反射的に背筋を伸ばしてしまった。

「お願い……！ プランターを移すのを手伝ってください。お願い……」

「リ……国王陛下は逃げてください！ ！」は火が回って危険です

「花を残しては行けません！」

リラは今にも泣き出しそうな表情に反して、はつきりした大声を上げた。

「それに、まだ城の中には移動魔方陣が足りず逃げ遅れた臣下たちがたくさんいます。非力な侍女たちもまだ残っていることでしょう。

私は一国の王として、城の安全を守る義務があります。最後まで残つて、すべてを見届ける、義務があります」

それは、先ほどまでおろおろしていた女性とは別人のような、毅然とした態度だった。

けれど、彼女の声は震えていた。声だけではない。身体も小刻みに揺れて、瞳には涙が溜まっていた。

彼女がリラ・コスマロード。

お母さんの仇。シルヘットの仇。そして、お母さんの、妹……。

彼女を、私が

「殺す……？」

温室から城内へプランターを移し終えると、リラは安堵のため息を漏らした。さすがにすべての植物を移動させるとはできなかつたが、それは彼女も承知の上のようだつた。

「ありがとう」

「いえ……」

リラは、ほつとしたのか少女のような笑みを浮かべて見せた。

「あなたは外の加勢に行つてください。できれば城の中に逃げ遅れた者がいなか確認しながら……」

しかしその瞬間には真剣な面を作。それが国王としてのリラの顔なのだろうか。

「国王陛下はどうされるのですか？」

「私は

リラの言葉は続かなかつた。否、それより大きな音に遮断されたのだ。

その音は頭上から聞こえた。城壁の一部が剥がれ落ち、落下してきたのだ。巨大な白壁が目前に迫り、フブリは逃れようとして、立ちはぐくんだまま空を見上げるリラを田の端にとらえた。

「リラ！」

フブリは考える前に飛び出していた。

崩れ落ちる塊。轟音が静寂の中に響き渡り、やがて消えていく。砂埃が宙を舞い、一瞬目の前が真っ白になった。

足元に飛び散つた破片がパラパラと転がつていく。

「あ、ありがとう……」

リラの声が耳元を通り、フブリは自分が彼女を抱きしめて転がつていたことに気づいた。後ろを振り向けば、つま先からあと一步のところに城壁の塊が砕け散つて転がつていた。我ながら、重い鎧のままでよく動けたものだと思う。

「リラ！」

唐突に突風が舞い、切り開かれた青空の中から男が現れた。

「オーガスター！」

「大丈夫か？ 怪我は？ 近衛隊が捜していたぞ。こんなときに一人でいるなんて……」

オーガスターはリラのもとに駆け寄ると、へたりこんだままの彼女に手を差し伸べた。立ち上がるも、女の両足はまだがくがくと震えている。

「だいじょうぶ……この人が、私を」

リラが振り向いたときには、そこに兵士の姿はもうなかつた。

「火を放つたのは、旧女王派らしい」

沈痛な面持ちでオーガスターが漏らし、リラは下唇を噛みしめた。

「来たのね……つ、ついに……」

「大丈夫、落ち着いて」

リラを安心させるためか、オーガスターは彼女の肩を叩き、その目線に合わせ腰を落とした。

「私を殺しに来ただわ。わたしを……」

「私に、この暴動を鎮圧してくるよう命令しなさい」

視線を合わせようとしないリラに、オーガスターはきつく言った。

「命令するんだ、リラ！」

びくり、とリラの身体がかすかに動く。

「…………」

リラは、初めてオーガスタの存在に気づいたかのよつこ、よつやく彼の目を直視した。

「オーガスタ……」

彼女の震える口元が小さく動く。

「とめて……」

「わかっている。私が、必ず止めて見せるから」

決然と言い切り、オーガスタは宙に手をかざした。彼の手の平が淡く光り、フブリは柱の後ろに隠れながら、息を呑んでそれを見つめた。

一瞬の出来事だった。瞬きをする間もなく、庭園の火は消え、煙はなくなり、温室に残されていた花たちは勝手に城内へ飛んでいった。転がっていた城壁の塊ですら、影も形もなくなっていた。見上げれば、何事もなかつたように傷一つない城壁が高くそびえている。

「君はここにいなさい。すぐに兵をこちらに向かわせるから、ここでじつとしているんだ。いいね？」

リラは何も言わずに頷いた。

微笑むオーガスタの身体は徐々に透け、空に溶けこむように足元から青くなつていった。彼が今しがた消え去つた虚空を、リラは座つたままじつと見つめていた。

フブリは走った。

移動魔法を使いこなし、一度に複数のものに『呼びかける』ことができる魔法使いを、初めて目にはした。今の魔法使いが只者でないことをくらい、魔法を使えないフブリにもわかる。

彼が言葉どおり旧女王派を止めに行つたとして、それは可能なのだろうか。多勢に無勢、と思いたいが、明らかに彼の力は常軌を逸している。

もし旧女王派の反乱が制圧されたら

「…………制圧、されたら……？」

何がどうなるというのだ。フブリは自問した。

リラを殺して、自分が国王になることができなくなる。恐らくそういうことなのだろう。

「私、王さまになりたいわけじゃ……」

しかし、なる義務はあると思っていた。バレッタ・コスマレドの娘である以上、国民のために、旧女王派のために王になるべきだと思った。それが、母やシルヘットへの弔いになると信じて……。

真っ赤な絨毯の敷かれた長い階段を駆け下り、フブリはいつの間にか薄暗がりの中を走っていた。外に出るつもりが、地下まで降りてしまっていたのだ。

暗闇に目が慣れず、奥のほうはよく見えない。手探りで壁を探し、鈍い痛みを感じて慌てて手を離す。ささくれ立つた木のテーブルに触れたのだ。木の破片が指に刺さっている。フブリが引き返そうとしたそのときだった。カチヤ、と金属の擦れる音が聞こえた。

誰かいる。

それほど遠くないところにかすかな人の気配を感じる。フブリは迷つたが、外に出ても手をこまぬくことしかないと判断し、奥に進むことにした。

緊張に喉を鳴らし、ささくれが刺さらないように注意しながら、テーブルの上を慎重に撫で回した。人差し指が冷たいものに触れる。その腹を撫で上げ、頂点の細い金具にたどり着いた。じつと目を凝らし、それが手持ちのカンテラであることを確認する。近くを探ると、簡単にマッチも発見できた。

灯りを点して、フブリは全身の毛が凍るような感覚に襲われた。そこは、牢屋だった。

牢の数は半端でない。あまり手入れがされていないのか、フブリが触ると錆びついた柱の表面が簡単に剥がれ落ちた。ただ一つ救われたのは、そのどれもが中に人のいない状態であったことだ。

白骨化したそれはおれども。

フブリは身を斜に構え、奥へ進んだ。足元を黒いものが走り抜ける。

「ひつ……」

咄嗟に足を避けると、その隙間を縫つて、一匹のねずみが鳴きながら暗闇の奥へ消えていった。

「はあー……」

体中から気が抜けた。同時に、力チャリ。物音が聞こえる。

「……だ……」

人の声だ。確かに、奥のほうから聞こえる。フブリは恐る恐る、カントラを伸ばした。最奥の牢……だろうか。揺れる灯りの奥に、錆びついた鉄の格子が並んで見える。一本の足。声の主は、だらしなく足を伸ばして寝転んでいた。

「誰だ？ タ飯はまだ早えぞ？」

暗闇の牢にまるでそぐわない間の抜けた声が聞こえて、フブリは頬を紅潮させた。

「ツバル！」

先ほどまでの恐怖など忘れて、フブリは牢に駆け寄った。男は怪訝そうに眉をひそめて、田の前の甲冑を見つめた。

「何だ、オマエ？ ……その声、女？ ……フブリか！？」

フブリは何度も頷いた。頭の兜を外そうとするが、笠手が邪魔で上手くいかない。それはとりあえず諦めて、目前の錠前を外すことにした。しかし肝心の鍵は近くには見当たらない。

「待つてて、ツバル。今鍵を探してくるから……」

「フブリ」

腕をつかまれた。格子の隙間から、ツバルの手が伸びている。

「辛い目に遭わせて、ごめんな」

「な、何で、謝るの？」

ツバルは握る手に力をこめた。鎧に身を包んでいるから、そんな些細な感覚などわからないはずなのに、痛いくらい掴まれているように感じた。水風船が破けるように、唐突に感情のたががはずれる。

「あ、あれ……私、おかしいな……。哀しいことなんてないのにな

……」

とめどなく涙があふれてきた。ツバルといふときは、何故か辛い気

持ちを押さえこめなくなつてしまつ。吐き出したいものが自然にあふれて止まらなくなる。不思議だ、とフブリは思った。

「鍵は三階の看守室にあるはずだ。……無茶はするなよ」

ツバルの微笑がまるで何年も見ていなかつたように思えて、フブリは大丈夫、という言葉を発することすらできなかつた。次々にこみ上げてくる感情の荒波を押さえることで精一杯だつたからだ。兜のせいで目をこすることもかなわなかつたから、瞬きを何度もした。

「ツバル、待つててね。私が絶対、助けてあげるから！」

急いでもと来た道を引き返す。

壁を隔てた向うに聞こえていたはずの喧騒は、いつの間にか小さくなつていた。もしかしたら、先ほどの魔法使いの介入によつて、旧女王派が負けたのかも知れない。

看守室には人つ子一人おらず、鍵は思いのほか簡単に手に入つた。再度地下に降りてツバルを救出することも容易いことだつた。フブリはツバルの手を借りて、重い鎧と兜を脱いだ。涼しさにほつと息をつくも、体中汗でベトベトになつていた。

「こうなつてゐることは、旧女王派は攻め入ることに成功したんだな？」

がらんとした城内を駆けながら、ツバルは問つた。

「う、うん……。多分……」

フブリは、リラを助けにやつてきた魔法使いの動向が気がかりだつた。城内に兵がないのは、旧女王派の勢力に圧されているからな

のか、それとも旧女王派を制圧してその後始末をしているからか。旧女王派にとって旗色が悪い状況だつた場合、自分は一体これからどうすればよいのだろう。ツバルが傍にいることは心強いが、やはり多少の危惧も残る。

前を走つていたツバルが、フブリの動きを制す。彼は人差し指を立ててフブリに目配せをした。通路の角から、そつと視線を這わせ彼が足を止めた原因に、フブリは驚いた。

「ルビー」

茶髪の少年。紛つことなき、ルビーの姿だ。フブリは駆け寄りつと
して、躊躇つた。

少年はリラと対峙していたのだ。

「……あなたがフブリ・トリバンドラムを連れてきたのですね？」
「申し訳ございません……。ご命令どおり、できる限り、止めたつ
もりだつたのですが」

少年はうつむいて答えた。

「そんなことはもうどうでもいいのです。あなたでは頼りないから、
私がわざわざ暗殺の刺客を送つたといつのに、結局あの子はカラア
に来てしまつた」

小刻みなリズムで、リラの靴音が響く。苦渋に満ちた彼女の表情には少しお余裕も窺えない。

「やはりあれは、国王陛下が……！」

くぐもつていた声が、突然はつきりなものに変わつた。ルビーは何か言いたげに口を開けつつとして思い直し、そのまま黙りこんでしまつた。

「あなたやオーガスターには、もう任せられません。オーガスターだつて、フブリ・トリバンドラムがカラアへ来られないようにするという約束を破つたではないの！」

びくり、少年の肩が震える。

「リラさまは、フブリ・トリバンドラムを殺さないと言つていたで
はないですか……」

「殺さなければ、私が殺されます！」

リラの怒声が耳の奥に響く。

「見なさい、外を！ 旧女王派がいよいよ動き出したのです！ こ
のタイミングで！ どういうことがわかりますか？ フブリ・トリ
バンドラムが彼らを導き、私を殺そうとしているのです！」
頭を抱え、リラは苦しげに息を吐いた。怯えた小動物のようなそ
瞳に囚われ、対峙するルビーは、ぴくりとも動かなかつた。

リラが彼一人を残し、その場を去つても、硬直したまま動かない。フブリは一步、踏み出した。

「ルビー……？」

少年は、怯えたような目つきで、フブリを見つめた。

「うそだよ、ね……ルビー。嘘でしょ？ 「冗談だよね？ ねえ、笑つて、答えて……ねえ……」

ルビーの返答はなかつた。頭を深く垂れたまま、何の動作も示さない。

「うそ……。ねえ、答えてよ……！ ルビー！」

いつもみたいに笑つて。「冗談だよつて。

言つてよ、と呑みこんで体を震わせた。

気を抜けばすぐにでも涙があふれてきそうでたまらない。意識が混濁し、冷静に状況把握をすることすらままならなかつた。

色素の薄い茶色の頭が静かに上がり、ルビーはその物憂げな瞳を初めてフブリと合わせた。それはまるで、フブリを哀れんでいるかのような瞳だつた。

「本当の、ことです」

鋭い衝撃がフブリの体中を走つた。

まるで雷が直撃したような感覚に、硬直し立ちすくむしかない。

「だましていたんです、フブリさん。あなたを、ずっと

ルビーの聞きなれない敬称が、更にフブリを圧迫する。これは、ルビーの自分自身に対する免罪なのだろうか。

「う、嘘だあ……ルビーは私と一緒にずっと村にいたじゃない。カラアのことなんか知つてゐわけない。そ、うだよ……ずっと小さい頃から一緒に……だつたじやない……」

必死に笑顔を作つてルビーに対峙するも、彼の瞳があまりにも真剣なので、言葉がつながなくなつてしまつた。

「なんで……？ 何で国王の部下なんかになれるんだよーー！」

フブリはついに、喉の奥から悲愴な叫び声を上げた。それを皮切りに、こらえていた涙があふれ出して止まらなくなつた。

見上げると、ルビーの冷ややかな瞳がフブリをじっと見つめていた。

その目が本当に別人のようで、フブリは恐ろしいやうに悲しいやう胸がいっぽいだつた。

すべてが、今この一瞬で壊れてしまつたのだ。

つい数時間前までは、大切な幼なじみだつた。同じ村で生まれ、同じ村で育ち、同じ時間を生きてきた。シルヘットの死も一人で乗り越えた。旅に出た後でさえ、辛いときも悲しいときもいつも傍に彼がいた。

唯一の心の拠り所だつたルビーがいなくなることなど、フブリは今まで考えたことがなかつた。

考える必要がないと、思つていた。

信じていた。

「どうして……!? 説明してよ、ルビー！」

フブリはいつしかルビーの胸を、固く握り締めた拳でがむしゃらに叩いていた。立ち廻くしたままのルビーの体がその振動に合わせて微妙に動く。

「どうして……」

弱々しく咳くと、フブリはそのままルビーの胸に顔を突つ伏した。震える拳が、力なく振り下ろされる。

「ぼくは、クイルビー・ウォルケットじゃない」

はつきりと、耳を貫く衝撃。

フブリは、その言葉の意味を理解できなかつた。

少年の胸に埋めていた顔を恐る恐る上げる。がんとしたルビーの表情が深く胸裏に焼きつき、痺れた頭から何かが体中を駆け巡るのを感じた。

「あ……あ、あ……」

フブリは頭を抱え、喉の奥から蚊の鳴くような声を発した。ゆっくり意識が遠のいていくのを感じた。足の力が抜け、ふらつく。ぐらぐら揺れるフィルターがかつた視界の奥に、ルビーを見つけて

手を伸ばすが、届かなかつた。

目を閉じる。真っ白な意識の果てに、フブリは幼いルビーを見つけた。

手招きをするルビーの奥には、食事をしているルビーが、その隣には眠つてゐるルビー……

『それ』は、思い出の中を駆け巡り、ゆっくりフブリの中に沈んでいく。

「…………ル…………ビー…………」

咳くと、前のめりに倒れこんだ。ツバルの腕が、素早くそれを支える。

フブリは、薄れ行く意識の中でルビーを見ていた。たくさんのルビーが、暗闇に呑みこまれていく。その先は知つてゐる。いや、フブリは思い出したのだった。

「クイルビーじゃない、か……他人になりますなんてことが魔法ができるなんてな……記憶をすりかえたのか？ 大した魔法使いさまだ」

フブリを抱きかかえたツバルが、吐き捨てるように言つた。しかし

ルビーは口をつぐんだまま、まるで微動だにしない。

「だんまりかよ。どうでもいいが、フブリの記憶は戻つたんだろうな」

「……戻りましたよ。ぼくが、クイルビー・ヴォルケットではない、と自白したでしよう」

「それが、解呪呪文か……」

ツバルは、何か考えるようにうつむいた。ルビーはそんなツバルを見ようとした。いや、正確には彼の腕の中のフブリを。深い眠りに落ちた少女は、まだ睫毛を涙で濡らしていた。

「さて……お前には聞きたいことがたくさんあるがな。本物のクイルビーはどこに行つたのかとか……ま、どうせ国王陛下に口止めされているだろーな」

言葉の一つひとつが突き刺さる。ツバルは誰が見ても明らかにほどに、ルビーを蔑視していた。

「お前はこれからどうするんだ？ 大方フブリを監視していたんだろ？ が、フブリに正体ばれちまつたら任務失敗だよなあ。国王さまを追つかけて彼女の靴でも舐めてるか？」

明らかに含みのある物言いに、ルビーは更にツバルから目を逸らした。

「お前は最低な人間だよ」

ルビーは言葉の重圧にひたすら耐えた。ツバルがフブリを優しく抱きかかえ、ゆっくり踵を返す。その後ろ姿を見送るルビーは、まるで魂の抜け殻のような顔をしていた。

ふと、ツバルの足が止まる。

「……ああ、忘れてた」

急に振り返られて、ルビーは体を強張らせた。

「お前の魔法……誰に習つた？」

ツバルの鋭い視線に射抜かれる。聞きたいことは他にもあるだろうに、何故わざわざそんなことを彼が問うのか、ルビーにはわからなかつた。

「何でそんなことを？ ……ツバルさんには関係ないでしょう」

「いいから教えろよ」

焦れたようにツバルは問い合わせた。ルビーは少し間を置いてから、彼に向き直つた。

「…………オーガスター。オーガスター・ササンクロスという方です」

「……それだけ聞ければ充分だ」

ツバルは言うや否や、ルビーに背を向け歩き出した。

ルビーはぼんやりその後ろ姿を見送り、歩き疲れた老人のように重たい腰を下ろした。頭の中は不思議と冴えていたが、恐ろしく重い足かせをかけられたような気分だつた。

眠っているフブリの、あふれる涙が脳裏に焼きついて離れない。

「ぼくは、クイルビー・ヴォルケットじゃない
ルビーは、確かめるように呟いた。

夢を見た。

幼い頃の、あの懐かしい村で生活していた頃の夢。
鮮やかな緑。優しい春風の音。まぶたの裏からでもわかる、暖かい
陽射し。

カーテンがそよ風に揺れて擦れる音が聞こえる。

やがて自家製煮豆のスープの香りが、鼻腔をくすぐるはずだ。シル
ヘットのスープが世界一美味しいことを、フブリはよく知っている。
フブリは、遠くに自分の名前を呼ぶ声に気づいて、目を覚ました。

「おはよーーー

重い目をこすりながら階段を駆け下りる。

「あら、今日は寝坊しないのかい？ 学校も休みなのに」
肩ほどの茶髪を片手で器用に結びながら、シルヘットはスープを卓
に置いた。

「だつて今日、シル……」

言いかけて、フブリは慌てて口をつぐんだが、その仕草は誰がどう
見ても怪しかった。

「私が何だつて……？」

「にやんでもみよにやい……」

両頬を引っ張られながら、フブリは必死に弁解した。

「あんた、どうせまたなんか壊したんでしょ」

「違うもん！」

「どーだか。ああそいつそいつ、こないだ壊した食器代出世払いでよろ
しくね」

「ぐつ……」

思わずスプーンを噛んでしまった。その話を持ち出されると、ぐつ
の音も出ない。

フブリは、こんな着飾らない性格の養母が大好きだった。物心つく頃には本当の母親でないことを聞かされていたが、血のつながりがあってもなくても、彼女は自慢の家族だ。シルヘットは、自分のことを母とは決して呼ばせなかつた。それがフブリには少し不満であったが、今ではもう慣れてしまつた。

フブリはスープ皿を流しに片づけると、外に出て『彼』を待つた。シルヘットが、今日は農作業を手伝いなさいよ、と言つていたが今はそれどころではない。

彼はくたびれた自転車でのろのろとやつてきた。

「もう！ ルビー遅いー！」

「めん、『めん、と謝りながら少年は自転車を投げ捨てるよつに急いで降りた。

「院長先生が自転車を貸してくれたんだけど……こんなので」

院長先生とは、ルビーの暮らす孤児院の創立者だ。フブリも何度か会つたことがあつたが、笑顔が優しくて、でもどこか抜けた耳の遠いおじいさんだった。

「言つちやあ何だけど、す」「ほん……」

小声で呟き、二人は吹き出した。

「ねえ、ちゃんと用意してきた？ 早くしないと、シルヘットに気づかれちゃうよ」

「も、もちろん準備万端だよ」

ぼくを誰だと思ってるんだ、とルビーは胸を張つた。

「フブリこそ、蛙なんか仕込んでないよね？ それはただの嫌がらせだから」

「なつ……確かに昔、シルヘットのベッドに蛙入れて怒られたけど

……

「あつ！」

突然ルビーが声を上げたので、フブリは咄嗟に姿勢を正した。

「な、何」

「シルヘットさんが行つちゃつたよ……」

……

シルヘットが自宅から出でてくるのが見える。彼女は毎朝、家畜たちに餌をやつてから、近くの穀物貯蔵庫へ向かうのだ。

ひたすらおひおひしているルビーの襟首を掻むと、フブリは走り出した。

「どう、どうしようー」

「今走つて行けば間に合つてしまょ！ もお、ルビーは本当に本番弱いんだからつー」

フブリは半ばルビーを引きずりながら、駆け足で貯蔵庫に向かつた。中にはまだシルヘットの氣配はなかつた。どうやら先回りできたようである。

貯蔵庫は、村のお祭りに使つたリースの余りや近くで摘んできた花、折り紙の星などで飾りつけが施されていた。辺りに穀物の袋やダンボールがあるのが何だかミスマッチだが、この際気にしてはいられない。シルヘットに気づかれずに行動することが最優先だったのだから。

そう、驚いてもらわなければ意味がない。

「シルヘット、誕生日おめでとうー！」

シルヘットは、貯蔵庫を開けた瞬間クラッカーの音に目をぱちくりさせた。

「これプレゼントだよー！」

「ぼくが選びました。フブリは趣味が悪いの……」

「あつ、でも包んだのは私だよ」

ぽかんとしているうちに勝手に大きな包みを手渡され、シルヘットは大声で笑い出した。

今度は仕掛けた一人が目をぱちくりさせた。

「あはは……おかしー。あんたら昨晩から何やつてんのかと思つてたら……ふふ

「ええーつ、気づいてたの？」

くすくす笑つてシルヘットは頷いた。口を尖らせるフブリの頭を優しく撫でる。

「フブリもルビーも、ありがとう。本当に嬉しい」
シルヘットの笑顔につられ、フブリとルビーも顔を見合させて笑つた。

フブリは、シルヘットの笑顔が好きだった。この笑顔を目にすると
き、自分たちはどこの家族にも負けないくらい幸せな母子だと感じた。

シルヘットがフブリを抱きしめたので、フブリは耳元に大好きだよ、
と呟いた。

「私もよ……でもね」

シルヘットの口元が歪んだ。

「……でもフブリ、ここは違うのよ」

「え……」

突然のことにつぶりがぽかんとしている、シルヘットは消えた。
腕が何もない空を掴む。

抱きしめていたぬくもりは、まだ腕の中に残つていた。

「シルヘット」

周囲を見渡しても、誰もいない。

「シルヘット……？」

フブリは突然大きな不安に襲われた。

「シルヘット！ ルビー！」

そこにはいつもの闇が待つていた。シルヘットも、ルビーもいない。
ただ真っ暗な空間に、フブリは一人立つている。

「やだ……やだよ……！」

フブリはがむしゃらに叫んだ。どこまでも追いかけてくる闇の中を
走りながら。

「ひとりにしないでえ！」

叫ぶと、フブリは真っ白なベッドに顔を突つ伏していた。

闇は消え去り、代わりに息を引き取つた後のシルヘットがいた。自
分の手を誰かが握つている。

その暖かさにほつとして顔を上げると、少年は切なそうな瞳でフブリを見つめた。

「ルビー……」

うん、とルビーは頷いた。

「大丈夫だ。フブリは絶対ひとりになんてさせないから。ぼくがずっと一緒にいるから……だから、もう泣くなよ」

フブリは、自分が泣いていたことに気づいた。片手でぬぐうと、繫いでいるルビーの手がかすかに震えていることにも気づいた。ルビーも、泣きたいのを必死でこらえているのだ。それが、これ以上自分を悲しませないためであることが痛いほどわかつたから、フブリは強くその手を握り返した。

すると次の瞬間、右手の温かさが消えた。フブリは、隣を確認しようとしなかつた。

ルビーがいなくなつたことはわかつていた。
やがて、暗闇がすべてを包みこむのだ。

“ルビー”も違うの？

どこなの？

ルビー

どこなの？

ざあつ、と大きな風が吹いて、フブリは宙に飛ばされた。

そしてフブリは記憶の波に流され、ついに失つていた真実に到達した。

風が引いたと思うと、フブリは地に膝をついて座りこんでいた。フブリは、成長していた。というよりは、いつも夢のように幽体のような存在で幼い自分を見ているのだ。夢と異なつてているのは、宙から見下ろしていないことくらいだった。

さわさわ、と風に稲穂が揺れていた。金色の畠の中、幼い自分がルビーと追いかけっこをしている。沈みかける陽が美しい夕暮れだ

つた。

フブリは懐かしい光景に心躍らせた。シルヘットが死んだ後、自分も孤児院に預けられてからは、ルビーは今まで以上に近しい存在となつた。毎日夜が更けるまでルビーと遊んだ記憶が蘇る。

フブリは歩き出した。幼い一人の影がだんだん近づいてくる。幼いフブリはルビーの手を引いて、どこかへ行こうと誘つているようだつた。

どこへ行くの？

それを見つめるフブリは幼い自分に話しかけた。しかし、その声が決して届かないことを彼女は知つてゐる。これは、フブリ自身の記憶が見せる夢なのだ。フブリが幼いフブリに触れるとき、その手はまるで映写された虚像に触れたかのように、すりぬけた。幽靈のようだ、と苦笑する。

「何が怖いんだよ。ルビーの意氣地なし。男のくせに」

「お、男とか女とか関係ないよ。そうじゃなくて、院長先生も村のみんなも言つてただる。この森は危険だから近づくなつて」

どうして、忘れていたんだろう。

フブリは、目前の森をぼんやり眺めた。毎朝登校途中に目にした、シルヘットの畠近くにある深い森。ここには、銀色に光る珍しい鳥がいること、図書館の本で読んだ。いつか、ルビーと一緒に探検したいと思っていた。

そこまで思い出すと、幼い一人は足早に森へ駆けていった。

フブリは見えない糸を、その奥にある忘れ去つた記憶を取り戻すために一人を追いかけた。その先に何があるのか、フブリは知らなくてはならなかつた。

「もういいよ。私一人で行くもん。意氣地なしさついてこないでよ」

幼いフブリが単身森へ入り、ルビーが慌ててそれを追つた。

「だめだつてば！ もう、わかつたから。ぼくも行くよ。でもその鳥を見つけたらすぐに帰ろう、ね？」

ルビーはしぶしぶ少女についていった。

ふいに、二人を追いかけていたフブリは足を止めた。

この先に何かがあることを確信していたが、それだけに恐ろしさもあつた。フブリは胸に手を置いて深呼吸をし、唇をぎゅつ、と結んだ。ゆつくり息を吐き出して、また歩き出す。

幼い二人はまるでそこでフブリを待っていたかのように、立ち止まつていた。フブリが歩くと、それに呼応して二人の足も動き出した。

「こうして印をつけておけば迷わないよ」

ルビーは幼い頃から利発な少年だつた。小さなナイフで木に切込みを入れていく。

深い森を進み行く二人を追うフブリは、驚くべきことに気がついた。木が、動いたのだ。

自らの根を引き抜き、軟体動物のようにするすると移動し、また沈黙する。こんな森で迷わずには帰れる人間などいるはずがない。そして二人はまだ、そのことに気づいていないのだ。

フブリはすぐに走り出し、彼らの前に立ちはだかつた。

戻つて、この先に行かないで。

しかし、フブリの声は届かない。目の前に立つていても、彼らは自分の体をすりぬけていく。苦渋に満ちた顔で振り返ると、遠くに淡い光が見えた。

「すごおい……きれいだね……」

「本当に銀色だ……鳥のくせに」

光の中から現れた美しい銀の鳥は、幼いフブリたちの頭上をくるくる飛び回つた。月の光が反射して、その姿は神々しく輝いた。いつの間にか、夕日は沈み、辺りは暗くなつていた。

フブリは、突然の恐怖に身を震わせた。

深い森……漆黒の空……黒い樹木と、そして……

それは、あの悪夢の中の光景だつた。フブリは震える両手で、急速に冷えていく身体を抱えこんだ。下唇を噛み必死に閉口するが、かすかに歯ぎしりの音が漏れた。

「あれ……」

帰途に着こうとしていたルビーが、先導していた足を止めた。

「どうしたの？ ルビー」

「あれ……おかしいな……」

ルビーは不思議そうに辺りを見回した。

彼らが迷ったことは明白だつた。やがて幼いフブリは状況を把握したのか、ルビーに代わり先頭に立つてどこへともなく歩き出した。空にぽつかりと浮かぶ満月が、ゆっくり彼らの影を追いかけた。まるで一人をあざ笑つているかのように、淡い光で足元を照らす。

「どうしよう……道がわからなくなっちゃつたよ……」

「こんな小さい森で迷うわけないじゃない。すぐに村に着くよ。それに暗くなっちゃつたから、院長先生や村のおじさんたちが探しに来てるかもしれないし」

すっかり弱気になつたルビーをなぐさめて、幼いフブリはどこまでも同じような樹木が立ち並ぶ道を、力なく歩いた。ずいぶん歩き回つていたため、二人の足の皮は擦りむけていた。

そのままじつとして！ 村の人たちが助けに来るのを待つて……！ 聞こえないとわかつていながら、叫ばずにはいられなかつた。一人の前に仁王立ちになり、必死に言葉を続ける。

あんたに何ができるの？ 無力あんたに、この森を抜け出すことができると思つてるの？

しかし幼いフブリは、無情にも彼女の体をすり抜けてしまう。フブリは絶句し、立ちすくむ。

「ねえ、ルビー！ あれ見て、ねえ！」

通り過ぎた幼い少女の明るい声が背後から聞こえて、フブリは恐る恐る振り向いた。

「村……？ あれ、村だ……！」

二人が指差す先には、ぼんやり暗闇に浮かぶ光があつた。歩き疲れて腰を下ろしていた一人は、頬を紅潮させて立ち上がつた。

光……

光の、先は……

遠くにぼんやり光つて見えるのは民家の明かり。フブリは、ついに気づいた。

だめ

フブリは決して聞こえぬ奇声を発した。それはむしろ悲鳴に近かつた。

ルビーが光に向かつて歩き出し、幼いフブリがそれを追いかけ……

フブリは、それを眺めている。止めたいたのに、足が動かない。

『私はまた、ひとりになるの?』

ルビーがぬかるみに足を滑らせ、あつ、と膝くフブリがそれを支えようとする。ルビーの体は引きずられるように、足元に広がる闇に呑みこまれるのだ。

『ずっと一緒にいてくれるって言つたじやない』

村に面した深く暗い崖が、その谷底がルビーを

フブリは、彼に手を差し伸べた。一人のフブリが重なり手がむなしく空を切る。

わずかに触れた彼の指の感触すら、残らない。

『お願いだから……ひとりにしないで』

幼いフブリは、座りこんで呆然と谷底を見下ろした。

そこは、闇。何も見えない。ルビーはもういない。ルビーは……

フブリは、膝をついた幼い自分を見下ろしていた。

やがて少女の叫び声だけが、森の中に空しく響きわたった。

闇が、すべてを呑みこむ。

ルビーが落ちた崖から広がる暗闇が、幼いフブリの幻影も、森も、すべてを呑みこんで消していく。

クイルビー・ヴォルケットは、即死だった。

おれはバレッタに何度も言ったんだ。

だけど、あいつってばおれを子ども扱いするし、拳句シルベットとオーガスターにチクリやがった。

オーガスターだつておれよりちょっと年上つてだけなのにせ、何でいつもばかりバレッタと仲いいんだる。代々国王に仕える魔法使いだか何だか知らねえけど、くつつきすぎだよな。

そういうえ、お前もこの間バレッタと話してたな。

でも、おれのほうが剣の腕だつてたつし、絶対将来いい男になる。そう思うだろ？

それでも相手にされないのは、やつぱり年下つてのがネックだからかな？ そればっかりはどうじょもねえな。おれだつて好きで今十一歳なわけじゃないし。

ああ、こりやつて悩んでる間に、バレッタに男ができるどうしよう。

知つてたか、クルージュ。バレッタの奴、今度ピー何とかつていう伯爵と見合にするらしいんだ。バレッタは美人だし、カラアの人気者だからな。言い寄る不届き者は多いつて話だ。

でも、おれは絶対反対してやるんだからな。おれを倒せるくらい強い奴じやないと、あいつの旦那になんて認めないからな。

え？ そりや知つてるよ。バレッタが國のためにいづれ誰かと結婚しなきゃいけないんだろ？ おれだつて馬鹿じやあるまいし、そんくらい知つてるぜ。

だから言つてるだろ。

バレッタはおれと結婚すればいいんだ。

そんで、おれがバレッタを歴代カラア一の王さまにしてみせるよ。つて、笑うなよ！

今は相手にされないけど、あと何年か経つたらわ、おれ絶対バレッ

タを嫁にする。

おれがバレッタの夫で、お前は軍団長、それに大魔法使いのオーガ
スタがいれば、カラアは無敵だろ。

約束だぞ。

絶対みんなでカラアを、バレッタを守ろうな。

十五年前、今でもはつきりと覚えている。

近衛の少年が止めにかかるのを振り払い、彼女を刺し殺した。普段なら、ツバル・リアノーラが私ごとに負けるはずはなかつたけれどそのとき私は、自分でも驚くくらいの素早さで、彼を振り切つたのだ。もう一度と、あのときのようないい力は出せないだろう。姉は死んで、私は近衛の少年たちにその罪を着せた。怖かつたのだ。

これほど、恐ろしく感じたものはなかつた。姉を殺したことよりも、近衛が私の罪を白田の下にさし出すことが怖かつた。

しかし、私が王になつて何か変わつたかといえば、そうではない。時間も、国も、民も、いつも通りに動いた。あえて言つなら、私が罪を着せた近衛の少年たちがいなくなつたことくらいであろうか。そう、姉の侍女も一人、姿を消した。

私は、何を期待していたのだろう。

いや、期待などないはずだつた。

姉がいなくなれば何かが変わる、なんて陳腐な動機は三流だ。動機なんて下らない。後からそんなことを考へても、過ぎてしまつたことは、もう変えようがないのだ。

私は、ただ怖くてたまらなかつた。

人も、ものも、風の音でさえ、私を責め立てるようになつて動くのだ。姉の声が、毎晩耳元で囁く。

殺してやる、と。

私は焦っていた。

一刻も早く、ツバル・リアノーラとクルージュ・エーレブルーを捕らえなければならぬ。特に、ツバル・リアノーラは殺害現場の目撃者だ。王族である私と年端も行かぬ近衛の証言ならば、民衆がどちらを信じるかは決まっている。だが、慎重すぎるに越したことはないだろう。

疑いを持つ者が現れるだろうか。彼らはバレッタのことを心の底から敬愛していたから、まさか彼女を殺すはずがない、と。落ち着け。今の王は私なのだ。王の言葉は絶対だ。私が罪人だと言えば、彼らは罪人なのだ。

「陛下が賊に討たれたと……！？」

「緊急事態だ！ 近衛兵は何をやっている！？」

「国王陛下はどこだ！？ 傷の具合はどうなのだ！」

城内は恐らくこれ以上のものはないほど、緊迫していた。警備の整つた魔法の王城。 その最奥に位置する王の寝室に賊が入りこむなど、天地が引っくり返るのと同じくらい有り得ないことなのだ。兵たちはみな、焦りの色を隠せないようだつた。事態の全貌が明らかでなく、今現在の混乱状態を收拾する王がそもそもいない。だから、私は彼らに事件の詳細を伝えるため、慣れない演説をはじめる羽目になつた。騒然とした空気の中に、出せる限りの大声を響かせる。姉が深夜未明に殺害された。実行犯は寝室に身を潜めていたツバル・リアノーラで、クルージュ・エーレブルー、オーガスター・サンクロスの両名も暗殺に共謀した共同正犯である。

雑兵はともかく、近衛隊や軍団長の中には疑問を抱く者もいたようだが、それ以上に私を支持する声は大きかつた。このような異例の事態の手前、とにかく一刻も早く城内をまとめ上げ先導する王が必要だつたのだ。

「リラさま！ 罪人を捕らえました」

兵が小走りに駆け寄ってきた。その背後に、うなだれた灰色の頭を見つけて、私は息を呑んだ。

「オーガスタさま、こちらへ……」

兵も、罪人とはいえ彼の扱いには困っているのだろう。両手を縛つてはいるが、彼を捕らえたというよりは地下牢へ案内しているように見える。オーガスタは由緒正しい大魔法使いの末裔であるから、重い刑罰を受けさせることはできない。だから、他の一人の近衛とは扱いが異なるのだ。

少年は、私のほうを一瞥しただけだった。叫び喚いて抵抗するかと思いや、そうではない。彼は理不尽な捕縛を受け入れていた。昔から、よくわからない男だとは思っていた。私より一つ年上だから、小さい頃は彼と遊ぶように侍女たちから勧められることが多かった。けれど、私は彼と遊んだことは一度もない。ツバルやクルージュに比べると、あまり活発なほうではないし、どこか冷めたような少年だったと記憶している。そう、冷めた目で、よく私を見つめていた。どこか人を蔑視しているような目であの目と同じだ、と思った。

軽蔑しているのだ、彼は。私を。

「それで、他の一人の近衛は見つかったのですか？」

私は下唇を噛みしめながら、慌しく城内を走り回る兵士に問うた。

「い、いえ……。それが、どうも次元の穴を通りて国外へ逃げた可能性もあると……」

それは私の予想通りだった。あの優秀な近衛たちならば、そうするだろうと思っていた。そのままどこかへ逃げて、一度とこの国へ戻つて来なければいい。捕らえて罰するよりも後が楽だ。

「それから、国王陛下のご遺体を、シルヘット・トリバンドラムが持つて逃げたという報告も入っています」

シルヘットは姉の側近中の側近だ。歳も近く、まるで友達のように姉と接していたのを覚えている。

「陛下の侍女ですね？……わかりました。引き続き、捜索を」

「はっ！」

兵たちは背筋をピンと伸ばし、敬礼して去つていった。

窓から差し込む朝日に目を逸らし、私は一つため息をついた。昨夜、姉の寝室に入つてから今まで、一睡もしていない。

姉を殺した日にも、変わらず朝日は昇るのだ。姉が死んだことなど、世界はそ知らぬふりで回り続ける。それが何だか可笑しくて、私は笑いながら地下へ降りた。

地下牢はひんやり冷たい風が流れ、氣味が悪い。銀の騎士となる囚人たちを横目で流しながら、足早に進む。ここはあまり好きな場所ではない。

奥の牢に、オーガスターは収容されていた。彼は座つたまま、ぼんやり薄暗い壁を眺めていた。私の足音が聞こえても、ぴくりとも動かない。まるで人形のように、そこに佇んでいた。

「オーガスター」

男は、沈黙したままだつた。

「私に何か言いたいことがあるのではないですか？」オーガスター・ササンクロス

私は少しだけ苛立つた。状況もわからず冤罪を着せられて黙つてゐる、この男の心理がわからない。

「姉さんは死んだわ」

その訃報を、彼は瞬き一つせずに聞いていた。

「バレッタ……」

オーガスターは、はらはらと涙を流して見せた。

同情を煽ろうというのだろうか。油断はできない。

「あなたは、姉さんを殺した罪人ということになつてゐる」

「……」

やはり、目立つ反応はない。激昂して噛みついてくれれば、どんなに私も気持ちが楽になるか知れないのに。

「何も言わないのね。そつやつて、私を馬鹿にしているの？姉を殺した愚かな女と思って、軽蔑しているの？」

私は早口に言つた。

「……」

「何とか言いなさい！」

しかしオーガスターは、いつまで経っても口を開かなかつた。ただ、虚ろな瞳から涙を流すばかりであつた。私はわななく拳をきつく握り締めた。大声を出すと震えが止まらなくなる。

「いいわ……それなら好きなだけそこにいるといい」

私は踵を返して階段を上つた。途中、何度かオーガスターを振り返つたが、彼は私のことなど気にも留めず、薄暗い壁をじつと見据えていた。苛々した。

あんな男のことなどどうでもいい。

牢に閉じこめておけば、何もできまい。王城の牢は、すべての魔法を封じる力が働いている。更に、城門、城壁に至つては誰も侵入・脱出ができないよう移動魔法を禁じる術がかけられている。どんなに偉大な大魔法を作つたという大魔法使いの末裔でも、あそこから抜け出すことはできない。

私は、はつとして足を止めた。

そう、大魔法。

カラアの王は、大魔法を保管する役目がある。そして、それを大魔法使いが護る。大魔法がなければ私はカラアの王たる資格がない。

私は、城の書庫で古い文献を調べた。

「大魔法は……どこ？」

天まで届きそうな書棚の隅から隅まで目を走らせ、私はそれを探した。

片手に余る分厚い本を幾つか見繕い、閲覧室の椅子に腰掛ける。ボソリ、水滴がめくるページの隙間に落ちた。いつの間にか私は汗を搔いていた。

「『……大魔法は、次代の王が即位する際に、自動的に受け継がれる。即位式で王から直接受け取るか、または現在の王が死亡すると同時に……』」

私は、音を立てて本を落とした。

「あなたは知つているのよね！？」

オーガスターは、目を丸くして私を見つめた。地下へ駆け下りるや否や、勢いよく格子に掴みかかつた私に驚いたのだ。きっと私は今、とんでもない形相でいるのだろう。

「大魔法って一体何なの！？」

「……知らないのか？」

「そうよ……！」

喉の奥から必死に絞り出す。私は勢い余つて牢格子を叩いた。

「それは、つまり……」

「姉さんが生きているということよ！」

ガシャン、と格子が鳴った。オーガスターは私の剣幕に驚いたのだろうか。それともバレッタが生きているという事実に驚いたのだろうか。目を据えたまま動かない。

「よかつたわね……あなたたちのバレッタが、きっとそのうち大魔法を使って私に復讐しに来るわ」

言葉にすると、その事実が重く圧し掛かつて、私を押しつぶしてしまいそうだった。心臓が壊れそつなくらい鼓動を打つ。

「私を殺しに来るわ！」

ガシャン。格子が鳴つて、沈黙が落ちる。一瞬の静寂が、とても長いものに感じられた。

オーガスターは何も言わない。

その沈黙が、恐ろしくてたまらない。血の気が一斉に引いていく。

「……リラ……。私を、解放してくれないか？」

口を開いたと思いきや、男は真剣なまなざしを私に向けた。

「何を、言つてるのよ……あなた自分が何を言つているのかわかつてゐるの？ 私に不利な証言をするあなたを、私が解放するわけないじゃない」

思わず笑つてしまつた。口元が震えながら不自然にほこりがぶ。

「私は、君の味方になる」

けれど、オーガスターは瞳を逸らさなかつた。揺らぐことのないその瞳が、私を射抜き、心臓までも貫いてしまいそうだ。

「何……言つてゐるの……」

「君を、バレッタから守ろ!」

この男は、バレッタの近衛だ。王に仕える大魔法使いだ。自分の主人を殺した女を守る？ そんなことができるはずがない。何かを企んでいるのだ。ここを抜け出して私に復讐しようと考へているのだ。信用できない。信用できるはずがない。

頭の中で警鐘が鳴り響く。私はくらくらする意識を必死に保つた。

「わ……わかつたわ……」

次の瞬間、私は男にそう答えていた。

予想外のことばかりを言つオーガスタに、私はどう対処していいかわからないのだ。何もかもを見透かしたような彼の瞳が、突き刺さつて痛かつた。

手元が震え、鍵がなかなか入らなかつた。オーガスタはじつと、私の震える手を見ていた。観察するように、私という人間を暴くように。

こうして、私はオーガスタを毎日の監視つきで城に軟禁した。

私が彼を解放したのは、きつと怖かつたからだ。

一人でいるのが怖かつた。誰か、自分を肯定してくれる人間が欲しかつた。そう、彼は私のそんな気持ちを知つていて、『味方』になつたのかもしれない。オーガスタは聰明な男だ。そうやつて、今は私の味方になつた振りをし、バレッタと共に復讐する機会を窺つているに違ひない。

だから、ある日オーガスタが監視を逃れ、城内から消えても私はさほど驚かなかつた。

「そう……オーガスタが、逃げたの……」

私は、監視していた兵の報告をぼんやりと聞いていた。

旧女王派が手引きしたのだ。

最近、噂を聞いた。バレッタを慕う民たちが、『旧女王派』という名で秘密裏に集まつていると。それにはツバルやクルージュも関わつてゐるという話だ。バレッタの死に疑問を持ち、私を疑う者たち

が反旗を翻そうとしているのだ。

『私は君の味方になる』

その言葉を、私は反芻した。

彼が逃げたとなれば、私の罪が白日の下に曝される可能性が高くなる。しかし、不思議と彼の逃亡に焦りを覚えることはなかった。怒ることもなかつた。

ただ、虚しくて仕方がなかつた。

真相を知るものは、もうこの城には私しかいない。心のどこかにぽつかり穴が開いて、そこを隙間風が抜けているような感覚だつた。それが、とてつもなく虚しかつた。

しかし、オーガスターが消えてから一ヶ月。私がいつものように温室のプランターを移動させていると、彼は突然風の中から現れた。

「ただいま、リラ」

男は、至極自然に笑つて見せた。まるで何年もそうしてきたように、私に微笑んだのだ。

「何故、戻ってきたの？」

私が鋭く言い放つても、彼の笑みは消えなかつた。

「私は君の味方だから……」

殺してやる

私は背後を振り返った。しかし、そこには誰もいない。声なき声が囁き、私を責め立てる。

「もう、やめて……姉さん……」

私は必死に耳を塞いだ。塞いだところで意味がないのはわかっている。そんなものでこの声が消えたことは一度もない。きっと彼女は死ぬまで私を追いかけてくるのだ。

「陛下！ 大丈夫ですか！？」

ベルイヤールが駆け寄つてくる。私は彼女の手を借り、ようやく寝台から降りることができるのだ。

これが、バレッタ・コスマロードがいなくなつてからの私の毎朝だった。

大魔法とは何なのだろう。どんな風に私を殺せるものなのだろう。身を一瞬で焼き滅ぼす炎か。それとも、何の痛みもなく私という存在を消してしまう魔法か。

気づけば、そんなとりとめないことを考えている自分がいる。オーガスターが戻ってきてから、私の精神はどこか狂ってしまった。オーガスターを監視しているというよりは、私が彼に監視されているような錯覚さえ覚える。彼の目はバレッタの目であり、バレッタが私を殺そうと思っている限り、彼もまた私の命を狙っているのだ。怖い。怖くてたまらない。

「……ラ……」

誰かの声が聞こえ、頭を上げる。

「リラ！ 何をしているんだ！」

「……オーガスター」

目の前には、見慣れた男の顔。

複数の声が聞こえる。誰かの叫び声 一ぱりに駆け寄つてくる侍女たちだ。ものすごい形相で近づいてくる。

停止していた感覚中枢が急に動き出す。冷たい。一度そう思つと、途端に体中が凍るような寒さに襲われて、私はたまらず両腕を抱いた。

腕が濡れている。腕だけではない。よく見れば、自分は頭からつま先までびしょ濡れだつた。冷水が空から降つてくる。

「私……」

オーガスターはシーツでくるんだ私を促し、『そこ』から遠ざけた。轟音が耳をつんざく。

ひどい雨音だ。そう、今日は朝から土砂降りだつた。

ようやく私は自分が雨に打たれていたことに気がついた。何時間外にいたのだろう。ぼんやりしていたから気がつかなかつた。私は彼に半ば引きずられながら、城の中へ入つた。湯に浸かり着替えると、冷えた体が芯から温まるのを感じて私はほつと息をついた。ベルイヤールに促され自室に戻ると、男が腕組みをしたまま立つていた。ずっと待つっていたのだろうか。彼の頭はわずかに濡れ、衣服から水滴が落ちていてるのが見てとれた。

「何故、あんなことをしたんだ」

オーガスターはきりり、と眉根を寄せてみせた。その思いのほか冷たい声に慄いたのか、暖炉に薪をくべていたベルイヤールがこちらを一瞥して、そそくさと出て行つた。

「わからないわ……」

私はやはりぼんやりとベルイヤールの後ろ姿を目で追つた。

「君の身体は君一人のものではないんだ。君は国王だ。国民を守る王だ」

真剣に言う男が何だか可笑しくて、私は口元を緩めた。

「じゃあ、あなたが王になればいいじゃない」

瞬間、鈍い痛みを感じた。

乾いた音が高い天井に反響して、広い室内に響き渡る。

私は、何が起きたのかを把握するまでにしばしの時間を要した。じんわりと戻つてくる頬の痛みに気づき、そこに触れてみる。私の頬はわずかに熱を帯びていた。

「ふ……あはは……はは……つ」

何故か笑いがこみ上げてきてたまらなかつた。オーガスターの苦渋に満ちた表情が、それを更にかき立てる。

「やつぱり……！ そ、そ、それでいいのよ。オーガスター！」

叫ぶと、肩から荷が落ちたように急に気持ちが軽くなつた。私は、こうなることを望んでいたのだ。

「リラ」

男が、私に手を伸ばしてくる。私は躊躇いもせず、それを弾き返した。オーガスターが一瞬たじろぎ、私はその隙を見逃さなかつた。

「早く殺しなさいよ！」

拳を握り締めて喉の奥から絞り出した。次第に感情のたがが外れ、エスカレートしていくのが怖いほどわかる。

「あなたの主人の命を奪つた女よ！？ あなたが世界で最も憎い女よ！」

もう止まらなかつた。

このままでは言いたくないとまで口にしてしまつ。

言いたくないとまで……

「くるしいのよ……！」

オーガスターが目を丸くした。私が人前でこんなことを漏らしたことがなかつたからだ。自分の弱みを曝け出すような真似だけはしないようにと、細心の注意を払つてきた私が、初めて弱音を吐いたのだ。だが、もうどうでもよかつた。

苦しい。

苦しい。

「もう……殺して……！」

憂いに満ちた男の顔が、崩れ落ちた私を覗きこむ。同情しているの

が、それとも蔑んでいるのか。

静寂の中に雨音だけがうるむ響き渡つた。

その中に、聞き覚えのある女の声を聞いた気がして、私は目を見開いた。

殺してやる

初めは空耳かと思つた。
しかし、その声は雨音のリズムに合わせて絶え間なく耳元に囁かれる。

「ひつ……」

周囲を見渡す。誰もいない。けれど、どこからか声が聞こえるのだ。歯の根が合わなくなつた。オーガスターの顔がぼやけてよく見えない。視界が震んできたのだ。私はよろめき、痛みとともに何かが転がる音を聞いた。暖炉脇の椅子にぶつかつたのだ。しかし、それに気づいたとき、私はすでに地に膝をついていた。

私が後ずさりすると、オーガスターは異変に気がついたのか、ゆっくりと近づいてきた。

「リラ？」

「こ、こ、いや……！ もう許して！ ゆるして……」

私は頭を抱えて小さく丸まつた。

バレッタがやつて来る。私を殺しにやつて来る。

「リラ、どうした！？ リラー！？」

私の肩を痛いくらいに掴んで揺さぶる男のことなど、もう気にならなかつた。

「声が聞こえるの……！」

「声？」

「殺しに来るの……！ 私を殺しに来るのよ！」

瞼を閉じると姉の姿が鮮明に浮かび上がり、私は慌てて目を開いた。

「お願ひ……お願ひ……来ないで……！ 怖い……」

私は次第に声のトーンを落としていった。叫べば叫んだだけ、恐怖は背後から押し寄せてくるからだ。

「大丈夫、誰もいない。リラ、誰も君を殺そつなんて思つていない」私は、涙目でオーガスタを見上げた。彼の表情は見えない。ただ、薄暗くぼやける輪郭が小刻みに動くばかりだ。

「怖い……怖い……」

「だいじょうぶ……」

思いのほか大きい、その男の胸に顔を埋め、私は泣いた。濡れたままの彼の服は、雨の匂いがした。せっかく湯浴みをしてきたばかりなのに、また濡れてしまう。何故か、そんな考えが浮かんだ。

安心したのかもしれないが、

人の体温は不思議だ。先ほどまでの恐怖が嘘のように、落ち着いていくのがわかる。今このときばかりは、オーガスタから離れたくない。彼の体温を感じてみたいと思つた。

声が消えていく。

波が引くように穏やかな感覚を覚え、私はそつと目を閉じた。

翌朝になつて、私は前日の醜態をひどく後悔した。

自分に仇なす存在であるかもしれないオーガスタに、弱みを見せるような真似をし、拳銃彼にすがりついたのだ。その事実にえもいわれぬ怒りを感じ、私は下唇を噛んだ。

温室で花たちに水をやつてみるも、そのことが頭のどこかについて回る。

思い出したくもない。私は大きく首を横に振つて、その事実を揉み消すように黙々と作業を続けた。

「おはよ、リラ」

怒りの矛先を向けてやりたい男がやつて來た。

「出て行つて。あなたの顔なんて見たくない」

私は彼の顔を見ることもせず、背を向けたまま呟いた。

「ひどいな。せつかく手伝いにきたのに」

「いらないわ

今度は向き直つて、ぴしゃりと冷たく言い放つ。オーガスターは苦笑して肩をすぼめた。

「これだけの種類、よく育てられたものだ。ここにはよく来ているみたいだね」

昨日のこと、私が心を許したとしても思つていいのだろうか。馴れしい彼の口調が不快だつた。

「落ち着くの。ここにいると」

早く出て行つて欲しかつたから、私は早口で言つた。私だけの温室に、誰かが足を踏み入れることがたまらなく嫌だ。しかし、私の気持ちなど看取できないその男は、無遠慮に私の花園に押し入つてきた。

「これは菊？」

「『都忘れ』よ」

私は苛立ちを抑えながら、言い捨てた。

「へえ……」

「昨年から種つけをはじめたの。一緒にはじめたクレマチスがあり育たなかつたから……これはちゃんと育ててあげたくて」
オーガスターがあまりにも感心したように頷くものだから、つい要らぬことを口にしてしまつた。

私がひと際大きなプランターを動かそうとして苦戦していると

「運ぶよ」

オーガスターが脇から手を出し、軽々と持ち上げてしまつた。あ、と咳くも、もう遅い。オーガスターに手伝つてもらうなど決して気分のいいものではなかつたが、私は渋々彼にプランターの移動場所を教えた。

「今朝もうなされていたらしいね。身体の調子はどうかな」
運びながら、男はごく自然に問つた。

私の精神状態を探ろうとしているのだ。やはり昨日、あのような姿を見せるべきではなかつた。

「私は病氣だわ。自分でわかるもの」

「そう自分を否定するものじゃない。君は健康だよ」

「オーガスターが微笑み、しかし私はそれに反して顔を歪めた。

「じゃあ、はつきり言つて、オーガスター。私は王には向いていない、

と。『旧女王派』の一人として私を失脚させてやりたいと」

「リラ……どこでそんなことを？」

私がはつきり言つても、彼は慌てることをえしない。ただ、少し驚いたように口を開くだけ。その態度が私は嫌いだつた。私のすべてを見透かして、心のどこかで蔑んでいるのだ。

「わからないとでも思つてた？ そうよね、そんなバカな王だから操りやすくて助かるわよね。いつでも旧女王派に会いに行きなさいよ。私に拘束されてるなんて、本当は私にはそんな力はないもの！ あなたは自由にどこへでも行つて、いつでも私を裏切れるじやない！」

オーガスターは変わらない優しいまなざしを私に向ける。私がいくら激昂しようと変わらない。いや、すればするほど彼は冷静になつていく気がした。

癪癩を起こす子どもをなだめるように、オーガスターはうつむく私を覗きこんだ。

「私は裏切らない。旧女王派という一派が一部の国民に存在しているという話は聞く」

「白々しいわ」

私は鼻で笑つた。

「リラ、疲れているんだろ？」「

「やめて！ もう誤魔化されないわよ……！」

「私は君に従う。私は勝手に外には出ない……。約束は守るよ」

「嘘つき……。やめてよ……」

オーガスターは変わらず微笑んでいた。

「さあ、部屋へ戻ろう。風が強くなってきた」

「この城に……何人いるの……？」

オーガスターは、何を、とは問い合わせなかつた。

「わからない。けれど、声を張り上げて活発に表で動いている人間はもついないだろうね」

「……どうしてあなたはここにいるの？」

その問いは、私の意思に反して勝手に滑り出た。あまりにも弱々しく口をついて出た言葉に自嘲する。

「君の味方だからだ」

「本当のことを言って」

間髪入れずに言い返す。

信じられない。信じられない。警鐘が鳴り響く。

「……君を助けたいんだ、リラ」

オーガスターは、瞬き一つせずに私を見つめた。

「どういう意味……？」

「そのままの意味だ。リラ、私たちは幼い頃滅多に話すことはなかつたね」

その視線をゆっくり地に落とし、彼は瞳を閉じた。

「私は君を知ろうとしなかつた。だから今、知りたいと思っている

信じられない。信じられない。

「君の苦しみを、少しでも知りたいんだ。そしてそれを和らげるすべを、一緒に考えよう」

手を握られ、その温かさに私は脳髄が蕩けるような感覚を覚えた。信じられない。裏切るかもしれない男だ。バレッタとともに、私に復讐しようとしている男だ。

「私と一緒に、やり直そう

涙があふれた。

何かが奥底からこみ上げ、胸がいっぱいになつた。

信じてもいいのだろうか。

もし、本当にやり直すことができるなら、私は

私はいつものように、広い食堂で遅い朝食を済ませた。

散歩がてら温室の様子を見てこようとぼんやり歩いていると、若い娘たちのおしゃべりが聞こえた。書庫近くの一室であった。

それは、侍女たちの下らない世間話だった。毎日のように耳にするが、よく他人の話でそこまで盛り上がるものだ、といつも思う。

「えーっ、あのオーガスタさまが？」

そのまま通り過ぎるつもりだった私は、足を止めた。オーガスタも話題に上ることがあるとは、何だか彼の人間臭い一面をみたような気がして可笑しかった。

私は、こつそり扉に耳を傍立ててみた。他愛ない世間話も、オーガスタのこととなれば自分には有益な情報となるかもしない。

「本当だつて！ 私見たんだもの。厨房裏の倉庫……あそこで毎晩、真夜中に女と逢引してんのよ」

思わず吹き出してしまいそうになつた。有益な情報なんてとんでもない、やはり下らない噂話だった。

「でもそれって、相手誰よ？ 人目忍んで……ってことは同僚の誰か？」

しかし、ふと考へてみる。それは、逢引ではないのではないか……。たとえば『旧女王派』と呼ばれる組織の人間が密かに侵入していく、オーガスタと会っているとしたら？

そうだとすれば、深夜の密会にも合点がいく。

「この間武官の側仕えに入った新人の子、怪しくない？ あいつ城中の男という男に片つ端から色目使つてんのよ」

「案外、陛下だつたりして！」

「うつそ禁断の恋！？ 密通！？」

会話の流れにさすがにいたたまれなくなり、私はその場を去つた。

オーガスタが……。

私は、胸に熱いものがこみ上げてくるのを感じた。もしかしたら今まで私の頭の中でのみ作られていた彼の裏切りが、本当のものになるかもしれない。

私は唇をかみ締めた。

そうかもしない。違うかもしない。またいつもの、私の勝手な思い過ごしかもしれない。私は何度も自問自答を繰り返した。彼は味方だ。なのに何故、こんなに不安になるのだろう。

私の体は震えていたかもしなかった。自室に戻るとベルイヤーが驚いて、風邪をお引きになりましたか？と訊いてきたのだ。

私は、馬鹿馬鹿しいという思いと、確認しなければという思いの板ばさみになつた。

もう、あの事件の日から十年の月日が経つた。オーガスタは私の味方で、私の政務を助けてくれている。私は大魔法使いである彼に支えられ、国王として何とかここまでやってこられたのだ。それ自らの安易な想像で壊してしまつことは、あつてはならないと思う。信じている。だからこそ……。

その夜、私は迷わず倉庫へ向かつた。

厨房裏の倉庫小屋は、昼間であつても人気はない。私自身、子どもの頃に一度探検したことがあるくらいで、滅多に足を運ぶことはなかつた。周囲に明かりもないため、昼ならまだしも夜中などは誰も近寄らないだろう。

倉庫の中に入気を感じて、私は息を凝らした。

立てつけの悪い扉の隙間から淡い明かりが漏れている。誰かが中に入るのは確実だった。

聞き耳を立てるが、声は聞きとれなかつた。そこで私はぐるりと裏手に回つた。どこかに窓がないかと考えたのである。相手が自分の臣下であるとしても、真正面から扉を堂々と開け、中に入る勇気はなかつた。

残念ながら窓はなく、私は困り果ててもう一度入り口に戻つた。そのとき、突然中の明かりが消えた。

私が驚いて近くの茂みに身を隠すと、扉が開いて二つの人影が出てきた。何かを話していたようだが短かつたので聞き取れなかつたし、人物の顔も暗くてよく見えなかつた。

そのうち一人は足早に城内へ戻り、一人はまた小屋の中に入つた。

二つの影が消え、しばらくして私は倉庫の前に立つた。

私は息を殺し、ノブに手をかけた。

しかし 勢いよく引いたのだが 閉は開かなかつた。私は、呆然として扉を眺めた。開かなかつたことにはつかりしたのではない。これで、密会していた人物がオーガスターである確率が高まつてしまつたのだ。

そのドアには、魔法がかけられていたのだから。

翌日は、侍女に就寝の準備を早めてもらい、ベッドに入る素振りを見せてからすぐに倉庫へ向かつた。

それでももう一十一時を回つていたが、まだ倉庫に灯りは点いておらず、今日は先回りできたようだつた。ほつと息をついて、慎重に小屋全体を見回してみる。明かりがないため不便だつたが、じつと小屋を見つめているうちに目が慣れてきた。

私がその木目にほんの小さな隙間を見つけたとき、彼はやつて來た。慌てて木陰に隠れる。

私は、今度は間近に彼を見て、ついに確信した。

その男は、紛れもなくオーガスターだつた。

驚く間もなく、彼は小屋へ入り戸を閉めてしまつた。淡い灯りが扉から漏れる。私は急いで木目の隙間に耳を傍立てた。未知の会話に興奮するも、オーガスターが何者かと密会していたという現実が妙に私の胸を締めつけた。

信じていたのに……。

私は、落ち着かない胸の痛みを必死に抑えていた。彼らの会話に集中しようと思えば思うほど、自分の鼓動がそれを邪魔した。

「…………そう、フブリ・トリバンドラムは娘だ……」

オーガスターの声だ。

「シルヘット・トリバンドラムが田舎で彼女を育てていた。フブリはバレッタ国[王陸]下の実の娘であり……」

瞬間、体が自然に小屋から離れた。私は口元を押されたまま、駆け足でその場を去った。

もつと話を聞けばよかつた、などという考えは浮かばなかつた。とにかくその場から逃げたい衝動に一心に駆られていたのだ。私は、恐ろしかつた。

寝室に戻り、シーツを被ると恐怖がやつてくる。

十年、私は我慢したではないか。何故また今頃になつて戻つてくるのだ。

お前も殺してやる

耳元に声が聞こえた気がしたが、振り返つても誰もいないことはわかつている。私は、震えの止まらない体を精一杯丸めて縮こまつた。頭までシーツを被り、固く目を瞑つた。

殺してやる

姉さん、いつまで私を苦しめるの……？

＊＊＊

オーガスター・ササンクロスの外出は、計画的に秘密裏に行われた。リラの監視の目は、ここ最近は緩いとはいえ油断はできない。彼女の精神はとても脆く、傷つきやすい。オーガスターの行動一つで、リラがまた昔のように心を閉ざしてしまつことも十分考えられるのだ。城内に潜む旧女王派の協力の下、真夜中にオーガスターはカラアを抜け出した。彼ほどの魔法使いともなれば、瞬間に移動することくらい容易い。風に魔法をかけるのだ。人工物ならある程度習熟した魔法使いであれば誰でも呼びかけられるが、自然物に呼びかけられ

る魔法使いはそういうない。

カラアの城壁は魔法を無効にする力が働いている。そのため城門を出なければ、移動魔法は使えない。だから旧女王派の手引きがどうしても必要だつた。また、国外へ出るには大樹の根をくぐつて空間を飛び越えなければならないため、その場所までの移動である。

カラアへの入り口が唯一残されている、『最果て』という名の皮肉な村に彼は下り立つた。バラックのような粗末な造りの小屋には、先客がいた。

「遅かつたか。やはり私が最後だね」

「オーガスター！」

感極まつた様子の二人の男たちは、オーガスターが戸を閉める間も許さず彼を抱きしめた。

「落ち着けツバル！ 変わつてないなお前は……」

「はは……、本当に久しぶりだ！」

ばんばん、と背中を叩かれオーガスターは苦笑した。

「お前のことは本当に心配だつたんだ。なあ、ツバル」

スカートを完璧に穿きこなしている青年は、オーガスターから先に離れた。ツバルは頷き、腰掛けると肩の辺りまでの金髪をもどかしそうに搔き揚げた。

「私も心配していた……。お前たちは……弟みたいなものだからね」

オーガスターも椅子に座り、微笑んだ。

「何だか、昔の時間が戻つてきたみてえだなあ……」

「おれとツバルは何度か会えたけど、三人揃うのは十年ぶりか……」

「二人が無事でよかつた。クルージュが最果てにいると聞いたときは気が気じやなかつたけどね」

クルージュは、歯を見せて笑つた。その様子に、オーガスターはほつと息を吐いた。彼の恋人が大樹の生贊にされたという事實をオーガスターは知つてゐる。しかしこの様子からすると、自分が心配することは何もないようだつた。

「この女装趣味のおかげで助かつたわけだな。今じゃバレッタでも

俺だとわからないかも」

確かにクルージュの女装は、十年前に比べると遥かにレベルアップしている。化粧もナチュラルかつ巧みで、彼を知らない人物はまず女性と信じて疑わないことだろう。

「それで……」

ツバルはわざとらしく言葉を切った。

「リラはどうしてる?」「

一瞬で空気が重くなる。三人は身を硬くした。

「……変わったよ。当時は少しのことでも混乱して癪癪を起こしていたが、今は落ち着いている」

オーガスターは慎重に言葉を選んだが、ツバルは不満そうに眉を吊り上げた。

「そう簡単に変われるもんかよ」

「ツバル、人は変われるよ。リラは……」

「お前、何の話してるんだ?」

クルージュが訝しげに表情を歪め、言葉を遮った。

「リラが変わったかなんてどうでもいいだろう。おれたちはそんなことのために、この十年間隠れてきたのか?」

「しかしこれは大事なことだ」

「オーガスター」

クルージュは静かに首を横に振った。

「リラはバレッタを殺した。忘れたわけじゃないだろう」

「だが……」

「ごもるオーガスターを横目に、クルージュは分厚い封筒を取り出した。オーガスターはそれをぼんやり眺めた。

「私の手紙を、読んだんだな?」

「ああ。最初は、バレッタが死んだなんて信じられなかつた。だが

……まさかあのとき身ごもつていた子を出産していたなんて……正直それだけが救いだつたよ」

「シルヘットは養母としてフブリを養っていたが、一年前に病死し

たらしい。フブリは私が見た限り、とても健康そうな可愛らしい少女だつたよ。バレッタと同じ銀の髪に翠の瞳をしていた

クルージュは嬉しそうに頷いた。

「それでな、実は……」

雰囲気が和らいできたのを感じて、オーガスターは、自分が最近王城に連れてきた少年について話そうと思った。しかし、それはツバルによつて遮られる。

「なあ……フブリを、カラアに連れてこようぜ」

予想だにしなかつた彼の言葉にオーガスターは驚愕し、思わず立ち上がりつた。

「な、何を言つてるんだ、ツバル。彼女は何も知らないほうが幸せだ」

「いや、おれはいいと思つ。のつのうと城に守られて生きているリラに、バレッタのことを思い出させてやるべきだ」

考えこんでいたクルージュも、頷き賛同した。

「馬鹿なことを……！ 今のリラにフブリを会わせたら、彼女は壊れてしまつ。フブリだつて今の生活があるんだ。両者のためにならない。そうだろ？？」

「リラ、リラつて……お前あの女に毒されちまつたんじゃねえの？」
ぴしゃりと言い放たれて、オーガスターは閉口した。

「おれはリラがどうなつたつていいと思ってる……。あの女がバレッタを殺して、おれたちに罪を着せて、オーガスター、お前をカラアに閉じこめたんだぞ！」

気持ちが昂ぶつてきたのかツバルは立ち上がり、拳をきつく握り締めオーガスターに対峙した。彼の肩をクルージュが優しく叩く。

「オーガスター、ツバルの言う通りだ。おれだつてリラが憎くてたまらんよ……。おれの大事なものを……一度も奪つたんだからな」
できることなら、とクルージュは言葉を切つた。

「おれの手で殺してやりたい」

オーガスターは、なんてことだろ？、と心中で呟いた。クルージュが

恋人を殺されたことから立ち直ったなど、思い違いも甚だしい。彼もまた、ツバルと同じように暗い憎悪を抱えこんでいる。

「殺してやりてえよ！」

呼応するようにツバルが叫んだ。感情のたがが外れたのか、体中から搾り出すような叫びだった。

「ツバル、リラは反省している」

オーガスターは落ち着くようと身振りで伝えながら、やんわりと言つた。

「黙れオーガスター！ 誰が何と言おうと、おれはある女の女を許さねえ……！ バレッタがどんな思いで死んでいったと思ってるんだ！」

それを知りもしないあの女は……！」

ツバルのバレッタに対する恋心は知つていたが、これほどまでに激昂する彼をオーガスターは見たことがなかつた。

抑える、とクルージュがツバルの肩を抱いて口元に笑みを浮かべた。「こちらには大魔法がついてるんだ……リラも迂闊には手は出せないさ。そうだろ？ バレッタの娘がリラを殺してくれる」フブリが、リラを殺す？

オーガスターは我が耳を疑い、愕然とした。

確かに十年という長い時間の中で、各々いろいろなことがあつた。三人ばらばらになつてからの彼らをすべて知つてているわけではない。しかし……

「そ、そうじゃないだろ？ リラが死ねば、すべてが解決するとでも？ それは、それはただの復讐だ。憎しみの連鎖は何も生みやしない」

「おれは復讐でも構わない」

ツバルは決然と言つた。クルージュは何も言わなかつたが、ツバルと同じ決意を持つてゐることは簡単に見てとれた。

オーガスターは、多少の摩擦は覚悟していたが、これほどとは思わなかつた。自分と二人の思想のずれは、明らかに大きすぎる。

「……変わつたな、お前たち……。本当に、変わつてしまつた」

オーガスターは後退し、壁に背中をぶつけたため鈍い音がした。目の前の現実に気持ちばかりが先行して、正常な思考が追いつかなかつた。

「変わったのはお前だよ、オーガスター」

ツバルの声が別人のようで、オーガスターは慄いた。

変わったのだ。十年という歳月は、少年だった彼の声が大人のそれに変わったように、多くのものを変化させ、壊してしまつた。

もしかしたら、本当に自分も変わつてしまつたのかかもしれない。自分も、ツバルたちと共にカラアの外へ逃げていたら、リラへの深い同情は有り得なかつたかもしれない。むしろ、今の彼らのようにリラを憎み続けていたに違ひない。

「……しかし私は彼女を知つてしまつた」

オーガスターは独り言のように呟いた。

「今、彼女を憎むことはできない。ツバル、クルージュ……私たちは、もう昔のようにはいられないのかかもしれないね」

ツバルは、ぎゅつ、と唇を結んだ。一番年若い彼は、こうした仕草にまだどこか幼さを残している。

「私はリラを救いたいし、フブリを巻きこみたくない。だから、お前たちがフブリを利用しようとするのなら容赦はしない」

一変して冷たく言い放つたオーガスターは、二人の目をしっかりと見据えていた。

「旧女王派を抜けるのか？」

クルージュの問いに、オーガスターは視線で答えた。聞かなくてもわかりきつているのに、クルージュは確かめずにいられなかつたのだろう。

「今日、はつきりした。フブリの居場所はお前たちには教えられない。……お前たちはもう……」

オーガスターは言葉を搾り出そうとして、詰まらせた。今は、それを口に出すことが辛い。

十年前、罪人としてカラアを追われることになつた三人は、いざれ

戻つてこよつと、バレッタと共に自分たちの手でカラアをもとに戻そうと約束した。リラをどうするかなど、考える間もなかつた。そのときはバレッタの失踪で頭がいっぱいだつた。

それは、希望だつた。

どこかでバレッタが生きており、彼女の指示に従つてカラアに戻り、また三人で彼女を守るのだと……。

淡く儂い希望は、もはや碎け散つてしまつた。

初めから、バレッタが生きていることは幻想に等しいと、三人とも思つていたに違ひなかつた。しかし、信じたかつたのだ。

もう戻らない昔を思い浮かべ、オーガスターは扉に手をかけた。

「私はね、すべての人が幸福であることを望むよ」

悲愴な面持ちで微笑み、オーガスターは出て行つた。

このとき、彼は大きな決意を改めて抱いた。

すべての人が幸福に……。

反芻し、大樹の根に潜りこむ。

オーガスターは、カラアに戻ると真つ先に厨房裏の倉庫に向かつた。

私は、暗い廊下で彼の帰りを待つっていた。

倉庫でオーガスターの話し声を聞いた翌朝から、私は彼の行動観察を欠かさなかつた。もはや自分は彼を信用していないのか、まだ信用したいのか、それすらもわからないほど混乱していた。

そして、オーガスターは今日どこかへ出かけた。

私の許可がなければ、彼はたとえ城下町であつても勝手に外出できない。しかし、こともあろうに彼は真夜中に城門をくぐりぬけ、魔法を使つてどこかへ転移した。そう、転移しなくてはならないほど遠くへ、である。

見張つていたら、本当にオーガスターの裏切りの瞬間を目撃してしまつたのだ。

私は、不安で気が気がなかつた。

こうして彼を静かに待っている間も、気が狂いそうでならない。

その男は深夜に現れた。しかしさすがの彼でも、まさか私がこの時間にこんなところにいるとは思わなかつたようだ。彼の驚いた顔といつたら、あまりにも私が思い描いていたものと同じで、思わず笑みが漏れたほどだ。

「リラ……」

彼の慌てる顔を見るのは初めてだつた。薄暗い中でもわかるほど動搖している。私はオーガスターを出し抜いたという高揚感から、自分でも驚くほど自然に立ち上がつた。先ほどまでの不安が嘘のようだつた。

「お帰りなさい」

私は距離を保つたままで彼らにこり笑つた。

深夜に現れた人影は、一つあつた。思った通り、オーガスターが例の娘を連れてきたのだ。

「今日はどこへ行つっていたの？ オーガスター……」

私が視線を向けると、オーガスターの後ろにあつた小さな影がおびえたように動いた。

「毎晩その娘と話していたでしょ。どんな方法でオーガスターに連絡したのかわからぬけれど、あなたがバレッタの娘であること、辺境の村でバレッタの侍女の娘として生きていたことも」

「リラ、落ち着いて」

「母子で私に復讐しようとしていたんでしょう、フブリ・トリバンドラマ！」

「リラ！」

「ち、近寄らないで！」

私は咄嗟に身構えた。

「裏切り者……あなたはその子を迎えて行つたのね。やっぱり、いつかはこんな日が来ると思つてた！ そうだ、あの女が私を殺しにくるんだ！」

「……リラ、大丈夫。何もしないよ。ほら、よく見て、この子は男の子だ。信用して」

目を凝らすと、なるほど後ろの影は確かに少年のようだった。

オーガスターは、ゆっくり私に近づいてくる。何もしない、というよう両手を上げている。

私は猜疑心を前面に押し出したような顔つきをしていいると思う。この男は信用できない、といつも心の中で警鐘が鳴るのだ。

しかし、私はどのみち彼を信用するしかないと初めから思っていた。信用する以外にどんな選択肢があるのだ。私はわからない。姉のよう殺せばよいのか？ 彼の同僚たちのように国外へ追放すれば？

私はもう彼がいなければ、寂しすぎて生きていけない。

「この子は、そのバレッタの娘を見張らせるために連れてきたんだ」じりじり距離を縮めてくるオーガスターに身を硬くすると、彼は苦笑して歩を止めた。

「そう、バレッタの娘の名はフブリ・トリバンドラム。彼女は今、ある辺境の村に住んでいる。リラに一言も話さなかつたことは謝るよ。彼女の消息がつかめたのは本当に最近だつたんだ」

オーガスターは、後ろの少年を前に出るように促した。

「この子は新しく城に仕える少年だ。実はフブリは最近、親しい幼馴染の少年を喪つたらし。この子にはその彼になりますまし、フブリを見張るように命じるつもりだつた。もちろん、彼女がカラアに来ることがないようにな」

少年は、バレッタの娘が私に仇なす存在となるのを防ぐために、彼女の監視役として派遣されるらしい。村の人間と娘の記憶を魔法で書き換え、クイルビーという、娘の幼馴染に取つて代わるのだと言う。

私は、彼がすべて話し終えるまで口を開かなかつた。

「……姉さんは？」

私はいろいろしながら早口で投げ捨てるように言った。この男は、こういうときの私の気持ちを何もわかつてはいない。そんな娘のこ

となど、私は正直どうでもよかつた。

「バレッタは死んだ」

彼は一息に言った。

驚愕し、私は大きく目を見開いてオーガスタを見つめた。後ろの少年は、まだびくびくした目つきでこちらの様子を窺っている。

「姉さんが……死んだ？ 嘘よ。嘘よ！」

私は、オーガスタに掴みかかる勢いで、彼に詰め寄った。彼は微動もせずに、私を見下しているだけだった。

「嘘でしよう……？ だって、だって、あの人は私を殺そうと身を潜めていたのよ」

「彼女がここを去ったとき、もはや生きているのが不思議な状態だつた。バレッタはシルベットとともに逃亡し、身ごもつていた子どもを産んだところで力尽きた」

私は両腕をだらりと落とし、彼を見上げた。

「し、死んだの……そう、そう姉さん……」

腹の底から笑い出したい気分だった。驚きよりも、安堵感のほうが強かつたのだ。歪んだ唇から震えた笑い声が漏れる。

オーガスタは、冷たい目で私を見ていた。本人はそんなつもりはなかつたかもしぬないが、少なくとも私にはそう見えた。

「私に大魔法が受け継がれなかつたのは、その娘が持つているからなのね」

少年をなめるように眺め、バレッタの娘を想像してみる。しかしいくら考へても、姉の顔しか思い浮かばなかつた。

「そう……姉さん……死んだの……」

私は、今度は声に出して笑つた。

天に届くくらい、高らかに笑い続けた。

私は数日の間、姉の訃報に心奪われた。

それは、瞬く間に私の中に浸透した。あれほど恐れていたものが、あっけなく消えたのだ。私は、姉の死をすんなり受け入れた自分を

自然に容認していた。それまでびくびくしていた自分を少しは顧みたものの、それはもはや過去の自分でしかなかつた。

そのせいか、姉の娘が大魔法を持つてゐるということにさほど恐怖感はなかつた。姉のときのように日常が手につかなくなるほどの関心もなく、私は解放感に満ちた日々を人々に送つた。

しかし、それも束の間だつた。

その後もオーガスターが不穏な動きを続けてゐることを、侍女たちの噂話で耳にした。私が目を離している間 つまりほとんどが真夜中であるが、彼は外出しているらしかつた。日を追うごとに、私の恐怖は堤防が崩壊するかのごとくあふれ出していつた。

オーガスターの連れてきた少年がいなくなると、いよいよ新たなる不安が私を襲つた。

フブリ・トリバンドラムという少女が、大魔法を有してゐるのだ。オーガスターが大丈夫だと私に言い聞かせるたび、私は不安でたまらなくなつた。最も怪しむべき彼を、信用しなければならないからだ。私は彼の行動を、今までの比でないほど規制した。城内ですら自由に歩けないよう、また外出時には必ず監視をつけた。深夜は地下牢に閉じこめた。彼は嫌そうな素振りすら見せず、微笑んでそれに応じた。そんな態度ですら、私の不安を煽つてやまない。姉が死んだところで何も変わつてなどいなかつた。

私は結局、死ぬまで姉の亡靈から逃れることはできないのではないか。

殺してやる

耳の奥で声が聞こえる。

姉の子が、私を殺しにやってくる。

「さあて、どうしたもんか……」

ツバルは困ったように頭を搔いた。足元には、依然目を覚まさないフブリが横たわっている。

氣を失ったフブリを抱えて城を抜け出したはいいものの、旧女王派の拠点に戻るためのすべはなく、仕方なく城に面した森に隠れる。遠くを見れば、朝よりはずつと小さくなつた煙がまだ立ち上つていた。

ツバルは小さく舌打ちをした。

呻くような声に、ふと視線を落とす。フブリの小さな口がわずかに動いた。

「かわいそうにな……」

少女の頬にそつと触れその涙をぬぐつてやると、彼女の腕がツバルの手を掴んだ。突然のことでのツバルは驚いたようだったが、目を覚ましたフブリを見て安堵のため息を漏らす。

フブリは、影を帯びた虚ろな瞳を地面に落とした。

「……私が……」

「ん？」

かすれた小声にツバルは耳を傾けた。

「……私が、殺したの……」

「何だつて……？」

「わたしが……ルビーを殺したんだ……！」

フブリは爪を立てそうな勢いで顔面を覆つた。ツバルが彼女の腕を強引に引き剥がす。少女のむき出しになつた顔は哀切に歪み、大きな瞳からはまだ涙を流している。

ツバルがあまりの形相に躊躇しフブリの腕を離すと、彼女は上体を起こして頭を搔きむし始めた。

「何であたしは無力なの！？ 何でみんなを死なせてしまうの！？」

？」

はじめは、ただの恐怖でしかなかつた。

でも今はわかる。

あの夢は

「あの夢は、私が自分で隠した記憶だつたんだ……！」

フブリは大粒の涙をこぼしながら、悲痛な声を上げた。

「自分に都合の悪い記憶を抹消して、ルビーが死んだ」と忘れて、
べ、別人をルビーだと思いこんでたんだ！」

「やめろ！」

暴れわめくフブリの両手を押さえ、ツバルは耳元に顔を近づけた。
フブリははじめ抵抗していたが、やがてしゃくりあげながら両手を
だらんと落とした。不規則な吐息の合間に、生睡を飲みこむ音だけ
が静かに響く。

ツバルはきつくフブリの両肩を押さえこんで、彼女の視線を無理に
自分のそれに合わせた。

「そもそも、私が森に行こうなんて誘わなければ……。私のせいだ
よ……！　私が殺したのよお」

「フブリ！」

叫ぶと同時に、ツバルは少女の体が折れそなぐらいきつく抱きし
めた。

「…………。ひとりにしないつて…………約束したのに…………」

小さな嗚咽は、間断なく少女の口元から漏れた。涙が頬を伝つて熱
い。ツバルの腕がきつくて苦しい。けれど、フブリは涙をぬぐうこ
とも、ツバルを引き剥がすこともできなかつた。

「…………なあ、おれもな、昔大切な人を死なせてしまつたことがあつ
たんだ」

耳元に囁かれ、フブリは恐る恐る顔を上げた。

「自分を呪つたよ。何でおれは弱いんだつて、人ひとり守れねえの
かつてな」

ツバルはフブリを抱きしめていた腕を緩めると、自嘲気味に笑つた。

「おれは早くに両親亡くして、父親が剣を教えてくれてたから何も考えずに兵士に志願したんだ。ガキにしちゃ腕は立つほうだったんでな」

胸襟を開くように、ツバルは自身の過去を語りはじめた。

「たかだか十やそこらの子どもが、そつそつ城に入れるわけがねえんだ。でも、何を考えたんだかそこの国王さまは……おれらを自分の近衛にしたんだ。おれとクルージュと、もう一人……オーガスターって言う魔法使いをさ。一番年長のオーガスターでさえ、まだ十三だつたんだぜ」

その三人が国王殺しの罪で国を追われたことを、フブリは知っている。彼女にあまりにも近い存在だったことが、逆に仇となつたのだ。「彼女は流れ者のおれを、いや誰であつても分け隔てなく接してくれる人だつた。素性もわからないガキを兵士の、しかも一番自分の身近におくべき近衛にしたんだぜ？」後から聞いたなら、その人間がどんな人なのかは一目見ればわかるつていうんだ。例えその人間がどんな悪党でも、自分が信じていれば相手も信じてくれる。すごい女だよな……疑いも偏見もないんだ。……おれは、そんなバレッタが好きだつた」

ツバルは昔の情景を思い浮かべるように、空を見上げた。今は亡きその女性に語りかけているのだろうか。その瞳があまりにも哀しげだつたから、フブリは目を逸らせなかつた。

「けど、バレッタの思想はとても危うい。世の中信じてくれる人間なんざ一握りだ。だから、たとえバレッタが結婚しても、国王をやめても、変わらずにおれはバレッタを守り続けると誓つた。なのに

……

鈍い胸の痛みを感じて、フブリは唇を結んだ。大切なものを喪つた気持ちは、今なら痛いほどわかる。

「この先は、知つてるよな？」

フブリは静かに頷いた。

「ツバルは、今も後悔しているの……？」

ツバルはその問いには答えなかつた。代わりにフブリをきつゝ見つめた。

「いいか……？ おそらくあの少年は、リラに命じられてお前を見張つていた。お前がバレッタの娘だからだ」

悪夢が、その一言でついに現実になつた。フブリは少なからずショックを受けた。確実にわかつてることでも、やはりまだ受け入れたくない自分がどこかにいる。

「そしてあいつはこともあるうに、死んだフブリの幼なじみに取つて代わつた。お前や村の人たちの記憶をすりかえたんだ。……だから、フブリは何も悪くない。ルビーのことを忘れてたのは魔法のせいだ。そうだろ？」

フブリは虚ろな目でツバルを見つめていたが、やがて彼にしがみつきながら小さく頷いた。

「確かにバレッタを守れなかつたのは、おれの力不足かもしれない。でもな、残された者の気持ちを踏みにじつてあまつさえ利用する奴はもつと最低だ」

ツバルの言葉は冷たく鋭く響き、胸がつかえた。

「リラ……現国王はそういうことを平氣でやれる卑劣な女だ」自分を掴んでいた腕がかすかに動いたのを感じて、フブリは顔を上げた。ツバルはどこか遠くを見つめている。

「フブリ。お前は王にならなくちゃいけない。シルヘットもそれを望んで遺言を残したはずだ」

「シルヘット……」

「そうだ」

フブリはぼんやり耳を傾けながら、ツバルにもたれかかつた。

「私……何だか……」

する、と力なく彼の腕に体重を預ける。その恍惚とした表情に、ツバルは優しく微笑んだ。

「疲れたんだろ……。ん、少し休むか。そこらへんで水汲んできていっから、待つてな」

フブリを丁寧に横たわらせると、ツバルは背中を向け小川の音の聞こえるほほへ消えていった。

しばらく、フブリは目を閉じていた。

眠たくはなかつた。ただ頭を空にして、見えるものすべてをシャットアウトしたに過ぎない。静寂が静かに響き渡ると、フブリは閉じた瞳から一筋の涙を流した。

頭を空にすることなどできなかつた。

「う……うう……う……」

口元を押さえ上体を起こすと、周りでさえずつていた小鳥たちが驚いて飛び去つた。フブリは膝に顔をうずめ、涙が枯れるのを待つた。

「ルビー……」

胸の奥に棘が刺さつたように苦しかつた。

「何で……何でだよ……ルビー……」

顔を伏せたままで、噛みしめるようにつまづりぱつりと呟いた。何かを発していれば、その間は深くものを考えないで済むような気がした。

フブリは、夢の中の幼いルビーを思い出していた。彼の姿を思い浮かべると心が安らいだ。

いつも自分勝手な我が儘で振り回してばかりだつたルビー、本当はすごく臆病で泣き虫なルビー、でも自分の前では強がつて、たまに男の子らしいところも見せようとするルビー……

想いがあふれ出しそうだつた。

しかしそれらが、共に旅してきた少年と重なり綺麗に一致すると、胸が苦しくなつた。はつとして首を横に振るも、そのイメージは頭から消えてくれなかつた。

「あれは、ルビーじゃない……！」

フブリは座つたまま、じだんだを踏んだ。頭を抱えて必死に忘れようと試みるが、足搔けば足搔くほど彼の虚像は鮮明になつた。むしろ幼い頃のルビーがかすんで、はつきりその姿を思い出せなくなつた。

鳥の鳴き声が響いた。

「どうして……」

涙で前が霞んで見えない。フブリはそれをぬぐつゝともせず、ただぽんやりと遠くを見つめた。

「どうしてこんなことになっちゃったんだろ……」

このようになるなら、カラアに来なければよかつた。何も知らずに、ずっとあの村でルビーと一緒に暮らしていれば……

「違う！」

フブリは自分自身を否定するように首を大きく横に振った。

「それはルビーじゃないんだよ……！ ルビーは、ルビーは……」幼なじみのルビー。一緒にシルベットを見取ったクイルビー・ヴォルケット。

しかし、彼はもういないのだ。

フブリは、はつとして顔を上げた。

自分が涙していたのは、ルビーが死んだという事実が哀しくて辛いためだと思っていた。しかし、感情の奥底に問い合わせてみれば、哀しい気持ちは確かにあるものの、その死を自然と受け止めている自分がいる。

「私……」

何が、納得いかないのだろう。

「私は……」

ルビーが死んだことが哀しいのではなかつた。裏切られたことが……

いや、彼がルビーでなかつたことが何より、辛い。

「そうだつたんだ……。そうだよ、そうだ！」

フブリは涙をぬぐい、何かを決意して深呼吸した。自らの両頬を勢いよく叩き一喝してみる。明るい音が響くと、フブリは長い夢から覚めたように感じ、大きく背伸びした。少女の心は、もう晴れ渡つていた。

「お待たせ〜。……フブリ？」

ツバルが水を持って戻ると、そこにはもうフブリの姿はなかった。鳥の声が、ツバルを嘲笑つかのように森の中に響き渡る。

「フブリ……」

ツバルは、苦しげに咳き、遠くにそびえ立つ王城を眺めた。

フブリは走っていた。何度も息を詰まらせ、足を草に絡ませながら、走っていた。

「はあ……はあ……はあ……」

彼が誰なのかはわからない。

ツバルの言つように、とんでもない悪党かもしれない。本当に自分を利用していただけかもしれない。

けれどルビーが死んだ後、自分を支え、ここまで一緒にいてくれたのは確かにあの少年だ。あの時間の中で自分にとつて、彼は紛れもなくクイルビーだったのだ。

だからフブリは、信じたかった。

他の誰でもない、彼に支えられていたことは真実。

その瞬間、自分はひとりではなかつたことも真実。

「ルビー、待つて……」

フブリは、まっすぐに王城を見据えていた。その目に、涙の跡はもうなかつた。

「すぐ行くから……！」

城に放たれた火は鎮火していた。煙ももう見えない。

城門前では、傷ついた兵士たちが救護班に手当てをされ、健康な者は旧女王派の残党処理に奔走している。多くの旧女王派は捕らえられる前に逃亡したが、数人は拘束され、捕虜となっていた。

その周囲は、城下町からやつて来た野次馬たちでごった返し、兵士どころか侍女までもが外に出て対応に追われていた。

そんな騒動に紛れて、城壁の傍の茂みを這うようにして動く影が、三つ。

大きな影が、青い古ぼけたポリバケツをおもむろに開けた。その背後を小さな影が二つ、つかず離れず追いかけてくる。

「オヤジー。何でお城に来てんのあたしたち」

小さな影 オリヴェンサが黒いフードを脱ぎため息をついた。静かにしろよ、と大きな影がたしなめる。

「もう旧女王派も危ねエからな……。」のぞきくさに紛れて、もうもんもらつてさつさと王都から逃げようかと」

「サイテー」

「さいてー」

「うるせエよ、おめーら」

イエリコはぼやきながら、胸元から簡易移動魔方陣を一枚取り出し、一人の子どもに渡した。

「あつ、おうじょさまだ！」

魔方陣を受け取りもせず、ヴィティムは遠くを指差した。

「んなわけねーだろ。何でわざわざここの警戒態勢の中、捕まりにくる……」

しかし次の瞬間、イエリコはその少女の姿を田の端ことひらえて驚愕した。

「イエリコー」

フブリは、肩で息をしながら駆けつけた。ぽかんとするイエリコにしがみつく。

「私も、城の中に、連れてつて！」

「まじかよ……」

イエリコはまるでそれが冗談であるかのように、大げさに両手を広げて見せた。しかし少女の真剣な瞳に呑まれたのか、彼は大きく嘆息し次の瞬間、魔方陣の描かれた紙片を差し出していた。

身体がぐるぐる回るような感覚の後、フブリは頭から落下し、見慣れた鶏小屋の中に落ちた。飼料が体中にへばりついてる。

「いつてー！」

「オヤジ、この移動方法どうにかならないわけ！？」

子どもたちがすっぽり体を収めてしまった敷き草から、顔だけを出してまくし立てている。

「仕方ねエだろ……。改良してるヒマがなかつたんだからよ」

体に張りついた草を器用に払いながら、イエリコはぼやいた。

「イエリコ」

フブリが真剣なまなざしで彼に向き直ると、イエリコはやり場がないように視線を泳がせた。

「リラの話を聞かせて」

「旧女王派だのツバルだのから耳が腐るほど聞いてるだろ……」

イエリコは面倒くさそうに息を吐いた。

「ううん、違う。あなたの客観的な意見を聞かせてほしいの。私、真実が知りたいんだ」

そつぽを向いてしまったイエリコの前に出て、フブリは懇願した。

「あなたはお母さんが国王だつた頃からカラアに仕えていたんでしょ？ そしてリラにも仕えて、今は旧女王派と行動をともにしている。……あなたなら、三者の主観的な視点を切り崩してくれるはず」

「……さアな。おれにはわからんね」

イエリコは少し考えるよう間に間を空けて、瞳を逸らした。

「父ちゃんのケチ！」

「ケツの穴の小さい男！」

「つるせよ、おめーらー！」

足元で「ああああああああ騒ぐ子もたひこ、イエリコの一喝が飛んだ。

「イエリコ、聞いて」

フブリは、再度彼の前に出た。少女を視界から外そうとしている男に、食つて掛かる勢いでしがみつく。

「リラに会つて、私思つた。あの人は……」

「あア、わかつた！ わかつたよ！」

迫力に圧されたのか、ついにイエリコは両手を上げてフブリを直視した。

「お前さんはリラに会つて、少なからず違和感を覚えた。そうだな？」

強く頷く。

「じゃあ、それが答えだ」

即答され、フブリは目を剥いた。自分の答えが間違つているとは思えない。だが、それを彼がこんなにも簡単に、容認してくれるとは思わなかつた。

「それ以上でも以下でもねエ……。おれは確かにどつちつかずな生き方を選んできたし、これからもそうするつもりだ。だが、完全に客観的なリラを見れているかと言えば、そうじやない」

「それでもいい！ あなたから見た、私の知らないリラの姿を知りたいの！」

激しい態度で迫ると、彼は眉をひそめてこめかみを押された。

「……あア……面倒くせよ……。おれはこいつこいつのは苦手なんだよ……」

イエリコは小屋の隅に腰を下ろし、座れよ、とフブリを促した。子どもたちはきよとんとしたまま、敷き草の中から一人の様子を凝視している。

「リラが国王になつて、何が変わつたかって言つたら、実はそんな

大きな変化はなかつた

胸のポケットから噛み煙草を出して、イエリコは吸いこむように口に放つた。

「何が駄目つてことはねエんだ。政権がリラに移つてすべてがマイナスになつた、なんてこともねエ……」

「でも、最果てのことは……」

「あれは確かにやりすぎだがな。大樹の生け贋に少女を選んだのは、リラじゃなくて最果ての兵士だ。それに過去のカラア王だつて、そりや悪いの探せばリラ以上のが山ほど出てくるぜ」

国に逆らつた民を大量虐殺した王、ひどい納税を課した王 イエリコが語るそれらの王の姿は、フブリにとつてとても信じがたい話ばかりだった。

「リラは王には向かねエが、その分をオーガスタが補つて、それなりの政治はできてる」

フブリは、リラの前に現れた魔法使いの姿を思い出した。リラは彼のことをオーガスタと呼んでいた。

「オーガスタつて、ツバルたちと一緒にお母さんに仕えていたつていう、魔法使い？」

「そうだ。カラアを別次元に造つた大魔法使いの末裔。奴らは代々国王に仕える身なのさ……」

ツバルたちと同じように罪を着せられ、しかし彼はカラアに残つてゐる。リラを助けたときのオーガスタを思い出すも、彼がリラを憎んでいるようにはとても思えなかつた。国王に仕えるという身の上、渋々リラに協力しているのだろうか。いや、そうではない。きっと

オーガスタは

「彼は、リラを許したんだね」

「……さアな。あいつの考へることも、おれにはさっぱりわからねエ。昔はあいつ、旧女王派だつたんだが、足抜けしたんだ」イエリコは煙草を噛み潰しながら、頭を搔いた。

「それで、リラは何とか今のところカラアを引っ張つていけている。

なのに未だに旧女王派が存在するのは、あいつが実の姉を殺した罪人だからだ。おまけにその罪を三人の近衛に着せた。バレッタという人間に惚れて、国王を支持していた民たちは、その真実を知り黙つていられなかつた。それだけ、バレッタのカリスマ性は高かつたんだ」

息苦しさを感じ、顔を歪める。こればかりは、何度聞いても気分のいい話ではなかつた。

「バレッタ・コスマレドとリラ・コスマレドは、歳こそ離れてるがそりや大層仲のいい姉妹だつた」

抑揚のない声が耳を貫き、その真実にフブリは少なからず動搖した。「バレッタは明るく社交的、リラは内向的だが頭脳明晰。まったく正反対な姉妹だが、お互が持つてないものをお互いに補い合つてるつて感じで上手く釣り合いが取れてた」

「えー！ 王さまと前の王さまって仲よしだつたのか！？」

「ヴィティムは黙つてな！」

ヴィティムが身を乗り出し、それをオリヴェンサが制す。彼らにとつても意外な情報だつたのだろう。目を丸くして聞き入つている。

「だけど、リラはお母さんを殺した……。それは何故？」

フブリは静かに口を開いた。イエリコの話が真実ならば、あのように凄惨な事件が起るはずはない。

「知らねエよ……。おれが見たことがあるのは、仲よさそうに一緒に花の手入れをしたり、髪を漉き合つたり、笑い合つてる一人の姿だけだ」

感情のまったく見えない声で答えると、イエリコは噛み煙草を吐き捨てた。

リラの怯えたような顔しかフブリは見たことがない。彼女が母とともに笑い合つている姿など、少しも想像がつかなかつた。

「リラが王位に興味があつたとは、とても思えねエ……。それでなくともあの女は人づき合いが嫌いで、人前に出ることすら苦手だつたからな。でも、バレッタの婚儀では大粒の涙を流して自分のこと

のようになんでたし、フブリ、お前の名前を一緒に考えたりもしていた。リラが唯一心を開けたのはバレッタだけだつたんだろうな」やはり彼の語るリラの姿に、フブリの想像はとても及ばない。ただ、火の回る温室近くで彼女が震えている姿だけが、脳裏に鮮明に浮かんだ。

「だけど、もしかしたらあつたのかもしれない」

イエリコは落ちた噸み煙草を足で潰しながら、囁くように言った。

「リラが心の底に暗いものを作つてしまつような出来事が、ほんの

小さなすれ違いから生まれた惡意が」

しばらく、物音一つない真っ白な時間が過ぎた。

フブリが硬直したまま彼を見つめていると、イエリコは初めて自分

から彼女に視線を合わせた。

「何がきつかけだつたかなんて本人たちにしかわからねエさ

それは、フブリを立ち上がらせるのに充分な言葉だつた。

「ありがとう、イエリコ」

「ねーちゃん、どこ行くんだ?」

突然立ち上がつたフブリに、ヴィティムが心配そうに駆け寄る。

「私、わかつたの。リラのところに行く」

微笑んで小屋を後にする。子どもたちが不思議そうに首を傾げていたが、フブリは何も言わず外に出た。足取りは軽かった。リラに会いたい。ルビーに会いたい。話したいことがたくさんある。

フブリは迷うことなく、走つた。

久しぶりに大声を出した。

私は、小刻みに震える手を必死に握り締めた。

感情を荒立てることには慣れていない。しかし、怖くてたまらないのだ。叫ばなければもつと怖いことが起こる気がして耐えられないのだ。

「陛下……」

少年は、打ちひしがれたような顔で、私の前に戻ってきた。先ほど私が怒鳴つたからだろうか。生氣の抜けたような、暗い影を背負っている。何故戻ってきたのか、と私は問わなかつた。

「あなたも、私と同じなのね」

フブリ・トリバンドラムを監視していた少年。しかし、カラアへ戻ってきた今は何者でもない。何年もクイルビーという嘘をまとい生きてきた彼に、もうフブリ・トリバンドラムという宿木はないのだ。

「どこにも居場所がないのよ。そうでしょう?」

少年は、ただじつと私の顔を見つめていた。

「まだ、外は騒がしいのね……火は消えたみたいだけれど」

「旧女王派は制圧されたようです。オーガスターさんが暴動を鎮めて、今は兵士が総出で事後処理に追われているようです」

「そう……」

私はほつとして息をついた。胸元に下げていた鎖を、音を立てて引き上げる。

「これが何かわかる?」

私は鎖の先についている小さな鏡を、少年に掲げてみせた。

「魔法ですね?」

少年は即座に答えた。

鏡は光を反射させながら、くるくると回つた。そこに映るものは、私の顔でなければ少年の姿でもない。そこには、城門で傷ついた兵士の搬送に追われているオーガスターの姿が映し出されていた。

「この鏡は、オーガスターがどこにいて、何をしているのかがわかる魔法がかけられている。毎朝、オーガスターが自分でこの魔法をかけ、私の味方だということを証明するの……」

私は鏡の装飾を撫でながら、ぼんやりそれを眺めた。

「これがなければ不安なの。いつ彼が裏切るのか……信じたいといふ気持ちもあるけれど、本当は彼が裏切る日を待っているのかもしないわ」

何故こんな話をこの少年にしているのか不思議だつた。私は鏡を胸元にしました。

「陛下！」

外に出ていた多くの侍女と兵士が戻ってきた。彼らはこの非常事態に私が一人でいたことに責任を感じているようで、各々が地につきそうなほど頭を下げた。近衛隊ですら、つい先ほどまで応戦で手いっぱいだったのだ。彼らに非はない。

「私が周りの言うことも聞かず勝手に温室へ行つたのがいけなかつたのです。気にしないでください」

本当に申し訳なくて、私は条件反射で頭を下げた。その動きに非を感じたのか、兵士たちは更に頭を垂れた。王ならこうしたとき、もつと毅然とした態度を取らなければならないのだろう。そうは知つているものの、私はどうしても強気になつて行動できないのだ。彼らを前にいたたまれない気持ちでいると

「何だ。おれが一番手か」

突然低い男の声が背後から聞こえた。

声の主は、しかし一目見た限りでは女性のようだつた。胸の辺りまでの長い髪を二つに編み、フレアスカートを穿いている。右手に握られた近衛兵の剣がなければ、私は彼だとわからなかつただろう。

「クルージュ・エーレブル……」

男は、不敵に笑つた。くるくる剣を回す慣れた仕草が、その身なりとあまりに不釣合いだ。身を強張らせると、兵士たちが私を取り囲むように前へ出た。

「おいおい、おれと本氣でやりあつて勝てると思うのか？」

トントン、とクルージュは軽く足踏みをした。剣を構える様子もなし。兵たちは男の余裕に少なからず動搖したようだ。私は彼の強さをよく知つてゐる。剣の腕だけを見れば、間違ひなくカラア一だ。

銀の騎士以外に、この男と張り合える人間がいるとは思えない。

「クルージュ！ くつそー。おれのほうが絶対近いと思つてたのに

！」

遠くから緊迫した状況にそぐわない能天気な声が聞こえた。回廊を駆けてくる金髪の男が視界に入り、私は驚愕した。彼は次々に立ちはだかる兵士の群れをなぎ払い、もう私のすぐ近くまで迫っていた。

「ツバル……」

「だから言つたろ。右の階段のほうが近いって」

クルージュは、その言葉だけを背後のツバルに投げ、おもむろに私に向き直つた。私がびくり、と身を震わせると、クルージュは冷淡な瞳をこちらに向けた

「最果ての警備は全滅させてきた」

心臓がどくん、大きく鳴り響く。ひどい息苦しさを感じて、私は唾を飲みこんだ。

「あ……」

ついに、恐れていたことが起きた。旧女王派が攻め入り、その混乱に乗じて私が罪を着せた近衛たちが、私に復讐しに戻つて来たのだ。

「村人はアリカが守つてゐる。大樹の生け贋になつた娘だ」

どくん、どくん。

心臓の音がうるさく耳の奥で響いて止まない。

「もうすぐフブリが来るぜ」

兵の体が傾いで倒れ その背後で皮肉な笑いを浮かべるツバルの姿が見えた。憎悪に満ちたその相貌が、私を確実にとらえる。

そう、フブリ・トリバンドラムが来る。

私を殺しにやつて来る。

私を殺しにやつて来る。

「罪を償え、リラ！」

ツバルが叫び、私は、白くなつていいく意識に呑みこまれた。声が出なかつた。頭も回らなかつた。

兵たちが、とまどつてゐる。言わなくてはならない。反逆者を捕らえろ、と言わなくてはならない。この者たちの言葉に耳を傾けるな。王の命に従い、反逆者を捕らえろ。

言わなくてはならない。十五年前のように、彼らを反逆者にしなけ

れば、私の罪が本当のものになつてしまつ。

だが、私の唇は震えるばかりで一向に動く気配がない。

そう考へてゐる間にも、一人の剣士は次々に兵士たちをなぎ倒していく。もはや、私を守るものは数人の兵と背後で震えながら構える侍女ばかりだ。

私が祈るよう手を胸に当てる 突然ツバルの剣が空を飛んだ。私はぼんやりとそれが描く弧を目で追つていた。見間違いではない。彼の剣は彼の意思に反して手から抜け出し、まるで命あるもののように空を飛んで逃げたのだ。

金属の塊は地に落ちて、カラカラともの哀しい音を立てて転がつていつた。

「てめえ……」

ツバルが私を睨んだ。いや、よく見ると彼の視線は私に向かつてはない。ツバルは私の隣にいる魔法使いの少年を見据えていた。

「クイルビー」

私は呆気に取られて彼を見つめた。少年が何故私に『する』ような真似をしたのか、わからなかつた。

「オーガスターさんはあなたを裏切つたりしません。だから、信じてあげてください」

少年はそう言つと、私を守るようツバルたちの前に立ちはだかつた。

「ルビー。お前、おれに勝てると思うか?」

「思いません。でもツバルさん、あなたは間違つてゐる。誰かを殺してその上に成り立つものなんて何もない。復讐は愚かです」

「何年も人を騙し続けてきた男がよく言つぜ……」

ツバルは唾を吐き捨てた。対峙したまま、少年が表情を曇らせたのを私は見逃さなかつた。

「陛下は逃げてください」

「でも……」

余裕のない少年の後ろで私が足踏みをしていると、目の前で風が舞

つた。一瞬の風は轟音を鳴らし、それらが収束して人の姿を形づくる。白く浮き出るその男の顔は、暗く影を負っているように見えた。

「オーガスターさま！」

私が口を開く前に、侍女が歓喜の声を上げた。灰髪の魔法使いオーガスターはこの状況を知っていたようだつた。彼は周囲を見渡し、ここにいるはずのない二人の男を、悲哀漂う表情で見つめた。

「ツバル、クルージュ」

オーガスターはまるでそれが幻であるかのように、彼らの名を呼んだ。

「遅いぜ、オーガスター……」

ツバルが口の端をわずかに上げた。オーガスターは私を囲んでいた兵や侍女たちを見渡し、素早く彼らに指示を出す。

「ここは私に任せて、君たちは外へ行きなさい」

臣下たちは顔を見合わせ、しばらく逡巡していたが

「早く！」

オーガスターの怒号に身を固くすると、敬礼をして足早に去つていった。

静かになつた回廊で、オーガスターはツバルと向き合つた。これほど切なそうにしている彼を見るのは初めてだ。私は、自分のことでもないのに何故かとても胸が苦しくなつた。

「……こんな形でこんなに早く再会することになるとは思わなかつた」

「本当にな……」

ツバルが咳き、彼の手元でチャリ、と金属の擦れる音がした。

私はただ、クイルビーの後ろで立ち尽くしていた。体が石になつたように重たく、動かない。ツバルが一步、足を踏み出した瞬間

「待つて！」

大声が、回廊に響いた。駆けてくる足音も。そこにいた全員の視線が声の主に集中する。

少女は息せき切らせ、私の前に現れた。

フブリは、汗に濡れた前髪を煩わしそうに搔き揚げた。ツバルの帶剣に視線を向け、彼の手に自身のそれを重ねて配せをする。ツバルは戸惑っていたが、やがてフブリが微笑んでいることに気づき、剣を下ろした。

「フブリ。どうして、どうして戻ってきたんだ！」

悲愴な声でルビーが叫んだ。

けれどフブリは、微笑んでいた。彼がそう言って自分を心配するだろう、ということがとっくにわかつていただからだ。

「ルビー、私ね、思い出したよ」

ゆっくり、噛みしめるように弦くと、瞼の裏に幼いルビーの姿がぼやけて映し出された。

「さっきは驚いたやつて、何も言えなかつた。あなたが幼なじみのルビーじゃないって知つて、すぐ悲しかつた。私騙されてたんだ、つて思つて……」

ルビーは喉元につかえたものを絞り出そうとするよつと、口を小刻みに動かした。しかし、いくら待つても、そこからは何も発せられなかつた。

ルビーは申し訳ないことがあつたとき、それを言葉にするまではしばしの時間をする。長い間一緒だつた。だから、彼が今どのような心境でいるか、手にとるようにわかる。

「でもね、私思つたの。幼なじみのルビーはあのとき死んでしまつたけど、その後の私を支えてくれたのはあなたなんだ」

「フブリ……」

フブリは小さく頷いた。

「銀の騎士に村が襲われたときも、旅の途中も、私のこと、助けてくれたよね？ 一緒に笑つて、泣いてさ……シルベットのことを思い出しても、いつも傍にいてくれた。私たち、いつも一緒にいた」

遠い記憶を思い出し、フブリは田頭が熱くなるのを感じた。もう、答えは出ている。

「あなたが幼なじみのルビーでも偽者のルビーでも、私にとつて大切な人だつてことに変わりはないんだよ！　私の大好きなルビーなんだよ！」

体中から滲み出た叫びだつた。思い出の中の彼ではない。今、こうして対峙しているルビーに伝えたかった。

「だけど、ぼくは、クイルビーじゃ……」

ルビーが揺らぐ視線をフブリから逸らし、しかしフブリはそれを許さなかつた。咄嗟に彼の腕を引き寄せる。

「私の大事な人なんだ」

弾かれたように、ルビーが顔を上げた。泣き出しそうな少年の瞳の奥に、わずかな温かさを見つけ、フブリは一筋の涙を流した。

「リラ、ツバルも……もつやめよう？　こんなことに意味はないんだよ」

しんとした回廊に、フブリの声と足音だけが反響した。

「初めまして、リラ。私、あなたの姪のフブリ・トリバンドラムです」

近づいても、リラはぴくりとも動かなかつた。できる限り柔軟な笑顔で、彼女に歩み寄る。

「私、あなたと話したいの。話し合いましょう？　私はあなたを殺そうなんて思つてはいない」

フブリは、頬を伝う熱いものをぬぐうこともせず、彼女をしつかりと見据えた。

リラ・コスマレド。自分の母を殺した叔母。カラアの王。だけど今は、ただのちつぽけな一人の人間に見える。

「話し合いなんて……できるはずがない。私はあなたの母親を殺したのよ？」

かすかな笑いを孕んだ声で、リラは吐き捨てた。数日前なら、こうして笑えるリラが憎らしく思えたことだらう。けれど今は、とても哀しい仕草に思えてならないのだ。哀しい人だ、と思う。ずっと母の亡靈に怯え、人を疑い生きてきた国王……

「それでも、あなたは私の叔母さんだもの。私の血のつながった家族だもの」

「……でも、私は、もう……」

リラは、信じたくないといつよつにしきりに首を横に振った。フブリが彼女にそつと手を差し伸べた瞬間音がした。何か軽いものが落ちたような、トン、といつ小気味よい音。と同時に、リラの体が一瞬大きく前に揺れる。

「あ……？」

最初は何が起こったのかわからなかつた。リラが小さく咳き、目を見開いたまま動かなくなり フブリは差し伸べた手を彼女の背中に回すことができなかつた。

目前の白い衣服が朱に染まつていくのを、フブリは立ち止まつたまま見ていた。リラは胸を押さえ、自身の手にこびりついた赤いものを虚ろな瞳で見つめた。

リラの背後で、人影が薄い笑い声を漏らした。細い背に突き立てられた剣は、リラの生命を一刻も早く奪い去ろうと彼女の肉に深く食いこんでいく。

鮮血が真っ白な床を濡らし、フブリはわななく唇で叫んだ。

「リラ！」

「お前……確かに」

ベルイヤールという名の、侍女だつた。女は誇らしげに笑つた。

「私も心中ではずっと旧女王派の一人だつたのよ……。バレッタさまがご健在だつた頃からリラに仕えていたから気づかれなかつたけど、信用させておいて、裏切つてやりたかったの。いつかこうして殺してやるつもりで傍に残つたのよ……。あはは……いい気味だわ！」

甲高い笑い声を上げ、ベルイヤールは剣を手放した。落ちた金属の鈍い音が回廊に響く。

クルージュが彼女を拘束し、後ろ手に縛り上げた。ベルイヤールは抵抗もせず、ただ笑うばかりだつた。

「……人を疑う生き方しかできない私には……当然の結末だわ……」リラの身体が傾いで、落ちる。膝を着いたリラは、虚ろな瞳で口元を歪めた。

「私が信じてないもの……。信じてもらえるはずがないわよね……」

苦しいだろうに、彼女は微笑みを作ろうとしていた。自分に向けられたその笑みに、フブリは胸を締めつけられるような感覚を覚える。

「よかつたわね、オーガスター・ツバルも……こうなることを、望んで……」

言葉が途切れたと思うや否や、リラは前のめりに倒れこんだ。オーガスターが彼女の身体を支え、仰向けに横たわらせる。

「リラ……私は、君を殺したいと思ったことはない。憎みはした……けれど、君は清い人だ。犯した罪の重さをわかることができる人だ……」

オーガスターは、ひざまづき、リラの手を祈るように握り締めた。だが、彼女は虚ろに天井を眺めるばかりで、ぴくりとも動かない。

「フラ！ リラ！」

顔中を涙でぐしゃぐしゃに歪めたフブリが駆け寄る。

「オーガスター、魔法で何とかならないのか？」

クルージュは、応急処置をしようとして手持ちの医療器具ではどうにもならないと判断したのか、オーガスターに問うた。しかしオーガスターは静かに首を横に振るだけだ。

「人体の傷にも魔法は効く……。しかし、それはあくまで自然治癒の範囲だ……」

苦悶の表情を浮かべ彼女を見下ろす面々に、フブリは絶句した。

もう、何一つなすすべはないのだ。

何もできない自分が心底呪わしい。リラを救えなかつた。自分はまだ、何も伝えられない。向き合つて話し合つたことすらないというのに。

それだけが頭の中をぐるぐる回つて、涙となつてあふれ出る。

やつと叔母のことがわかつたような気がした矢先に、自分は唯一の肉親を喪つ。また、大切なものを喪つ。死んでしまつ。

また

「コラア！！」

少女が、私の名を呼んだ。

そのとき、私の意識は不思議とはつきついていた。

私の手を痛いくらい握り締める男も、しがみついて離れない少女も、立ち尽くしたまま私を見下ろす男も、彼らの動きはスローモーションのようにしつかりと私の目に焼きついた。

いや、もしかしたらこれは、氣を失つた私が見ている夢なのかもしない。

「『めんなさい……姉さん。ごめんなさい』」

夢ならばいい、と思つた。緩やかに口をついて出る謝罪に、私は自分で驚いた。

そう、こんなにも自然で、簡単なことだつたのだ。

「オーガスター、私、ずっと謝りたかった……。どうして今……私は薄らいできた意識の中で、口の端から呟いた。もはや身体は鉛のように重く、指先一つ動かせなかつた。

「リラ、わかっている。大丈夫だ、バレッタは君を恨んではないよ。大丈夫……」「姉さん……ごめんなさい……。ごめんなさい、ごめんなさい……」私は最後の力を振り絞つて、姉さんの腕を掴んだ。

「私の顔を覗く姉さんの顔が見える。姉さんは、私のために涙を流してくれている。あなたが私を殺しに来るなんて、有り得ないのに。姉さん、私、ずっと謝りたかったのよ。姉さん、ごめんなさい……」

「姉さん、ごめんなさい……」「

リラは、フブリから視線を逸らすことなく呟いた。しかしその強い瞳に反して、フブリの腕を掴んでいた手からは、徐々に力が抜けていく。フブリはたまらず、落ちかける彼女の手を握り締めた。

力なき腕がだらりと下がる。蒼白な頬を涙が伝う。

「リ、リラ！ やだあ！」

「フブリ、落ち着いて！」

ルビーが、暴れるフブリを抱きすくめた。

「いやだ、いやだ！ せつかく会えたのに！ 私の、たつた一人の血のつながった家族なんだよ……！」

しばらくリラの顔を覗きこんでいたクルージュが、静かに首を横に振つた。

「やだあ！」

ツバルは、少女の慟哭を聞きながら、一同の背後でぼんやり立ち尽くしていた。

望んでいた結末は、こんなものだつたのだろうか。

自分は、何のために何年も隠れてきたのだろうか。リラを憎み続けてきたのだろうか。フブリを哀しませるためでは決してない。そもそも、バレッタは人を憎めと言うような女ではなかつたはずだ。結局、自分は自己満足のためにリラを憎み続けてきた。

フブリも、リラを憎んでくれればいいと思った。

いや、そう仕向けたはずだつた。何も知らないフブリをカラアへ連れてきて、その現実に落胆させ、自然とリラを憎んでくれるようにならせる計画だつたはずだ。

それがどうだ。

フブリは、憎むどころか彼女を愛している。

憎しみは何も生み出さないとオーガスターが言つていた通りだつた。そんなことはわかりきつていた。わかつていて、見ない振りをした。憎む以外に、何もできなかつたからだ。

「ツバル、いい加減気づけ……。フブリはバレッタじやないんだよ」

クルージュが立ち上がり、ツバルの肩を叩いた。

ツバルの視線はゆつくりと宙を舞い、虚ろにフブリの背に向けられた。

真っ白な回廊に、フブリの泣き声だけが響き渡る。それはいつまで経つてもやむことはなかつた。

「フブリ」

しばらく沈黙していたオーガスターが口を開いた。静かに泣いていたのか、彼の頬には涙の跡が見て取れた。

「これは、私の個人的なお願いだから、君には断る権利がある」

静かな声が少女の耳元を通り過ぎる。

「彼女に、大魔法を使って欲しい」

フブリは涙でぼやける視界の中に、オーガスターの真摯な瞳を見つけた。

同時に、自分の身体から淡い光が漏れ、それがリラへ向かつて伸びた。

ハニカムアーマーが破壊された。

両手に余る大きな鉢植えを抱えた少女が、広い廊下を駆け抜ける。それはもひつ、顔全体を覆い尽くすほどの大さだつたから、少女は前もろくに見えなかつた。おまけに鉢植えの重さといつたら……いやいや、愚痴はやめておひつ。自分で運ぶと言つた手前、今更ツバルの手は借りられない。

途中すれ違う侍女たちの、くすくす笑う声が聞こえて、フブリは少しだけ恥ずかしくなつた。

「リラ！ 具合はどう？」

扉を勢いよく開けて、フブリはひと際明るく彼女に話しかけた。そよ風が頬をくすぐる。開け放たれた窓から入りこんだ風が、カーテンを静かに揺らした。ベッドに上半身だけを起こしていたリラは、その少女の訪問を待ち望んでいたように満面の笑みを浮かべた。

「もうずっとといいのよ。オーガスターが私をベッドに縛りつけているの」

リラは少女のようすに微笑んだ。隣に座つてゐるオーガスターが、少しだけ困つたように頬を搔いた。

「あら、ライラックの花が咲いたのね。ありがとう」

鉢植えの横から顔を半分だけ出しているフブリに苦笑しながら、リラは手を差し伸べた。鉢植えを受け取ると、彼女は陶然とした瞳で花の香りを嗅いだ。

「昨日咲いたんだ。あとシラーも薔を出しはじめてたんだよ」

「ごめんなさいね。温室の世話もフブリに任せきりにしちやつて」
フブリは無言で首を横に振つた。笑つて、早くよくなつてね、とだけ答える。

外に出ると、扉の脇に潜むように、ツバルが立つてゐた。

「どうだつた？」

フブリの歩幅に足を合わせながら、ツバルは静かに問つた。

「うん。 いつもどおり。 やっぱりまだ思い出すには時間がかかるかも、ってオーガスターが言つてた」

「記憶が戻らないほうがいいとも思うけどな……。 気がついたときには、姉は他界していくその娘が傍にいた……。 悪くねえ世界だ」

「そうだね……」

フブリは歩きながら、遠くを見つめた。

リラがベルイヤールに刺されてから、一ヶ月が経つた。 旧女王派が王に反旗を翻したという世紀の大事件は、すぐに民衆の中でセンセーショナルな話題となつた。 更に、王城に忍んでいた旧女王派の侍女が国王を殺害しようとした、そのショックで国王は十数年間の記憶を失つてしまつた、というニュースが流れるど、それはもう民の興味を惹きつけるに充分なものだつたのだ。

だから、先代国王を殺めた罪で国を追われていたツバルたちが戻つてきたことに、民衆の多くは無関心であつた。 三人の近衛は自分たちの身の潔白を証明した。 しかしそれを喜んだのは、今は無き旧女王派の残党くらいで、結局、誰が先代の王を殺したのかはうやむやのまま、国民の記憶から忘れ去られていくことだらう。

リラには大魔法の副作用と思われる記憶の欠如が見られたが、それ以外は至つて健康であるし、胸には傷跡一つ残つていない。 むしろ、罪の呵責に苛まれ続けていた数年間が彼女の記憶から抜け落ちたことは、ツバルの言う通り幸せなことなのかもしれない。

いつかは思い出す日が来るかもしれない、と思う。 けれど、フブリはそのときも今と変わらず彼女の傍にい続けることができると確信していた。

「明日、フブリのお披露目パーティーだる」

ぼうつとしているフブリの頭を小突き、ツバルはいたずらつぽく笑つた。

「お披露目つて……言つておくけど、私は王さまになんかなるつもりはないよ。 明日は単なるリラの快気祝い。 私は一般客として出るつもり」

もとより、王になるためにカラアへ来たわけではない。リラが記憶を失つた以上、今は彼女を支えることだけが自分の役目だとフブリは思う。先のことはわからないが、大切な叔母を守りたい。そう思つた。

「そう言つてたよ」

ツバルは、今度は声を出して笑つた。

「でも、お前は人の上に立つのが向いてると思つぜ～？」

ひょうひょうとした、能天気ないつものツバルだ。フブリは安堵感を覚え、破顔した。真剣な彼も悪くないが、やはりツバルはこうでなければ。

「……おれは、リラを憎むことを何年も生き甲斐にしてきた。憎むことでなあ、バレッタを守れなかつた自分を擁護してたんだな、多分」

「そつ か」

隣でツバルがぽつりと漏らした。フブリは、彼がどれだけバレッタのことを守りたかったのかを知つてから、素つ氣なく返事を返した。

「でもさ、フブリはリラを愛してやれたら？　『バレッタのため』なんて言つて何年もリラを傷つける計画を練つてきたおれなんかよ、よっぽどすごいことだと思うんだ」

うん、とツバルは一人大きく頷いて見せた。だが、自分はそんな聖人のような考えはできない。

「私、リラのすべてを愛せるような人間じゃないよ」

フブリは小さく首を横に振つた。

「本当は最初、リラのことが憎くてたまらなかつた。シルベットの思い出を奪つてお母さんを殺した人だ、つて。私も殺してやりたいと本気で思つた」

母を殺し、最果てを生け贋によつて閉ざし、あまつさえ姪の命をも奪おうとした女　　そう、その話を初めて聞いたときは、とんでもない国王だと思つた。彼女を殺せと声高に言う旧女王派の気持ちが

わかつたのだ。

「だけど、憎いけど、認めなきやいけないと思った。だつて、リラはあんなに苦しんで、あんなにちっぽけな人だつた。私が信じなきや、誰がリラを信じるの？」

バレッタと仲がよかつたというリラ。それが本当の彼女であると信じたかつた。

「そうだな……。うん、さすがおれの見こんだ女だ。絶対フブリは将来イイ女になるつて」

ツバルは、歯を見せて笑つた。

「やっぱ、お前すごいよ」

真顔で心底感心しているツバルに、フブリは思わず吹き出した。

「さつ、パーティーの準備しないとね！ ほらツバル早く！」

突然早足で駆け出した少女を見送りながら、ツバルは困惑したように頭を搔いた。フブリが焦れて彼の腕を掴み、回廊を走り出す。

「あ～、若いもんは元気だねえ」

咳くツバルの背中は、どこか嬉しそうだつた。

翌日は朝から大忙しだつた。

兵士も侍女も総出で、広間にじつた返す各地の権力者をもてなしている。顔を見せないと失礼に当たるからか、兵士たちは重い兜を脱ぎ、それを脇に抱えて駆け回つていた。城門は更に悲惨で、リラの見舞いにやつて来た者からただの野次馬まで、とにかく城中を囮うほどの民衆がそこに集つていたのだ。その現状に頭を抱えたのはオーガスタや文官たちだ。ツバルは外のことなど素知らぬ顔で、お祭りのようにはしゃいでいたため、オーガスタに雑用を押し付けられていた。

オーガスタはこれほどの大事にするつもりはなかつたらしいのだが、民衆の噂話が各地の貴族方に伝わつたらしく、リラの快気祝いは国を上げての大きなものとなつてしまつたのである。

慌しく駆け回る臣下たちの隙間を縫つて、フブリは広間に面した庭

園に逃げこんだ。

「す、すつごい人……！」

「私も驚いたわ」

リラは胸に手を当てながら、そわそわと辺りを見回している。いつもより装飾の多いドレスに身を包んでいる彼女は、別人のように美しいかった。

「リラのお話はもう終わっちゃった？」

パーティの主役、国王陛下のスピーチだ。これを聞きたくてずっと広間で待っていたのに、あまりに人が多いためたまりかねて外に出了のだ。

「これからよ。あ、そうだわ、フブリ」

リラは思い出したようにフブリの肩を叩いた。

「やっぱり貴女のこと紹介しましょ。こんな機会滅多にないし……本来なら王になるはずの貴女が名乗り出でていらないなんて、あまりにも不自然よ」

フブリが王女であることは公言していない。それはバレッタの、娘を王族にしたくはないという要望によるものであり、フブリは侍女シルヘットの養女として育てられた。だからバレッタの死後、国王に即位したのはリラ・コスモレドである。それが、今のリラが知る真実だった。

リラは、十五年前からこれまでの記憶をすっかり失っている。だが、こちらからわざわざ辛い真実を語ることはない。フブリはオーガステと話し合って、そういう結論に達したのだ。

「私は、フブリ・トリバン・ドラムとして十五年、生きてきたの。だから私はお城のこともよく知らないし、今更王族になりたいとは思わない。それに今の王さまはリラなんだよ」

「信じられないわ……。私は王なんて、そんな器じゃないのに……」

スピーチの原稿が彼女の手の中で皺になつていて、フブリはすぐ気づいた。そつと彼女の手を両手で握り締めると、リラは恐る恐る顔を上げた。

「でも十五年、あなたは立派に王としてカラアを引っ張つてこれたんだよ。……自信をもつて、リラ」

「……ありがとう、フブリ」

フブリが広間へ促すと、リラは一息深呼吸をして、最奥の壇上に上がつた。

その後ろ姿を、フブリは隅のテーブルからじつと見守つていた。拍手が広間全体を覆い、リラは怯えたような瞳で壇上の下を見下ろしていたが、やがて拙い口調でスピーチを読みはじめた。

「結局、自分の命を脅かすと思っていた大魔法に命を救われるとは、皮肉なものだな」

クルージュがリラの姿を眺めながら、呟いた。いつの間にか広間の隅には、三人の近衛が集まつていた。ツバルはフブリにグラスを手渡し、自身はオードブルの皿を貪つている。

「蘇生魔法だつたとはな～。確かにとんでもねえ大魔法だ……。オーガスター、それでおれには教えなかつたんだろ」

大きな海老に頭からかぶりつき、ツバルは口をモゴモゴさせながら言つた。

「おれが、バレッタを蘇生させるためにフブリを利用するから」スピーチに耳を傾けていたオーガスターが、少しだけ顔をツバルに向けた。

「いや、大魔法は、もとより誰もその正体を知つてはいけないもののはずだつた。誰も使うことのできないように、王が保管し大魔法使いが守るものだつた。だが……すまない、ツバル。私は自分の一存であつても、リラを生かしてやりたかつた。……大魔法使いとして決してあつてはならない大罪だ」

その声はあまりに小さく、か細かつたため、フブリは彼が消え入つてしまふような気がした。

「大魔法を使つたのは私だよ。オーガスターは何も悪くない。それに

……」

うまく言葉が出なかつたから、フブリはグラスの中身を一気に喉に

流しこんだ。喉元を通る冷たい感触が、気持ちを後押ししてくれる。「うまく言えないけど、私はリラに魔法を使ったとき、これでルビーもシルヘットもアリカも、お母さんだって生き返らせられると思った」

フブリは手のひらに視線を落とした。今でも、自分に大魔法が使えるなど信じられなかつた。まして、リラを生き返らせたという自覚があるわけでもない。

「でも……お母さんが生き返るのとリラが生き返るのって何か違う気がするよ」

口調はいつしか強いものになつていて。オーガスタが目を丸くしているのがわかる。

「リラは、生きなきやいけない人だつたんじやないのかな……。だつて、ずっと謝りたかつたつて言つてた」

フブリは、オーガスタを見据えた。

「リラにはまだ、やらなきやいけないことがあると思うんだ」ぽん、とフブリの頭に大きな手のひらが置かれた。フブリが驚いていると、ツバルが頭を乱雑に搔き乱した。フブリは嬉しいような、困つたような顔で笑い、オーガスタを見上げた。

「私間違つてる？」

「いや……、間違つっていたのは私のほうだ」素つ氣ない答えたつたが、男がわずかに微笑しているのをフブリは見逃さなかつた。

「……おれさ、蘇生魔法のことを知つても、バレッタを蘇生させようとは思わなかつたかもなあ」
ぽつり、ツバルが呟く。
「何で？」

だつてよー、と相変わらず間の抜けた声が彼の口からこぼれる。

「こんなバレッタそつくりのフブリがいるんだから、それだけで充分だつて思つちまうよなあ」

かすかに笑つっていたのかもしれない。ツバルは何が可笑しいんだ、

とでも言いたげにフブリを覗きこんだ。あまりに純粹な男の呴きが、フブリには何より嬉しかった。

「……ねえ、オーガスタ。ものは相談なんだけど、大魔法つて壊せないのかな」

ごく自然に滑り出た言葉だつたのだが、三人の近衛は皿を落としたり飲み物を吹いたり、言つたフブリが驚くほどのリアクションを返した。

「はあ！？」

「お前何言つてるかわかってるのか！？」

そんなに自分はおかしなことを言つたのだろうか。ごほごほ、むせているツバルの背をさすつてやる。

「だつてそんなものがあるから、カラアは閉ざされた。大魔法がなくなれば、カラアが襲われる心配も、最果てを閉ざす理由もなくなるでしょ？」

涙目のツバルは、フブリを凝視したまま動かなくなつた。しかし、そんな状況の中で一人あつけらかんとしているフブリには、何故彼らがこんな反応をするのかがわからない。

「大魔法を壊す……か。とんでもないことを言う。歴代の王の中にも、そんなことを考えた者はいなかつた。かのバレッタですら、次元の穴の警備を緩めたくらいだつたのに」

「この国を離れたフブリだからこそ、気づいたんだろう。狭い城内しか見えてない王には、何もわかるはずがないさ」

オーガスタが感心したように頷き、クルージュもそれに賛同した。

「いいだろう。壊してみようか、大魔法」

しばし腕組みをしていたオーガスタが、意気揚々と言い放つた。

「本気かよ、お前！」

「つていうか、そんな簡単に壊せるものなのかな！？」

ツバルとクルージュは食つてかかる勢いで驚愕の声を上げたが、

「さあ……、やつたことないからなあ」

オーガスタが笑つて首を揺らすと、盛大なため息をついてうな垂れ

た。

大魔法は代々国王が保管する。だとすれば、もしや……

「例えば……もし、王家の血が途絶えたら、大魔法はどうなるの？」

「使える者がいなくなるわけだから、当然消えるね」

案外さらりと答えられて、フブリは少しだけ驚いた。予想通りだつ

たが、しかしそれを実行するには問題もある。

「フブリ……！　お前まさか」

滅多に見ない、焦るツバルの言葉を慌てて遮る。

「ううん、私一人いなくなつたところで、リラがいる。血は途絶えない。それに私にはリラが必要だし、リラには私が必要だつてこと、わかつてゐるから。えーと、結婚しなければいいのかな？」

ツバルは大きく息を吐いて胸を撫で下ろした。

一生独身で子どもを作らずにいれば、自分たちの代で王族の血は途絶える。そう遠くない親戚もいるようだが、あくまで大魔法を有する資格を持つのは直系の子孫だけ、といふ話をオーガスタから聞いていたため、そうなるのだろう。だが、それでは自分たちが死んだ後、カラアを統治するものがいなくなつてしまつという問題もある。「王がいなくなればカラアは国として機能しなくなつてしまつさ。カラアがなくなつては本末転倒だ」

オーガスタが微笑み、フブリは腕組みをして唸つた。

「そつか……じゃあやつぱり」

「壊すしかねえな」

恐ろしく楽観的に言うツバルであつたが、今は誰も咎めなかつた。やがて広間に拍手喝采が鳴り響き、フブリが振り向くと、壇上で頭を地につけそうなほどお辞儀していたリラが、こちらに向かつて微笑んだ。壇上を降りるリラの周りには、たくさんの人人が押し寄せた。けれど彼女は聴衆の波にもみくちゃにされながら、名のある貴族たちの長話を断り、隅のテーブルに向かつてくる。

王がこんな隅っこに来てどうするよ、とツバルが突つこんだが、リラがようやくたどり着くとそっぽを向いて黙つてしまつた。

「お疲れさま」

フブリは優しく微笑んで、大切な叔母を迎えた。

鳴り止まない拍手と歓声の中、ルビーは一人、庭園から中の様子を眺めていた。

スピーチを終えた国王が、真っ先にフブリのもとに駆け寄る。リラを迎えるフブリは、それはとても幸せそうな笑みを浮かべていた。フブリに、言いたいことがある。けれど、それは自分が言つていよい葉ではないし、それを言つたことで彼女の今の幸せを少しでも揺らがせてしまうことは耐えがたかった。

ルビーは、じつと少女を見ていた。

久しぶりにこぼれそうな笑顔を見せるフブリを見られただけで、もうよかつた。叔母が、そしてあの頬もしい近衛たちがいれば、彼女はずつと笑つていられるだろう。

彼らに囲まれてこれから先、何年も笑つている彼女が想像できた。それは、彼が最も望んだ光景だった。

ルビーはグラスをそつと置いて、静かに会場を後にした。

フブリは、幾分か会場が落ち着いてきた頃合いを見計らい、そつと広間を抜け出した。

それというのも、朝は一緒に会場設営を手伝っていたルビーの姿が見えなかつたからだ。広間は民衆でごつた返していたから、あまり人ごみの得意でない彼のこと、人の波に押されて会場の隅に追いやられているのではないかと思つた。

しかし、ツバルたちと離れ広間を一周してみるも、彼の姿は見当たらなかつた。自分が見逃しただけかもしれない、と思つたが、この広間の中で再度一人の少年を捜し出すのは骨だ。そこで、フブリは見知らぬゲストたちにルビーを見なかつたかと聞いて回つた。ルビーのことなど知る者はいないだろうが、そこはそれ、美貌の少年、と言えば大抵は通じる。フブリの読みは的中し、ルビーが庭園から城内へ戻つていくところを見たという情報を手に入れることができた。

外はひつそりと静まり返り、広い回廊全体が冷たい空氣に包まれていた。朝はまだ料理やテーブルを運ぶ臣下たちで廊下も騒がしかつたのだが、今は数人の侍女が空になつたオードブルの皿を持つて往復しているくらいで、落ち着いている。

彼女たちが厨房に向かうのを尻目にし、フブリは階段を上つた。上には、オーガスタが用意してくれた自分たちの個室がずらりと並ぶ。その一つのドアが数センチ開いているのを見つけ、フブリはそつと中を覗いた。

「ルビー……？」

見慣れた少年の後ろ姿を発見し、フブリは部屋に入った。大きなほこりびだらけのリュックに、ルビーが粗雑にものを詰めこんでいる。そのリュックには見覚えがあつた。一緒に旅をしている間、ずっと彼が背負つっていた荷物袋だ。

「フブリ……。ええと……ちょっと今、忘れ物を、思い出して
最初は驚いたような顔をしたルビーだが、微笑んで言った。

「嘘だ。ルビー、嘘をついてる」

「嘘じやないよ」

ルビーはフブリに背中を向けて、はつきりと言った。

「出て行くつもりなんだ。私に何も言わず、逃げる気なんでしょう
その丸まつた背中に、フブリは冷たく言い放つ。これくらい強く言
わないとわからないのだ、この少年は。

「違うよ……ぼくは、どこにも行かないよ」

「嘘。私、わかるんだから。ルビーは、自分がルビーじゃないから、

私に申し訳ないから、逃げるんだ」

追いつめるように、突き刺すように口調を強める。

「違う」

ルビーは、深呼吸を一つして静かに首を横に振った。

「ぼくは……確かに、出て行こうと思った。でも、それがフブリの
ためだと本気で思ったからだ。ぼくがクイルビーでないことが知れ
てから、ずっと考えてた……ぼくの居場所は、ここにはないんだ」
無性に腹が立つた。『フブリのため』？ その行為が自分のために
なるなんて、本気で思っているのか。結局居場所を否定しているの
はルビー自身ではないか。

「あなたの居場所はここだ！」

たまらず、フブリは叫んだ。ルビーの肩を強引に掴み、自分のほう
を向かせる。辛そうに眉をひそめる少年の表情を見ているのが切な
くて、フブリは顔を歪めた。

「前にも言ったよね。あなたが、幼なじみのルビーじゃなくとも、
私にとってあなたはルビーでしかないんだよ。幼なじみのルビーも、
今のルビーも私にはかけがえのない大切な人なんだ」
諭すように言つても、ルビーは首を横に振るばかりだ。

「辛いんだよ、やめてくれよ。ぼくは長い間フブリを騙して傷つけ
ていた卑劣で最低な男だ。誰かに大切だなんて思われる資格なんて

ない。フブリと同じ道はもう歩けないんだよー。」

ついに、ルビーも大声を出した。その勢いに、フブリは思わず息を呑む。彼がこのように怒声を張り上げるのは、大樹の穴の中で言い合ったとき以来だ。けれど、フブリはもう彼の癩瘍も怖くはなかった。

「嘘つき」

低く囁くと、ルビーの体が小さく動いた。

「もうわかつてんんだから。私たち何年一緒にいると思つてんんだ。本当はここにいたいくせに」

「違う」

「あなたが一人で出て行つて、それで私が喜ぶなんて本当は思つていないくせに！」

「違うー！」

「どうして自分の気持ちを否定するんだ！ 馬鹿ルビー！ バカ、バカ！ 大バカ！」

フブリは、ルビーに抱きつくと、わんわん声をあげて泣きはじめた。

ルビーは自分にしがみついて泣き出した少女の肩に触れようとして、躊躇した。胸元で彼女が切ない嗚咽を漏らすたび、胸が締めつけられるような痛みを感じてたまらなくなる。

こうなるのが嫌だつた。

自分が何もかも悪いのに、そんな自分のためにフブリが泣くのが、何よりも辛かつた。自分はそうされるに値しないのに。

「泣くなよ……」

口にして、何て偉そうなことを、ヒルビーは言葉を続けられなかつた。喉元に熱いものがこみ上げてくるのを感じた。いつの間にか、自分も泣いていたのだ。しかしフブリは、ルビーがそれを押さえこもうとしているのを見通していたように追い討ちをかける。

「一緒にいるのに資格なんて要らないでしょー？ そんなわかりきつてること、どうしてわからないふりするのー？」

涙で潤んだ瞳をルビーに向け、フブリは叫んだ。

「私に言つてもらいたいんでしょう！？ ここにいて欲しいよつて言つて欲しいんだ！ 自分の気持ちだけは棚に上げて卑怯だよ！」

「わかつてゐるよ！」

これ以上大声を出すつもりはなかつたのに、押さえ切れない想いが爆発してしまつた。体中が興奮で熱くなつていくのがわかる。

「フブリがどれだけぼくを本氣で引きとめようとしてるのか……ぼくのことをどれだけわかつてくれるのか……！ ぼくは、出ていくつて言つて自己満足に浸つていいだけなんだ！ ぼくは、ぼくは「ぶわつ、と感情が大粒の涙になつてあふれ出した。

興奮が早々と冷えていくのに比例して、声のトーンが一気に下がる。「一緒にいたいよ。ぼくは、ひとりが……クイルビー・ヴォルケットである自分を失うのが……」

声が喉に詰まつて、震えた。

「怖いんだ」

ヒツ、としゃくりあげる合間に本音が漏れた。

泣きながらフブリの背中に恐る恐る腕を回すと、彼女の手も強く抱きしめ返してくれた。

「クイルビーじゃない、本当の自分としてフブリに会いたかった……。本当のぼくは誰なのかわからない……クイルビーでなくなつたら、ぼくは本当に何者でもなくなつてしまつようかな気がして、怖いんだよ」

「自分が誰だかわからないの？」

ルビーが頷き、フブリは首を傾げて微笑んだ。

「誰でもいいじゃない」

あつけないほど簡単に答えは出た。そういうことをさりとて言える少女に、ルビーはいつものことながら閉口してしまう。もう、フブリの傍にはいられないと思つた。クイルビーでない自分が、ここにいることは許されないと、そう思つていた。だがそうした負の感情すべてを、目の前の少女は何でもないことのように棄てることがで

きるのだ。

「誰でもいいよ」

耳元に囁かれる言葉はすぐぐつたくて、けれども温かくて、ルビーは口元を、への字に歪めた。

しばらく、一人で昔話をした。夕日の影が色濃く浮き出る真っ白な廊下の隅に並んで座り、フブリはルビーに寄り添いながら足を無造作に投げ出した。

シルヘットの思い出が燃やされ、村を出てから随分長い時間が過ぎたように思える。

「……懐かしいな……村を出てからもう一年になるんだね」

フブリは、窓越しに暮れる夕日を恍惚として見つめた。

「ぼくが止めるのも聞かずに、フブリは出て行つたんだよね」

「そうそう！」

広い回廊に一つの笑い声が響く。

銀の騎士が火を放つてから、逃げるように村を出たのを覚えている。院長先生やパン屋のおばさん、小麦畠のおじさんも、旅に出ようとする自分たちを一晩中説得してくれた。フブリは悪くない、シルヘットが罪人なんて何かの間違いだから

フブリは目頭が熱くなるのを感じ、慌ててまなじりをこすつた。

「……ぼくが、クイルビーになつて君を監視してたのはさ……」

「ルビー、無理しなくていいんだよ」

ルビーは静かに首を横に振つた。

「いいんだ。フブリには本当のこと、知つてほしい」

何かを決意したような少年の瞳に囚われる。フブリは何も言わずに頷いた。

「ぼくは、気づいたときにはカラアにいて、ここがどこなのかも、自分が誰かもわからなかつた。ぼくを拾つてくれたオーガスターさんが言つには、きっとぼくが何か強いショックを受けて記憶を失つてしまつたんだわう、って話だつた」

ルビーが横目で笑うと、フブリは素直に相槌を打つ。まるでお互いの気持ちを何度も確認し合っているかのようだ。

「記憶のないぼくはクイルビーと年恰好も似ていたから、死んだ彼の代わりになつてフブリつていう女の子を守つてくれと頼まれた。ぼくは混乱していたから何が何だかわからなかつたけど、カラアを出て村に行つたとき、墓地で泣きながら眠つている君を初めて見て、子供心に可哀そうだな、つて思つた。何でこの子はこんなに泣いているんだろう、つて……」

ルビーが転落死してから、自分は毎日毎日、それこそ大人たちが心配するくらい墓地へ通つては泣いていた。思い出す幼き日の自分は、とても小さく無力な子どもだつたと思う。

「ぼくは、その夜みんなに魔法をかけた。記憶の魔法をね……オーガスターさんに教わつたその魔法で、死んだクイルビーになりますた。ぼくはひとりだつたから、自分が誰かもわからない子どもだつたから、誰かになりたくてしじうがなかつた。誰かにぼくつていう存在を証明してもらいたかつた」

「うん……」

胸がすく思いで、フブリは話を聞いた。ルビーが本当の自分を語つてくれることが嬉しかつた。

「陛下が襲撃者たちを、暗殺者として仕向けただろう？ あれはオーガスターさんにとってはまったく想定外の出来事だつた。でもオーガスターさんは陛下の下を離れられず、ぼくに連絡を取ることもできなかつた……だから、ぼくは何が起こつているのかわからないま、君と一緒に村を出たんだ」

「そうだつたんだ……」

ルビーが襲撃者の仲間だとしたら、命がけでフブリを守つていたことに疑問が残る。しかしイエリコのような襲撃者を放つたのは、あくまでリラだ。リラの下にいたオーガスター、そしてその下にいたルビーは、リラの味方であると同時に、フブリの味方でもあつたのだ。

「カラアの居場所を知るツバルさんが怪しげってことにはすぐ気づ

いた。旧女王派の人間が、フブリを捜していつか村にたどり着くかもしれない。だけど、彼らに従つてフブリをカラアへ行かせるようなことがあつてはならない、つてオーガスターさんに言われていたからね」

「じゃあ、ツバルとクルージュが旧女王派の人間だつてこと、ルビーは気づいてたの？」

「そうだとすれば、最果てに至るまでの、ツバルに対するルビーの異常な不信感にも頷ける。

「それを確信したのは最果てに着いてからだつたけどね。でも、ぼくは自分が本物のクイルビーじゃないつてことをフブリに知られるのが怖くて、あのときははつきり言えなかつた」

「気持ちが安らいでいくのを感じる。別人のように見えていたルビーが、今はもうとても近しい、いつものルビーに戻つてている。それがとてつもなく幸せで、何よりもかけがえのないことに感じられた。」

「ルビーは私を守つてくれていたんだね」

瞳を伏せて、フブリは呟いた。心の中に沈んでいたわだかまりが、一度に消えてなくなつた気がした。

「……二人に、大魔法使いが最高の魔法をプレゼントしてあげよう」突然の背後からの声に驚いて振り向くと、そこにはいつの間にか灰色の魔法使いが立つっていた。フブリは立ち上がり、ルビーもそれに続いた。

「君は、私がどうやつて君を捜し出したかわかるかい？」

首を傾げるフブリは、わずかに微笑んでいた。

オーガスターは返事を待たずに話し続ける。

「私は、大魔法の波動で君の存在に気づいた。君が大魔法を使わなければ、私は君が生きていることすら知らなかつた」

フブリの表情が一瞬で強ばる。

「大魔法を使つた……私が？」

「別に、責めているわけじゃない。君は何も知らなかつた。そう、五年前の秋、毎晩墓地の前で泣きじゃくる君は、無意識のうちにそ

れを使つた

急に頭の中が空になつたように、目の前が白くなつた。

「その波動に私が気づき、すぐにフブリのもとへ向かい、ルビーを連れてカラアへ戻つた。一度死んだ人間が生き返つてピンピンしてたら村中が混乱するからね。リラの監視があつたから、村中に魔法をかけている時間もなかつた」

信じられない。夢物語を聞いているかのようだ。だが、オーガスターの言葉はそれが現実であることを指し示すかのように、耳の奥にゆっくり響く。

「ルビーは大魔法の副作用で、今まで生きてきた記憶がすべて消えていたから、真実を語れなかつた。大魔法の正体をルビーに知られるわけにもいかないからね。……と、この辺りは蛇足だつたかな」ぽかんと口を開ける二人にオーガスターは微笑んだ。

「はつきり言えるのは、君が紛れもないクイルビー・ウォルケットだということだ」

「ルビー！」

フブリは、立ち尽くすルビーに抱きついた。

ルビーがかすれた涙声で何かささやき、フブリの背に腕を回し力強く抱きしめた。その抱擁はきつく強すぎるものだつたし、胸の中もいっぺいで苦しかつた。

抱きしめあつた体温から、腕の強さから、フブリはルビーがそこにいる喜びを感じ取つた。

ひとりでは感じることのできない喜びだつた。感謝だつた。

それを彼に伝えたかつたが、言葉では到底表せなかつた。むしろ声に出すことで価値が壊れてしまうような気がした。

嬉しいのか悲しいのかわからない。ただ、二人が同じ気持ちでいることだけは間違ひなかつた。お互に同時に顔を見合わせて、笑つた。やがて二人分の笑い声は廊下中に響き渡り、侍女や兵士たちが不思議そうな顔で集まつてきた。ツバルやクルージュも広間から顔を出した。それを遠くから見つめていたリラは、やがてツバルに強引に

引き出され、輪の中に入つた。

誰かが一人につられて笑い出し、いつしか城内は彼らの笑顔に満たされた。

幸せそうなそれを背に受けながら、オーガスタは夕暮れの陽だまりの中に消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4296e/>

Magic of Kingdom

2010年10月17日16時51分発行